

マルチン

彼は基督教會と離道改宗の生活を愛し、ガリヤにて數年間軍務に従ひし後之を棄て、ゴアチエのヒラ...

マルチン

一七九一—一八四三 英國の女流傳道家、グレート...

マルチン

しつば、仕立屋を止め、専ら傳道事業に身を委れ、...

マルチン

一七八一—一八二二 英國の著名なる外國宣教師...

マルチン

マルチンは四年半ほどの間アイナゴール及びゴア...

人名

tensen, Hans Lassen, D.D. 一八〇八—一八八四...

マルチン

マルチン一世。マルチン四世

マルチン五世。マルチンセン

マルニクス

に射られての旅なれば、實に生命賭の事なりしなり...

マルチン

マルチン一世 Martin I. 人名 羅馬法...

マルチン

マルチン四世 Martin IV. 人名 羅馬...

マルチン五世 Martin V. 人名 羅馬...

マルチン

マルチンセン Hans Rappesen Mar-

マルニクス

Philip van 人名 一五三八—一八九八...

マルチン

マルチン

マルチン

マルチン

彼は基督教會と體道思想の生活を愛し、ガリヤにて數年間軍務に従ひし後之を棄て、ゴアチエのヒラ...

マルチン

マルチン Martin, Sarah

一七九一—一八四三 英國の女流傳道家。グレート...

し、仕立屋を止め、専ら博愛事業に身を委れ、赤貧の中に生活せしが、一八四一年...

マルチン

マルチン Martin, Henry

一七八一—一八二一 英國の著名なる外國宣教師。父は...

マルチンは四年半ほどの間アイナゴール及びゴオン...

マルチン

マルチン一世

マルチン一世

マルチン一世

に射られての族なれば、實に生命の事なりしなり。果せる最熱病と聞歌は...

マルチン一世

マルチン一世 Martin I

王。六四九—六五三在位。コンスタンチノープルの皇帝...

マルチン四世

マルチン四世 Martin IV

法王。二八一—八五在位。シモン、ド、ブリアン...

に當り、シャルルはシモンを擧ぐることに力を盡し、其成功を見たり...

マルチン五世

マルチン五世 Martin V

法王。一四一七—一四三二在位。本名カッタド、コロ...

マルチン五世 Martin V Hans Lassen, D.D. 一八〇八—一八八四...

マルニクス

改革教に改宗し、カールゲン主義に化せらる。爾後...

マルハイチケ

ニクスはライデンに移り、後に創世記の翻譯を終へ...

マルハイチケ

Mathieu, Philipp Konrad 人名 一七八〇—一八四六...

マルフランシ

のヘーゲル哲學の意義に就て講演し、ヘーゲル著作...

マルフランシ

Mansel, Henry Longueville 人名 一八二〇—一八七二...

マンニク

倫理學及び心理學講師となり、五九年ウェーティン...

マンニク

以上挙げたる者の外に『水道に関する人の思想』及び...



り、熱心と雄辯を以て名聲大に揚り、四二年大學...

ミカ

ミカ

ミカ

ミカ

ミカ

ミカ

ミカは、向事情の許す限り活動す。八四年ハンジ...

ミカは其より南に南を向り味方を語らひ、二四年の暮...

ミカは、向事情の許す限り活動す。八四年ハンジ...

ミカ

ミカ

ミカ

ミカ

(三) 六の一七の六 三箇の短き演説より成り...

關係あり、第二章は一の九、十の警告の基礎として...

獨逸の東邦學者。父マテアクト亦有名の東邦學者...

【ミカ活動の時代】 以上いふ所に従へば、ミカの...

【ミカ】 舊約の人物、此名を...

【ミカエル】 Michael (Mykael) 聖名 ミカ...

ミカ

ミカ

ミカ

ミカ

ミカエル八世

ミカエル八世

事は但十二の一に記さる。エノク書には、ミカエルは人類の最良部分即ち以色列国民の上に置かれたり...

ミカエル八世 (パレオログス)

パレオログス (Paleologus) 人名。コンスタンチノープルの皇帝。二二六〇年即位。二二五九年...

ミサのミシナの税吏のミッドルトン

ミッドルトン

も、合同は不調に終り。何となれば希臘教會の多數は羅馬を憎み、而して斯かる條件にて合同するをば...

ミサ

The Mass. 『マサ』の條を見よ。

ミシナ

Mishna. 『マサ』の條を見よ。

税吏

Tollkeeper (Tollman) 職名。新約聖書に記されたる税吏は、輸出税を徴収する官吏を...

ミッドルトン

Middleton. 『ミッドルトン』の條を見よ。

○第十八世紀の英國の論争者。ロルトに生る。牧師の子也。銀橋のトリニチ、カレッジに學び、按手...

ミツバ

ミツバ

自由研究』を著し、奇跡力は現今の教會には絶えたりと論じて一般の非難を受く。五〇年『倫敦監督の預言の用法及び意向論』を著して、シャール...

ミツバ Mizpah

地名。パレスチナに於ける數箇の邑の名にして、又ミツバと稱せらる。

ミティアン

Midian, Midianites. 人名。ミティアンは以色列人の祖アブラハムが、ケトラに依りて生ませたる子の一人の名にして、其子孫をミ...

ミティアン (Midian, Midianites) 人名。ミティアンは以色列人の祖アブラハムが、ケトラに依りて生ませたる子の一人の名にして、其子孫をミ...

ミドラン

ミドラン

るべし。モーセがミティアンの婦人を結びしこと何等の非難なくして記されたるも、亦此兩者の關係の密なりし證となすべし。ミティアン人イシマエル人の區別は、創世の系圖には明に示されたる共、...

ミドラン

Midrash. 『ミドラン』の條を見よ。

ミニクス

Minucius Felix, Marcus. 人名。ラテン神學者。『オクタウィウス』の著者。同書は開創的の所なく深遠なる直覺をなけれ共、熱情に充ち壯麗の趣あり。...

ミニクス (Minucius Felix, Marcus) 人名。ラテン神學者。『オクタウィウス』の著者。同書は開創的の所なく深遠なる直覺をなけれ共、熱情に充ち壯麗の趣あり。...

美善教會

Methodist Protestant Church.

修殿節

The Feast of the Dedication.

未來世

Future Life. 『生、死、終末論』及び『靈魂不滅』の條を見よ。

美善教會

Methodist Protestant Church.

修殿節

The Feast of the Dedication.

未來世

Future Life. 『生、死、終末論』及び『靈魂不滅』の條を見よ。

ミルクツ

クレンツェルの Milkoz of Krenzer. 人名 一三三四死

ミルクツ クレンツェルの Milkoz of Krenzer. 人名 一三三四死
ミルクツのミリアティアデス
ミルクツのミリアティアデス

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ジョン ミルトン John Milton. 人名

ミルトン John Milton. 人名
ミルトンが詩人として知られるのは、その『失樂園』である。...

ミルトン

ミルトン

ミルトン

ミルトン

三の部

ミレトス。民數紀略

レバヤのフェローとなり、一六年按手禮を受け、聖メ
 ーイ會堂の牧者となり、三五年ウエストミンスター
 聖マーガレット會堂の司牧又「カノン」となり、四
 九年倫敦聖保羅會堂の「テイーン」に任ぜらる。之
 と並び、一八二一年より三五年までは牛津にて詩學
 の教授たり、其間に二七年には「使徒の性格行爲」を
 題するパムプトン講演をなす。神學には自由の見
 解を有し、廣く傳道なり。其多くの詩は當時世の注意
 を引きしも今は忘らる。「此世に生れ世の憂き事を」
 (When our heads are bowed with we) は日本語に
 も譯せらる。然れども歴史家としての彼のオコネ永
 く世に記せらるべけれ。『猶太史』二冊は一八二九年
 に出で、後屢々改訂正せらる。同書は奇蹟的分子
 を見るに唯理派の眼を以てしあれば、一時紛擾を起
 せしも暫くして静まれり。『基督生誕より羅馬帝國像
 教歴史』の『基督生誕』三冊「拉丁族基督教の歴史」
 又共に名高し。

ミレトス Miletus. 地名。ミレトスは小
 亞細亞の四方の沿岸に在りし希臘殖民地イオニヤの
 首都中最も有名にして最も重要な處なり。昔て
 亞細亞に於ける最大の希臘首府と稱せられ、羅馬帝
 國の下に在りては第二流の都會と認められたりし
 が、今や寒村となりて僅に其廢墟を留むのみ。
 使徒保羅はアカヤ、マケドニヤ、アワヤ、ガラテヤ
 四地方教會の義捐金を携へてエルサレムに上る途次
 此市邑に留まりしことあり(徒廿の十五)。又彼は
 羅馬より出獄後此市邑に來りしことあり(提後四の
 廿)。

民數紀略 Numbers. 經名。舊約聖書
 一七六卷中の一書。七十人譯の標題「Apharaim」
 (拉丁譯 Numeri) より來り、書中屢々壯丁の數へら

民數紀略

れたる事を記せるより斯く名けらる。希伯來語聖書
 には「ミレトス」名けられ、一の一の第五字より取
 れり「野に於て」の義也。此書以色列人が埃及を出
 てたる次の年の二月一日に初まり、第四十年五月ア
 ロンの死する時に至る迄の事を記す。結核出埃及記
 と類似し、祭司(一)典より來れるもの、エホバ、エロヒム(JE)典より來れるものを以て
 す。

此書三部に區分せらる。即ち以色列人がシナイに降
 營したる事(一の十の十)荒野に漂泊したる事
 (十の十一の十九の廿二)及びモアアの平野に到着
 したる事(廿の二の廿六の十三)是也。
 (一)シナイの陣營(一の十の十) (イ) 以色
 列の種族と其陣營(一の十の十) 一章には幕屋を築らせ
 んためレビの外他の十二種族の壯丁を數へたる事
 と、其數へたる廿歳以上の男子が六十萬三千五百五
 十人に達したる事を記し、二章には此等の種族の
 營の位置と其運搬の順序とを叙し、三、四章にはレ
 ビ族に祭司を助けて集會の幕屋の役事をなすべき事
 のなる事と、レビ族の壯丁にして軍團に入り幕屋に
 働かなす事を得る者の數へられたる事及び其營中に
 於ける位置、職務を記す。(ロ) 種々なる儀式的
 律法(五、六) 五の一四には、癩病人及び汚れた
 る人々を悉く營外に出すべしとの事、五の五十一に
 は、人罪を犯して償を爲さん、之を受くべき親戚
 なき時は祭司を受くべき事、及び凡ての人の聖別
 して獻ぐる物は祭司に歸する事、五の十一一十一に
 は、不義の疑を受けたる妻を受くべき審判の法、六
 の一十一には、ナゲレ人の律法、六の廿二廿七
 には、祭司が以色列人のためになすべき祝詞の形
 式を記す。(ハ) 七章には幕屋及び壇を聖別する

民數紀略

に當り、十二種族の長の捧げたる献物の事を記す。
 (ニ) 八章には壇臺に燔火を燃す事に關する教訓
 (一四)レビ人は其役事を爲さんため聖別せらるべ
 き事(五、廿二)及びレビ人が其役事を爲すべき年齢
 (廿三、廿六)を記す。(ホ) 九章には埃及を出てた
 る翌年過越節を行ひたる事、定まりたる時期に行ふ
 こと能はざりしものために設けられたる規定(一
 一十四)及び以色列人が雲に依りて其進退を導かれ
 たる事(十五、廿三)を記す。(ヘ) 十章(一、十)
 には、進軍其他の場合に銀の喇叭を用ひたる事を記
 す。

(二) 荒野の漂泊(十の十一の十九の廿二) (イ)
 十章には以色列人が其軍隊の次第に従ひてシナイを
 出立したる事(十一、廿八)ホバアツシが嚮導者たり
 し事、及び契約の櫃之が進退を導きたりし事(廿九
 一、廿六)を記す。(ロ) 十一、二章にはタベウラ及び
 キアロテハツタリにて民衆のつぶやきたる事、マナ
 及び錫の與へられたる事、モーセ七十人の長老を選
 びて己を助けしめたる事、及びミリアム、モーセを
 誘りたるため癩病人となりたる事を記す。(ハ) 十
 三、四章にはモーセ人を遣はしてカナンの地を探偵
 せしめたる事を記す。(ニ) 十五章には種々の律法
 を記す。即ち燔祭及び酬恩祭に添へて素祭及び温祭
 を獻ぐべき場合の事(一、十六) 舉祭を獻ぐべき場
 合の事(十七、廿一) 個人又は國民が罪祭を獻ぐべ
 き場合の事(廿二、廿六) 及び衣の髭に穢を
 染りたる物語(廿二、廿六) 及び衣の髭に穢を
 染りたる事(廿七、四十二)を記す。(ホ) 十六、七
 章にはコラ、ダタン、アビラム等相結びてモーセに
 逆りたりし事を記す。(ヘ) 十八章には祭司及び
 レビ人の職務及び地位、即ちアロンの子孫は祭司と

三の部

民數紀略

して聖所及び祭壇の役事をなすべき事、其他のレビ
 人は祭司を助けて其下位の役事をなすべき事(一、
 七) 祭司の收入の事(八、十九) 民衆は其所得の十
 分一をレビ人に納め、レビ人は其所得の十分一を祭
 司に納むべき事(廿一、廿二)を記す。(ハ) 十九
 には死骸に觸れて汚れたる時及び其他の場合に取る
 べき潔めの式の事を記す。

(三) モアアの平野に於ける以色列人(廿一、廿六)
 (イ) 廿一、廿二(一節)は以色列人がカデシに止ま
 り、それより遙にモアアの平野に達したりし事を記
 す。其間に起りたる出来事はモアアの死、水なき
 こと民衆のつぶやきたる事、ミリアムにてモーセ及び
 アロン罪を犯せる事(廿一、一十三) エドム人以色
 列人の其領内を通過するを妨げし事(十四、廿一)ア
 ロン死しエレアザル其後を繼ぎたる事(廿二、廿九)
 以色列人アラテ王を取りたる事(廿二、一三) エ
 ドムを繞り通らんことし、民其道のためにつぶや
 き蛇に咬まれて死する者多かりし事、モーセ銅の蛇
 を造りたる事(四、九) モアアの野に至りし事(十
 一、廿) シホン以色列人の其領内を通過するを妨げし
 事、以色列人シホン及びバシヤンの王オアアに勝ち
 りし事(廿一、廿五) 而して遂にモアアの平野に到
 着したりし事也。(ロ) 廿二(二節) 一、廿四章には
 パラムの物語を記す。(ハ) 廿五章には以色列人が
 シアテムにて淫行を犯し、刑罰を受けたる事、セチ
 ハス其熱心の應報として其家長く祭司たるべしとの
 約束を與へられたる事を記す。(ニ) 廿六章には再
 び以色列人の壯丁の數へられたる事、レビ族を除き
 其數へられたる壯丁六十萬一千七百卅人に達したる
 事を記す。(ホ) 廿七章には男子なき時には女子父
 の産業を繼ぐべきを得べしとの律法、モーセが其死

民數紀略

する前バレスナナの地を望み見よとの命を受けたる
 事、及びヨシュア、モーセの後繼者に立てられた
 る事を記す。(ヘ) 廿八、九章には各季節に行ふべ
 き犠牲の事を記す。(ト) 三十章は誓願に關する律
 法(ナ) 卅一章はミテアン人に對する復讐戦(ニ)
 卅二章はモーセがガド、ルベン及びマナセの支派
 にヨルダンの彼岸の地を分配せる事。(ヌ) 卅三章
 は以色列人がモーセとアロンに導かれ、埃及の國を
 出でより經來れる旅路、及びカナン占領に關する
 命令。(ヘ) 卅四章はカナンの境域、及び之を分配
 するのためにヨシュア、エレアザルの補助者として舉
 げられたる人々の名。(チ) 卅五章はレビの住所と
 して四十八邑の定められたる事、及び殺人者のため
 に過越邑の定められたる事。(リ) 卅六章は産業を
 もてる女子が己の父の支派の家に嫁ぎたる事を記
 す。

民數紀略

此書が其材料を祭司典、エホバ、エロヒム典より取
 りたる事に既に之を云へり。今之を示せば左の如
 し。

(一) エホバ(J)典より取りたるもの
 十の廿九一卅二、廿一の一、三、
 (二) エロヒム(E)典より取りたるもの
 廿一の四、五、九、卅二の十六、十七、
 (三) エホバエロヒム(JE)典より取りたるもの
 十の卅三、卅六、十一、十二、十三の十七、
 一、廿、廿二、廿四、廿六、廿七、卅一、卅二、卅
 三、十四の一、三、四、八、九、十一、十五、
 卅一、卅三、卅九、四十五、十六の一、二、十二、
 十五、廿五、廿六、廿七、卅二、卅三、卅四、
 廿の一、三、四、五、七、八、九、十、
 十一、十三、廿一、廿二の十一、卅一、卅二、

卅五(一)、廿二の二、廿五の五(廿二の廿二)卅
 四は思ふにJ典、廿三章はJE典、廿四章はJ典、
 廿四の廿一、廿四は後世の挿入なるべし、卅二の一
 二、三、五(六、十五、廿一、廿七、卅一、卅
 三も此中ならん)卅四、四十二。
 (四) 祭司(P)典より來れるもの
 一の十一の廿八(此中間は後世の挿入あり)十
 三の一、十七、廿一、廿五、廿六、卅二、十四
 の一、二、五、七、十、廿六、廿九、卅四、卅
 八、十五章(卅七、四十一は挿入なるべし)、十六
 章、十七章(此兩章のPの筆には二種の記事あり
 てJ、Eと混同しつゝあり、即ち一方には十六の
 二、三、七、九、十九、廿四、廿七、卅二、十
 七の六、廿八と續き、他方には十六の一、七、七、
 八、十一、十六、十八、卅五の五と續く也)、
 十八の一、十九の廿二、廿一の一、二、三、六、
 七、八、十、十二、廿二、廿九、卅一の十、
 十一、廿二の一、廿五の六、卅一章、卅二の一
 a、二b(一)、四、十八、十九、廿八、卅一、卅
 四、卅六章。
 【參考書】 ドライヴゲル。コルニル。ケーニヒ。
 ストラック。グイテン等の『舊約聖書總論』アダイ
 スの『モーセ六經の文書』ウエムハウゼンの『モー
 セ六經の組織』ウァットソン『エキスゴジナル、パ
 イナル』中)アレー『インターナショナル、クリス
 チナル、コムメンタリー』中)等の註釋書。

ムの部

無垢懐胎説。無神論

ムーデー

ムラトリ聖書

ムの部

無垢懐胎説

Immaculate Conception of the Virgin Mary. 其蘇の母マリアは耶穌の功徳と神の恩恵に依り、其懐胎の刹那に於て原罪の汚らわしき無垢に保たれたる...

無神論

Atheism. 有神論(Theism)に對し、神の存在を證明す可らずして拒否するものなり。古來此地位を取りたる者は甚だ多からず...

ムーデー

Dr. W. D. D. 人名

ムーデー Dr. W. D. D. 人名 一八三七一九九米國の傳道者。マサチューセツツ州東ノースフィールドに生る。一八五五年ホストンにて靴店を賣子たりし時、悔改して基督教に歸し、是より熱心に...

ムラトリ聖書

The Muratorian Bible. 新約聖書の断片、ムラトリが以太利・ラン市のアマプロス圖書館に於て、第八世紀又は第九世紀の寫本中より發見したるより此名あり(一七四〇年出版せらる)。此寫本はモザンティのコロムバノ大寺院の所有に係り、思ふに初め拉丁語にて書かれたるものにして、四教會の所産に係り、第二世紀の末に成りたるものなるが如しと雖も、作者は明らかならず。此書四福音書、使徒行傳、保羅の十三書翰、約翰第一、第二書、猶太書及び約翰啟示錄、彼得啟示錄を有し、希伯來書、雅各書、彼得前後書、約翰第三書を缺く。

メの部

メの部

Nominalism. 唯名論の條を見よ。

墨西哥

Mexico. 地名 北亞米利加合衆國の南に在る共和國。廣袤七十六萬七千方哩。人口一千三百六十萬五千九百九十九人(一九〇〇年)にして、其一分九分は歐羅巴人種に屬し、四割三分は混合人種、三割八分は純粹の印度人也。此國の歴史は三期に區分するを得べし。即ち第一期はコルテスに征服せられたりし時代(一五一九)第二期は西班牙が主權を握りし時代(一五一九-一八二一)第三期は獨立時代(一八二一より現今に至る)是也。初めて此國に住居したるは第七世紀の頃北方より來りしトナチカ人(Toltec)にして、第十三世紀に至りアステカ人(Aztec)又來り住せり。後者は人身犧牲を獻げ、生き乍ら心臓を切り取りて神に供ぐるを常としたりと云ふ。一五一九年西班牙人コルテス(Cortes)來りて彼等を征服し、爾後三百年間西班牙政府の送り來れる副王に依りて支配せられたりしが、政府は人民を強て羅馬教を信ぜしめ、教會は全國の土地三分の一を所有するに至れり。一八一〇年國民の獨立運動開始せられ、一八二一年に至り遂に西班牙政府の輻轡を脱し、二四年共和國となり、合衆國と均し憲法を採用せり。後ルイ、ナポレオン墨其西哥に佛國の勢力を扶植せんとし、後又現太利のマキシミアン自ら墨其西哥皇帝と稱せしが、國人起ちて之を放逐せり。羅馬教は一八五七年に至る

メの部

名目論。墨其西哥

惠

メソヂスト教會

遂尙其勢力を逞ふせしが、同年大統領ユアレスは教會所有の土地を沒收し、僧庵を廢止し、且他の宗教を寛容せり。然れ共人民の多數は今に至る迄羅馬教を奉ぜり。プロテスタント教の傳道はランキン女史が一八六六年獨力を以てアラウカンゴウに學校を創立したりしに初まる。女史は十二個以上の學校を建てたりしが、後之を米國監督教會の傳道會社に引渡せり。墨其西哥教會の中にも亦改革運動起り「耶穌の教會」なる者を創設せしが、後米國監督教會の助力を得て、一八七三年以來米國監督教會の傳道會社之を維持することとなり、以て今日に至れり。長老派、會衆派、フレンド派は一八七二年、メソヂスト監督教會は一八七三年、墨其西哥に傳道を開始し、其初めは多くの困難に遭遇し、殉教者をさへ出したりしが、後傳道好運に向ひ、全國至る所にプロテスタント教の傳道を見るに至れり。現今信徒の數凡そ四萬有せり。

惠

Grace. (Yluc) 術語 惠は喜悅の機會となり、又は喜悅を興ふる者の謂にして、親切、好意の義を有し、主人が其僕に對する親切、神が人に對する厚意を表する場合に使用せらる(路一の卅、徒七の四十六、羅一の七、哥前一の三等)。然れ共新約聖書に於ける此語特殊の用は、罪ある人々に對して顯はされたる神の心に關し、神が人の罪過を赦し、迷へる者を招き、救と永生との賜を與へ給ふ願ひの恩恵を指すに在り。而して此惠は「神の惠」と稱せられ(羅五の十五、哥前十五の十、哥後六の一、八の一等)又は「基督の惠」と呼ばれ、又は單に「惠」と稱せらる(羅五の十七、廿)。此惠は任意的に與へらるゝ者にして、其根本思想は之を興ふる者之を受くる者と共に、其與へられたる惠の全く興ふる者

の好意に出づる者にして、受くる者の權利に依るに非ざるを承認するに在り。「惠」なる語は斯く人類の救済をもたらす神の企圖又は性情を指す爲めに用ゐらるれ共、又此企圖若くは目的の遂行せらるゝ力を指すためにも使用せられ(徒十八の廿七、哥後四の十五、六の一、歌後一の十二)更に又此動作の結果を指すためにも使用せらる(羅五の二、提後二の一、彼前五の十二、彼後三の十八)斯る經驗の證據、即ち基督教會が兄弟の乏を賑はさんとして集めたる施濟を指し(哥前十六の三、哥後八の六、十九)此世の賜(哥後九の八)基督教徒の願はせる種々の力(彼前四の十)又は使徒の務を行ふ力(羅一の五、十二の三、六、十五の十五、哥前三の十、加二の九)を指せるが如し。

メソヂスト教會

Methodism or Methodist Church. 宗派名 第十八世紀の初め英國に起りたる教會。もと英國教會内に在りて其腐敗を止め、新生氣を興へんため起りしものなるが故に、英國に於ける「第二宗教改革」及び近世宗教歴史の「起脚點」と稱せらる。之より先き英國に在りては清教徒なる者起り、一時其勢力を振ひたりしが、ロムウェル事件、王政復古するに及び(一六六〇)漸次其熱心を失ひ、遂に自然神論の渦中に没入せらるゝに至れり。當時英國教會も亦頗る沈衰し、間々基督教論議に關心し、且之を爲すに堪えたる敬虔の人々なきに非ざりしが、此等の人々は少數にして、下級の僧侶は一般に無學、懶惰、不品行の状態に在り、高級の僧侶は其受くる俸給に満足して、人民教化の任を盡さず。敬虔の士は此状態を見て深く將來を慮り長大息したりしと雖も、何等策の施すべきものな

メの部

メソヂスト教會

かりき。此時に當りては意外なる邊より來れり。一七二九年牛津に於て數人の學生相集り、聖書を研究し、宗教上の談話を交換したりしが、其牛耳を取りしはジョン・ウェズレー及び其弟チャールズ、ウェズレーの二人にして、後年ウェズレー、ホイットフィールド之に加はれり。彼等は『神聖俱樂部』と名けられ、又其研究及び生活の方法規則正しきより『メソヂスト』と呼ばれ、衆人嗚呼の目標となりしが、英國の宗教的革新は實に此メソヂスト俱樂部に其端を發したりし也。斯くメソヂストなる名は嘲笑的に他より與へられたる者なりしが、後には聖書に示されたる方法に従ひ生活する者也との意義にて、教徒自ら此名を採用するに至れり。而して此メソヂスト運動は起ちにして英國を風靡し、後太西洋を渡りて北米に往き、近年に至り又日本、支那、印度、太平洋諸島、及び歐羅巴大陸にも傳はり、プロテスタント諸派中最も強大なる教派の一となるに至れり。

【英國に於けるメソヂズム】(一) ジョン、ウェズレーの死に至る迄の略史 牛津の神聖俱樂部會員は毎週多量に聖書を研究し、又貧民、病者、囚人を訪問する等の事をなせり。後六年を経て(一七三五)ウェズレー兄弟は米國セオールドに航し、ジョンは福音を傳へ、チャールズは印度人の間に傳道したりしが、彼等は功を奏せずして一七八三年英國に歸り、後間もなくジョンはホイットフィールドと共に倫敦にて説教を開始し、大に感動を興たりしが、又他方には之を嘲笑輕蔑し、且之を迫害する者をも生じたりき。元來ウェズレーは高教派の人にして、英國教會内に在りて獨立の運動をなすの外何等の思念なかりしが、國教會は遂にウェズレー及び其徒の教會に於て説教するを禁じたりき。此に於てハ

メソヂスト教會

イットフィールドは一七三九年野外説教を初め、ウェズレーも初めは躊躇したりしが、遂に之に倣ふに至れり。今や聽衆は此兩説教家の周圍に群集し、道書喧嘩相續て起りしと雖も、彼等は毫も之に屈せず、此運動は漸次盛大に赴き、一七四〇年ウェズレーは廿六人の男子と四十八人の婦人會員を以て、倫敦のフランドリーに一協會を組織するに至れり。後間もなくウェズレーとホイットフィールドの間に豫定説に關し異論起り、分裂を來したりしが、此は後に至り再び合同するを得たり。ウェズレーは初め極端なる教會主義を持し、使徒的傳承、僧侶階級の偏見を有したりしが、其開始せる運動の漸次進歩し、權力を以て外部の要求に應ずる能はざるに至り、不本意ながらも信徒の中最も有力なる者を選びて説教者となしたりしが、一七四二年には既に廿人の信徒説教者を採用するに至りたりき。此等の一人は何れも多くの教育を受けたる者に非ざりしが、其活信仰に由りて雄辯となり、且多くの迫害にも堪えて、最も成功ある働きを爲したりき。一七四四年ウェズレーは彼と事業を共にしたりし教師及び信徒説教者を倫敦に會し、如何にして神の事業を進捗すべきやに就て協議したり。是れメソヂスト教會最初の年會也。斯くてメソヂスト運動は漸次發達して、蘇英二國に及び、英國にては三十年の終りに一百人の教師と多數の定住傳道者、及び三萬人の信徒を有するに至り、ホイットフィールドの働に依りて米國にも傳はれり。ウェズレーは初めより英國教會と分離するの志なく、其中に留まりて傳道せんことを欲したりしが、一七八四年彼は倫敦の監督に向ひ、米國に派遣すべき説教者に按手禮を賜さんことを請ひしに、監督は之を拒絶したりしが、彼は自ら之に按手し、同勞者コ

メソヂスト教會

ト博士を米國傳道地の總督として之にも按手し、翌年の年會には蘇國のメソヂスト教師として二人に按手禮を賜し、遂て二年更に英國の説教者として三人に按手禮を賜せり。斯くて彼は英國教會との間隔は甚だ相遠ざかりしが、彼は尙英國教會に留りて、一七九一年此世を去れり。彼が出席したりし最後の年會(一七九〇)の統計を示す所に依れば、英國は説教者百九十五人、會員五萬二千八百三十二人、ウェズレーは説教者七人、會員五百六十六人、蘇格蘭は説教者十八人、會員一千八百六十六人、愛蘭は説教者六十七人、會員一千六百六十六人、西印度は説教者十三人、會員二千五百八十人、西印度は説教者六人、會員四百五十人、英領亞米利加は説教者六人、會員八百人、北米合衆國は説教者百九十八人、會員四萬三千二百六十五人、合計説教者五百七十八人、會員十一萬九千七百三十五人の上り。ウエズレーの徒參照。

教會政治 英國メソヂスト教會の最高廷にして最も重要な會合は年會(Annual Conference)にして、一七八四年迄はウェズレーの召集せんと欲せし説教者の會合なりしが、同年憲法を作りて之を合法のものとなせり。七七年迄は年會は教職のみに依りて組織せられしが、七八年信徒代議員をも之に加ふるに至れり。現今の年會は二箇の職掌を有す。即ち一は教職のみの會合にして、互に職務上品行上の状態を査察し、且特に教職に關する問題に就て審議す。他は教職及び信徒の聯合的會合にして、教會全體の利益に關する問題に就て報告、審議、議定す。法定會合(Legal Conference)と呼ばれたる法定團體は百人の會員より成り、年長者又は年會全體の投票に依りて選ばる。此團體は總會に於て爲したる事を承認し採

メの部

メソヂスト教會

用す。次に大切なるは部會(District Synod)にして、五月、九月の二回に開き、九月の會合は主として財政上の問題を審議するものとす。教職會には教職のみ出席し、教職の品行を査察し、教職候補者を年會に推薦す。他の會合には教會の幹事及び信徒代議員も共に出席し、各教會の状況を査察し、教會共同の資金の報告を受け、年會に必要な推薦を遂行するものとす。一箇若くは一箇以上の教會を以て教會區(Choir)となし、各教會よりの代表者を以て四季會(Quarterly Meeting)を組織す。四季會は教會區内の宗教上財政上の事を査察す。組長會(Parish Meeting)は幹事及び組長より成る。組會は初め凡そ十二人を一組となし、其一人をして組中の献金を集めしむる方法として立てられたる者にして、今日にては歸納ある信徒をして各若干の會員を監督せしめ、吉凶福禍相訪ひ相慰め、貧富強弱相助け相助まし、如此くして信徒の交際をなすを得せしむ。ウエズレー、メソヂスト教會の教師は特別の場合を除き三年毎に其教會區を變更せしむ。ウエズレーは初め一年毎に交代せしめしが、後二年毎に交代することとなり、後更に三年間一箇所に留任するを得ることとなり。此年限は延擧すべしとの議案も起りたれ共、行はるるに至らず。尤も一般の傾向は漸次之を延長するを以て可とすに似たり。巡回傳道(Litinerary)と稱するは、斯く一定の期限内に教會區を變更するの謂にして、是れメソヂスト教會特色の一也。又メソヂスト教會は普通信徒の説教者を採用し、一地方に定住傳道せしむ。定住傳道師(Local Preacher)と稱する者是也。教義 ウエズレーは『メソヂスト』と呼ばれたる人々の簡略なる説明と題する者に於て、メソヂスト派

メソヂスト教會

の教義を説明して左の如く云へり。曰く『吾人の主張する主要の點四あり。第一、正統を以て若し宗教の一部也とすを得ば、此は唯宗教の一小部分たるに過ぎず。元來宗教なる者は單に何等の善なしといふが如き消極的の者に非ず、又善なる者、又は恩寵の方法を行ふこと、世に所謂敬虔と稱することなし、又は慈善事業をなすが如き單に外形上に關することに非ず。宗教とは『基督に在る心』心に形されたる神の愛、神の平和と『聖靈に依れる喜悅』を作へる内心の義に外ならずして、毫も之に異なるべからず。第二、此の宗教に於て唯一の道は『悔改めて福音を信する』に在り。使徒の語を以て云へば『神に對ひては悔改め、主耶穌基督に向ひては信仰す』るに在り。第三、此信仰に依りて『不義なる者をも義とする神を信する者は、耶穌基督の隨に依りて神の恩を受け、功なくして義とせらるる也』第四、我等は『信仰に依りて義とせられ』我等が往かんとする天の趣味如何を知り、聖く福となり、罪と畏怖とを除き『耶穌基督と共に天の所に坐する也』と。メソヂスト神學の特色は其極めて實際的なるに在り。元來ウエズレーは神學の方面に於ける創始力を有せるものに非ず、又新なる神學を立てんとしたることなし。彼は大陸に於て英國教會の三十九箇條を承認し、又カールディン説に對してアルミニウス説を保持したれ共、アルミニウス徒の如く原罪説及び三位一體説を拒否することなきを以りしが、ウエズレーの特に高調したりしは新生及び聖潔(又は完全)にして、前者に就ては俄然悔改の出來得べきことを受へ、後者に就ては基督教徒は此世に於て愛に於て完全となり得べきことを説けり。メソヂスト教會教義の基礎となるべきものは、ウエズレーの新約聖

メソヂスト教會

書註釋及び五十二の説教也。

(一) 一七九一年より現時に至る迄の略史 ウエズレーは其死後教徒の中に分裂の生ずべきを豫知し、年會に一書を遺して、互に人を支配せんとすることなきべき事、及び資金の分配に不公平なるべき事を會員に警告したりしが、果然彼の死後教會内に異論起れり。即ち一派は英國教會との結合を離脱せんと欲する者にして、他は之より分離せんと欲する者也。而して年會に普通信徒代議員を入るの可合に就ても亦異論ありき。斯くてウエズレー死後の英國メソヂスト教會は久しく分離に次ぐに分離を以てせり。今左に此等分派の梗概を記すべし。

(イ) メソヂスト新組合(Methodist New Connection) 普通信徒の位置及び權利に關する争論より起りたる分派にして、毎年の年會が普通信徒を代議員として列席せしむるを拒みしを以てアレキサンダー、キラム(Alexander Kilham)は之に反對し、普通信徒の權利を擴張せんことを求めしに、年會はキラムの教職停止を命じ、彼が尙其權利を主張せんとするや、彼を年會より放逐したりしが、五千人の信徒は彼に従て母教會を脱したりき。彼は於此一七九七年此等の人と共に一教派を組織し、之を『メソヂスト新組合』と稱し、普通信徒の權利(教職と同数の代表者を年會に出す事)に關する事を除き、其他は凡てウエズレーの教義及び教會政治を採用したりき。此派一九〇六年には總計六百五十五箇、教師二百六十六人、會員三萬八千人なりしが『バイブル、クリスチャン』及び『合衆メソヂスト自由派』と合同し『合同メソヂスト教會』となれり。

(ロ) 初代メソヂスト派(Primitive Methodist Connection) キーレン(Bourne)及びクロース(Clouse)

メの部

メソヂスト教會

と稱する二人の信徒説教者の開始せる所也。彼等は信仰復興の目的を以て天幕傳道を開始したりしに、年會は之を許さずして彼等を教會より放逐したりしが故に、彼等は遂に一八一一年を以て一新派を創設し、一八二〇年其第一年會を開きたり。教義及び教會政治は母教會と異なる所なく、唯教師の權力を制限し、年會の代議員は教師一人に信徒二人の割合を以てするを、講壇及び私生活に於て勉めて原始的メソヂスト風の單純素樸を維持せんことを異れりとするのみ。此派の發達は頗る著しく、加那大、ニウワランド及び澳洲に傳はれり。一九〇六年の調査に依れば、英國に於ける此派の禮拜所五千七百七十二箇、教師一千二百廿四人、會員廿萬五千八百四十九人も、(一) ヨイブル、クリスチヤン派 (The Bible Christians or Hymanites) 一八一五年ヨイブルに起る。コレニヤンの定住傳道者ウィリアム、オブライアン (William O'Bryan) の創設する所にして、巡回傳道者の報酬に關する不満の感情より分離するに至りしもの也。一九〇六年の調査に依れば、此派の禮拜所六百三十八箇、教師二百二人、會員三萬人なりしが、其翌年『初代メソヂスト派』及び『合衆メソヂスト自由派』と合同せり。

(二) プロテスタント、メソヂスト派 (Protestant Methodists) 一八二八年ヨイブルの禮拜堂に於てオレガンを使用したりしといふより生じたる分派にして、禮拜堂の管理者は年會の許可を得たるに於て、メソヂストの管理に反したりして斯る争論起りたり。

(三) ウェスレーン、メソヂスト、協會派 (The Wesleyan Methodist Association) 一七八四年の年會に於て、傳道者養成の目的を以て神學校設立の議を可

メソヂスト教會

決したりしに、サミュエル、ワァーレン (Samuel Warren) は之に反對し、年會之を放逐するに及びて、彼は二萬の會員と共に『ウェスレーン、メソヂスト協會派』を創立せり。又教會の中に三十年間最も有力なる働をなしたるマンチンゲ博士に反對し、權力集中を攻撃せる一派ありしが、此等の人々は『ウェスレーン、メソヂスト協會派』及び『プロテスタント、メソヂスト派』(前掲)と合同して、

(四) 合衆メソヂスト教會 (The United Methodist Church) を組織し、合同を不可分のものに成りて、(五) ウェスレーン改革同盟 (The Wesleyan Reform Union) となりし。

(六) ウェスレーン、メソヂスト教會 (The Wesleyan Methodist Church) は最初より傳道に熱心にして、殊に國教會の久しく看過したりし無學者、貧民

メソヂスト教會

及び労働者の傳道に向ては最も熱心也。一八八五年の選挙的運動の結果、倫敦、マンチンゲスター及び其他の大都市には、傳道本部を設け、許多の傳道館及び講義所を立てたり。第廿世紀の初めには、感謝資金一百万ギニア (一ギニアは我十圓に當る) を募集して傳道の資に供せり。内國傳道會社の外に外國傳道會社あり。印度、支那及び歐洲大陸に傳道地を有す。此外に出版會社、孤兒院等の設あり。神學校はヨウチモンド、ヘッティンジャー、マンツワールス及びアイブペリーの四ヶ所に在り。

【英國に於けるメソヂズム】 一七六〇年の夏愛蘭移民の一隊紐育に到着したりしに、其中に定住傳道師フィリップ、エムズリー (Philip Eastury) 及びバウル、ヘッタの妻バルバラ、ヘッタ (Barbara Hecks) なる者ありき。エムズリーは英國に來りて後其信仰冷却したりしが、バルバラ、ヘッタの熱心なる勧めに依りて一七六六年自宅にて説教を開始したりき。翌年英國陸軍大尉トマス、ウェブ (Thomas Webb) なるもの來りしが、彼も亦定住傳道師の一人にして、英國メソヂズムの建設に與りて大に力ありき。此二人の働に依り集會者漸く増加したりしが、エムズリーの家は漸く狭隘を告ぐるに至り、後屢々居を轉じて、一七七〇年ワシントン街に石造の會堂を建つるに至りしが、是れ實に英國に於て初めて築かれたるメソヂスト會堂なりき。ヒラアルヒア其他の場所に於てもメソヂストの會衆増加し、傳道者を要するに切なりしが、英國に向て助を請ひたりしに、一七六九年ウェブ、ヒラアルヒアの二人を送り、七年更にフランシス、アズベリー (Francis Asbury) ヨウチールド、ライイト (Richard Wright) の二人を送

メの部

メソヂスト教會

リ、翌年更にトマス、ランキン、ウォルツ、シヤツフォールドの二人を送り來れり。此等の人々は七三年七月ワシントンにて英國最初の年會を開き、ウェブスレーの定めたる條例に従ふべきことを約せしが、此時の報告に依れば會員の數一千一百六十人なりき。爾後長足の進歩を以て會員増加しつゝありしに、英國獨立戦争起りて一時頓挫を來したりしも、戦争終りて再び其勢力を回復し、アズベリーの記す處に依れば、八三年には會員一萬四千人、傳道者七八十人ありしといふ。

(一) メソヂスト監督教會 (Methodist Episcopal Church) 一七八三年の條約に依りて英國合衆國の獨立公認せられたりしより、英國に在るメソヂスト教會の英國教會に對する關係は、母國に於けるが如くなることをばす。而して當時英國メソヂスト教會には按手禮を受けたる教師なかりしを以て、禮典を執行すること能はざりき。於此ウェブスレーは八四年ヨウチールド、ワァーレン (Richard Whatcoat) トマス、ヴェーナー (Thomas Vane) の二人に長老の按手禮を授け、又英國教會の長老トマス、コーク (Thomas Coke) を總督 (Superintendent) とし、且コークに委任するに、當時英國に於けるメソヂスト教會の副總理たりしフランシス、アズベリーを擧げて、彼と共に總督の職に就かしむべきことを以てせり。此三人は同年十一月紐育に到着して直ちに説教を始め、十二月廿四日ワシントン市に開かれたる『クリスチヤン協會』に於て、コークは其同伴者と共に六十名の傳道師に會したりき。會議はウェブスレーの提案を容れ、アズベリーをコークと共に總督に擧ぐることに決し、コークは數人の長老の補助を得てアズベリーを總督に聖別せり。此會議は十日間繼

メソヂスト教會

續し、廿五箇條の信仰條條及び規則を採用し、斯くて『英國メソヂスト監督教會』の組織成りぬ。此クリスチヤン協會は通常の年會とは異り、メソヂスト教會の全體を包含せるもの也。『メソヂスト監督教會』の會議は四季會 (教會區内の説教者及び役員の會議) 年會 (地方教會或説教者の會議) 及び總會の四箇にして、總會は初め全教會の説教者全體の會議なりしが、後教會の發達と共に代議員の會議となり、一七九二年以來四年毎に一回會合することとなり、代議員の數は初め年會員五人に對する一人の割合を以て選出せしが、後教師の増加と共に漸次此割合を減せり。而して初めは教師のみの會議なりしが、後には信徒代議員も入ることとなり。説教者は年々監督の任命を受け、長く一所に留まることを得ず。長老司 (部長) も亦引續きて四年以上同一部の長たるを得ず。監督以下凡て巡回教師たるべきものとせらる。

メソヂスト監督教會は種々の慈善機關を有す。傳道會社は一八一九年の創立に依り、亞非利加、印度、支那、日本、朝鮮、獨逸、露西、諸國、瑞典、丁球、アルジャー、以太利、墨其西哥、南米諸國等に宣教師を派遣し、内地に在りては亞米利加印度人、獨逸人、スカンディナヴィア人、支那人、日本人等に傳道す。教會建築會社は一八六五年の設立に依り、自會堂を建築する實力なき地方の會員を助けて、會堂を建築せしむ。其他日曜學校同盟、小冊子會社、婦人傳道會社、出版會社等の設あり。又紐育、シンシナチ、ナカゴ、セントレイス、サンフランシスコ、アトランタ、及び其他にて週刊の機關紙を發行す。一九〇六年の調査に依れば、『メソヂスト監督教會』は、合衆國に於て教會二萬七千六百九十一箇、教職

メソヂスト教會

一萬七千六百九十四人、會員二百九十八萬四千二百六十一人ありし、英國最大の教派也。此教會は日本傳道の手を決したりしは一八七二年 (明治五年) にして、其最初の宣教師は翌年日本に到着して傳道を開始したりしが、其漸く發達するに及びて『南メソヂスト監督教會』及び『加那大メソヂスト教會』の年會と合同するを可とし、明治四十年遂に合同して一教會を組織せり (日本メソヂスト教會の條を見よ)。

(二) 南メソヂスト監督教會 (Methodist Episcopal Church, South) 奴隸問題は久しく英國のメソヂスト教會を悩ましつゝありしが、一八四四年に開かれたる總會に至りて頂點に達し、南部諸州の教師及び會員は遂に北部より分離して別に一教會を組織するに至りし。之より先キワシントン年會に屬する一教師は、妻の所有に係る奴隸解放を拒みしため教職を中止せられたりしが、監督ウェブスレー、オー、アズベリーも亦奴隸を所有せりとのこと發見せられて總會の議題となり、熱心なる論議の末總會は多數を以て、監督アズベリーが奴隸を所有すること、監督の巡回的職務を行ふに差支を生ずるもの也と思惟するの決議案を通過したりしが、南部諸州の代議員は之に快からず。而して北部諸州の代議員は其所信を固持して動かしざりしが、分離を以て最も得策也となし、南部諸州の年會は總會より離れて別に一教會を組織することとなり、一八四五年南部諸州の代議員はレイズゲイルに會議を開きて、『南メソヂスト監督教會』を組織し、監督ソワール及びアズベリーを擧げて總督職となし、翌年五月其第一總會をメテレスブルグに開けり。此時十九箇の年會、一千五百十九人の教師、三十二萬七千二百八十四人の會員を有したり

メの部

メッシュヤ

メッシュヤ

メッシュヤ

を鼓舞作用したりしが、此の如き希望はメッシュヤ來臨の希望に先ちて存在したりき。四福音書は即ち此種の希望の存在を示す者にして、書中にはエホバの大なる日には以色列の罪人は許せられ、四周の異邦民は滅ぼされ、次でシオンに福あるべしとのことを記したれ共、メッシュヤの事は未だ記載せられず。後以色列の歴史には、メッシュヤ來臨の希望の申述べたる時代もありしが、以色列及びシオンの終に教はるべしと云へる希望は常に強烈にして、世界の終末に關し秘密なる思想の發達するに及び、此希望は更に強烈となり「終末論」の條參照。而して此希望はメッシュヤに關する希望と其根本の信仰を同するが故に、之を「メッシュヤ的」也と稱するも不可なし。然れ共エホバの契約は彼以色列國民全體との間に爲されたるのみに非ずして、特に彼メデビヤ及び其子孫との間に爲されたるものなりしが故に（母後七の八一七、詩八十九の十九一廿七）國民の希望は常にメデビヤの家を仰りたりき。去ればアモス（摩九の十一）及びホセア（何三の五）が預言したりし、メッシュヤの來臨には非ずして、メデビヤの家の榮耀にせられ、以色列民族の再び其下に結合せられん事なりき。又エレミヤの語りし、メデビヤ王家の回復にして、特に一人の王者の出現せん事には非ざりき（耶十七の廿五、廿二の四、卅三の十五、十七）然れ共預言者の中には特に一人の王者の出現に就て語れるものなきに非ず。賽七の十四一十六、九の六、七及び十一、米四、五章の如き即ち是也。此等の場所が使用せられたる言語は、メッシュヤの觀念を含めるが如し。死に角エホバメデビヤとの間になされた契約に基き、エホバと特殊の關係を持し、エホバの者と力とに依りて民を治め、神の聖意と正義とに従

ひて政を行ひ、國民をして神を崇めしめ、以て平和と幸福とを享受せしむる王者の觀念の中には、メッシュヤの觀念の要素を有したりしこと疑なし。元來メッシュヤ（*Messiah*）は「預言者」なる語に「膏注」がれたる者の義にして、膏注とは昔時王者を立て、又は祭司若くは預言者を任用する時用られたる儀式にして、利四の五、十六、六の廿二、マツカビ二書一の十には、此語の形容詞を祭司に適用したれ共「主の膏注」たる者「我が膏注」たる者」と云へる如き實名詞は、單に王者を立てる時のみ使用せられたり。而して此語は「メッサヤ」に與へられたれ共（卅三の十二）メデビヤ及び其子孫に使用せらるる場合に初めて完全の意義を有したりき（詩二の二、十八の五十等）クロスにも此語が用いられたれ共、其意義極めて輕し。但九の廿四、廿六に至りて、此語は初めて特殊の意義を有せるを見る。次に出でたる最古の文籍には、メッシュヤ來臨の希望を述べたれ共、メッシュヤなる稱號を使用せず。是れ此等の書が默示的性質を有せしが故に、表號的の言語を用ゆるを以て便となしたりしに由るべし。即ち「シビオン神託」最古の部分は一四〇年頃の産物にして、書中神託より遺はられたる王者の事を記せるが、此はメッシュヤの義に外ならざるべし。又同時代の産物なる「エノク書」最古の部分に、選民の歴史を表號的に記述せるが、其中に白社領とあるは、メッシュヤを指せる也。ソロモンの詩篇の中には、メッシュヤの觀念明白に顯はれ、且メッシュヤの稱號使用せらるるを見る。其十七、十八篇は即ちメッシュヤの希望を明に表白せるもの也。然れ共紀元前二三百年間にしてメッシュヤの希望を表示せる文書は極めて少く、其少き理由は明白ならざれ共、當時政治上の

状態の變化せることも亦一原因なりしなるべし。而して當時の人々がメッシュヤを以て如何なる者と思惟したりしやといふに、彼等は彼を以てメデビヤの裔に出づべしとなし、或る處には特に「メデビヤの子」と稱せり。而して又彼を以て理想的王者となし、其心之行と共に神の聖意に合ひ、地に在りて神の眞の代表者たり、神に依りて其約束を成就し、凡ての人を導きて神を崇めしめ、又神の民以色列を尊敬せしむべしとせり。次は四福音書に記されたるメッシュヤ觀にして、吾人は此處に耶蘇當時の猶太人の信仰を窺ふを得べし。之に依れば當時猶太人は一般にメッシュヤの來臨を期待したりき。而して彼等の期待したりしメッシュヤは、大體に於て以上述べたる處と異なる處なしと雖も、之に加へて彼等は更にメッシュヤの來るは不意にして奇跡的なるべしと信じ（約七の廿七、タルムド及びタルムドにも同一の觀念あり）且メッシュヤは奇跡を行ふべしとの事を信じたりき（太十一の二以下、約七の卅一）。ラビ文書にも同様の事を記せり。而してメッシュヤ觀は世界の終末に關する教義の發達と共に變化し、紀元七十年より二百年の間に書かれたりしと推定せらるる「バラク」の黙示録及び「第四エブラ書」には、世の終末に至りメッシュヤは天の雲に乗り海より來り、神の敵を滅ぼし、以色列の散れる者を集め、平和と富を以て四百年間之を統御すべく、四百年終りてメッシュヤも凡ての人類も悉く死し、後凡てのもの蘇りて神の審判を受け、此處に新世界の出現を見るべしとの事を記せり。斯くメッシュヤは理想的王者として顯はされたれ共、舊約書中には此外に尙來るべき理想的人格として示されたる者あり。吾人は之を以て上記のメッシュヤと同一視すべきや。今左に之を略論すべし。

メの部

メッシュヤ

メッシュヤ

メッシュヤ

(イ) 預言者 申十八の十五に「汝の神エホバ汝の申汝の兄弟の中より我の如き一個の預言者を汝のために起し給はん」とあり。此は單に神は其民に預言者を興へずして之を顧み給はざるが如きことなしとの義に外ならず。預言者の起るること既に久しく止み、メデビヤ王朝の久しく振はざりし時に方り、以色列人は切に眞預言者の出現を期待したりしことありき（マツカビ二書十四の四十一）。耶蘇の時代に至り、猶太人の中には古の大預言者の歸來を望み（可八の廿七以下）又「預言者」と稱せられたる者の出現を望むものありしが（約一の廿一、廿五、六の十四）此等の場合に在りて其預言者云々（は）メッシュヤの義に非ず。然れ共メッシュヤに預言者の性格を歸したるは疑ふ可らず。即ち猶太人がメッシュヤを以て奇跡を行ふべしとなし、サマリヤの婦人がメッシュヤを以て眞理を示す者となしたるが如き（約四の廿五）是也。

は其苦難を見て却て之を厭ひ棄つるに至りたりき。以て苦難の儂の預言が、メッシュヤ的觀念に及ぼせる力の殆ど皆無なりしを知るべし。(ハ) 人の子 耶蘇は自ら「人の子」と稱し、之に依りてメッシュヤたることを顯はしたれ共、猶太人はメッシュヤを「人の子」と稱したることなし。蓋し耶蘇が「人の子」と稱してメッシュヤなる稱號を用ひざりしは、メッシュヤに關する誤解を避けんがためにして、猶太人は實に此稱號の何の意義なるやを知るに苦みたりき（約十の卅四）亦以て「人の子」なる語が當時の猶太人に在りてメッシュヤと何等の關係が有しを見るべし。此「人の子」なる名稱は但し其書に象り、之に對して天の雲に乗り來れる異人を描き、之を「人の子の如き者」と云へり「人の子の如き者」とは以色列國民の義にして個人を指せるに非ず。故に此處にはメッシュヤの義なしと雖もエノク書（四の十六の一、六十九の廿九）には「人の子」をメッシュヤの義に使用せり。(ニ) 基督教のメッシュヤ觀 耶蘇が自らメッシュヤに對して何をなしたりしや等の事に關しては今爰に之をいふを要せず。吾人は爰に唯耶蘇はメッシュヤの觀念に新なる意義を與へたりしことをいふを以て足れりとすべし。即ち彼は其身に來るべき苦難に就て語り、之を以てメッシュヤの取るべき道也となせり（可八の廿七以下、十の卅二、卅四）初代の信徒は十字架、復活及びパンテオステの出來事に依り、今更に其曾て親しく見聞したりし耶蘇の性行、教訓を思ひ出で、其抱きたりし猶太的メッシュヤ觀を變へたりき。彼等は耶蘇の教訓に基き、新なる眼を以

て舊約聖書を讀み、耶蘇に應驗したる完全なる理想の此處彼處に散在せるを見たりき。即ち彼等は先づ第一に耶蘇が其教訓及び生活に於て顯はしたる性格に依りて、眞の預言者の約束に注目し、耶蘇は即ち舊約に所謂預言者の應驗したる者也となし、其最初の教訓に於ては此點に重を置きたり（徒三の廿二、七の廿七）又彼等が其祈の中に「爾が膏を注ぎたる聖僕」と云へるは（徒四の廿七、卅）耶蘇を以て「エホバの僕」の應驗也となしたるを示し、耶蘇をメッシュヤとして信じたりし人々と不信なる猶太人との争點が、耶蘇の苦難と死とを以て神の豫め定め給ひし處也となすや否やに在りし事は、徒三の十八、八の卅二、十七の三、廿六の廿三等に依りて明也。彼等はメッシュヤの來臨を以て二回あるべしとなし、最初の生涯は風俗の生涯なりしが、今や彼は天に擧げられて神の右に在り、再び來らん時には榮光を以て來るべしと言へり。而して希伯來書記者は史にメッシュヤに歸するに天の祭司職を以てし「希伯來書」の條を見よ。斯くて新約聖書に於てはメッシュヤは預言者、王及び祭司の三職を負へりとなせり。アドラムの「猶太のメッシュヤ」シワレルの「猶太人歴史」スタントンの「猶太及び基督教のメッシュヤ」等を見よ。教、教主「終末論」の條及び「耶蘇の教訓」の條「メッシュヤ」の項等參照。

滅絶説 Annihilationism. 教義 聖人に對する永遠の刑罰は、靈魂の滅絶に在りとの説也。此説は一宗若くは一派の信條とはならざりしが、個人として此説を持つる者少からず。

メデア人 Mediae 種族名 創十の二に「メデア人はヤハテの子としてゴメル及びヤランを並記せらる。メデアのアッスリヤ語はマダナれ共、シヤマ

滅絶説のメデア人

メアの部

チセル二世の史記にはアマテと記さる。前七四三年チアラテセル三世はツアラロスの東に在るメアア人の國を攻め、次で前七一三年サルゴンがメアア人の諸酋長を征服せり。後メアア人はキムメリア人等と共にアッスリヤを攻めたりしが、アッスリヤは敵軍を撃退したりき。メアア人はキムメリア人と共にアッスリヤ族のイラニア系に屬し、彼斯人と其種族を同ふす。ヘロドタスに依れば、彼等は其國國分れたりしといふ。アッスリヤ時路に依れば、メアア人は中央政府を有せず、希羅人の如く數多の小邦に分れたりしといふ。去ればメアア帝國と稱する信即は全く根據なく、此はマダ(メアア人)とマンダ(キムメリア人)を混同せしより起りし者也。近頃發見せられたる碑銘に依れば、ニツベを滅したる昔は(前六〇六)マンダ人にしてマダ人に非ず、楔形文字の表する所に依れば、メソポタミヤを劫掠したる者はマンダ人にして、タロスも亦メアア人に叛きたりしに非ず、マンダ人に叛きたりし也と云ふ。メアア人もマンダ人の中に含まれたりしやも知る可ざれ共、マンダ人なる語は元來コカサス山脈を越えて西亞細亞に屬集し來りし北狄を指したる名也。ヘロドタス及びタシタスの記したるメアア人の語王は作爲的にして史的價值なし。前七二三年サマリヤがサルゴンのために掠奪せられし後、少數の以色列人はメアア人の諸市に移されたりき(王下十七の六、十八の十一)。此は蓋しサルゴンがメアアと戦ひ(前七二三)ピクニ流進軍したりし後に起りたりしことなるべし。以賽亞書(十三の十七、廿一の二)には、メアア人とエラム人と共に巴比倫を滅ぼすべしとあり。耶利米亞書(五十一の十一、廿八)には、

メドハルストのメドレー

メアア人の諸王巴比倫を滅ぼさんとて、アララット、メンニ其他の軍を聯合せしことを記せるを見れば、當時メアア人は尙數多の君主に依りて分轄せられたりしを見るべし。タロス王はメアア人と彼斯人とを合して巴比倫を滅ぼしたりしが、彼が巴比倫の最初知事となせしゴアリアはメアア人なりき。彼斯帝國滅亡後メアアは二部に分れ、廣大なる領地を有したりき。メアア人は山地の住民にして、勇敢にして好戦人なりしと傳へらる。而して其宗教は拜火教なりしといふ。

メドハルスト ウォルタル ヘンリー

Melhus, Walter Henry 人名 一七九六一八五七 英國の宣教師、東洋語學者、倫敦の人、一八一六年より五六年まで極東に在り、印度、コヤバ、ボネオ、支那に宣教師、ツヤバ、支那、日本諸語に通じ、聖書を支那語に譯し、支那語英語辭書及び英語支那語辭書を編纂し、支那の現状及び將來の編纂の著者なり。

メドレー サミエル Melley, Samuel

人名 一七三〇一八九九 英國浸禮派の牧師、聖美歌作者、ハーンチエスハントに生れ、一七五二年倫敦にて油商に奉公し、五五年海軍下士官となり、五九年負傷し、其後悔改し、六〇年又は六一年倫敦に學校を開き、六七年ハーンチのラットフォードにて浸禮派牧師となり、七二年リヴァプールに移り熱誠教會として功績ありき。衆らぬ感業を以て『聖美歌集』を公にし、八九年七十七箇を集めて一冊となし、一八〇〇年二百三十二箇を集めたるものを出す。其歌には才能見ゆれど味とては現はれざりしが、中には世に廣く唱へらるる者あり。『心の精華』と稱し、譯文は『A voice, my soul, in joyful lays』我主の

メラントン

こゝなき御いそを O could I speak the matchless worth) 等はメドレーの作なり。

メラントン フィリップ Melancthon, Philipp

人名 一四九七一一五六〇 獨逸の宗教改革家、ルーテルの協力者。舊名シヨロツクエルド、黒土を意味す。當時の風習に従ひ大叙交にして有名なる學者ロイヒマンの勧めに由り、希羅語の同意語メラントンに改む。後又教會を容易にせんため自らメフントンと稱せり。一五九七年祖母の住地ホルツハイムの拉丁語學校に入り、ロイヒマンと親しくなり、一五〇九年ハイデルベルグ大學に入り、一二年バチエロル號を得、翌年マスター號を得べかりしを年少の故に拒まれ、チロビンゲンに入り哲學純文學と共に法律天文醫學を研究し、一四年マスター號を得、尙同大學に在りて神學の研究を始め、又編輯出版の業に従ふ。一八年ロイヒマンの勸言を拒絶し、インゴルスタット及びライプチヒ兩大學の招きを辭して、ワイツテンベルグの希羅語教授となり、ルーテルの感化に由りて聖書を深く研究し、一九年のライプチヒ宗教討論に臨みて益々神學に趣味を強くし、ルーテルを助けて其交情密なるに至れり。エウラムバタイカスへ贈りし書面は、端なくもエックの攻撃する所となり、彼は又エックに答へて聖書の權威を主張し、是等に依りて神學の遺語を認められ、神學士職を興へられ、神學博士號をも與へられんとせしむ。斯かる事は敬虔の精神を以て授受せられざるべからずと言ひて之を拒絶す。二〇年友人等の切なる勧めに由り市長クラッブの女カターリナと結婚す。二一年ティンブス、フラゲンチヌス等を著してルーテル主義の主張者たることを明かにし、同年又新教神學を始めて組織立てたる『ロキ、

メアの部

メラントン

リ消すことを迫られしも之を拒絶し『スママ、ドクトリナイ、レテリ』を著して其主義を略説す。二六年神學教授となる。其後ニコレンベルヒ、チロビンゲン、佛蘭西等より交々招かれしも、ウイツテン



『ムニス、レルム、テオロギカラム』を出す。其後はルーテルと共に聖書を獨逸譯する事と、註解を著はすこととに従ふ。二四年健康のために南部獨逸に遊び、法王施東カムヘギラスと遊ひ、改革説を取

メルヒに留り、二九年スビーレス會議にては獨逸改革者に對して辯論し、同年のマルブルヒ會議にも臨み。此時は寧ろ獨逸兩派の分離を欲せし故何等の爲す所もなかりき。三〇年アラカスアルヒ會議あ

メラントン

リ、アラカスアルヒ告白成る。同告白は選後の指名に依りメラントンの編纂せしもの。用語明白にして調子は平和穩當のものなるが、尙晩年に就てはルーテルの嚴重なる説に従ひたり。ルーテルは尙嫌

メラントン

賦、聖徒禮拜、法王等に關する教義を除き手ぬるしことなし。メラントンは此を以て後に『辯論論』を著はしたり。後數年間は重に學校の教授に勤め、羅馬書の註解を書き、アトチエルの送りに來りて其に十分の賛成を表し、三四年晩餐祝に就て共に講せんとしてカッセルに會合し、斯くて益々ルーテルの持説を遠ざかり行けり。ルーテルは彼をツウイングリー説に傾けりと思ひ、又コルダトスといふ説教者より彼が善行を以て義とせらるること不可缺條件とせりて詆へられしも、ルーテルも尙彼とは心一つなりと言ひ、メラントンも『ロキ』の第二版にアラカスチヌス説より遠ざかれることを示しつつも、尙ルーテル等へ書を贈りて決して人々の教ふる所と異なる事を説かずと言へり。其等の事情よりワイツテンベルグに在りて面会せし事なり居りし所に、有名なるヘッセルのファイリップの重婚事件は起れり。メラントンもルーテルと共に之を例外的場合として式に臨み、唯秘密に保つべく注意し置きしに、忽ち此事は公にせられたり。メラントンはロイマルに在りて之を聞かば、後悔痛恨其心の實に堪へず、殆ど死ねばかりに傷みしな、ルーテルの勇氣ある所と自己の意志の力とに依り幸うじて救はるゝを得たり。一五〇〇年十月ワルムス會議あり、彼は此時前會議より一層容軟なく法王派を攻撃せんことを決心せしが、會議は延期してレグンスアルヒに開かれ、協約成立らぬ。四三年メラントンがアトチエルと共にクルン改革派のために試みたる演説に就てルーテルとの争論起り、ルーテルは講壇上よりすら攻撃をなし、其より兩者の間面白からざりしが、四六

メの部

メラントン

年二月にテレル死するや此感情は忽ち一掃せられ、大学の記念演説にてメラントンは語を極めてルイテルを頌し、イザヤ、バプテスマのヨハネ、保羅、パウロ、メソメスと伍すべき人なりとせり。四七年メラントンは天主教儀式の多くは守るも守らざるも差支なしと云て、ルイテル派の厳密なる意見の疑符ヲナラス、イルミナスと激しき論争を結ぶ、四九年以後は義せらるゝ事の教義に關してアンドレアス、オクアンデルと争へり。此等の反對者は多少性格上の缺陷もあり、殆ど皆へびを食ふをせしむるも、メラントンは平和なる書面を以て之に答へぬ。次でキソニア選侯はトレント會議に新教主義の言明書を送らんとし、メラントンに之を伴らしめ、彼をして五年に之を寫らしてトレントに赴かしめしに、途中キソニアのモリツツの出兵準備を見て歸り來りぬ。五年のオクアンデルの平和は新教の安全を保證せし、皇帝は五七年ウエルムスの新舊教神學者對論を開きてメラントンを之に呼びしめ、ルイテル派は既に左右兩派に別れ居りしため、此對論は何の甲斐なくして止みぬ。其頃また改革教會内にカールゲン説教を占め來り、メラントンは晚餐に關する論争に引き入れられて、晩年を非常なる苦悶の中にすごし、神學論より教ひ出されんことを祈るにまで至れり。メラントンはカールゲン説教一致する能はざる所多かりき。基督觀し、在りし、晚餐に於て自らを分け與ふといふことは彼に取ては非常に重大の信仰なりき。勿論彼も晩年に於ては基督肉を以て現在といふ説をば棄て、精神的に在るといふ説を取れり。されど基督と合一するといふ事は終始彼の重んじ所なりしなり。死する數日前の事なり、死を恐るゝ理由を書き記せしが、左

メラントン

の方に「汝は罪より救ひ出され、神學者等の兇暴より脱れざるべからず」とあり、右には「汝は光の國に行き、神を見神の子を仰ぎ、此世にて解する能はざりし秘義を解し得ざるべからず」とありき。ライプツヒに赴く途中風邪にかかり、間歇熱となり、最後には祈りを以て時を埋め、詩廿四、廿六、以賽亞五十三、約翰一、十七、羅馬五等の朗讀を聞き、殊に「其民之を受けざりき、然れど之を受けし者には之に力を賜ひて神の子となせり」といふ句を愛せり。婿イナエル何等か要する事なきかと問ひし時「何しなし、唯天こそ」と答へたり。遺骸はワイツツンベルヒのシエロワスキルへなるルイテルの墓の側に葬らる。

メラントンはルイテルの置きし處に宗教改革を確立せし事由て、史上に大なる功績を留めたる人なり。性質の甚しく異なる兩者を一に合はせて一の事業を成さしめたるは攝理の妙と謂ふべし。世界大の舊教會に對して新教を分たせしむるには、唯かにルイテルの膽力を要したり。メラントン自身も實にルイテルに依り活動に引き入れられしなり。彼は性來讀書好學の人にして、常に退隱を樂習し居たり。然るにルイテルに依り引き出されて改革の活動に與かり。ルイテル散布的に其思想を發表すれば、メラントンは其好むし文學的の技術に依り、其保守的の穩當なる性質に依り、之を組織的論理的に建設し、斯くて獨逸の教育ある社會へも改革を注入することを得たり。ルイテルは九十五箇條文を書き、メラントンは數多の著を作せり。斯くて兩者は交々他の能を認めたり。メラントン「我もルイテルと離れざるを得ずんば事死なん」と言へば、ルイテルも彼をエリヤに比し、聖靈に充ちたる人と呼び、

メラントン

ルイテルの死し時にはメラントンは「死者は此世の世に教會を治めし以色列の騎者及び戰車なり」と言ひしが、ルイテルは曾て「余は先驅者なり、ワイツツ君は柔しく靜かに心から種まき水まきよ。神彼に豐に天才を賜ひたればなり」と言へり。晩年相善からざりしも、相互の信用背無になりしとは言ふべからず。而して兩者の關係を見るに、ルイテルは曾てメラントンの性格に關する如き事を言ひし跡見えず、唯メラントンは時々かゝる事を言せり。實にメラントンの性格は弱かりき。さればルイテルの如き重々しき人格を重荷の如く感じたるならん。メラントンの遠慮的なる所は、常に勇氣の缺乏性格の缺陷の數す所と疑はれたり。然れども彼が常に冷靜に教會の幸福を考へしを見れば、沈勇の缺けたる人とも見えず、又或時には學生が互に拔劍して争へる中に飛び入て仲絶したる事もあり。素より彼の勇氣は奮發に依り出でたるものなりし也。彼は天性溫和の人なり、争鬭分難をば厭ひ避け、天主教教會に對しても常に平和的精神を有し、之を尊敬し、殊に教會の師父を尊敬したり。儀式等に就てもルイテルの如く絕對的に之を排斥せざりき。メラントンの文才は甚だ秀でたるものにして、明白活潑壯麗の趣あり、加ふるに知識を温習するの情を有せり。講演も甚だ美しくは「プライクテブル、ゲルマニエ」(獨逸の師)の名を得たり。

神學者としてのメラントンの地位は、單に改革の協力者たるよりも以上實に其首領者たる者なり。彼は開創的人に非ず、感受的の人なり。其「ロキ」は新教最初の組織的神學書なり、思辨的ならず、教育的にして條理整然明確なり、學說的よりは實際的の點に重を置けり。一五二二年初版を出し、三五

メの部

メラントン

年訂正版を出し、スワラチン初版を二二二年に、ユスタス、ヨナス二版を三六六年に、獨逸語に翻譯す。テレルの意見と別れずは著者の自ら解釋せし所なるも、實は次第に遠ざかり、ルイテルの説の神學的分子多きと異りて、メラントンは教には道徳的要素大切なりと言へり。預定説にも初めの程は一致せしが、次第にルイテルと別れ、人類の自由意志の存する餘地あるを説き、信仰の説にはカールゲンと異りて之を神の働とするよりも多く人の働となし、神の言と聖靈と人の意志とを三原因とせり。倫理説も「キケロ著ア、オプイキニス序言」エナナチオチス、リケルム、エチコロム、アリストテリス等エチカイ、ドクトリナイ、エレメンタ」等に於て述べ、有力なり。聖書解釋にはルイテルを助け、ルイテル譯聖書のマツカピニス書は彼の譯なりと言はる。創世記、豫言、但以耳、詩篇、羅馬書、哥羅西書の各註解、約翰傳の拉丁語註解あり。説教に於ても大なる感化を與ふ。されど彼は按手禮を受けざりし故絶えて教會にて説教せざりき。アンノチオチス、イソ、エヴァンゲリカ」其他は此類の著なり。言語學教育學の上にも勢力を及ぼし、古典にも通じれば學者派の關連となり、學校と教會とを結合せしめし功甚だ多し。

メラントンは身體矮小なりしが、眼終りまで閉居たり。ホルバイン作の肖像ハノーフェルにあり。健康は強き方には非ざりき。家庭は甚だ美はしく、彼は自ら「小さな神の教會」と呼べり。一男一女後まで生存す。メラントンの性格に就ては死後甚しき非難ありき。第十八世紀の初めオナルド、フツァルはワイツツンベルヒにて演説の時、言メラントンの事に及ぶや、壁にありし彼の肖像を取りはづし

メリタ

て公眾の前にて之を足下に誣罵したる事正確に記録せらる。一七六〇年に至り始めて其死去二百年の紀念行はれ、その三百年紀念は全獨逸に於て盛に舉げらるゝに至れり。彼もより弱き所はありたるべきも、唯かに宗教改革に於て大なる功勞ありし人、又高き人格を有したりしことは疑ふべくもあらず。彼の傳記はシツツ(一八八七)ハルトフェル(一八八九)ハルツァル(一八九八)エリツゲル(一九〇二)等之を書けり。

メリタ Melita. 使徒保羅が羅馬へ航海の途次船給して上陸したる島として記さるれ共(徒廿八の二)保護が其一行と共に上陸したりしはマルタ島也と思惟せらる。彼が船の次第及び、此島に上陸せし時土人等が一方ならぬ親切を以て彼等を待過せし事、保羅が島守アプテオ(Pollio)に款待せられ、其父の病を愈したりし事等は、徒廿七の十三―廿八の十四に記さる。マルタはシツツの南の岬バキナムより六十哩、ボン岬より凡そ二百哩の所に在り。島の長十七哩、廣九哩、周圍六十哩、面積九十五方哩あり、人口稠密にして一方哩毎に二千人の比例也。希臘人風に此處に殖民せしものも如し。久しき間カルセウの所領なりしが、前二一八年羅馬に奪はれ、三九九年東帝國的領土となり、爾後幾變遷を経て、一七九八年ナポレオンの占領する所となりしが、一八〇〇年遂に英國の所領に歸せり。

メルヴィル

らし巴里に行きて大學に入り、拉丁語希臘語及び哲學と共に潘伯來語を研究し、二年後民法研究のためボアチエに行き、聖マルセオン、カレツァの長となる。其後ヴェネツァアに行き純文學の教授となり、五年間ベザの下にて神學を研究し、ベザより「ヴェネツァアの教會はメルヴィルを取り去らるゝも、之を以て蘇國の教會を富ますことを喜ぶ」と言はれて、七四年七月歸國し、グラスゴウ大學總理たることを承認す。其勢力と熱心とにより、學生は諸方より來集るゝに至れり。一五七五年の總會にはウシ、アマツヤの反對に賛成して、既に設置せられたるタルカソ監督領の廢止を主張し、五年の後に其廢止を見るに至り、又「第二回戒書」の材料を集むる委員としては重大なる地位を占め、之を稱讃せし七八年の會議にては議長の席を占めたり。八〇年聖アンドリス市大學に轉じ、議會に依り神學研究所と定められたる聖メアリー、カレツァ校長となる。初めは反對を受けしを、二年にして其學問と熱心とは能く人認を收むるを得、學生は増加し、宗教は學校にも市民にも重ざらるゝを得たり。然るに樞密院は一五八一年の契約あるにも拘はらず、七二年レリスにて作りし法律を復活して監督制度を認可し、王の寵臣レンノクスはモントゴメリーをグラスゴウ大監督に任じたり。政府は強制的に此制度を立てんとせしかば、教會は大膽に之を拒絶し、モントゴメリーを破門せし、樞密院は此破門を無効とし、監督税を納めざる者を悉く投獄すと宣言し、グラスゴウ大學に對して禁令を布けり。メルヴィルは説教を以て樞密院の處置を攻撃し、これ君主の身の上に新しき法王國を築くものなりと叫び、示威的宣言を決議して之を王に送れ

メの部

メンノー

メンノー

メンノー派

の富める猶太人の家族教師となり、五四年書齋出版の株主となる。其頃よりレツシヤ、ニコライ、アプト等と知り文學的活動に入る。其『フエドム』及び『モルゲンスタンテン』の二講演は、神を権威不滅の事を論じたものなるが、彼は之に依て哲學者として知られ、其書は諸國語に翻譯せられたり。去れど其思想及び論じ方は今は古びぬ。ラファエルは彼を基督教徒にせんとして議論を闘はせしが遂に功を奏せず。ヤコビはレツシヤをスピノザ説なりと駁して又彼を議論し、兩ながら面白かりき。彼の長く記すべき事業は編纂に於ける猶太人を進歩せしめんとせし努力なり。

メンノー

シモンズ

Menio Simons.

人名 一四九二—一五五九 和蘭の宗教改革者。フリースラントの一村落に生る。一五一五年又は六年に僧となり、生地に近きセントニユムの司牧となる。其頃より晩年化體説に就て疑惑を抱き始めしが、之を悪魔の誘惑として退けたり。されど終に解決の血路を開かんとして、其までは危険極まる誘惑者として斥け居りし聖書を研究し、其結果直ちに福音主義の説教者として知らるゝ力を得るに至れり。三一年ワイトマルスムの牧師に轉じ同年シツケ、フレールグスツアアブテスト主義を抱きて焚き殺されし事のために非常に感情を動かされ、此に研究をなして終にルーテルもブツケルもアリンゲルも未だ幼児洗禮の是なる確證を立て居らずと信するに至りたり。彼の説教は次第に多くの人を天主教より去り行かしめぬ。されど自己は尙留り、三四年ウヤン、マテスツーンの書『ゲアン、デル、ワラーク』の出版し時には書を作りて之に反對せり。然れども三五五年狂妄なるアナバプテスト徒はアレムカムア僧院を強

奪し、フリースラント總督と争ひて熱心者の多數之に死し、メンノーの兄弟又其中に在りき。メンノーは翌三六年一月職を退きて愈々天主教會を去り、自己の周圍に集り來る人々に説教す。其年八月アナバプテストの諸派の代表者はウエストフリアのホフホルトに會議し、幼児洗禮、晩餐、基督の化身、自由意志、恩恵等の點にては衆說皆一致せしむ。結婚及び天國に就ての説合はず。ミユンステル及びバートンアルベの代表者等は多妻主義を辯護し、メルキオリツ派オベニツ派は之を蓋淫なりとし、天國に關してはオベニツ派は、迫害及び苦痛の間に、篤信者に依て成り立てるものゝ外此世にあるべからずと言へば、メルキオリツ派は聖靈の降臨を預言者使徒の遺出に依て奇蹟異能行はれ世界一變すべしと説き、ミユンステル及びバートンアルベの代表者の如きは、兵に訴へて天國を來らざる可なりとまで主張し、調和甚だ困難なりしに、デビッド、ウーリスは之に乗じて其狂妄なる信仰を鼓吹せんことを欲し、オベニツ派は動搖の全體に波及せんと恐れ、代表者をメンノーに遣はして、派中の『長者』とならんことを勧め。メンノーは遠逝の後之を誦し、一同より大に喜ばる。彼は敬虔にして真心鋭く實して同派中に道徳の高からんことを命じ、狂妄なる信仰動作を抑壓せり。一五四年までアレニンゲンに住せしが、實を懸けて其首を求めらるゝに至りてアムステルダムに移り、其より北和蘭の各地をさまよひ、一五四三年ウヤン、ア、ラスコより公開討論をなすべく招かれて、東フリースラントのエムテンに行きて定住し、此にて大なる感化を與へたり。然れども四五年カレル五世、フリースラントよりアナバプテストの退去を命じ、彼は一時ケレンに脱れ、四六年オランダ

ローへ行き、信徒を集め又印刷事業を興し、多くの時を巡回訪問に費し、又勢力を得たり。其頃著はしたるは教義の書たる『フォンダメント』を始めとし、信仰的辯證的論議の種々なる小冊子なり。彼は開創的の英才にはあらざりしも、思想明白なる人なりき。性格も強剛には非ず、服々遠逝する事ありしも、其は護衛の爲めにして一たび決断すれば不勑不屈なりき。メンノー派と稱する者は教會制度戒規洗禮聖約軍役等に就て彼の説に従ふ徒なり。メンノーの傳はアラウエンの著者ハツ(一八五三)。

メンノー派

Mennonites.

宗派名

メンノー派 Mennonites. 宗派名。メンノー、シモンズと其説を同する福音主義基督教徒の一派にして、ネデルラントにて此名を得たれ共、其説の起源は瑞西に在り。現今此派は獨逸、佛蘭西、露西亞、北米合衆國及び加那太に在り。一五二五年クワインギー派の會員なりしがベル及びマンツの二人、クワインギーの所説に不満を感じ、クワイヒに獨立の教會を立て、信仰を告白せる後にのみ洗禮を施すことをなしたり。彼等は小兒の洗禮を以て悪魔及び法王の發明に歸したりしが、教義には實行程の重を置かず。彼等は使徒時代教會に發見せざるものは皆之を排斥すべしとなし、有給の僧侶、什分一税、政府の職に就くこと、領を用ゆること、及び宣誓をなすこと等を排斥し、破門及び財産共有等の制度を復活せんとし、遂に而して彼等の中には狂熱に走る者ありしが、遂に政府の干渉を招き、平和無害なる者へ迫害を蒙るに至り、第十六世紀より第十七世紀の初めに至りて其極點に達し、一六三五年クワイヒにては彼等を強てレフホルム教會に入らしめ、其後はざる者は獄に投じ、其財産を沒收せり。シツフハワセン、ヘル

モの部

モーア

モの部

モーア

人名 一四八〇—一五三五 英國宗教改革時代天主教の殉教者、有名なる『夢想國』(Utopia)の著者。倫敦に生る。父は御前裁判廷の判官なりき。

ン、パーセル等にも同じく之を迫害し、第十八世紀の初めに至りて迫害漸く止めり。瑞西にては此派寛嚴二派に分れ、其嚴なる者は鎖を用ゆること、頸繫を制することを禁ぜり。獨逸のメンノー徒はアルサス州殊にウオスグスに住す。佛蘭西のメンノー徒はナンシー、トゥル及びフランチエコマテに在り。露西亞のメンノー徒は初めカマリナ二世に招かれタロミヤに農業的植民地を作りしが、現にコレチフ、モロトシナ、マリアポル等に住す。多くは獨逸より來れる者也。米國のメンノー派は迫害を避けて歐羅巴より移住せるに初まり、最近の調査に依れば、合衆國及び加那太に於ける信徒の數凡そ十萬あり。主として農業に従事す。和蘭に於てはメンノー、シモンズ實に之の首領たり。初め迫害を蒙りしが、一五八一年迫害止みて後政府却て之を保護し、一六七二年には公然之を承認せり。彼等は醫師、辯護士等の中より其説教者を選ぶを常とせしが、一七三五年アムステルダムに神學校を建てたり。此派第十八世紀の初めには十六萬人の信徒を有せしが、後漸次衰微し、現今は凡そ三萬人の信徒あるに過ぎず。彼等は重んじ北和蘭及びフリースラントに住す。

モーアは『カルテイヤル』モルトンより教育せられ、後牛津に送られ、ケロウソン、リネケル、コレット、エラスムス等新學問の人々と相親しむ。父の意に従ひて法律を研究し、一五〇三年には衆議院議員となりしが、ヘンリー七世の怒を買ひし事ありて政界を退き、古典を翻譯し、隱遁生活を實行し、又僧となるべきを思考し居りしが、其健全なる性質に依て〇七年結婚し、再び出て法律事務に従ふ。ミランテヌラのピッコの傳記及び事業を翻譯し、ルーゲンズの教授ドレヒウスに反對して、エラスムス及び



ア—モ スマ—サ

其新約聖書を翻譯し、斯くて一八年年半津にて希臘語を必修とするの王命出でたり。ヘンリー八世即位の時は詩を作りて歡迎し、其廷に入らるる『夢想國』は一五一六年に著はしたるものにて、南洋の夢想國を訪ひ來りしラファエルと對話せし體にて、英國の國民的社會的狀態を批評し、新社會組織を建言したるものなり。其『夢想國』を心に感めて書き及ばれど、婦人も尙たり軍人たること男子と同權なり。宗教は自由にして種々の形式あり。市民たるの

モーア

モーア

條件は唯靈魂不滅と神との信仰あれば可なり。同書著作の時は、既にウラウーに強いられて王に事へんとせし頃にて、斯かる理想を以て政治及び社會の改良を志せしなり。然るにルーテルは恰も其頃現はれたり。社會の動搖は起れり。モーアは此に於て其地位を一變し、英國天主教の勇士となり、ルーテルが一五二三年ヘンリーに贈りし答書に對し『レスポンス』、アド、コンゲインキア、ルーテリ』を出し、更に二九年に出せし『テイアログ』及び『チンダルヤ』、フリス等々の答辭にては、天主教主義を徹くまで辯護す。王は此に於て彼を尊び、二九年ウラウーの没落すや、彼を最高判官となす。王がアラウエンのカザインを離脱せし事に就ては、モーアは合法とするを肯せず、之を神學者等の判斷に移せしが、アン、ホーリンの結婚をば拒くまで同意すること拒めり。而してヘンリーが愈々法王より離れんとするを見るや、三二年病に托して辭任し、アンの冊立式に臨むを拒みなごせしも、無難に過ぎ、又監督フィツシャルと共に所謂セントの處女を結婚せりとして誣へられし事あるも、之も深く關係なかりしが、告訴棄却せられたり。モーアはフィツシャルとは相違んで天主教派の首領と仰がるゝに至り、一五三四年には王廟令に就て立誓するため喚ばれ、モーアはエリサベスの王廟たる事には喜んで同意せしむ。三五年には喚び出されて至上權に誓約を強いられしが、又拒みて審問を受くること九週間、法王がフィツシャルを『カルテイヤル』とするの命到るに及び、二人は愈々死罪と定まりぬ。モーアは泰然として刑に服せり。獄中に在りし時には彼は隱者生活及び基督の受難に關する書を作りて時を消せり。彼の

モーア

性質は高潔にして温厚なりしが、又理直明白、批評鋭利にして、宗教意見は偏狭なりき。其品格は昔の...

モーア

トマス Moore, Thomas 人名 一七九一—一八五二 英國の讃美歌作者、...

モーア

ハンナ Moore, Hannah, Miss 人名 一七四一—一八三三 英國の女流文學者、...

モーア

ヘンリー More, Henry 人名 一六一四—一八七 英國の哲學家、...

モーア

すこゝ能はざるを感じ、戯曲著作を止め其後は長短の詩及び散文を作るに至り、五年間編輯せし...

モーア

しも拒絶し、又ダブリンのトニーチー、カレツヤの長、及び聖パトリック教會の「ティーン」に招かれし...

モーア

言ひ、又時として神に依歸するを言へり。其有神論は人の道徳性より立論せり。其著書は『エンソーシ...

モーア

又モーアの歴史なりこの事を示す。モーアはロトの子、アムラの兄弟にして、ロトはアブラハムの甥にして、彼と共にウラを出てハランを経て來れるも...

モーア

古代の最も重要な碑銘の一にして、一八六八年エフ、エ、クラインがアイバンにて掘り出したもの也。高三尺五寸、廣二尺、厚二尺計りの黒き玄武石にして、三十四行に亘れるフェニキヤ文字を有す。此碑はモーア王メシヤがイスラエルに叛きたる次第を記したるもの也。

モーア

モーア人の石 The Monibie Stone. 人名 Mosheim, Johann Lorenz von 人名 一六九三—一七五五 編譯のキリスト教の神學者、...

モーセ

モーセ

モーセ

モーセ

安息を興へん」と。而して彼はモーセに其榮光を示し、彼の名を宣し「エホバは憐憫あり、恩恵あり、怒ること遠く、恩恵と眞理の大なる神」也と言へり(卅一の二三、卅三の十二、卅三、卅四の六、九)。モーセの外男ホバブ、モーセを訪ふ。モーセ彼に彼等と共にカナンの往かんことを勧めしに、初めは之を肯ぜざりしが、後之に従ふ(民十の廿九、卅二)。シナイを去りて後以色列の民は埃及の肉味を思ひ出で、之を得んて哭く。エホバ之に向ひて烈しく怒を發せしかば、モーセ、エホバに向ひて「我は一人にては此凡ての民を我が荷として負ふこと能はず、此は我に重きに過れば也、我れもし汝の前に恩を蒙らば請ふ所なく我をなさんよりは寧ろ我を殺し給へ」と祈る。エホバ此に於て海の方より無數の鴉を吹き來らしめ、民をして之を食はしむ。然れ共民惡心を起しければ、彼等未だ食ひ終らざるに滅されたり(民十一の四、十五、十八、廿三、卅一、卅五)。カナンにて民水に至りしければ、モーセに向ひてつぷやく。モーセ、エホバの命に従ひ、岩をうちて水を得。此水はメリバの水と呼ばれり(廿の二、十三)。モーセ、カルブ及び其他の人々をカナンの南の高原に遣はして其地を偵察せしむ。彼等アロンを導き、歸りてカナンの地豐饒なれ共其民強しと告ぐ。カルブは進みてカナンを攻むべきことを其民に勧めたれ共、其他の者等がカナンの強きことを誇張せしが故に、民恐れて進むことを欲せず。エホバ怒りて彼等を滅ぼさんと思はしかば、モーセ祈りて其怒を宥む。然れ共彼等屬々エホバを試みしが故に、カルブの外何人もカナンに入る。こ能はず(十三の十七、十八、十九、廿二、廿七、廿八、卅一、十四の一、八、九、十一、廿四、卅一)。モーセ、カルブにアロンを其所

有となすべきことを告ぐ(書十四の六、十四)。以色列人はエドムの境に沿ふてモアブに進み(民廿一の十六、廿二)。ヘション及び其他の市邑を掠奪す(廿一の廿四、廿五、卅一、卅二)。バラク、バラムを遣はして以色列人を誑はしめしに、彼れ却て之を殺せり(廿二、廿四)。以色列人モアブの婦等と淫を行ひしかば、モーセ其首領を殺せり(廿五の一、二、三、四)。モーセ最後の典例と勧めの言を以色列人に與ふ(卅一の十六、廿二、卅二の二、四、十三)。エホバ、モーセを呼びてモアブの頂よりカナンの地を見せしむ。モーセ死してモアブの谷に葬らる(申卅四の一、四、六)。(ロ)。エホバ、典に記されたるモーセ、エホバ典の原本にはアロン及びモアブの事記されたりとの事は一般に承認せらる。之に依れば、アロンはモーセの兄弟にも祭司にも非ざるが如く、以色列人を罪に導きし者としてモーセと對照して記さる。モーセはアロンが以色列人より生るる男兒を悉く殺すべしと命じたりし時、レビの家に生る。三日の間隠匿せられしが、後彼の方舟に容れられ、ニル河邊の葦の中に匿せらる。彼の姉蘇ダンに之を窺ひけるに、アロンの女を見て憐れみければ、之に勧めて其母を呼び來りて乳母となさしむ。後アロンの宮殿に携へ往かれ、其處にて埃及貴人の子として教育せらる(出二の一、十)。彼れ長するに及びて己が以色列人なることを知り、同胞の状態を見んと出て往きしに、一人の以色列人が埃及人に留まるるを見て、其埃及人を殺したりしが、此事怒り人の知る處となりしを見て、連れてエジプトに往けり(二の十一、十五)。彼れ神の山ホレブにて外男エテロの羊を牧ひ居りしに、神彼に顧はれて、アブラハム、イサク、ヤ

コブの神なることを告げしかば、モーセ恐れて其面をかくせり。神モーセに向ひて、彼既に以色列人の時を聞きければ、モーセを遣はして彼等を救ふべしとのことを告ぐ。モーセは自己の斯る使命を荷ふに足らざることを述べしに、神は彼れモーセと共に在るべきことを告げ、且其徴を之に與ふ(三の一、四、六、九、十二)。彼れモーセに其名を示し「我は有りて在る者也」と言ひ、又諸の奇跡を行ひて埃及を撃つべしとのことを語り、モーセに奇跡を爲すべき杖を與へたり(三の十三、十四、十九、廿二、四の十七)。モーセ、エテロに暇を告げ、手に神の杖を持ち、埃及に向ふ(四の十八、廿)。神の山にてアロン出で、モーセを遣ふ。モーセ之にエホバの言を語る(四の廿七、廿八)。モーセ(及びアロンと)アロンの所に往き、エホバの名に依り、以色列人を去らしめんことを求む。アロン許さず(五の一、二、四)。モーセ、エホバの命に従ひ五の災厄を埃及人に與ふ。ニル河の水を血に變へし事、雲の降りたりし事、蝗の地を蔽ひたりし事、三日の間暗黒となりし事及び初生兒の殺されたりし事也(六の一、七の十五、十七、廿三、九の廿二、廿三、廿五、卅五、十の十二、十三、十四、廿一、廿三、廿七)。此最後の災厄の後アロンは夜人をモーセに遣はし、以色列人の埃及を去るを許せり。以色列の民はエホバの命に従ひ、埃及より金銀の飾品及び衣服を携り旅程に上りし。彼等行伍を立て、埃及の國より出で、モーセはホレブの骨を携ふ。神ヘリシテ人を遣はんがため、彼等を導きて紅海の曠野に往かしむ(十一の一、三、十二の卅一、卅五、卅六、十三の十七、十九)。アロンは杖を擡て六百幅を率めて之を追ふ。以色列人恐れてエホバに呼び

モーセ

モーセ

モーセ

モーセ

りしかば、エホバ、モーセに告げて「以色列の子孫に言ひて進み往かしめよ、汝杖を擡げ手を海の上ける所を往かしめよ」と言ふ。神の使以色列人と埃及人の間に至り、モーセのために雲を彩色りたる(十四の三、七、十、十五、十九、廿)。アロンの姉ミリアム等率ゐて踊り且歌ふ(十五の廿、廿一)。エホバ以色列の民にマナを與ふ(十六の四)。彼等ホレブに至りしに水なかりければ、モーセに向ひてつぷやく。モーセ岩をうちしに水湧き出でたり。之より此地をミリアムといふ(十七の一、四、六)。モーセ登りて神に請る。エホバ、モーセに言ひければ、第三日にはエホバ凡ての民の目の前に顧はるべし、民を聖め準備をして三日を待たしめよ。モーセ斯くなせり(十九の三、六、九、十、十一、十四、十五)。第三日に至り雷電あり、密雲山を蔽ふ。雷の聲あり。モーセ民を導きて山の麓に立ち神に會はしむ。モーセ語り、神答へ給ふ(十九の十六、十七、十九)。民雷電と雷の音を見て戰慄し、遠く立ちて、モーセに依りて神の言を聞きんことを請ふ。神十誡をモーセに與ふ。モーセ之を長老等に語り、民之に従ふべきを約す(廿の十八、廿一、一、十七、十九の六、八)。モーセ及びヨシュア、エホバの命に従ひ山に登り四十日夜山に在り、アロン及びホルを留めて民を守らしむ。アロン民の請に従ひて黄金の犢を造り、其前に壇を築き、エホバのために祭禮を設く。四十日終りて神モーセに神の手して書ける石の板二枚を與ふ。蓋し十誡を記せる也。モーセ及びヨシュア山より下りし時、民の呼ばるる聲を聞きしかば、モーセは近くに及びて壇と犢とを見たりしかば、モーセは大に怒りて其手よりかの板を擡ち之を碎き、

又彼等が造りし犢を取りて火に焼き、碎きて粉となし、水に撒きて以色列の子孫に之を飲ましめ、且大にアロンの罪を責めたり。而して彼は再び山に登り民のために祈りて「嗚呼此民の罪は大なる罪也、彼等は自己のために金の牛を造り、去れどかなば、彼等の罪を赦し給へ、然らずば願くは汝の書き記し給へる書の中より我名を抹し去り給へ」と言へり。エホバ、モーセに答へて「凡て我に罪を犯す者をば我れ之を我が書より抹し去らん」と言ひ、其民を許せり。民恐れて一人も其杖師を身につくる者なかりき(廿四の十二、十四、十八、廿二の一、六、卅一、廿六)。エホバ、モーセに種々の典例を與ふ(廿の廿二、廿三、廿四の十一、十三、廿二の廿九、卅一)。モーセ、エホバの言及び其凡ての典例を民に告げしに、民同音に之に遵ふべしと應ず。モーセ、エホバの言を悉く書き記し、聖朝壇を築き、以色列の十二支派に従ひて十二の柱を立て、若き人々を遣はして燔祭及び盟約の書を民に讀み聞かせしに、彼等又之に遵ふべしと應ず。モーセ即ち其血を民に灑ぎ「是れ即ちエホバが此凡の言に就て汝と結び給へる盟約の血也」と言ふ(廿四の三、八)。モーセの外男エテロ、神がモーセと以色列とに爲せる事を聞き、モーセの妻と二人の子を携へホレブに來る。彼れエホバに犠牲を持ち來りしかば、アロン及び長老等彼と共に神の前にて食をなす。モーセが獨り座して朝より夕迄民を審判くを見て、小事を審判くべき下役を立つべき事をモーセに告ぐ。モーセ乃ち千人の司、百人の司、五十人の司、十人の司を立つ(十八の一、廿七)。モーセ營の外に集會の幕屋を建つ。モーセ出で

幕屋に至る時は民幕の門口に立ちて彼を見る。彼れ幕屋に入れば雲の柱降りて幕屋の門口に立つ。而してエホバ、モーセと面を合せて語る、人が友にものいふが如し。民は各其天幕の門口にて拜をなす。モーセの僕ヨシュアは幕屋を離れずしてエホバに事ふ(卅三の七、十一)。斯くて以色列人の神の帳に導かれ、エホバの山を立て出で往く。神の帳の進まんとする時はモーセ「エホバ起き上り給へ、去らば汝の敵は打ち散され、汝を惡む者等は汝の前より逃げ去らん」と言ひ、其止まる時は「エホバよ千萬の以色列人に歸り給へ」といふ(民十の卅三、卅六)。タベラにて民エホバに向ひてつぷやくしかば、エホバの火彼等に向ひて燃え出でしに、モーセ祈りければ其火鎮りぬ(十一の一、三)。モーセ、エホバの命に従ひ、七十人の長老と共に集會の幕屋に至りしに、エホバ降りて彼等語り、彼の上に在る雲を長老等にも分ち與へしかば彼等預言せり。雲に留まりし二人の者も亦然り。ヨシュア之を禁めんと云ひければ、モーセ答へて「汝我がために相續を起すや、エホバの民の皆預言者とならん」とこそ願はしけれといふ(十一の十六、十七、廿四、一、卅一)。モーセアロン、エホバ唯モーセに依りてのみ語り給はんや、又我等に依りても語り給ふに非ずや」と言ひてモーセを誘ふ。エホバ彼等を幕屋に呼び之に告げて「預言者には我れ異象と夢にて顯はる、去れ共モーセには我れ口を以て相語る、彼又エホバの形を見る也」と言ひ、ヨシュアを携へて相續を生ぜしめしが、モーセ祈りければ愈えたり(十二の一、十六)。アマレク人レヒテにて以色列人と戦ふ。モーセ、ヨシュアに戦ふべきを命じ、神の杖を取りてアロン及びホルと共に山の巔に上りて手を擡げ、

モの部

モーセ

モーセ

モーセ

治せし間之を統治したりし事、以色列人はモーセに依りて天啓を興へられ、此天啓は國民的宗教の發端、猶太教及び基督教の基礎となりし事、モーセは以色列人の風習、制度を立て、其國民的發達の邊を開きたりし事、故に以色列人が國民として存在するを得たりしは全くモーセの力に歸すべき事、及びモーセは舊約に於て最も重要な偉人なりし事に至りては、古文書の共に一致し、近代批評家の多數が共に承認する所也。

更に詳細なる點に就て之を云へば、モーセがレビ族との關係を有したりし事は、出二の二、六の廿に於ける彼の出生に關する記事よりのみならず、デンに在る聖所のレビ人が自らモーセの子孫也と主張したる事(士十八の卅)申三の八にレビ人を「汝の聖人(モーセ)の民」と呼びたる事、代上廿三の十四、十七にモーセの子孫をレビ族の中に數へたる事等に依りて證明し得べし。又モーセが埃及人の中に成長したりし事は、彼の名が埃及語メサと同じきことに依りて證明され得べし。レナン(レナン)の如くモーセの事業を以て埃及人の教育に歸す可らず。最古の記述に依れば、モーセが其宗教的教育を受けたるは埃及にレスタナとの間の曠野に於て、即ち神はホルアにてモーセに顯はれ、彼はシナイに於て最も完全なる啓示を得たり。斯くて彼は以色列人を埃及より導き出し、神は以色列人との間に立ちて仲保の業をなしたりし。以色列人は神がモーセを立て、彼等の嚮導者となしたりし事を認め、其教を導きよに從ひたりしが、彼等の中には又モーセに叛き其手より脱せんとしたる者あり、屢々彼に向ひてつぶやきたりし。此を以て神は屢々彼等に向ひて怒を發し、之を滅ぼし、モーセのために新なる國民を起さんとしたりしが、

モーセは常に神に祈りて其怒を宥め、終始以色列の民を保護嚮導したりし。彼が「汝もし彼等の罪を赦すこと能はずば、汝の書より我が名を抹し給へ」と祈りしが如きは、其最も濃厚なる愛民の情を流露せる者也。斯くてモーセは以色列人を導きて初めカデシに到り、それよりモアアの平原に達せり。然れ共彼はパレスチナに入るに至らずして死せり。彼が斯く約束の地に入る能はざりしは罪のためなりしと云へる傳説は其意明ならず。モーセの最も重要な事業は、以色列の諸民族を統一して之を「エホバの民」となし、唯エホバにのみ仕へしめんとしたるに在り。而して諸民族を統一するためには、彼等をしてエホバに對して忠誠ならしむるに共に、相互の間に在りて又互に忠誠ならしむる可らざるが故に、彼の宗教は自ら倫理的にして、エホバは必然倫理的性質を有する神となりたりし。而して初代の民を教へんに具體的なるを要したりしが故に、モーセはエホバのために聖所を築し、祭司職を設けたりし。集會の幕屋の事はエロヒム(民十一等)に記さる。神の靈がモーセの創設せしものなる事は殆ど疑なし。而して彼は幕屋と神の靈の保護を自己の家の人々に委し、決して之を他人に委せず。ヨシヤが幕屋を守りしは單にモーセの代理としてののみ。モーセは實に祭司にして、祭司職を繼承せしめたりしが如し。彼は其子孫をして祭司職を繼承せしめたりしが如し。アロンの家が祭司職を委任せられたりしこと云へる祭司典の記事は、如何程迄古傳説に基けりや明ならず。

モーセは又或る律法、典例を書きたりしと傳へらる。即ち「エホバの諸の言」(出廿四の三)十誡(出卅四の廿八)軍旅の旅路の記(民卅三の一)及び申

卅一の九に「此律法」と云へる者は是也。此等の部分が現形に於てモーセの書きたる者に非ざるは明なることなれ共、所謂モーセの五經中に記されたる律法、典例の多く、其起源をモーセに發し、若くはモーセの承認を経て出でたりたる者に於て、後其精神が以色列國民に通用せらるるに至りし者なること亦疑なし。又舊約の中にはモーセの作也とて傳へらるる者あり。即ち出十五の一、十八の紅海に於ける歌、申二の一、四十三のモーセの歌、詩九十のモーセの祈、五經及び約百記の如し。然れ共此等が如字の意義に於てモーセの作に非ざるは云ふ迄もなし。モーセが以色列の宗教に加へたる新要素如何の問題は屢々論ぜられたる處なれ共、今日尙未だ此點に關して精確の答を得るに至らず。蓋しモーセの事業は教訓的なるよりも實行的にして、彼は抽象的教義を説きたりしよりも、寧ろ其偉大なる生活に依りて感化を興へたりし也。彼がエホバに於ける信仰、聖所及び神の靈を以て、以色列民族統一の要となしたりしことは、エロヒム、祭司二典の共に明にせる所にして、此二典は即ちエホバなる名がモーセに依りて初めて明にせられたりし事の事實を傳へたり。從來用ゐられたりし神の名に比して、此名が如何なる新要素を以色列人に携へ來りしや今日にては確言し難し。レナン、以色列諸民族がアマモン、モアブ、エドム等の如くも多神教を奉じたりしことは殆ど疑なく、而してモーセに至り此諸民族がエホバのみ事へ、後士師時代に至り政治上の統一消失せしに及びて、尙此信仰の維持せられしを見れば、エホバなる名が多神教より唯一神教に達するの段階をなしたりし事明也。而して神は以色列人を埃及より救ひ出し、曠野に於て彼等を嚮導保護し、而して

レスチナを彼等の所領として與へたりとの信仰は、エホバは土地の神に非ずして國民の神也との真理を明にし、神と彼等との關係をして一層緊密ならしめたり。換言すれば、エホバは以色列國民の神也との信仰を、モーセの嚮導に依りて其信仰以色列國民の歴史上に實證せられたりとの事は、實的一神教の顯著なる進歩として見るべき也。

(二) 新約に於けるモーセ 新約聖書の中には屢々モーセの事蹟に言及せるものあれ共、多くは舊約の物語を引用し、若しくは敷衍説明したるものに外ならず。而して舊約の物語より出でたる者も思考し難きものは、經外聖書より來りたる者にして、提後三の八、九は「ヤンチ及びヤンブルの書」より來り、猶九は「モーセの昇天」より來りしと思惟せらる。又新約は屢々モーセの律法のことを言ひ、モーセを以て舊約宗教の祖となし、五經をモーセの作也となせり(路十六の廿九。新約は又律法を福音、モーセと基督とを對照すれ共、(約一の十七等)モーセを以て基督を證せる者もなし(徒七の卅七)基督はモーセよりし大なれ共、モーセは基督の先驅者若くは預表者也との意を述べたり(來三の五、六)。

(三) 傳説に於けるモーセ 聖書に記されたる物語の外、モーセに關しては諸種の傳説あり。其多くは「セファス、フィロソフ、ユウセビウス」の書、タルカム及びラビの書、モーセの作と稱せらるる偽書、コラン及び他の亞利比亞人の文書に記さる。然れ共此等の書中に記されたる傳説は、ヨセファスの書に記されたるものを除きては大抵非歴史的也として排斥せらる。尤もスタンレーの「猶太教會」及び「聖書の『聖書辭典』」は此等の傳説を聖書の物語の中に混用せり。此等の傳説は何れもモーセの歴史に異常の

出來事を添加し、彼をして一層偉大ならしめんとしたる者にして、一例を擧ぐれば、ヨセファスがモーセの幼時及び少年の事を記し、パロの女はテラムチスと云ひたりし事、孩兒が埃及人たる乳母の乳を吸はざりし事、孩兒が神の形をなしたりし事、王女交王に勧めて其冠をモーセの頭の上に置かしめし、彼れ之を地を足にして踏みたりし事を云ひ、フィロソフ、スターア、エラド、ウエルハワセン、コロニル、キツテル等の「以色列國民史」スメンドの「舊約宗教史」ロゲルトソンの「猶太教會に於ける舊約聖書」オエレル、シュレル等の「舊約聖書神學」ロウリンソンの「モーセ、其傳及び時代」等の書を見よ。又此條「以色列」モーセの六經「出埃及記」「利未記」「民數紀」申命記「契約の櫃」「幕屋」等の條を併せ見よ。

モーセ五經 Pentateuch 經名 舊約聖書最初の五卷をいふ。モーセ六經の條を見よ。

モーセの昇天 The Assumption of Moses 書名 舊約經外聖書中の一書。紀元第一世紀の頃希伯來語又はアラム語にて書かれたる猶太の書にして、現存する者は拉丁譯のみ。書中の内容を精記すれば左の如し。即ち(一)紀元前二千五百年モーセ百二十歳の時ヨシヤを呼びて其後繼者となし、且彼に一書を授け、之を安全の地に藏せしむ。(二)書中の言は左の如し。ヨシヤは以色列の民の所領を彼等に與ふべく、後彼等は首長及び王に依りて統治せらるべし。而して神は其聖所を定むべく、然も以色列は偶像を拜するに至るべし。(三)

其時王更より來り(「アバドチザルをいふ)彼等の曠地(「エルサレムをいふ)及び神殿を燒き、彼等を俘囚となすべし。此に於て十二の支派は共に集りて歎き、モーセの誠を懐ひ出づべし。而して彼等は七十七年間俘囚となすべし。(四)其時一人(「ダニエル)出で、彼等のために祈り、彼等の中或る人々は歸還するを得べし。十の支派は尙異邦人の中に留まるべし。(五)後惡しき王(「アンチオカス)彼等を治むるに及び、祭司、奴隸及び奴隸の子等は偶像を拜するに至るべし。(六)此時自ら祭司也と呼ぶ諸王(「アスモニア朝)出で來るべし。而して之に次で祭司ならざる王(「ヘロデ)出で來り、三十四年の間以色列を虐げ、其子孫亦暫らく之を治め、後強き王(「スリヤの知事「アラス)四より來りて彼等に勝り、神殿を燒くべし。(歴史は此に於て終り、之より預言となる)。(七)先づ來るものは偽善、貪食、暴虐、傲慢、不虔なる治者等也。(八)神の怒は又彼等の上に臨み、地の諸王の王は制禮を受けたりと云ひ、而して其妻を異邦人に與ふる者を十字架刑に處すべし。(九)其時レビの族より「マクシオ(「エレアゼル)出づべし。彼は諸主の律法に背かんより、其七人の子を曠野に携へ、其處にて斷食し、寧ろ死するを希ふべし。(十)其時神の顯はれ、天使(「ミカエル)以色列の敵を滅ぼすべし。至上者立ちて異邦人を附し、地は震ひ日と月は暗くなるべし。而して以色列は視せられ、其敵の滅ぶるを見て神に感謝すべし。ヨシヤは此等の言を安全に保護すべし。モーセの死より此時に至る時期は二百五十倍なるべし。(十一)ヨシヤは此等の言を聞きて甚だ憂へ、如何なる幕をモーセのために立つべきや、如何にして六十萬の以色列人を導き、又アモリ人と戰ふべき

モの部

モーセ

モーセ

モーセ

モの部

モーセ

モーセ

モーセ

モ一の部

モ一七六經

モ一七六經

モ一七六經

洪水を起せり云ふが如き、又廿二の廿五以下に、ヤコブが終夜神を角力して勝ちイヌラエルの名を得たりし云ふが如き、神話的要素を含むるは言ふまでもなきことなれ共、其中には又古代の雄勳なる宗教的觀念を見るに足る者あり。又出埃及記に、エホバを以て其初めモーセに依りて以色列民族に紹介せられたる亞刺比亞の荒野の神にして、一種族の守護神に過ぎずとして顯はしたるが如きは、此古典の正直にして飾りなき者なるを見るべし。然れ共又此古典の清や後れたる部分には、思想の範圍漸く廣まり、エホバの觀念も從て高く、彼は以色列の神たるに共、又世界萬民の神たることも認めむべく、又墮落せる人類を洪水に依りて滅ぼし、傲慢なる人々の言語を混同せしめて外國移住の端を開き、ソドム、ゴモラを燒きて惡人の到底神罰を免るべき者に非ざることを示し、又モーセに種々の異能を行はしめてバロを驚駭せしめたりといふが如きは、以色列の神政史が漸く進んで世界萬民の審判廷となりたりしことを示す者といふべし。ヤコブが兄エサウを欺き、長子の權を奪ひしといへる物語もエホバの記す所のことを記するは甚だ佳むべきが如しと雖も、當時以色列人とエドム人との間には不和あり、彼等は互に相敵視し居たりしを以て、記者は古昔に溯りて、此等二族の先祖が骨肉の關係なりしに拘はらず互に不和なりし事歴を有りの儘に記し、以て彼等不和の淵源を審へたりし事、又以色列民族が他國人を虐待したりし事等の如き、當時の習俗をも有りの儘に記したり。彼等の當時有したりし倫理思想が、今日より見れば頗る奇異なりしは言ふ迄もなきことなれ共、

典記者が此等の事に對し毫も一家の私見を挾まず、褒貶の筆を下さず、又少しも飾り飾る所なく正直に事實を露出したるは、以色列人民古代の思想を研究する者に取りて無二の寶典也といふべし。此古典の年代を正確に定むることは困難なれ共、本典に依れば、ノアは既に王上九の廿に記されたるソロン王がカナン人を奴隷に使役したりしことを知りしが如く、又創十の八以下の記事に依れば、記者は明にアッスリヤ王アッシュルナパルが前八三三年頃に再建せしカラの都を知れ共、七二二年後に築きたる北ニネベの都をば知らざりしが如し。此等の事實より學者は本典の編輯せられたる時代を前八〇〇年より九五〇年頃迄の間にあるべしとす。

(ロ) エホバの傳記 (The Elohian Narrative) 此古典の記者は神の名をエロヒムと稱するより斯く名を呼ぶ。時してエロヒムと稱す。エロヒムは創十五の五以下にして、アブラハムの傳記を以て筆頭となす。此は初めより然りしが、又はエロヒムにも天地創造の物語若くは人類の始祖に關する記事ありしものなるや否明ならざれ共、舊約に現はれたる上より云へば、エロヒムはアブラハム以下の族長の歴史より、以色列人が埃及を出でカナンを征服するに至る迄の記録にして、J典と兩相對して以色列人の古代史をなし、而してエロヒムは主として以色列神政治の基礎となす準備に關し特に注意せしむべきことなれ共、エロヒムは北朝エロヒムのものなることは批評家の一般に一致する所にして、ベテル(北朝の聖所)の聖石を以てヤコブの建てたる者もまた云ふべし。

J典とJ典と何れが先きに成りたるものなりやに關しては、古來學者の間異説ありしが、今日一般の學者はJ典を以てJ典より凡そ一世紀後に編輯せられたるもの也とす。是れJ典は古來の傳説を蒐集したる者に過ぎざるに、E典には首尾一貫せる思想あるに由れり。即ちE典には神の聖名を獨りに呼ぶべからずとの誡に基きて、エホバの名を呼ぶを避け、代ふるにエロヒムなる名を以てし、以て崇敬の念を衰せり。又J典の記者は擬人法に依りて神を顯はし、エホバ自ら現はれて直接に人に語りしが如く記したれ共、E典には神が直接に人と接せりといふが如きことなく、單に神が天より語り給ふが(創廿一の十七以下、廿二の十二) 然らざれば天使に依りて人に語り(廿八の十二) 若くは夢幻に依りて神人の交通なされたりしが如くに記せり。此の如きは記者用意の致す所にして、亦以て其思想のJ典記者に一步を進めたるを見るべき也。又E典の記者はアブラハムが遺言を語りしことを詳解し(廿の十二) 其待女ハゲル及び庶子イスマエルに對してなしたる種族なる處置を庇護し(廿一の十一以下) 又ラバンに對するヤコブの非倫理的行為を譏刺せり(卅一の六以下) 是れ亦E典記者の倫理思想がJ典記者のそれと比して一步を進めたるを示す者なり。J典の記者はJ典より後に成りたるものなるを證する者也。且兩典の比較研究上看過すべからざることは、E典がJ典に比して元氣乏しく、宗教的にも愛國的にも熱心な欠けるに在り。例之ヨシヤアがカナンを征服したる後其民に告げたる語也としてE典記者の傳ふる所を見れば(書四の十九、廿) 凱歌といふべきより寧ろ悼辭といふべきものにして、敵地占領後凱旋

モ一の部

モ一七六經

モ一七六經

モ一七六經

の將軍が其部下に告げたる辭としては解す可らず。是れ畢竟後世の史家がヨシヤア後後歴代の事實を顧みて憤慨の念に堪えず、假りにヨシヤアの口を藉りて滿腔の心事を洩したるに外ならず。J典の記者がソロモン王治世の前後國運隆盛の時代に生れたるに反し、E典の記者が天下爭亂繼ぎるアハア王朝以後に生れたるを思へば、是れ誠然に當然の事にして、E典の記事が兎角回顧的にして活氣に乏しきも亦推しむに足らず。

J典及びE典の二典は以上云へる如く、各々特色を有し、凡そ一百年の時代を隔てて編輯せられたるものなれ共、此二典は又紀元前七世紀の終り頃第三の編輯者に依りて一番に編輯せられたり。批評家は「エホバエロヒム」(J典)と「エロヒム」(E典)とを呼ぶ所のもの即ち是也。

(キ) 申命記 (The Deuteronomie Code) 紀元前六二一年より少し以前、現時の申命記の大部分を爲す所の書他の作者に依りて編輯せらる。是れ申命記典と名くる所にして、略してD典と呼ぶ。D典の特色は其勸戒的なる、其確信的なるに在り。即ち本典は神を以て見るべき形状を有する者となす(申四の十二) 神は人に近く在り、彼の律法は人の心の中に在り云ひ(卅の十一、十四) 人の神に對する關係は、愛に依りて顯はさるもの外顯はさるべからずと爲し(六の五、十の十二) 又人は心に對體を受くべきもの也と云ひて、比較的宗教的儀式を輕視せり(十の十六、卅の六)。申命記は即ち六經中の福音書と稱すべきもの也。D典記者の最も高調せるは、以色列國民をして唯一神を禮拜せしめんとのことにして(六の四) 彼は異教の諸神を祭る壇を毀つのみならず、エホバの撰み給へる聖所の外凡ての祭壇を毀つべきことを極言せり(七の廿五、十二の二、三、五、一七、十六の二)。

壇を毀つべきことを極言せり(七の廿五、十二の二、三、五、一七、十六の二)。

前云へる如くD典は現時の申命記の大部分を爲す所の書にして、其義に之を解すれば申五章より卅四章に記されたるもののみを含むる共、六經の他の部分にも申命記の特質が斯るもの全くなきに非ず。尤も如何なる部分が斯る特質を有するやに關しては、學者の説一ならずと雖も、創世記、出埃及記等の中にも、後の編輯者が申命記の影響を受けて古典を改作したるの形跡を認めんばあらず。例之エホバがアブラハムに就て「我れ汝を以て其後の見孫と家族とに命じ、エホバの道を守りて公義と公道を行はしめんために汝を知れり(創十八の十九、申四の十、六の七、十一の十九等と比較せよ)」と云へるが如きは申命記的にして、其他出十三の三十一、十六(申十六の三、六の八、廿、廿五、十一の十八と比較せよ) 及び出廿の十誡の如きも、亦申命記典の感化を受けたるものと疑なし。

(ク) 祭司典 (The Priestly Code) ソロン神歌の成りたる以後の作にして、一般に前五百年頃の作也と信ぜらる。祭司の手に成りたるものなるが故に祭司典と稱せられ、略してP典と呼ぶ。祭司典の記事は創世記の初めよりカナンの征服に亘り、六經の骨子をなせり。創世記及び出埃及記にてはエロヒムの神名を用ゆることに依りてJ典と、文體、言語及び一般の性質に依りてE典と、直ちに區別するを得べし。利未記は全體P典に屬し、民數記も十(廿九以下) 一十二、十三、十四、十六、廿、廿一、廿二(二以下) 一廿五(五迄) 卅二章を除くの外凡てP典に屬す。申命記及び約書亞記にも亦P典に屬するものあり。斯くP典に屬する部分甚だ多けれ共、以

色列人祖先の歴史を知らんには、記事あまりに簡略的なるが故に、E二典と對照するに非ざれば分明なり難し。

祭司典の特色を擧ぐれば、先づ其文體の簡明にして文飾を避け、年代に注意し、文章に一定の格例を守ること宛も法廷の判決文の如きものありも其也也。然れ共其著しき特色は、文字の外形よりも其中に包含せる宗教思想也。即ち神の觀念に就てはP典は古典中最も高潔なる思想を有し、J、E二典の如く擬人的若くは偶像的なる幼稚の思想全く之れなし。例之天地創造を記するに、P典の記者は「神光あれと言ひ給ひければ光ありき」と言ひて、神は第三者を信ることなく、單に聖言を以て天地を創造し給へりとの思想を顯はし、J典が神の顯現を描くに擬人的筆法を用ゐたりし(創三の八以下、十八の一以下、卅四の卅四以下の如く) に反し、遙か遠方より現はれ給ひしが如く記し(創十七の廿二、卅五の九、十三等) シナイ山に於ける神の顯現を示すに、其榮光雲に蔽はれたりとせざるが如き(出十六の十、民九の十五以下) 是也。P典にて神を形容せる唯一の語は「燃ゆる火」にして、J、E兩典にモーセ、アロン等が視しく神の榮光を見たりしと云ふに比すれば以て其思想の大に進歩せるを見るべき也。P典の記者は又族長の事を記するに當りて大に注意し、其行為にして其尊嚴を潰するが如きことある場合には努めて之を記するを避け、以て祖先に對する敬意を示せり。例之ヤコブとエサウとの關係の如き、他典には其兄弟相争へる有様を露骨に記したるに反し、本典には其相分離するに至りし所以を以て協議上の結果に歸し、之を喧嘩の結果とせざるが如し(創卅六の六以下)。

モの部

モ一七六經

然れ共祭司典の最も重を置けるは律法にして、其最も著しき特色も亦此點に顯はる。P典の此點に於ける根本思想は、凡て神の選民たる者は如何なる事柄に於ても神は萬物の主也とのことを證せざる可らずと云ふに在り、即ち土地、財産、生命等あらゆる物は神の所有なるが故に、之を以て凡て神の用に供せざる可らず。故に先づ此等のものより一部を割きて之を神に聖別せざる可らず。一の聖所、一の祭壇を定めて其處にのみ神を禮拜するは、即ち全地がエホバのものなるを示さんが爲めに、P典の記者は殊に聖所に關する律法を重し、特殊の注意を以て之を記せり(出廿五の八以下)。又一定の日を定めて之を神に聖別すべしと云ふもP典獨創の思想にして、七年目毎に希伯來の奴隸を解放し、又耕地を七年目毎に休ましむべしと云へる律法の如きも、E典に在りては益しき同胞を憐れむの主意より出でたることなれ共、P典に在りては全地がエホバのもの也との主意に出でたることにして(利廿五の一七)此主意は更に擴張せられて『ヨベルの年』の制度となり(利廿五の八以下)以て五十年目には土地の大所有者たるエホバに一切返上し、再びエホバより借地するものなるの義を教へたり。而して什分一般の如きも亦之と均しき主意より出でたる者に外ならず(利廿七の卅一卅三)。又他の古典に依れば、祭司は人々が祭壇の前に於て歡樂するを主となしたることなれ共(出廿四の十一、十九の廿七)後歡樂は祭壇の第二意義となりて宗教的意義を占むることとなり、祭司が重なること共に、祭司用の肉は祭司のみ聖所の内に在りて食ふことを得ることとなりて祭司の事漸く専門家の手に移り、曾て何人にも自ら神を祭ることを得しもの、祭司のみ祭壇の事に關係す

モ一七六經

ることを得ることとなり、P典に至りては祭司長の職務を權威制定せられ、レビ族をして以色列全家を代表して神に奉仕せしむることとなり。斯くの如く祭司典に在りては全地のもの悉くエホバのものにして、人は何事につけても彼を主と崇めざるべからずとの思想遺憾なく發揮せられ、從てエホバに奉仕する方法儀式等に制定せられたり。(二) 摘要 以上云へるが如く六經は上記四箇の文書を重なる材料として編輯せられたるもの也。思ふに古代の以色列人は久しき間過去の記録として詩歌の如きものを有し、宗教上の祝詞には之を誦するが如きことをなしたりしなるべし(出十五の一、廿、廿一、七十一の四十參照)。初めて之を記録して聯絡ある歴史となさんとしたるは、思ふに前八世紀又は九世紀頃の事にして、預言者の手に出でたりしこと殆ど疑なし。J、E二典は即ち是にして、此二典は同一主意に關することを記したるものなれ共、兩者の間に文學的關係なし。且一般の信する所に依れば、E典はJ典より凡そ一世紀程後に編輯せられたるものなるべしといふ。第七世紀の終りの頃此二典は編輯せられて一書となり、二者の間略と區別せられ難きに至れり。J典と稱するものは也。之を凡そ同時頃モーセに啓示せられたりといふに依るる律法エホバに編輯せられ、ヨシヤ王の治世に至りてに公にせられたり。是れ即ち申命記典(D)と稱せられたる者にして、此法典は後に至り律法の與へられたる歴史の場合附記せられ、J、E二典と共に修正編輯せられて一書となれり。J、E、D典は也。後序因中エホバの弟子の作るべしと思はるる法典編輯せられたりしが、此は思ふにエホバが巴比倫より携へ歸りて神殿の水門の前なる廣場に民を集め

没藥。モズレー

て讀み聞かせたりといふ律法の書(前四四四。尼八、九章)と同一のものなりしなるべく、祭司典(今)と稱する者即ち是也。後此祭司典を會子とし前掲の三典と古記類、詩歌、傳記とを編輯し、前三世紀の頃迄屬々修正を加へたるもの即ち現今吾人の有する六經也。參考書としてドワイグエルの『舊約聖書總論』ペーコンの『創世記の起源』ハルトフェルドの『五經、其起源及び結構に關する近代諸説の吟味』クイテンの『六經の起源の史的探究』アッティスの『六經の文書』ウェルハウゼンの『六經及び舊約の歴史的文書の組織』ハロルド、グレイチルの『六經の起源』(ウェルハウゼンに對する批評)等を推す。

没藥 Myrrh. 物名 熱地に産する樹の脂、通常琥珀色にして芳香を有し、其味苦し。植物の候廿四種植物の項を見よ。

モズレー ジェームス バウリング Muzley, James Bowling, D.D. 人名

一八一三—一七八八 英國の教會の神學者。リンコンシヤのゲインズボローに生れ、一八三四年牛津のオリエル、カレッジを卒業し、四〇年マダラレン、カレッジのフェローに選ばれ、五六年サセックスのオールドソアムの牧師となり、六九年グラッドストーンの推選に依りてウェルセスターの『カノン』とせられ、七一年其推選に依りて神學の王室支給教授となり、牧職を蒙りて死に至るまで之を奉ず。六五年には、パムプトン講演にて『奇蹟』を論ず。モズレーは牛津在學時代はニウマン、ハレル、フロード、キーアル、セウラー等の感化漸く感なりしことにて、所謂小冊子運動に熱心賛同したりしが、ニウマン天主教會に轉ぜし時、彼は自己の知力判斷のために容

モの部

モナルキア説

易く此動搖に依りて去られず、確乎として國教會に附み止まれり。其學說に於てもアウグスチヌス預定説を取り、自ら洗禮に關する部説と所謂カレッジ主義なるものを融和せんと努めし所り、其神學の立場は獨逸となりぬ。彼は福音派と一體の精神に於て同情なく、自ら高教會主義なれども其派の盛大は其趣味に合はざりき。其『論文集』は明かに此立場を示せり。アウグスチヌス預定説洗禮更生の原始説洗禮論争論論發達の説『奇蹟論』初代の主要思想意匠及び原因原則の論『大學說』教義人間的判斷の反照等の著あり。其心算は最も論明に通り、當時の神學思想家中の最良なる一人なりき。

モナルキア説

モナルキア説 Monarchianism. 學派名 第三世紀前後に、當時發達しつゝありし基督ローマの教義を以て神の唯一、至上權(Monarchia)を危くするもの也として、之に反對せし人々の説に與へられたる名。第二世紀の頃迄はロス説のみならず、基督を以て世界の創造以前に存在したる神の子也とせる思想も、僅少なる神學者のみ擁護せる所の者なりしに、漸次基督の性格に關する諸説出でたりしに、此等の諸説を約すれば、基督を以て神の靈の留まれる人となすものと、自ら肉體となり、世に來りし神の靈也となすもの二に外ならざりき。此二説は共に聖書に依りて證明せらるべく、即ち前者は共観福音書に依り、後者は使徒の書翰に依りて證明せらるべし。然れ共此二説の間に大なる相違あり。此相違は初め神學者のみの注意する所なりしが、後漸く多くの人々の注意する所となり、遂に兩説の間に争論を生じ、後漸く勝利を得、基督をロス説のみならず、基督を以て神其者となすの說教會の信仰となるに至れり。於此斯る思想は唯一

モナルキア説

神の信仰を危くするものにして、教會は事實に於て二神を崇拜する者となるべしと唱ふる者を生ずるに至れり。モナルキア説とは即ち此等の諸説を總稱する者にして、初めは基督をロス説に反對したる者をアロギヤ派(The Alogians)とす。彼等はモナルキア教徒に反對して小亞細亞に起り、預言の現存することを拒否し、約翰文書を批評し、其福音書を以てセリオンテの書きたる者とし、黙示録及び書翰を笑ひ、ロス説を拒否し、當時新に起りつゝありし基督論に反對せり。然れ共彼等は當時教會の中に在り、之を異端と呼びたるは後に至りて發達せる説とにして、初め彼等に異端の名を與へたりしはエホバ、ニウマン、フアンニキヤ、テオドマス(Theodotus)一九〇年頃テオドマスなる者ビザンチウムより羅馬に來り、非基督をロス説を唱へたり。思ふに彼の説は小亞細亞のアロギヤ説の感化を蒙りて發達せる者なるべし。彼は他の點に於ては正統説を保持したりしが、基督論に於ては、耶穌は處女の胎に宿りて肉體を取りし神子に非ず、特殊の攝理に従ひ、聖靈の力に依りて處女より生れたる人也との事、及び耶穌はバプテスマを受けし時聖靈を受け、且其職を行ふに必要な力を與へられたりとの事を主張したりき。基督の神性とは單に彼に與へられたる力の義に外ならずと唱ふる者を力的モナルキア説(The Dynamic Monarchianism)とす。テオドマスは即ち此説を代表せる者也。彼は羅馬に於て何程の信徒を有したりしや明ならざれ共、思ふに少數なりしなるべし。然れ共彼は一八九九年より一九九年の間にガイクトルのために破門せられたり。彼の弟子に又テオドマスと名けられたるものあり。

モナルキア説

り。後又アルテマスなる者出でて同一の説を唱へたりしが、彼等は多く注意を引くに至らざりき。サモサタのパウラス(Paulus of Samosata) 第三世紀の亞歷山神學に依りて、耶穌の眞性は人に非ずして神也との説漸く勢力を得るに至りしが、アンテオケの監督サモサタのパウラスは此説に反對して、基督の人性を高調し、之がため論争を惹起し、二六八年の宗教會議には彼を破門せしが、彼を助くるものありて、彼の説は尙久しくアンテオケに勢力を有したりき。彼は神のペルソナの唯一に重を置き、父子、聖靈は一個の神にして、ロス及び聖靈は神の屬性又は力に外ならずと主張したりき。形式的モナルキア説(The Modalistic Monarchianism) 然れ共一八〇年より二四〇年の間に於て、基督をロス説の最も危險なる反對説は、力的モナルキア説に非ずして形式的モナルキア説也。形式的モナルキア説とは、基督は神自らの化身せるもの、自ら肉體を取りし父にして、單に神の一形式に外ならずと論ずる者にして、形式的モナルキア説の名は斯くして生ぜり。此説は四教會に於ては、父神受洗説(Chalcedonian)と稱せられ、東教會に於てはサマリウス説(Samaritan)と呼ばる。此説も亦小亞細亞に起り、羅馬に傳へられて劇しき論争を起せり。初めに此説を唱へて注意を喚起したりしはスマルナのノエマス(Noezus)にして、スマルナ及びエホバに之を教へ、三三〇年頃破門せられたり。彼の弟子エホバマスは二〇〇年頃羅馬に來り、パトリバシアン派を立て、クレオメテス、サベリウス相續て此派の牛耳を取りたりき。テルチウリアヌス、オリゲヌス、ノヴァチアヌス、ヒッポリタスは此説の猛烈なる攻撃者なりき。①パトリバシアン説②及び③サベリ

モの部

モニカ。モハメッド

モハメッド

モハメッド

モニカ Monika. 人名 三三二頃—三八七

モニカは少くしてダガスタの人。モトヨリキリスに嫁し、アウグスチヌスの外にナゲイユス及び一女を生む。夫は偶像教徒にして性質粗放極めて多血的の人なりしを、モニカは自己の基督教生活に依りて之を基督教に導き、三十七年受洗するに至らしめたり。夫は間もなく死し、モニカは亡夫の志に何所までも同情して、アウグスチヌスを學者たらしめんと望み居りしが、愛子が基督教信仰を棄てしむるに心を傷め、長き間を祈の中に過し、終に同じ所に住まんとてミラノに行きしが、此に多年の願がなひて三十八年アウグスチヌスは悔改し、翌年の復活節(四月廿五日)アムプロウソより受洗せり。之にて母子會合の目的は達せられしかば、直ちに共に亞非利加に向ひしが、モニカは五月四日ティベル河口のオスタチアにて客死せり。

モハメッド Mohammed. 人名 五七〇頃—六三二

モハメッドはアラビアのメッカに生る。其父は商人にして、アブタラフは彼の誕生以前に死す。家はアラムの異教族に屬し、イシマエルの血統を引けり。モハメッドは曠野の酋長の妻に依りて育てられ、頭痛及び熱病的癡癡を患ふ。六歳にして母を喪ひ、叔父アブ・タリブの保護を受け、之に従て曠野とメレスナチ・スリアチに行商す。隊商の從者のことなれば生活も至て低く、羊と山羊とを守りしが、自ら「神は決して牧羊者ならざりし預言者を招きしことなし、モハメッドは預言者を見よ」と言へり。二十六歳の時己より

は十五歳年長者なる寡婦カタイヤと結婚す。妻は富有の者なりしが、モハメッドは其の隊商を督し、旅をなす。六子生まれしが、女子ファティマの外皆死し、アリを養子とす。是れ後の有名なる人物なり。モハメッドは旅行にて猶太教徒及び基督教徒と接し、其傳説を不完全ならしめり。自ら退隱斷食祈禱をなし、自失昏倒することあり。目に文字なれば、聖者の物語は唯人口に傳ふるものを知りたるに過ぎざれど、其宗教中之が加はれること甚だ多し。四十歳の時(紀元六一〇)ヒラ山の寂寞なる所にて天使ガブリエルより招きを受く。初め恐れて自殺せんとせしを、妻は彼が亞利比亞の預言者となるべきを預言し、天使また現はれて之を確む。此に於て起る宗教改革の業に從ひ、二十年間斷續ガブリエルの啓示を受く。初め三年間は家族友人の教化を勉め、四十人の改宗者を得たり。妻第一に從ひ、義父アブ・バクル、青年オマル、女ファティマ、養子アリ、叔父ザイド等之に次ぐ。其より公に預言者たることを宣言し、巡行して説教し、偶像禮拜を攻撃し、反對者との議論し、求めれば奇蹟を行ひたり。間もなく迫害は起れり。彼は生命を全うせんために、信徒等とメディナに遁る。是れ六二年七月十五日にして、此日をヘヤラ又はヒドジュラと稱し、其不思議なる成功に依りて回教の紀元とせらる。メディナにては預言者として認められ、之に従ふ者多かりしが、彼は其軍を以て敵と戦を開き、猶太教の諸種族を征服し、六三〇年メッカに入りカーバの像を毀ち、亞利比亞の主と稱すは唯一也。モハメッドは其預言者なりといふ囁聲は市に響きわたたり。ヘヤラの第十年モハメッドは四萬の信徒を率ひてメッカに行きしが、歸後激

しき熱病にて死せり。臨終は苦痛甚だしく、泣歎呻吟せしも信仰は終りまで堅く「主よ猶太人基督教徒を滅ぼし給へ。預言者の墓を禮拜の所に化せし者共に神の惡徳をよめし。イスラム(回教)をして獨り亞利比亞に行はれしめ。ガブリエルよ我に近來れ。主よ我を教し給へ。マラダイスに永遠に在らせ給へ。教し給へ」と言ひて死れり。「コーラン」(回教の聖書)に現はれたる所に依りて見れば、モハメッドの性格は漸次變遷せり。彼は嚴密道より詩人となり、預言者となり、亞利比亞の王となり。其初頃は、彼は唯かに正直を以て宗教改革者として起り。神は「なりと云ふ信仰に燃え、偶像教を忌み恐るること甚だしく、自ら神に招かれたりしと信じ、猶太教基督教を融和して亞利比亞一神教を其上に立てんと勉めしなり。是れ必ずしも彼の獨創せし所に非ず。當時ハニフスと稱する宗派あり、偶像教に満足せず、アブラハムの宗教の如き一神教を欲し居たり。其一人たるワラカはカタイヤの従兄弟なるが、聖書も知り居たり。モハメッドは此宗派運動を著しく進行したる者なり。其メッカに在りて迫害を受け居りし間は、決して不潔利己の動機なく、唯だ道徳的手段によりて布教し、説教にて偶像教を攻撃し、其妻に對しても誠なりしなり。然るにメディナに於ける大成功は、彼を墮落せしめ、野心淫慾の奴隷となりぬ。初め寛容を説きし彼は其より剣を以て布教の要具とし、一日に猶太人六百を殺せし事あり。四ヶ月以内に服従せしめば亞利比亞國內の凡ての偶像教徒を根絶せんことを命ぜり。カタイヤの死後には十四五たび妻をかへ、自己の死後には殘れる寡婦九人妾數多ありき。自らは普通信徒には許されざる淫蕩及び近親結婚も天啓に依りて許されたりと稱し、五

モの部

モハメッド

モハメッド

モハメッド

十三歳の時九歳の少女を娶れり。去れど何所までも質朴の生活を維持し、妻妾と共に煙屋に住し、飲食を節し、自ら山羊の乳を搾り、履物及び衣服を繕ひ、裁縫料理を助けたり。輻輳は中世にして、層層の職と髪鬚を長く族父的の髻垂れ、寛帯の襟子あり。學問なけれ共想像力強く、詩才あり、宗教的熱情に充ち、感情の冷熱高低激しく、癡癡昏倒することありしを以て見れば、其所謂天啓も必ずしも欺瞞の類とは謂ふべからざりしなり。

回教 回教をイスラムといふは「アラ(神)への喜」といふより起れり。回教は猶太教基督教と並びてモハメッドより發出せし一大一神教にして、其中に存する他の二教の要素は、モハメッド以前に亞利比亞に散布せしものを拾取せし也。即ち猶太教よりは一神主義及び儀式を採り、アブラハムの信仰を復興す。自稱せり。基督教に對しては、東方のユニテリアンとも稱すべく、基督をばモハメッドに次ぐ預言者となし、彼に人外ならず、神は妻を有せれば子をも有せずと言ひ、拜像を排斥し、耶穌は調製師來るべしと言ひてモハメッドの事を預言せり。モハメッドは再來して審判すべしと言ひて、基督教の要素をば重に篤聖書及び異端説より仰げり。此等兩教の要素に加ふるに、肉慾、多妻、奴隸等の主義及び宗教弘布に不道手段を取るを可とするの主義等の異教的要素を以てせり。イスラムの根本的信條は「アラの外に神なく、モハメッドは其預言者なり」といふにあり。信條は六條ありて、神、預定(即ち宿命)、善惡の天使、經典、預言者、及び復活と審判とを説く。アラの意に全然服従するは信徒の第一の義務にして、凡ての動機の本根ならざるべからず。祈、斷食、施與、巡拜も附加せられ、豚肉及び酒は嚴禁せられ、多妻

妻妾は許さる。普通信徒には四妻までと限れ共、酋長、教長、教主には無制限なり。回教國の婦人は覆面し、無知にして奴隸の地位に在り。來世にては信徒は花さき清水流れ美女充つる樂園に行き、不信徒及び戦國に從はざる者は、地底の暗黒の海の七地獄の一に投せらるる也。禮拜の儀式は単純にして、經典を讀み、メッカに面を向けて祈りをなす。偶像は堅く禁ぜられ、僧もなく供物もなし。神は直ちに罪を赦すと信す。金曜日安息日に代へ、モスク(會堂)は常に開きあり。婦人には祈れとの教なし。メッカは神聖なる都とせらる。

經典「コーラン」云ひ、天使ガブリエルの言ひし所を隨時隨所モハメッドの寫し傳へたるなりと稱す。其死後ザイドは棕櫚の葉の面と白石の板とを胸の胸より断片を集め、前後の順序なく配列編纂せり。一百四十四項六千二百廿五句より成り、詩の體をなす。至て神聖なるものなれば、翻譯又は印刷又は販賣すべからずとせしが、印度にては此念絶めり。埃及カイロのケイイグ圖書館、巴理の國民圖書館及び諸會堂にあるものは最も美なり。命令あり、警戒あり、獎勵あり。又舊約の種々の物語、マテスマのヨハネの事、耶穌の事等を載す。歴史及び年代には破綻あり、重複あれ共、詩的にして純亞利比亞語にて記されり。回教の歴史 回教はモハメッドの生存中既に亞利比亞を服せしが、死後その狂熱と剣の力とにて迅速に傳播し「汝等の前には樂園あり、汝等の後には死と地獄あるぞ」と呼ばはりつゝ、其曠野の見たる木色を發揮して戦へり。折しもビザンチウム帝國は衰へ、基督教會は東西相争ひ、東方教會内には形而上學の争論激しくして、回教徒は一層征服に都合よく、

メレスナチ、スリア、埃及、北亞非利加、西班牙南部を服し、ヒレチーリスをも越え、あはる羅馬をも蹂躙せんとせしが、七三二年シヤール、マルセル之をクローアにて敗り、之にて歐洲侵入を喰ひ止む。而も彼等は第九世紀には波斯、アフガニスタン、印度の大部を取れり。第十一世紀中セルジュク土其其亞利比亞を征服せしが、其宗教をば採用し、第十五世紀に至りコンスタンチノブルを陥れてビザンチウム帝國を顛覆し、聖ソフィヤの大會堂を回教寺院と化し、希臘教會をば奴隸的教會となし、進んで日耳曼帝國を壓倒せんとせしが、一六八三年神諭の入口にて大敗し、ドナウ河の南に追ひ歸されて止り。改革時代の獨逸議會は内にルーテル派を抑へ、外に彼等の侵襲を退くる計を回らし、ルーテルも法王の回教徒の難より救はれんことを祈り、英國教會式文にも彼等のためにする所あり、以て當時の恐怖たりしを知るべし。彼等は其至る所を荒廢に歸せしめ、被征服者よりは憎まれ居れり。其治下にては基督教徒には何等の權利なく、信教は寛容せらるれ共、回教徒を基督教に改宗せしむれば死を以て罰せらる。クリミア戦争後改宗者死刑の規定は去られしも、普通信徒の狂妄なるは依然たり。一八六〇年のダマスコ虐殺、七七年のアルゲリア虐殺、八二年のアレクサンデリア虐殺、其後のアルメニア虐殺等之を證す。然れども其國令や衰へて「病人」を以て呼ばるること久しく、若し一八五四年のクリミア戦争、七八年の露土戦争に英佛兩國の干渉あらざりしならば、回教徒は全く歐洲より其故國に逐ひ歸されしならん。されど七八年の柏林會議に依りてブルガリアは獨立國となり、ヘルツェゴヴィナは奧太利領となり、タブロは英國に買はれ、八〇年の追加會議にて

モの部

モラヴィアン教会

モラヴィアはプロシヤ領に在りて、...

モラヴィアン教会

Moravian Church.

モラヴィアン教会の歴史、...

モラヴィアン教会

モラヴィアン教会の中心地、...

モリアのモリス

モリアのモリスの歴史、...

モリア

Moriah.

モリスの歴史、...

モリス

Morris.

モリスの歴史、...

モの部

モリス

モリスの歴史、...

モリソン

Morrison, Robert.

モリソンの歴史、...

モリツ

Moritz.

モリツの歴史、...

モロノ部

モリノス

が、此に於て通れてアルプスを越えて去りぬ。フェ...

モリノス

人名 一六四〇—九七 西班牙の寂靜派...

の主張者。サラゴサに生る。アラゴンの名家の子に...

モルガンのモルモン派

モルモン派

が、モリノスは社會上に高き地位を占め居りしを以...

モルガン

人名 トマス Morgan, Thomas 一七四三年死...

し、雄辯にして聖書に通曉し、且文學上の趣味にも...

モルモン派

Mormons, Mormonism. 北米合衆國ウタフ州ソールト...

モの部

モルモン派

モルモン派

モルモン派

千四百年前に死したるモロニの靈に依りて助けられ...

が、此に於て通れてアルプスを越えて去りぬ。フェ...

し、雄辯にして聖書に通曉し、且文學上の趣味にも...

が、モリノスは社會上に高き地位を占め居りしを以...

一八九一—一九〇一 次にウエフ、エフ、スミス...

が、モリノスは社會上に高き地位を占め居りしを以...

モの部

モレク

モロク

モンクレーフ

べしとなす。彼等は小兒を祝ふ共八歳以下のものにバプテスマを施さず。彼等は通常毎日曜日の晩餐式を行ひ、葡萄酒の代りに水を用ひ。彼等は神は人の形状を有せりと信じ、耶穌基督は神の子なれ共、其實質全く父に異れりとなし。聖靈は神格を有せず、單に力に過ぎずとせり。彼等は人の靈魂の豫在を信じ、多くの靈魂は地上に来るを待てりと信じ。彼等は基督の再臨を信じ、千年間彼等と共に地上の王となるべしと信じ。彼等は五月第一木曜日を以て断食日となし、相集りて祈禱をなす。彼等は多妻主義を信じて之を行ふ。モレモン経には多妻主義を嚴禁す。スマスは初め之を禁ぜしむ。後之を許せり。一八五二年より九〇年迄の間に於てモレモン徒の一分は多妻を娶り、之がため法に觸れたるもの少からず。聯邦議會はモレモン徒選出の議員の議會に列するを拒否せり。一九〇四年統領スマスは遂に多妻主義を禁ずるに至れり。最近の調査に依れば、米國に在るモレモン徒の数は三十萬人以上に達し、近時英國にも之を信するもの起れりといふ。此徒日本にも來り、モレモン経を邦譯し、傳道に勉むとせり、未だ見るべき效果なし。(此派の事を詳知せんば、メーヒワの『ウツセフ、スマスの傳』カテデーの『モレモン派の初代』パンダロフの『モレモン派の歴史』モンタヌの『モレモン派の思想』トマス・モレモン著、マリーアムの『モレモン村落に於ける一夏』メレリヤの『ソールト、レーキ市の歴史』ヨンの『モレモン派の物語』等を見よ)。

モレク

モレク 又はモロク Molech or Moloch. 亞摩人に於けるは短しエホバの以色列人に於けるが如く、ケモシのモアブ人に於けるが如し。本来の名は

モロク

モロク Molo-h. 『Pala』の條を見よ。
モンクレーフ Henry Wallwood, D.D. Moncreiff, Sir Henry Wallwood, D.D. 人名 一八〇九—一八八三 蘇格蘭自由教會の牧

師。エザンバラに生る。蘇格蘭最高裁判所判事モンクレーフの長子なり。家は代々蘇格蘭長老教會に屬し、經文を尊敬すべき牧師を出して名高し。ヘンリーの祖父はエザンバラ市聖カサバルト教會牧師として名高く、且教會の福音主義派の首領たりし人なり。ヘンリーはエザンバラ高等學校及び大學に學びて後牛津大學に入り、クラフトストン其他の名士と同時代の學生たり。境遇の勢力は彼を英國教會に引かんとし、且カンタベリー大監督の妻は自己の叔母に當れるものから此方面には前途の望甚だ多かりし。彼は父祖の教會に盡すことに決し、エザンバラに歸りて神學館にて研究し、一八三六年バルダイノックの田舎任所に於て按手禮を受け就任し、三七年グラスゴーに近きイーストキルブライドに轉じたり。四三年の教會分裂に當りては自由教會に與みし、五二年エザンバラの聖カサバルト自由教會に轉任し、死に至るまで牧師たり。彼は自由教會總會の書記中の有數なる人たり、又蘇格蘭女王印刷局の秘書として種々な聖書の版の正誤を監督せり。六九年には自由教會總會議長とせらる。チャルメス演の立ちてより第一回の講演者ともなりし。彼は教會の法律先例及び形式に就ては天才を有し、自由教會の書記としては大に功あり。殊に教會と國家の問題に關しては常に事務の整理及び料理の宜しきを得、一八四三年同問題が危機に達せし時には充分に之を研究し、屢々之に關する書物を公しした。『メレモン補に與ふる書』『諸証に於ける自由教會の實行』『アルサイルに與ふる書』『自由教會の權利要求』『自由教會の原理』等はその著なり。最後のものは即ちチャルメス講演にして最も念の入りのものなり。『自由教會の實行』また長く傾あるも

モの部

モンゼル

問答書

問答書

モンゼル

モンゼル John Samuel Hawley, J.L. D. 人名 一八一七—一七五 愛蘭の牧師。ロンドンテリーの聖コルムバスに生れ、ダブリンのトニチー、カレッジにて教育せられ、一八三二年パナエロル城を得、監督マントの附屬試験牧師となり、ラモーンの司長となり、コンノル教區の『チャムセロル』となり、五三年サレーのエアハムの代牧となり、『ルーラルアイランド』となり、七〇年ギルホルドの聖ニコラス教會の司長となる。我等の新ザイカール』を始め散文の著者とし、又『讚美歌及び詩』『静想』『教會年中愛』『讚美の歌』『精神的の歌』『教會讚美歌』『ブレネのシモン』等の韻文、及び種々の小冊子を著す。其韻文は信仰的にして且熱情と精練とを兼ね、諸派の讚美歌作者より尊ばれる。我國『さんび』の『喜び歌』の主な『Sing to the Lord of Hosts』『愛の御神』御前に立た』(O love divine and tender)は彼の作より取れり。

モンタヌス派

Montanism. 宗派名 第

の。彼は現行の國立教會制を否認し之を撤して純粹なる國立制を立てんと唱へし人なり。牧師としては熱心篤實に、説話は平民的ならざりしと誠實に説教のたり、實質あり、隨て有力なり。彼は會員を規律正しく訪問して怠らず、凡て教會の義務をば能く果たしぬ。人々爲りて親切にして懐くべく、貧者のために力を盡すを喜び、自ら非國教會の最下等の地位に居て他人の厚く遇せらるを見るを樂みたり。基督信者としての誠實、福音事業への同情、人々の精神的幸福と教會の全體に神の在ることを願ひし熱情は極めて眞面目なり。彼より且熱誠と深なる性格を具へし人は稀なりしと云はる。

二世紀の中頃(エヒファニウスに依れば一五六六年)フルギアに起りたる分離派にして、ムツアの人モンタヌス(Montanus)の創始する所也。彼は自ら神の使命を負へる預言者にして、默示を受けたりと稱し、基督は速に再來し、フルギアのバプテスマに天のエルサレムを建つべしとのことを告げ、信徒は斷食をなし、婚姻を禁ずる等最も峻厳なる克己主義を行ふべきことを説きたりしが、之を信する者頗る多く、其中にはアルカヒアス、テオドタスの如きものあり、ヒエラポリスのクラクティウス、アポリナリス及びミルチアス等の如き人々は熱心に之に反對したりしが、其勢頗る盛にして以て大利及びゴールに據まり、亞非利加に及び、カルセーアのテラチウリアヌスは遂に之に歸するに至れり。於此二二五年イコニウムに開かれたる會議に於ては、之を異端として禁じ、三八一年のコンスタンチノーブルの會議にては、其處したるバプテスマを承認せず、之を異教徒と同列に置きたり。斯くて此運動は第五世紀の初に至り遂に消滅せり。シエウエケレルの『モンタヌス派』基督教會『アンソイルの』『モンタヌス派』初代教會』等を見よ。

第八世紀及び第九世紀に至りては、アルサスのワアイエンブルグのオトフリード、セント、ゴールのクロ及びノトケル、ラオオの如き人々は、人民教育の目的に用ゐらるべき問答書を書きたり。又ワアルテンス徒、アルビゲンズ徒ワタリフ徒の如きは、盛に問答書を出して其所説の善及び劣たり。即ち改革の時代にも亦多くの問答書は書きたり。即ちルターは開局初學書の外に、一五二九年大問答書及び小問答書を出せり。アレンツの問答書(一五二七—一八)も名高く、カウゲンも之を書きたり。其は一五六三年カスバル、クレグアイヌス及びツアカリアス、ウルシヌスの編輯せるハイアルメルヒ問答書出づるに及びて廢りたり。此ハイアルメルヒ問答書は一六一九年ドットの會議にて改正、准允せられ、内外の獨逸及びドイツ、レフォルム教會にて用ゐらる。改革主義の教理に對する反對及び反動も亦均しく問答書を作せり。即ちソーチヌス派は波蘭のラコウにて大小の問答書を採用し(一六〇五)クエーカル徒はフォックスの書きたる者也と云へる問答書(一六六〇)の外に、バルクレーの書きたる問答書(一六七三)を有す。羅馬教會にてはトレントの會議の訓令に基き、問答書を作り、屢々改正せられたる後一五六六年採用せらるるに至りしが、此は問答書と云ふよりも寧ろ神學書といふべきものにて、普通常用としてはベテロ、カシニウスの書きたる大小問答書(一五五四、一五五六)多く用ゐられたり。ペラレモン(一六〇三)及びガズマー(一六八七)も亦各々問答書を書きたりしが、ペラレモンの Schemata de Puris は一八七〇年の世界會議にて准允せられたり。希臘教會にてはキイダの監督ハテロ、モギラス一六四〇年頃問答書を作せりしが、現今

問答書

問答書 Catechism. 書名 問答の體裁にて教ふる目的を以て書かれたる書をいふ。此語は單に宗教上の教訓を教ふるものみに限られたるに非ず、科學上、政治上の問答書もあれ共、通常問答書と云へば宗教上の教訓を教ふる目的を以て書かれたるもののみを指す也。最初の問答書は『カテキウマン』(洗禮志願者、其餘を見よ)を教ふる目的を以て書かれたる者にて、極めて簡短なる者なりしが、後宗教的知識を一般人民の中に弘布せんとする特殊の運動起るに及び、長篇の問答書起るに至れり。即ち

モの部

モンテスキウ

モンテレーヌ

モンゴメリー

使用せらるゝものは、プラトン(二七六)及びア
イラント(一八三九)の著きたる二問答書也。英國
にて最も著名なる問答書は、新編書の中に在る問答
書也。此は二に分れ、各々時代を異にする。初めのも
のは洗禮の契約、信仰簡條、十誡及び主の祈を包含
し、エドワード六世の治世に成りたる者也。終りの
ものは聖禮典の教義にして、一六〇四年のハムプ
トン、コート會議にて、ジェームス一世の提案に基き
て書かれたる者にて、アイン、オウエラールの作也
と信ぜらる。大問答書はエドワード六世の治世に出
版せられたりし。後アイン、ノウエラール之を教習
せり(一五七〇)。然れ共此は實際の使用には長きに
過ぎたりしを以て、小問答書補遺せられ、今日多少
修正せられて、至る所の基督教會にて使用せらる。蘇
國にて最も有名なるはクレイグの問答書及び大小問
答書也。前者は一五九二年の會議にて准せられ、
後二者は一六四八年准せらる。現今普通に用ゐら
るゝは小問答書にして、最も明白有力にカレッジ
の說を表白せり。其他の教會も亦各々問答書を有す。
(シャッフの『基督教信條史』を見よ)。

モンテスキウ シャール ド セコンダ
男爵 Montesquieu, Charles de Secondat,
Baron de. 人名 一六八九—一七五五、佛
蘭西の政治家、政治學者。ホルドーに近きシャ
ラ、ブレードに生れ、法律を研究し、一七二四年ホ
ルドー國會議官に擧げられ、一六年議長となり、二
六年辭任し専ら文學に従事す。多年獨逸、以大利、
英國を巡遊して社會的政治的狀態を觀察し、歸りて
『ラ、ブレードに居る定め、時に巴黎を訪へり。二一
年『私書(レットルズ・ヌルゼン)を出し、三四年『羅
馬盛衰原因考』を出し、四八年二十年間の苦心に成

れる『萬法精理』を出す。世に歡迎せらるゝこと甚
だしく、十八ヶ月内に二十二版を重ねる。モンテスキ
ウは所謂百科學者派の人と稱せられた。實に『佛蘭西
百科學』の著者たりしと雖も、其精神に於ては大
に異る所あり。神學者には非ざりしも、宗教を研究
し、其力をかり、靈魂不滅の説や聖書の天啓なる事
等を承認し、迷信と共に無神論をば厭忌せり。然れ
共彼は重に社會及び政治的學問の上に感化を與へた
る人也。

モンゴメリー シェームス Montgome-
ry, James. 人名 一七七一—一八五四
英國の宗教詩人、讚美歌作者。エアシャのアルグイ
ンに生る。父はモラゲイアン派の宣教師なりき。ウェ
ームスが英國に於けるモラゲイアン派の宣教師たる
ルネッタの學校に在りし時、父母は共にバルバド
スにて先去す。ウェームスは宗教家なることを取
ひてマーフィールドにて茶葉等を商ふ者となり、
其より所々を漂浪し、終にシェッフィールドにて一
新聞の所有者兼編輯者となりしが、一七八九年自由
黨政府を嘗へたる水版畫を載せて三月の禁錮
に二十磅の罰金に處せられ、次で一佐官の慣習談を
載せて再び六月の禁錮に處せらる。然れども其人
望は次に於て、二五年編輯者の地位を退きし時に
は公宴に招待せられ、死去の時に公葬にせられたり。
一八三〇年より三一年に亘りてはローヤル・イン
スタテにて詩學文學の講義をなし、四六年には百
五十磅の年金を給せらる。彼は無婚にて終り、又四
十三歳に至りて始めて信仰告白をなし、モラゲイ
アン派に入る。然れども他の教會の宣教師等にも勤
むる所少からず。其性質は至て敬虔の人なりき。彼は當
時の宗教詩人中最も傑出せし人なり。セッフルも
ウィルソンも彼の詩の永く世に生くべきことを信じて
賞讃せり。長作の中には禁錮中に成れる『獄の慰
み』あり、又『大洋(環)西渡人』等あり。奴隷禁止
記念の『四印度(洪)水前の世界』(グーランドラ
等あり。其讚美歌は最も有名にして、何れの集にも
入れり。『生ける主の靈御靈の露を』(O Spirit of the
Living God) 『父の定めし時來りて』(It shall to the
Lord's Anointed) 『御空、けり行く天(使)』(Car-

ヤの部

ヤー Jah (ヤ) 人名 ヤーウエー (ヤウ)

ヤーウエー Jahweh (ヤウ) 人名

ヤコビ Jacob (ヤコ) 人名

ゲル from the realms of glory) 『主は共ならん水なハ
ニ』(Forever with the Lord) 等は我國のものに譯せ
らる。

ヤの部

ヤーヤーウエーヤコビ

ヤコブ

ヤコブ

は『神らしき事ども』を著して、シェンガの講
論を掲げり。彼の哲學は系統を成さず、其根本の主
義とする所は、思想は個々の事物を結合するより以
上の力なく、實在を説明する能はず、思想のみにて
は結局無神論宿命論に到着す、故に之に信仰を加へ
て眞理を知ると言ふにあり。彼の批評は鋭利にして、
カントもシェンガも之を感服し、ハメルトン
をして彼に負ふ所少からざらしめたり。

ンと扁豆の羹をエサウに與へて遂に家督の權を買
ひ取れり(創廿五の廿一—廿四)。胎内に於て既に兄
に向ひて争端を開きしヤコブは、斯くして漸く兄を
排除し、己れ長子の權を得たりしが、彼は更に母と
共謀して眼盲せる老父を欺き、兄に屬すべき祝福を
奪ひ取りたり(廿七の—四十五)。エサウ之を知り
てヤコブを惡み、且之を殺さんと思ひ謀りければ、ヤ
コブの怒を避けてハラシに往き、伯父ラベンの處に
身を寄せんとて旅立ちしが、一處に至れる時日暮
れば、其處の石を取り之を枕として眠りしが、
彼れ神の使者の天に達せる梯子に上り下りするを夢
み、覺めて其枕せる石を立て、柱となし膏を其上
に灑ぎ、其處の名をベテル(神殿)と名けたり(廿
八)。既にハラシに至りしに、ラベンは喜びて彼を迎
へたり。ラベンはレア、ラケルと云へる姉妹の女
ありしが、ヤコブはラケルの美はしきを見て之を愛
し、七年の間之のために勤めたりしが、期満してラ
ベンは姉より先きに妹を嫁がしむるは我國の法に非
ずとて、レアを與へて其妻となさしめたりしが、
ヤコブは更にラケルのために七年勤め、期満してラ
ケルをも妻となしたり。レアは相續してヤコブに四
人の子を生めり。レベン。シメオン。レビ及びユダ
也。ラケルの侍婢はビルハ。ヤコブはダン。ナフ
タリを生み、レアの侍婢はゼルバ。ガド。アシエル
を生み、レアも亦イサカル。ゼアルン及びアナと云へ
る女を生みたりしが、ラケルは久し子なかりき。後
エサウラケルをも顧み、エサウを之に生ましめ給ふ。
斯くヤコブは多くの兒子を得たりしが、其産業も亦
甚だ富みたりき。於是ラベンはヤコブの彼と共に永
く留まらんことを願ひしが、ヤコブは長くラベンの
ために服事するを好まず、且ラベンは屬々ヤコブを

の略稱。次の條を見よ。
ヤーウエー Jahweh (ヤウ) 人名
ホアの正當の稱。ヤーウエーを讀りてエホバと讀ま
るゝに至りし次第、及びヤーウエーの觀念に於ては
『神(舊約聖書)』の條「エホバ」の項を見よ。
ヤコビ Jacob (ヤコ) 人名
Jacob, Friedrich Heinrich 人名
一七四三—一八一九、獨逸の哲學者。アムステルダ
ムに生れ、フランクフルト及びウィエナにて商學
を學び、歸りて事務的の事に従ひ居りしも、疾く
存せし文學及び哲學への傾向は終に彼をなして其境
遇に満足せず、ヘムヘルホルツに遇して至らしめ
ぬ。一七九三年戰爭に逐はれてホルスタインに行き、
居る。一七九九年、ミウニヒの學校長として招かる。著
書は『アルヴィル書翰集』(一七九四)、『ワオラデア
ル』(一七九)の二の哲學的小説を初とし、八五年には
『スピノザ説に関する書翰』を出して、モセスマン
アルソン及び伯林諸教授との間に論争を結び、八七
年には『ヒウムの信仰説』を出してカント及び批評
派との争を起し、一八〇一年には『理性を理解に導
かんとする批評の企て』を著し、一一年に

と知識を有せしことを疑なし。
モンゴメリー シェームス Montgome-
ry, James. 人名 一七七一—一八五四
英國の宗教詩人、讚美歌作者。エアシャのアルグイ
ンに生る。父はモラゲイアン派の宣教師なりき。ウェ
ームスが英國に於けるモラゲイアン派の宣教師たる
ルネッタの學校に在りし時、父母は共にバルバド
スにて先去す。ウェームスは宗教家なることを取
ひてマーフィールドにて茶葉等を商ふ者となり、
其より所々を漂浪し、終にシェッフィールドにて一
新聞の所有者兼編輯者となりしが、一七八九年自由
黨政府を嘗へたる水版畫を載せて三月の禁錮
に二十磅の罰金に處せられ、次で一佐官の慣習談を
載せて再び六月の禁錮に處せらる。然れども其人
望は次に於て、二五年編輯者の地位を退きし時に
は公宴に招待せられ、死去の時に公葬にせられたり。
一八三〇年より三一年に亘りてはローヤル・イン
スタテにて詩學文學の講義をなし、四六年には百
五十磅の年金を給せらる。彼は無婚にて終り、又四
十三歳に至りて始めて信仰告白をなし、モラゲイ
アン派に入る。然れども他の教會の宣教師等にも勤
むる所少からず。其性質は至て敬虔の人なりき。彼は當
時の宗教詩人中最も傑出せし人なり。セッフルも
ウィルソンも彼の詩の永く世に生くべきことを信じて
賞讃せり。長作の中には禁錮中に成れる『獄の慰
み』あり、又『大洋(環)西渡人』等あり。奴隷禁止
記念の『四印度(洪)水前の世界』(グーランドラ
等あり。其讚美歌は最も有名にして、何れの集にも
入れり。『生ける主の靈御靈の露を』(O Spirit of the
Living God) 『父の定めし時來りて』(It shall to the
Lord's Anointed) 『御空、けり行く天(使)』(Car-

ヤの部

ヤコブ

欺きたりしかば、彼竊に其妻子等を驛路に乗せ、其獲たる凡ての家畜及び所有物を携へ、ハランの地を去りてカナンに歸り住り。三日の後ハランヤコブの逃げたるを知り、兄弟を率ゐて其後を追ひ、七日を経てギレアデの山にて之に追及せしが、彼れ夜の夢に「汝懼みて善も惡もヤコブに言ふ勿れ」との神の告を受けたりしかば、ヤコブは契約をなし、其孫と女等に接吻して之を祝し、安然に其道を往かしめたり。ヤコブ道に進みて、エサウ四百人を率ゐ來れりとのことを聞きて怖れ、人を遣はして先づ禮物をエサウに贈らしめ、其夜ヤコブの涙を流りしに「人ありて夜を明くる迄之を角力す。其人己のヤコブに勝たざるを見て、ヤコブの體の軀骨に觸れしかば、ヤコブの體の軀骨其人と角力する時挫けたり。其人夜明けんとすれば、我を去らしめよ」と云ひければ、ヤコブは我を祝せば去らしめず。……其人いひけるは、汝の名は重いてヤコブといふ可らず、イスラエルと稱ふべし、其は汝神と人とを力あらしめて誇られたる也。エサウは四百人を率ゐて來りしが、ヤコブの預期に反し、趨り來りてヤコブを迎へ、抱きて其頸をかくへて之に接吻したり。エサウは此日セイルに還り、ヤコブは進みてシケムに至り、其處に天幕を張りしが、テナ的事よりシメオン、レビの二人其邑を襲ひ、其男子を殺したりしかば、長く此處に留るゝ能はずして、ベテルに往き、ベテルよりヘブロンに往けり。ラケルはベニヤミンを生みたる後、間もなくベツレヘムにて死せり。(廿九の一一) 卅五の廿九。斯くてヤコブはヘブロンに靜居したりしが、ヨセフ、兄弟等の嫉妬に依りてイシマエルに賣られたるより、ヤコブは之を死せるものと思ひて深く悲み、後歸國に達し、又一時ベニヤミンとも別

ヤコブ

ヤコブ

れざるを得ざることとなりて悲歎にくれしが、死せりと思ひしヨセフ埃及に在りて彼を迎へたりしかば、彼は諸子に伴はれて埃及に赴き、ヨセフに逢ひ、マロにも謁見し、オセンの地にて其晩生を平和安樂の中に送れり(ヨセフの終參照)。彼死の近づけるを知るや、諸子を其側面に招きて其子孫の運命を預言し、百四十七歳にて死し、王禮を以て葬られたり(卅七・五)。彼の性質は、ヤコブ(排斥者)及びイスラエル(神の角力者)と云へる其名の示す如く、一方に於ては利己心と羨望、他方に於ては勇氣と精神の向上心とを不思議にも混交したり。エサウの如き學者は、ヤコブの性格と経験とは、以色列人民の性格と歴史との理想的範圍に外ならずと云へり。エサウの「以色列列史」ロイヤルソンの「イマツ及びヤコブ」を見よ。

ヤコブ 雅各 (Jacob)

人名

新約聖書に此名を有する者三人あり。即ち左の如し。
 (一) ヤコブの子ヤコブ (Jacob the son of Joseph) 耶蘇十二使徒の一人、使徒約翰の兄弟。可一の十九(太四の廿一)に依れば、雅各は其兄弟約翰と共にガリラヤ湖畔にて網を繕ひ居りしに、耶蘇彼等を召したりしかば、其父と傭人とを棄てて之に従へり。彼等はシモン及びアンデレの伴居なりしが、此二人も亦同時に耶蘇の招に應じたり。而して此はマテスマのヨハネ(卅五以下)に依ればアンデレ及び其兄弟、悉くは約翰も亦マテスマのヨハネの弟子にして、彼より耶蘇の「神の羔」なることを教へられたり。多くの註釋家は路五の一・十一の記事を以て可一の十九の記事と同一事實を異様

に傳へたるものとせり。次の記事は彼が使徒職に召されたる事也(太十の二)可三の十四路六の十三、徒一の十三、四ヶ所に記されたる使徒の目録に依れば、彼得、アンデレ、雅各、約翰の四人は初めの一團として記され、可、徒は雅各、約翰を彼得の次に記せり。而して殊に變觀の山及びゲツセマリの園にては、此三人が特に他の使徒に先立てるを見る。雅各が路九の廿八を除きては常に約翰に先てるは、善し彼が兄なりしがためなるべし。第四福音書に彼の事の全く記されざるは奇といふべし。馬可が耶蘇が此二人の兄弟をおアチルゲ(雷の子)と呼びたりしことを傳ふ(三の十七)。此は善し彼等が激情を有したるより名けられたるものにて、耶蘇がサマリヤを通りてエダヤに往かんせし時、サマリヤ人之を拒みしとて、天より火を呼び下して之を燒き滅ぼさんと云ひ(路九の五十三)又「師よ、爾志を得ん時爾の右左に坐するを得せしめ給へ」と耶蘇に請ひしが如き(可十の卅七)之を顯はせり。セベダイの妻はサロマと云ひ(大廿七の五十六、可十五の四十四)耶蘇の母の姉妹なりしが如し(約十九の廿五、可十五の四十一)に依れば、サロマは耶蘇と共にガリラヤに往き、彼に奉仕せし婦人の一人なりき。多くの傭人を有したりし事と、約翰が祭司長カヤパを親しむ事より、セベダイ一家は比較的富有なりしと想像せらる。基督の十字架に釘げられし後凡そ十四年間雅各の事に就ては何事も記されず、彼が十二使徒中最初の殉教者たりし事は、彼が剛毅大膽にして猶太人殊にヘロデ、アグリッパの注意を引きたりしことを證す。アグリッパはヘロデ大王の孫にして、基督教を迫害し以て民望を取めんとて、紀元四四年の捕縛節の少し前雅各を殺し、彼得を獄に投じたりき

ヤの部

ヤコブ

(徒十一の11)。(二) アレクシオの子ヤコブ (James the son of Alphaeus) 耶蘇十二使徒の一人、四個の使徒目録に依れば、彼はマタイ(又はレツバイ、又はヤコブの兄弟のユダ)セロテと云へるシモン(又はカナンのシモン)及びイスカリオテのユダと共に第三團を作し、其首に記さる。此雅各に關しては新約全書何事をも記さず。然れ共彼は同じアルシオの子と呼ばれたるレビ(又はマタイ)の兄弟なりしと殆ど疑なし。通常彼はヨセの兄弟、マリヤの子なる年少雅各(大廿七の五十六、可十五の四十一)と同一視せらる。約十九の廿五に依れば此マリヤはクロマの妻とせらるゝより、クロマとアルシオとは同一人也と思考せらるゝ共確ならず。
 (三) 主の兄弟ヤコブ (James the brother of the Lord) 此雅各はヨセフ、マリアの子にして、十二使徒の一人に非ず、又耶蘇在世中は彼を信ぜざりき。彼が基督を信するに至りしは、其復活を見たりしに由るか如し(哥前十五の七)。此より彼の歴史は使徒行傳及び保羅の書翰より知るを得べし。即ち彼は基督昇天後其兄弟等とエルサレムに留り、十一使徒、母マリヤ及び其他の婦人等と共に聖靈の降臨を待ちたりき(徒一の十四)之より十年を経ざるに彼はエルサレム教會の首長となりたりき。保羅は其改宗後三年を経て(三八年頃)エルサレムに往き、十五日間彼得と共に在りしが、主の兄弟雅各の外は其他の使徒に逢はざりしと言へり(加一の十八、十九)。保羅は又後十四年を経て(五一年頃)最後のエルサレム行をなせし時、教會の柱たる雅各、彼得、約翰は彼が第一傳道旅行の報告を聞き、其「右手を與へて」彼とバルナバとに交を結びたりとの事を記せり

ヤコブ

ヤコブ

(加二の一十)。保羅が第二回のエルサレム行をなせし時のことは、更に詳に徒十五の四・廿九に記さる。此時雅各は、異邦人信徒は猶太人の律法を如何なる程度遵守せざるべからざるかの問題を定めんとため開かれたる會議の議長となりしが、「我れ思ふに異邦人の中より神に歸する者を擧げずば宜しからず、されども書を彼等に附りて偶像に汚れたる物と畜落と勸戒したる物とを戒むべし」との賛議をなしたりしは實に雅各なりき。後保羅が第三傳道旅行より歸り來りし時に、雅各はエルサレムに在りて重要な地位を占めたりき(徒廿一の十八)。即ち彼は保羅が異邦人の中になしたる功績の大なるを認め、神を崇めたりしと共に、保羅が異邦人の中に在る猶太人に對して、モーセを棄てしめたりとの風評猶太人の中に廣まりたり。誓願のもの四人を擧へ之と共に潔事をなし、以て其風聞の根柢なきことを知らしむべしとの忠告を保羅に與へたりき。哥前九の五より之を推すに、雅各は實を有せしが如し。新約書中の「雅各書」は彼の書きたるもの也(其條を見よ)。

りて、アグリッパ王及びアルシオに、アナキス守の同意を経ずしてサンドロインを召集せらるる權也とのことを訴へしかば、アグリッパは、彼の祭司職を奪ひたり」と云へり。亞歴山のタレメントは基督は昇天後雅各をエルサレムの監督に擧げたりとの事を記し、ユウセビウスは彼が其書を書きし時、雅各の監督椅子向エルサレムに存在せりとのことを云へり。

ヤコブ エデッサの Jacob of Edessa.

人名

アンタオクに近きイシタパに生れ、亞歴山にて學び、六八四年エデッサの監督に擧げらる。一たび辭して七〇八年再び擧げられし、赴任の途上死去せり。神學、歴史、哲學、文法の諸著あり、スリヤ、希臘、希伯來の諸語に通じ、舊約聖書のスリヤ譯を改訂し、アリストラテリス、セルフリー、兩グレゴリウス等をスリヤ語に譯し、文學の遺蹟の甚だ深きを示せり。其著書論政、巴理、フィレンツァ、羅馬の諸圖書館に傳り存する者多し。

雅各最初の福音書 Protevangelium of James.

書名

新約經外聖書中の一書。マリアの歴史と耶蘇幼時の物語とを記す。最初の福音書なる標題は、セルテリスの始めて發行せし拉丁譯に始めて用られたる者にて、寫本には「神の聖母の生誕に關する雅各の歴史」とあるのみにて、初代に在りては此書福音書と稱せられたることなし。作者は假定せられたるヤコブは、初代教會にて一般に主の兄弟ヤコブ也と信ぜられたり。眞の作者は何人なりや明ならず。此書のことを言へる最初の著者はオリゲナスにて、彼は屬々此書を遺棄として引けり(第三世紀の中頃)。亞歴山のタレメント及びユスタチウスの書中にも、此書中に記載せられたる事柄を發見す

ヤコブ。雅各最初の福音書

ヤの部

雅各書

れ共、此は必ずしも此書より取りたりと論定すべからず。...

雅各書

The Epistle of James. 經名

【此書の作者及び此書の地位】 此書の作者は自ら...

雅各書

此ヤコブは猶太書の作者ユダの兄弟にして(論一)此...

雅各書

を知らざりしが如く、ムラトリアン聖書にも記載せ...

ヤの部

雅各書

して之が爲めには智慧を要す、此智慧は信じて祈る...

雅各書

從ひて利益を得んとするが如きことを止めざるべ...

雅各書

せば、保羅ヤコブの書翰を知り、猶太教的臭味を帯...

ヤの部

ヤコブ・ヤコボン

たり。此井はツリシ山東の麓、エルサレムより...

ヤコフ

第五世紀中頃の人。コンスタンチノープルにて...

ヤコブ・ダ・トール

一四〇頃一三〇六。以大利の僧。スタバート、マテオ...

ヤベテのヤラベアム

會の腐敗を悔して法王ゴニファキウスを管するの詩...

ヤベテ

ノア三子の一。一人にして、異邦の地を領有せる諸族の先祖也...

ヤラベアム

エル王二人の名。(一)テパの子、猶太國分裂後...

ヤンセン

二の一十四の廿。ソロモン彼の大きな能力を有し...

ヤンセン

一五八五—一六三八。和蘭の神學者。アタコイに生れ、初等教育を終り...

ヤの部

ヤンセン派

ヤンセン派

Jansenism. 學派名。ヨルネ...

ヤンセン派

べき箇條ありその理由を以て、初め被教院、後法王...

ヤンチとヤンブレ

を流したりといふは半ヘラヤリス説也と論ずる是也...

ユの部

ユウオデヤ。ユウゲノー派

ユウゲノー派

ユウゲノー派

る書より引けりと言へり。斯かる書今はなけれ共、思ふに曾て存在したりしなるべし。

ユの部

ユウオデヤ Enoch. 人名 ヒビヒ教會の女信徒「セント」の條を見よ。

ユウゲノー派 Huguenots. 宗派名 佛國のレフォルムド派に與へられたる名稱。佛國のプロテスタント教徒は時代に従て種々の名を得たりしが、ユウゲノーなる名が一般に用ゐられたるは、一五六〇年アマゴア騒動以後のことなりき。此名稱の起源は明らかならず。或は獨逸語アイトゲノッセン(同盟者の義)より來り、或はラテン語アイトゲノッセン(同盟者)へられたる名なりしと云ひ、或は彼等が熱心ユウ、カヘの子孫のために謀りたりしより此名を得たりしと云ひ、或は此名はクルムより起りたるものにて、ツールの住民の中にユウゲノンと名くる状態夜々街上を徘徊すとの迷信行はれたりしが、プロテスタント教徒は迫害を蒙れて暗黒の中に於てのみ集會したりしより、ユウゲノーの名を得るに至りし也と云へり。第三説は近き如し。

ユウゲノーの歴史は五期に分つを得べし。今左に之を略叙す。
(一) 法律に依りて迫害せられたる時期(一五一二—一六二) 佛國の宗教改革は一五二二年巴理大學の教授ウヤック、レヘルが、保護書翰の註釋に於て明に信仰に依て義とせらるると云へる教義を説きたりし

に初まる。一五一六年ウイリアム、ブリンソンチ、モウの監督となり、其周圍には忽ちレヘル、フアラ、マブリエ等の學者集り、其教領に於て福音を説き、且レヘルは一五二三年新約の、一五二八年舊約の、佛蘭西譯を公にしたりしが、迫害起るべしとの脅迫を蒙り、此等の學者は遂に四散したりしが、モウの改革運動も頓挫するに至りぬ。フランシス一世は文學の復興を奨励し、一時改革を助けんとするの傾ありしが、元來宗教的熱情なく、且羅馬法王との好關係を維持せんとしたりしより、遂に迫害を開始し、六人のプロテスタント教徒を其目前にて焚殺し(一五三三) 暫て其領内の異端を動搖せんとす言へり。斯くて新教徒に對する嚴酷なる法律制定せられ、一五四五年にはメロンドル及びカプリエルの處刑行はれ、ウアルド派の住居せるフランス河岸の廿二町村は軍隊のために破壊せられ、其翌年には「モウの十四人」殉教せり。アンリ二世(一五四七—一五九) フランシス一世に繼ぎて立ち、熱心迫害を繼續せしが、新教徒は着々として進歩せり。改革運動の中心はウエテグアにして、カレヴァンは其著書と書翰と、間接には又其弟子に依りて、大なる感化を佛國の新教徒に與へたり。一五五五年帝は四班牙の檢教法を佛國に輸入せんとせしが、國會は承認せざりしがために果す。帝の晩年に至りては新教徒の數者しく増加し、帝の死する六週間(一五五九年五月廿六日) 佛國レフォルムド教會の第一國會は痛に巴理に於て開會せられ、後佛國新教徒信仰の標準となれる信仰告白を採用し、教會政治を定めたり。爾後一百年間に廿八回の國會開かれたりしが、一六五九年以後は政府之を開くを許さざりき。

以てアンリ二世に繼ぎて立ち、アンチ、ブ、ホルを死刑に處せしが、此舉は自由を愛する人々をして其暴戾を憤るの心を起さしめ、却て佛國新教徒の進歩を助けたり。且此時政權は皇后の二叔父ローレーンの「カルティナル」チャールズ及びギース侯フランシスの手に落ちたりしが、是迄迫害を忍び來りし新教徒等も、爰に至りて王の幼冲に乗じて其權威を擯にせるギース侯の虐政に堪ゆること能はず、新教徒ならざる愛國者の中にも亦同様の考を抱く者あり。斯くてアマゴアの騒動なる者起るに至りしが(一五六〇) 此騒動は成功するを得ざりしも、ギース侯をして新教徒の過去の行爲に對して大教令を出さしむるに至りたりき。又フエンテンアローラの會議に於て、海軍大將コリンニは新教徒のために禮拜自由の請願を提出し、大監督マリヤ及び監督モントルも亦教會の疾患を慮すためには、國民會議を開くの必要ありとのことを公然唱へたりき。然るにギース侯は痛にコンド公を殺し、且新教徒を屠殺せんとすの計畫をなしたりしが、偶々フランシス二世死して之を果さず。シャルル九世十歳の少年を以て代りて立ちしが、ル、ホビタルの寛容政策一時行はれ、一五六一年アマゴアの集會開かれ、ユウゲノー派は初めて國王の面前にて宗教上の意見を述べたる機會を得たりき。翌年一月所謂「一月令」と呼ばれたる者發布せられ、之に依りて新教徒は初めて形式的に承認せられ、城外にて禮拜するの自由を附與せられたりき。(二) シャール九世治下の内亂及び「バルトロマイ祭日の虐殺」(一五六二—一七四) 「一月令」の發布後未だ猶ならずして、ギース侯は新教徒の集會所を襲ひて之を屠殺せしが、爰に最初の内亂は始まり(一五六二—一六三)。コリンニ及びコンド公は新教徒

ユの部

ユウゲノー派

ユウゲノー派

ユウゲノー派

の主導者にして、コンスタブル、モントモレンシー、ギース侯及び元帥アンドレは羅馬教の主將たり。戰争は國中諸處にて行はれ、互に勝敗あり。モントモレンシー及びコンドは共に崩となり、アンドレはドゥワの役に戦死せり。ギース侯フランシス、ポルトロのために殺され、アマゴアの平和差に成り、新教徒は各市邑の郊外に集會するの自由を得たりき。續て一五六七年第二の戦争起り、一たび平定して、又六八年第三の戦争起り、コンド公は此役に戦死せしが、和又成り凡そ二年の小休を得たりしに、一五七二年八月王妹と新教徒の一貴族との婚姻式を舉ぐるに際し、多數の新教徒の巴理に集會するに乘じ、母后カマリナはシャルルを誘惑し、同日廿四日巴理を始め、其他の諸市に於て新教徒凡そ三萬を屠殺せり。是れ所謂「聖バルトロマイ祭日の虐殺」なる者也(其餘を見よ)。然れ共ユウゲノー派は之のために屠殺せられたるには非ず。第四回の戦争(一五七二—一七三)に於て彼等は能くラ、ローシエルを防御し、遂に國王と平和協約を結ぶを得たり。

約成り、八市を以て新都市となし、混合裁判制度を立つることとなり。續て八年の間は數月間第七回の戦争ありしのみにて國內平安なりしが、一五八四年アンリ三世を以てナヴァールの王がホルゴンのアンリを以て王嗣とせしが、此アンリは新教徒なりしを以て羅馬教徒に不安を與へ、之がため再び戦争となり(一五八五—一八九) 新教徒はコトゥワの戦に勝利を得たり。次でギース侯アンリ殺され、アンリ三世とナヴァールのアンリとの間に講和成りしが、アンリ三世暗殺せられ(一五八九) ナヴァールのアンリは新教徒を以て之に繼ぎ、アンリ四世と稱せり。彼は新教徒の後援を得て數年の間佛國同盟と争ひたりしが、舊教徒の反對劇かりしがため遂に新教徒を棄て、舊教に歸依したりしも、公平を以て國內を治め、一五九八年四月「ナント令」を發して真心の自由を保障し、新教徒の權利を認め、巴理を除くの外何處にても禮拜するを許したりき。

ルイ十四世は自己の品行を悔改するの道として異端を撲滅することに依りて天の恩寵を得べしとの希望を抱き、之がため種々な方法、例之騎兵を新教徒の家に宿せしめて之に突するが如きことをなして新教徒を苦め、漸次其特權を剝奪し、遂に一六八五年十月に至りナント令を廢止し、新教徒の禮拜を全くと禁内し、而して新教徒の國外に移住するを絶對に禁止したり。

(三) アンリ三世及びアンリ四世治下の奮闘(一五七四—一八九) アンリ三世即位數週前第五回の戦争開始せられたりしが、新王が到底新教徒を根絶し難きを悟るに至り、一五七六年五月平和協約成り、新教徒は巴理の外全國何處にても又何時にても自由に禮拜するを得ることとなり。然るに此協約は新教徒にあまり自由を許したりしがため、羅馬教僧侶及びギース侯の反感を買ひ、異端撲滅の目的を以て神聖同盟なる者全國到る所に結ばれ、アローアに開きたる國會に於て國王は此同盟の首長として仰がるとに至り、爰に第六回の戦争始まりしが、此戦争は數月續きたりしのみにて、一五七七年九月平和條

の自由を保障し、新教徒の權利を認め、巴理を除くの外何處にても禮拜するを許したりき。(四) ナント令の發布より廢止に至る迄の時代(一五九八—一六八五) ナント令はアンリ四世暗殺(一六〇一) 後ルイ十三世及びルイ十四世の攝政マリイ、ド、メテジに依りて相續して確保せられたりしに拘はらず、新教徒は之に満足すること能はず。一六二〇年バルンの教會破壊せられ、且羅馬教僧侶の漸く勢力を擡げしに至り、新教徒は之に反對し、一六二五年遂に戦争を開始したりしが、一八八年、ローシエル陥落し、新教徒の政治上に於ける權力は是全く地に墜つるに至り。然れ共知識の方面に於ける彼等の活動は此時より盛なる者未だ之れあらず。巴理附近に於る彼等の禮拜所「シャレント」は宗教的哲學の中心となり、著作者或教者の數は頗る多く、全國に六箇の神學校を設くるに至り。然るに

ユウセビウス

ユウセビウス

ユウセビウス

ユウセビウス

を以て新教徒を罵はすことを禁止したりき。向此後
の事に就ては『佛蘭西』の條を見るべし。
ユウスタチウス ユウスタチウスの條を見るべし。
Thucydides of Thessalonica. **人名** 第十二世
紀の初めコンスタンチノープルに生れ、一七五年
以來テサロニケの教長となり、一九四年其處にて
死せり。希臘古典に通じ、其註釋を以て名を得し、
神學上の著書も頗る多く、其『僧院生活論』は一八
四七年編譯語に譯せられたり。

ユウセビウス エメサの監督 Eusebius,
Bishop of Emesa. **人名** 三六〇頃死
メソポタミアのエデッサに生る。名家の子也。カイ
ザリヤのユウセビウス及びシトポリスのパトロフイ
ラスに隨て學び、次でアンテオケに往き、又亞歷山
にて學べり。聖書註釋學者、説教家として名高く、三
四一年のアンテオケの會議は彼をアマナシウスの後
繼者として選びたりしも彼は辭して受けず。續てフ
エニキヤのエデッサの監督となり、此地の住民
は彼が有する天文学の知識を恐れ、魔術者也と云ひ
て反對したりしかば、彼は逃れてラオケヤに往き、
後アンテオケに居る定め餘生を此處に送れり。註
釋、説教、猶太教及び異教に對する詳細の著書著
頗る多けれ共、今傳はるものは断片のみ。

ユウセビウス カイザリヤの監督 Euse-
bius, Bishop of Caesarea. **人名** 最初の
基督教史家。二六〇乃至二七〇年に生れ(多分パレ
スチナにて)、三四〇年カイザリヤにて死す。初め道
害のためパレスチナに逃れ來りシヨントの監督メロ
テラスに就て學び、後アンテオケに往き、長老ドレ
テラスに隨て學ぶ。然れ共彼に最も大なる感化を與
へしは、オリゲノスの著作也、メムフイウスの親交
也。彼は三〇六年迫害のためにカイザリヤを去ら
ざるべからざることをなり、ツロに逃れ、埃及に往
きしが、三二三年歸りてカイザリヤの監督せらる。
彼の監督たりし時起りし大問題は、三二八年に初ま
りしアリウス説論争にして、彼はアリウスをアマナ
シウスの中間に立ち、ニカヤの會議にては調和を
謀りしが成らず。終り迄同一貫説に反對して戦ひ
たりしが、終に正統説に屈服し其告白に調印したり
き。然れ共心中にはアマナシウスに對して怨恨を抱
き、後常にアリウス説領袖の一人となれり。彼は三
三五年アマナシウス職職のため、召集せられたるソ
ロの會議の議長となりしが、ニカヤにて調和を謀り
たることありしを以てコンスタンチヌス帝の交情を
失はざりき。彼は帝の特殊の信任を得たりしが、ア
マナシウスに就て語る時に眞實なること能はざりし
が如く、帝に就て語る時も亦眞實なること能はざり
き。
然れ共ユウセビウスが不朽の名を傳へたりしは監督
としてに非ずして、著作者としてなりき。彼の著作
は歴史、神學、神學及び聖書註釋に亘れ共。其中
最も重要なものは歴史上の著作にして、其『教會史』
(*Ecclesiastical History*)は十冊の大冊をなし、
教會の起源より三二四年に至る迄の歴史を載す。彼
は此著作に依り『教會史の父』なる名を得たり。是
れ彼が歴史著作術に達したりしがためには非ず、
彼は全體を記述する方法を有せず、詳細の事に就て
は批評を缺き、其文體も宜しからず、其事實も亦正
確を缺ける處あり。然れ共彼はし彼に對して之を利
用するに非ざればは失すべかりし材料を有し、非常
なる熱心と努力とを以て之を拾集し、斯くして教會
歴史家の先頭となりたり。是れ彼が此名を得たりし

所以にして、事實及び文書の寶庫として彼の書の價
値は頗る大なるものなりき。彼は『教會史』を著し
し前に『史記』を編輯せり。此書の初めには三二五
年に在る迄の世界史の概要を記し、第二部には此大
要の抄録を記して示せり。此外ユウセビウスの歴史
上の著作には『コンスタンチヌス傳』パレスチナの
殉教者』等あり。歴史上の著作に次で重要なものは解
説論にして『福音の論議の準備』及び『福音の論議』
の二冊は最も精細を極む。前者は異教の不充分にし
て且不合理なることを示したるもの、後者は其内的
性質及び外的結果より基督教の眞理を證明したるも
のにして、此兩書の大意は『テオファニア』と題す
る書中に摘録せられたれ共、此書はスリヤ譯にて現
存するのみ。此外に又『預言書抄録』オリゲノス解
論』あり。神學上の著作にはマルケルスの所論を
駁したるもの二冊あり、註釋書には詩篇、以賽亞書、
俱以耳書、雅歌、希伯來書等あれ共、共に重要な
ものに非ず。又『オノマストコン』と題する書あり、
パレスチナの風土記及び聖書地名を載せたるもの
也。ユウセビウスの教會史はソクラテス、ソッメン、
テオドレト、フィロストルゴス、テオドル、エグ
アクリウス等に依りて續けられたる。

ユウセビウス ニコマデアの監督 Eusebius
of Nicomedia. **人名** 初めニコマデアの監督
たり。後ニコメデアの監督となり、三三九年に死せり。
チノープルの監督となり、三四二年其處に死せり。
羅馬帝ユリウスと遠き縁戚の關係を有し、又コンス
チヌス帝の深き親任を得たりしが、帝の臨終に
洗禮を授けたりしは彼也。アリウスと同じくアンテ
オケのルキアヌスの弟子にして、初めよりアリウス
と同説を持したりしが如し。後歸國の末、恐らくは四

ユウタイケス

ユウタイケス

ユウタイケス

ユウタイケス

同の境遇に歷せられて、稍や其説を變じたりしが、
向アリウス派の指導者、組織者なりき。ニカヤの會
議(三二五)には正統派の告白に調印したりしが、
此は久しく之に反對したりし後のことなりき。アリ
ウス説を辯護したりしがため皇帝の怒に觸れ、會議
の數日後追放に處せられ、三年を経て漸く皇帝の親
任を回復したりしが、歸還(三二九)の後は其意見を
教會に實行せんため政府の全機關を用ひ、斯くて三
三一年アンテオケ會議に於て正統派の領袖ユウスタ
チウスを職職し、三三六年アマナシウスをトレグス
に逐ひ、三三七年アリウスをコンスタンチノープル
に招還し、斯くてアリウス派再び勝利を得たりしが、
此はユウセビウスの力なりき。『アリウス』の條參
照。

ユウタイケス Eutyches. **人名** コン
スタンチノープル僧院長。ユウタイケス論争の發頭
者。次の條を見よ。

ユウタイケス説 Eutychianism. **學派名**
ユウタイケス説は亞歷山派の基督論を極端に推し
往き、基督の人性を失する輕神性を高調したるもの
にして、チストリウス説に反對して起りたる者也。
四三三年アンテオケ派と亞歷山派との間になされたる
調和は、單に一時の交際に止まり、兩派共其主義的
立場を變ぜず。引續きて兩派尙相攻撃して止まざり
き。而して亞歷山派は皇室及び隱道僧等之を支持し、
獨に教會をしてテオドロス及びモプスエスチアの
テオドルの正統説なるやを疑はしむることに力を盡し、
アンテオケ派は主として科學の力を用ひて其説を主張し、
此點に於て反對者に優るものありき。兩派の争は
ユウタイケスに至りて遂に破裂したり。彼は此時凡
そ七十歳にして、既に三十年以

上コンスタンチノープル近隣の僧院長たり。嚴格な
る隱道僧にして僧院を出づること極めて稀に、來訪
者に接して之に基督の秘義を語り聽かざるを常とせ
り。彼は正直なれ共無學、論理に關はざれ共議論を
好めり。深くアンテオケ派の神學を信み、其一生を
通じて異端征伐に専心せり。エペソの會議(四三二)
に於て彼はケリルの最も熱心なる味方の一人たり、
又此會議の黨争的動作を世界會議の決議として承認
せしめんため、王宮に参入しテオドロス二世を脅
迫したる隱道僧の一人なりき。彼は宮廷及び隱道僧
等の信任を得て、アンテオケ派の攻撃に全力を注ぎ、
四四八年には法王レオ一世に書を贈りて、東方教會
に向テアリウス派異端の存在せざることを報じたり
しが、此時アンテオケの教長ドムヌスがユウタイケ
スを異端として皇帝に訴へたりしも、アンテオケ派
自衛の道に外ならざりき。
ドムヌスの運動は何等の効果なかりしが、同年の秋
ドムヌスの監督ユウセビウスはコンスタンチノープ
ルの會議に向て、ユウタイケスが基督の性格に關し
異端の教を爲せりとの告訴を出せり。アンテオケ派
の隱道僧フラゲイアヌスはユウタイケスとユウセビ
ウスとを會見せしめ、以て事件を調和に治めんを謀
りたりしが、ユウセビウス之を欲せざりしかば、ユ
ウタイケスは遂に會議の前に喚問せらるることとな
り、近衛兵と激昂せる隱道僧とに圍衛せられて出席
し、審問に對して半ば輕蔑的に、半ば道辭的に答へ
たりしが、彼は基督の體は他の人體と全く異なる質
質を有せりと教へたりしことを承認したりしが故
に、是れ彼がアホリナリウス説、ウアレナチニア
ヌス説、ドケテ説を有するを認するもの也とて、僧院
長の職を奪はれ、教會より放逐せられたり。然れ共

ユウタイケス及び其徒は此決議に服せず、更に世界
會議を開かんことを要求し、其結果四四九年エペソ
の會議開かれたりしが、此會議は所謂『盜賊會議』
と呼ばれたる者にして、アオスロスの所説が議長とな
り、軍隊の力を用ひ亂暴罪を極め、ユウタイケスの
地位を復し、フラゲイアヌスを殺し、アンテオケ派
に屬する監督の地位を奪ひ、斯くて亞歷山派は一時
勝利を得たりしが、テオドロス二世死して皇族ア
ルカイア位に即くに及び、エペソの會議にて追放せ
られたる監督等を復職せしめ、ユウタイケスは再び
破門せられたりしが、皇帝は四五一年カルセドンに會議
を召集し、此會議に於てテオドロスを破門し、レ
オ一世の書翰を得て基督は一個の人格と二個の性質
とを有することを確定せり。斯くてユウタイケス説
は異端として斥けられしが、其徒は自己の僧院を
有し、尙久しく存在したりき。
ユウノミウス Eunomius. **人名** 三九
四死。カパドキアのテオラに生る。三六〇年キウカ
スの監督となりたれ共、極端なるアリウス説を奉じ
たりしがため其職を奪はれ、後テオドロス帝のた
めに追放せられ、カイザリヤより逐はれて故郷テコ
ラに退き、其處にて死せり。彼は父と子とは其本質
絶對的に相異れりとし、子を以て他の受造物と異な
る處なく、通常の人間に過ぎずとせり。彼の著作
は皇帝の命に依りて焚かれ、彼の説はコンスタンチ
ノープルの會議にて實現せられたり。彼の『辯護』は
パトリウス及びニッサのクレゴリウスの辯駁文より
再び組立てられたり。
ユウノ ユウノの條を見るべし。
ユウノミウス Hugo of St.
Victor. **人名** 一〇九七頃一四一
十二年の大神學者。アペラール及びベルナルドと

ユの部

ユスチニアヌス一世

ユスチニアヌス一世

ユスチヌス

時を同うし、最も勢力ある神學者なり。僧院に退き
て生活し、教會の事に活動するよりも其敬虔と瞑想
に依り著はる。佛蘭西中世の神祕主義は實に彼を
宗とする可なり。クレアゴアのベルナルドも、
テロ、ロンバルドも彼に負ふ所多かりしなり。後世
彼を『アダスカルス』(師)若くは『アルテル』(第二
の)アウグスチヌス』と呼びしも眞に宜なり。ユ
ゴの生地は或はフランデルス中のイブレス近傍な
りしと云ひ、或はサキソニーなりしといふ。共に古
くより唱へられたる所なれ共、サキソニーとする方
一層有理に思はるゝ節あり。兎に角ユゴはサキ
ソニーのハメルスレーベンの僧院學校に學び、出で
て叔父ハメルスレーベンのユゴと共に佛蘭西に
行き、巴理に近き聖ヴィクトルの有名なる僧院學校
に入り、十五年の後同校の監長とせられ、八年在職
せり。聖ヴィクトルのマダム及びリシャールは當時の
學生なりき。ユゴはベルナルドと相親しかりし
も、教會及び政治の事に深く立ち入り、其體質
も弱き方なりき。ユゴの著書は數多あり。早き
頃の最も神祕的傾向に富む『ド、アルカ、モー
ライ』及び『ド、アルカ、ミヌカ』及び『ド、グ
アマト、ムンデ』の三著は其なり。聖書の註解も
多けれど、重に説教的にして創見少し。事變的の著
『エルディオ、ア、ア、ア』と神學的の二著
『ス、セ、セ、セ』及び『ド、サ、サ、サ』
チヌス、クリストス、フイア』は共に晩年の作に
て最も價値多し。

ユスチニアヌス一世 Justinian I. 人名

近衛に入り、狀貌の魁偉と勢力のすぐれたるより立
身し、五一八年には既に帝位を取り得べき權勢に達
し居たるが、ユスチニアヌスを幼よりコンスタンチ
ノープルに抱し來りて之れに最良の教育を施せし
が、即位の時には其地位に適當なる者となり居たり。
ユスチニアヌス治世中の最も著しき事跡は、既存の
羅馬法をトレカニウス等多くの委員に命じて修正組
織せしめ『コルプス、ユリス、ユスチニアニ』を制定
し、羅馬は勿論世界文明の上に永久の貢獻をなした
る事なり。然れども亞非利加、南西班牙、以太利に
試みたる遠征は稱すべきものに非ず、又此等の征服
國を統治すること専らより不成就なりしは一層非
難すべきものなりき。更に宗教政策に於てはユスチ
ニアヌスは甚だしく力を用ひしに拘はらず、全然非
難を受くべきものなり。彼は基督教者にして正統派
信仰の維持に熱心に、絶えず異教及び基督教異端に
對して撲滅せり。領内の所々には下級人民は尙偶
儀教を奉じ、上級者は宗教に無頓着なりき。帝は是
等に迫りて奉教或は改宗せしめたり。五二九年には
アナチの哲學學校を閉鎖して教師を逐ひぬ。彼等は
波斯に行きしが、後コンスチヌスの仲保に依り歸國を
許さる。コンスタンチヌス派、ユウライテ
ス派等の基督教異端者も同じく無情を以て取り扱は
る。中世紀の後に同教徒の埃及及びシリア侵入が驚
くべく成功せしは、帝の宗教政策に依り人心乖離せ
し結果なりと言はる。ユスチニアヌスは基督教單性論
者の態度に就ても失敗せり。初め埃及及びシリア及び小
亞細亞諸地方の民は單性論を信じ、カルセドン會議
(四五一年)の布令を奉ぜりしが、正統派と單性
論者との包容せんとすの『エノチコン』(四八
二年)現はれし、東方教會諸監督の已むなく之に調

ユスチヌス 殉教者 Justin Martyr. 人名

著書を今日まで傳へられたる最初の基
督教思想家。マルクス、アウレリウス帝の世に殉教
の死を遂ぐ。信を置くに足るべく思はるる『メテ
アスタス』(第十世紀)の中にある記事によれば、一六
五年に殺されたものと知り、テラヌスが『最も
驚くべきユスチヌス』と記せるを始め、テラヌス
アヌス、ヒッポリタス等も彼を殉教者と記し、其著
書の傳はりたるを言ひ、イレニウス、ユラセビウス
等は其書を名指せり。『レウカス、マリシヌス』
(Kerygma Parousia) 及び『テララロモンヌス』
(Chironomus) は二つとも十一の文書の蒐集なる
が、其中辯證論二つ『トルフォ』の問答』其他二三
は疑ふべからざるユスチヌスの著なり。アントニ
ヌス帝及びマルカス、アウレリウス帝の朝に著はされ
しものとせらる。ユスチヌスの自著に依り見れば、
彼はパレスチナの子アポリス(昔のシケム)に生れ、
其父母は異邦人なり。哲學を學び、ストア派、ア
ストテレス派、ピタゴラス派、プラトーン派と次第
に變化せしが、基督教徒の行爲と其の殉教の
喜さを見て心動きしに、或時基督教徒の一人より
人間の研究は神の觀念には達し得べきも、生ける神
自身には達し得ず、神を知るには之を聞き又見ざる
べからずと言はれ、舊約の預言書を指不せられ、之
にて太く心を震盪せられ、其より一心に舊約を研究
し、舊約を得、終に基督教の宣傳のために身を犠
けたり。羅馬にてはマルチオヌスと論争し、キニク
派のクレスケンスと討論し、辯證論を著して迫害
を受けつゝありし基督教同胞を援助し、著書を皇帝
に献せり。書は基督教徒と生活を描き、無神主義
秘密犯罪等の譏妄を辯じ、基督教は神より出づ、其證
は預言の適應せるにて知らる、基督教徒が十字架に
殺されたる基督を拜せるは狂せるに非ず、彼れ神の
子神の言たればなり、基督教の教は純潔なり健全な
り、基督以前に善と認められしものと合ふ、唯偶像
教及び敗徳と反對せり、基督教を惡むは不義なり、
迫害は聖賢の働なりと言へり。其より小亞細亞に行
き、歸りて『トルフォ』の問答』を著し、猶太人
の神は即ち基督教徒の神なることを説く。ユスチ
ヌスは諸書にて當時の基督教徒が何れも一體に奉ぜし
信仰を説かんことを期したり。されば彼は當時の教
會の信仰の一致し居りし、ことを説する者なり。彼に

ユの部

ユスチヌス

ユダ

ユダ

從へば、基督教は世界の交わる神と其子耶穌基督と
預言の聖靈とを信するに於て成立せり。ユスチヌ
スは又舊約聖書を聖靈の生ずる所と認めしが、使徒
の文書の結果の事は何も言はず。基督一代記を『使
徒の記念』と呼びたれ共、其著者の名を言はず。唯基
督の言のみを引けり。されど此引用に依り馬太傳路
加傳を讀み居りしことは知らる。近頃の學者は約翰
傳をも知り居たりしが如しと言へり。彼は此等の文
書が又福音書と言はるること、其使徒若くは其同伴
者に依り書かれたること、及び其神の言なることを記
せり。然れ共彼は保羅の名を言はざるを以て其舊約
を重んずる事と思ひ合はせて、彼を猶太派基督教徒即
ちエビオン徒なりとせし學者あり。クレドネル。シ
ユウ。ケル。パウル。ヒルゲンフェル等是也。
然れ共アラバムとソクラテスとを相違へず。猶太
人の罪を論じ、又基督千年統治を抱きたる所
など猶太人思想に非ざるなり。彼は基督教の道德道
法を取らば、意志自由を信じたり。パテスマは在
來の罪を清む、然れども其は唯悔いたる者に功あり、
聖靈に於ては基督の肉と血に變りたる物を受けて養
はると言ひ、始めて化體説を説けり。ロゴス論に就
ては神は肉となり子を有したりと説き、後世の基
督父へ從屬すといふ説の基をなせり。『コカヤ前基督
教文庫』中に取めらるる彼の著書及び、マルチンの
著に於て彼の傳(一八九〇)を見よ。

ユダ Judah. 人名

第四子。以色列の支派の族を見よ。
ユダ Isakariot. 人名
耶蘇十二使徒の一人、耶蘇を賣りし者。
第四福音書は彼をシモンの子と呼べり(約六の七十
一、十三の廿六)。イスカリオテとは『カリオテの人』

の義にして、カリオテは彼一家の所在地也。一般に
ヘブロン南エルカレエインの荒址也と思惟せら
る。兎に角彼は南パレスチナ出身にして、ガリラヤ
出身なる他の十一使徒との交情疎なりし一原因は蓋
し此處に在りしならん。彼が使徒となりし以前の生
活は明ならず。其親屬福音書は彼の十一人と共に
召されて使徒となりしことを記す。而して彼の名は
三書共に最後の組の最後に記さる(太十の四、可三
の十九、路六の十六)。第四福音書記者は、耶蘇は初め
よりユダが後に至りて己を賣るものなることを知り
たりとのことを記せり(六の六十四、七十)。此記事
を削除するに非ざれば、耶蘇がユダを賣りたること
を以て、彼の知識の限ある事に歸すること能はず。
去らば何故に耶蘇は之を選ばざりしや。或る人々
は斯くして神の計劃を成就せんとしたると説きた
れ共、此説は未だ以て此困難なる問題を解くに足ら
ず。思ふにユダが使徒として選ばるるに至りしは、
彼にも亦取るべき資質ありしがためなるべし。實際
的才能と其勢力の強きことは、即ち彼の長所にして、
耶蘇の團體が金銀を所有するに及びて、彼は金銀を
掌る者として選ばれたる(約十三の廿九)。然るに
彼は利慾の念深く、其預れる公金を費消し(約十二
の四一、二)後遂に耶蘇を銀三十にて祭司に賣るに至
りたり(太十四の十一、路廿二の五)。然れ共彼が耶
蘇を賣りたるは、單に其利慾のためのみならず、
彼は其他の弟子等と同じく地上の國の立てらるべき
を信し、利益と榮譽とを其一身に望みたりしに、耶
蘇は猶太人の彼を王とせんとしたりし之を拒み
(約六の十五)既にエルサレムに入りて、何等爲す
處なきを見て痛く失望したりし亦之が原因なり
しなるべし。且耶蘇は屬々貪慾と偽善とを責めたり

ユダ

ユダ

ユダ

ユダ

し、思ふに此はユダのためにも特に之を語りしな
るべく、ユダは此等の語を聞き、自己が耶蘇に疑は
れ居ることを感じたりしなるべし。而して彼は最後
の途程の席上にて公然其偽善を責めらるるに及び
て、愈々耶蘇を賣らんとの決心をなしたりしなるべ
し。學者の中にはユダを以て初めよりの陰謀家と
なし、耶蘇の事業を妨げせんため、其弟子となりた
る也と言ふものあり共、福音書中何處にも斯る證據
を認むること能はず。之に反して或る學者は、ユダ
はパテスマのヨハネと同じく、メッシヤの事業の
進歩進退を忍ぶこと能はず、之を速めんとして耶蘇を
賣れる也、彼は假令祭司等耶蘇を捕へんとするも、
耶蘇は奇跡を以て之を免るべく、斯る中に人民は彼
を立て、王となし、彼の事業は完成すべしと思惟し、
途程を以て好機を待たずして事なすべしと
也と論ぜり。此説に従へば、ユダは事を謀りたるも
のなれ共、悪人には非ず。然れ共耶蘇が彼を「亡滅
の子」と稱し「惡魔」と呼び又「生れざりしならん
却て幸なりしならん」と云ひしを見れば此説取り難
し。

められしを見て悔ひ、其銀三十を祭司の長老等
返して曰ひけるは、無辜の血を付し我は罪を犯し
ぬ。彼等曰ひけるは、我儕に於て何ぞ與らんや、
爾自ら當るべし。ユダ其銀を殿に投棄して、其處を去
りゆきて自ら縊れたり。祭司の長老等此銀を取りて曰
ひけるは、此は血の價なれば寶錢の箱に入るべから
ずとて、共に謀り此銀を以て旅客を擧るために陶工
の田を買へり、故に其田は今に至る迄血の田と稱へ
らる。とあり。然るに徒一の十六、廿一には、ユダ自
ら地所を買ひ、倒に墜ちて其中より割れ、其腸悉く
出たり、故に此地所を「アケルデマ」即ち「血の地
所」と名けたりとあり。斯く太はユダ銀を返したり
と言ひ、徒は之を留めたりとなし、太は祭司の長地
所を買へりと言ひ、徒はユダ自ら之を買へりと言ひ、
太は血の價なるが故に「血の田」と稱せられたり
と言ひ、徒はユダ血を流して死したるが故に「血の地
所」と呼ばれたりと言ひ、太はユダ自殺せりと言ひ、
徒は偶然に死したるが如くに記せり。此相違は蓋し
二箇の異なる傳説より來れる者にして、ユダが其終
をよくせざりしことは疑なきことなれ共、其他の事
は明ならず。斯くユダに關しては新約の記事に明白
ならざる點あるを以て、ユダは猶太教を離人化する
小説的人物に過ぎずと論ずる學者あり共、カイムの
云へるが如く、基督教徒が使徒の中に斯る人物を創
作せりとは信じ難し。

禮に供せんためなされたものなりしかば、猶太人
民の烈しき反對を惹起し、祭司長「アザールの力に依
りて僅に之を鎮定するを得たり。然るにユダはサド
クと呼べるパリサイ人をたらし、其自由を保護せ
んとて人民を集め、神の外何者をも主と仰がざるべ
きを誓はしめたり。ヨセファスも亦猶太人の事に
言及せるを見れば、此運動が頗る大なるものなりし
を知るべし。ヨセファスに依れば、セロテと稱する最
も凶暴なる一派は之より出でたる者也といふ。ヨセ
ファスはユダの死及び其運動に就て何事をも記さず
れ共、彼の証反せる時日其勢力に關して言ふ所は、
カマイエルの言ふ所と相一致せり。

ユダの兄弟 Jude the Lord's brother.

人名 太十三の五十五、可六の三に、耶蘇
の兄弟の一人としてユダの名記さる。傳説は通常之
を以て十二使徒中の「イスカリヤテ」ならざるユダ
(約十四の廿二)と同一視す。路加は「イスカリヤテ
ならざるユダ」をヤコブの子として記せり(路六の
十六、徒一の十三)。然れ共十二使徒中に耶蘇の兄弟
あるを拒否する人々は此傳説を信ぜず、之をヨセ
フ前妻の子とす、又はマリヤの子とせり。暫
く此説に従はんに、彼はナザレに住し、他の兄弟等
と同じく、復活後に至る迄基督を信ぜざりしといふ
こと(約七の五、徒一の十三)の外何事をも知る能
はず。彼が「猶太教」の作者なることは疑なく、猶
太は自ら「耶蘇基督の僕、ヤコブの兄弟」と稱せり(彼
一)。此は彼が耶蘇に對する親密の肉體的關係よ
りも重要なを感じたる事と、彼がヤコブよりも教
會に知らるゝことの少かりし事を示す。十七節に
依れば、彼は明に自らを使徒と區別するを見る。又
此書翰は彼が猶太人の傳説に通じたりしこ

ユダ

猶太教

猶太教

猶太教的基督教徒

之を示す。ユウセビウスがヘゲシッブスより引く處
に依れば、ドミシアン帝はデビアの後裔を殺さんと
して之を棄めたりしに、ユダは耶蘇の兄弟にして、
其子孫は即ちデビアの後裔也と訴ふるものあり。斯
くて彼等は帝の前に引き出されしが、帝は彼等が眞
なる労働者に過ぎずして、且基督の國は天の國にし
て世の終に來る者也と言ふを聞き、又恐るべき者な
しとなし之を放免せり。又彼等は使徒傳の證をな
し、且耶蘇の一族なる故を以て教會に勢力を振ひ、
トラヤン帝の時代に至る迄生存せり云へり。

猶太教

The Jews' Religion or Judaism.
宗教名 廣義に於ては猶太人の信奉する宗教、
即ちモーセの宗教、預言者の宗教、及び預言者以後
の宗教を總稱して、猶太教と名くを得べしと雖も、
嚴正の意義にて猶太教と稱するは、猶太人の時代、評
言すれば巴比倫俘囚(前五八六—五三九)以後に發達
したる猶太人の宗教の謂にして、廣義に於ける猶太
人の宗教は「以色列の宗教」(Religion of Israel)と
稱せらる。舊約聖書は即ち以色列の宗教の記録にし
て、モーセが律法を立つるに及びて著しく發達し、
預言者に至りて其靈的方面は更に一層の發達を遂げ
たり。以色列の宗教の一大特色は其倫理的、神教的な
るに在り。而して彼等の神エホバが、彼等の歴史と
生ける關係を有せる人格的神なりしこと、又其
宗教に重要な一特色なりき。此神の觀念及び舊約
宗教の發達に關しては、他の條に之を説けるを以て
爰に略す。『モーセ』『預言者』『神』(舊約の)『律法』
『犧牲』『祭司』『終末論』等の條を見よ。

彼等の建てたりしは國家に非ず神聖にして、宗教は
國家的生活と分離して全く神聖に於ける祭祀とな
り、此祭祀を司る祭司の一階級は漸く勢力を得て貴
族の位置に上りしが、世間的地位の高まりと共に
彼等は益々俗化し、前第二世紀に至りては其頂點に
達し、四周より興ひ來りし希臘文明の侵入に抵抗し
得ざりしのみならず、黨争の結果遂にスリヤ王安
チオカス、エビラチスの干渉を招き、神聖はスリ
ヤ軍の爲めに破壊せられ、エホバの崇拜は全く禁
じらるに至れり。於是敬虔なる國民の反動起り、マ
カベイス王家の奮闘に依り一時スリヤの覇權を脱
して獨立するを得たりしが、其結果貴族黨祭司黨(サ
ドカイ派)は之に屬す。國民の信任を失ひ、宗教の
主權は彼等の手を離れて敬虔深き平民の手に移れ
り。是れ即ちパリサイ人と稱せられたる人々にして、
之より宗教は次第に神聖の祭祀より遠かりて國民の
風俗習慣と結合するに至りしが、之が基礎となりし
は律法にして、此律法はモーセ五經に其根據を有し
たれ共、猶太國民の特色を神の意志として特に之を
神聖視し、之を維持し之を保護せんために、彼等は
五經に定められたる律法を以て満足せず、更に幾多
煩瑣なる規則を設け、日常生活の些細の點に至る迄
一々之を制限するに至れり。斯くて彼等は猶太人に
異邦人との區別する特徴として立てられたる割禮に
最も重きを置き、之に關聯して異邦人との交際及び結
婚を制限し、又は全く禁止し、其他安息日を守るこ
と、手足や器具を洗ふこと、杯酌の事に關し、一々細
密なる規則を設けたり。而して彼等は規則を守るこ
とを以て神の聖意に基ける神の命令也となしたりし
が故に、從て神を以て專制君主となし、服従を以て
宗教上最も肝要なる義務となしたりしが、其結果神

に盲從するを以て宗教となし、又屬々事の輕重本末
を誤り、動機如何を顧みずして、外部に顯はれた
る行為に重きを置きたりしが故に、宗教が道徳も全く
其生命を失ひて形式的機械的となり、偽善者も行く
るに至れり。然れ共猶太教の中にも全く取るべき
所なきに非ず。猶太教が舊約の宗教の上に立つ者に
して、之を基督教に傳へ基督教の先驅をなしたりし
は云ふ迄もなし、猶太教の中にも亦神を信じ敬虔な
る生活をなしたる人々少からず。且マルコム、エノ
ク、ソロモン等の詩篇等の如き亦猶太教の産物にし
て、其神の觀念の如き當時の希臘人又は羅馬人の到
底及ぶ所に非ず。之を要するに、猶太教は長短共に
基督の出現を促し、以て基督教の準備をなしたる者
にして、基督教の母也といふも可也。尙「耶蘇基督」
の條「歴史的狀態」の項、及び「サドカイ派」「パリサ
イ派」「エッセネ派」等の條を見よ。

猶太教的基督教徒 Jewish Christians or Judaizers.

猶太教と基督教との相違は、唯基督教が耶蘇を
以てメッシヤとなすに在りて主張する一派の猶太人
基督教徒をいふ。此等の人は異邦人にして基督教
に改宗せるものは、先づモーセの律法に従て割禮を
受けざるべからずと論じ、基督教徒に向て凡てモー
セの律法を守るべきことを要求せり。使徒保羅は基
基督教を以て萬民の宗教也となし、之を信する者にモ
ーセの律法を強ふべからずと論ぜしを以て、初代教
會猶太人の在る處には至る所に此議論沸騰し、保羅
に反對する者少からざりき。此問題はエペサレムの
會議(其條を見よ)に於て一旦解決せられたりしが、
反對論は此後尙暫く止まず。保羅の著きたる書翰の
中には、此一派の人々に對して向けたる議論少から

ユの部

猶太書

ユ。加拉太書は其最なるものなり。彼得、雅各は猶太人の使徒なれ共、此一派の所見に與りたりといふは事實に非ず。尚「パウロ」ヘテロ「ヤコブ」(主の兄弟)等の條を見よ。

猶太書

The Epistle of Jude. 經名 新約聖書公同書翰中の一書。此書が第二世紀の終り第三世紀の初めに於て、確實なるものとして、三大教會の承認する所となりしこと明也。即ち亞歷山教會に在りては、クレメント之ユダの書として其書中に引用し、カルテウの教會に在りては、テラチウのアナキス之承認し、羅馬教會に在りては、ムラトリアン聖經之を其書中に入れ、ヒョゴリタスも亦之を承認したりしが如し。尤もクブリアヌスは之を引用せず、スリヤ譯の中には之れなく、又アンテオク學派が之を承認したりし明證なしと雖も、概して論ずれば第二世紀の終りより第三世紀の初めの教會は、之を以て確實のものとして承認したりしが如し。

【言語文體及び他書との關係】 此書の言語の中には明に基督教教義的要素なる者あり。七十人譯より借りたる者あり。又極めて莊嚴、高調にして、間々詩歌的なる者あり。故に作者は猶太人也と雖も、教育を受けたる者にして、多少希臘の文學に通じたる者ならざる可らず。然れ共文體は著しく柔軟の性を缺き、美辭的要素なきに非ざれ共、概して論ずるに形式的にして巧妙ならず。書中に七十人譯より借りたる者あり。その事は既に之を云へり。又作者は「エノク」書と稱する經外聖書より引用せり(四、五、六、七、九、十二、十三、十八、廿四節)。又「モーセの昇天」(十二、十三、十八、廿四節)。又「モーセの昇天」(十二、十三、十八、廿四節)。又「モーセの昇天」(十二、十三、十八、廿四節)。

【著作の時代及び作者】 ナウレンゲン派の批評家は、此書を以て保羅派に反對して書かれたる猶太的基督教徒の作也となし、第二世紀の終の產物也とせり。同派近頃の批評家は、之を以て第二世紀の中頃若くは初年に書かれたる者也とせり。此書の中に「第二世紀に成りたりと爲す主なる理由は(一)此書に依れば「信仰」の道の傳へられてより既に多くの年所を経たりと爲す如しといふに在り。然れ共是と均し言はば加一の廿三、三の廿三、六の十、羅一の八、弗四の五等に在り。此書の思想も要するに加一の六、羅六の十七の思想と異なる所なし。(二)

猶太書

ユ。何人も看過すること能はざる所にして、其最も著しく類似する所を挙げれば左の如し。即ち猶四節「彼後二の二。六二の四。七二の六。八一の二。九二の十一。十一の十二。十二の二。十三の三。十一の十二。十五。十二。十三の十七。十六。十七。十八。十七の三。十八の三。三。是也。此等の類似は如何にして説明するを得べきや。此書及び彼後記者は共に第三の文種より借り來れる也との假説を爲す者ありしが、斯かる文種が存在したりし確證なく、且此説は此兩書の相異なる特質を説明すること能はざるが故に、近代の學者は悉く之を棄てたり。故に殘る所の説は、彼後の作者此書を借りたりや、又は此書の作者彼後を借りたりとの問題にして、彼後を以て使徒彼得の作也とせず者は、彼後を以て先きに書かれたる者となし、此書の作者之れより其類似の言語を借用せりと論ぜり。然れ共彼後の使徒彼得の作に非ざることは今日多くの學者の殆ど一致する所にして「彼後聖書」の條を見よ。此書の方彼後より先きに成りたる者也との説既に近きが如し。

【此書の内容】 作者は挨拶の言を以て初め(一)、二)神を敬はす、神の恩を賜へて也を志にし、神と基督を愛する者教會に入りたれば、讀者が其一たび傳へられし信仰の道の爲めに力を盡すことな勧めめんとし此書を書き贈る(三、四)我が福音に懐き起さんとする事は、以色列の民が其不信のために滅ぼされたること、天使が其本位を守らざるがために墮落したること、及びソドム、ゴモラの市色が其肉の慾のために滅ぼされたること也と云ひ(五)一七)斯く殷鑑を以て、我等は肉體を汚し主を敬ひ、尊者を誇れり(八)一十)是れカインの途に往き、バラムの迷途に陥る者、風に逐はるる雨なき雲、枯れて果のなき秋の樹、道を放れたる星也(十一)一十三)エノクは彼等の事を預言せり(十四、十五)彼等は惡言を吐く者、是ること知らざる者、私慾を志にする者、誇る者、人に誦ふ者也、爾曹は使徒の語りしことを憶起して靜肅なるべし(十六)一十八)彼等は又自ら區別をなす者、肉に屬する者也、爾曹は其徳を謙き信仰の上に建て、聖靈に感懐を待つべし(十九)廿一)是れ爾曹各自に對する義務也、彼等に對しては其或る者を説服せしめ、其或る者を教ひ、其或る者を憐れみ、其惡は何處迄も惡むべし(廿二、廿三)と述べ、頌榮を以て此書を終れり(廿四、廿五)。

【参考書】 註釋としてはブリクテラ、フロンミ

猶太書

次に十七節の語は使徒時代を以て既に過ぎ去りたりとせずが如しと云ふに在り。然れ共此は單に此書を受取りたる人々は、曾て使徒等の口より教を受けたりしが、斯る時代は既に過ぎ去りたりとの意に外ならず。(二)次に經外聖書を引用せるを以て、晩出の證據となすも、此等經外の書は紀元前後の作にして「モーセの昇天」は紀元三十年頃に成りたる者也と云へば、之を以て此書の第二世紀以後に成りたる證となす可らず。(四)最後には書中ノストラク教に言及せる者ありと云ふに在り。即ち此派の批評家は四、八、十九の語を以てノストラク教の誤譯を指摘せる者もなきと雖も、四節は單に基督の最上權を否むの謂に外ならず(羅十六の十八、腓三の十八)八節は彼等の行爲の精神の誤れるを指摘したるに過ぎず、十九節は羅十六の十七と同意義にして、何處にもノストラク教的誤譯と認むべき者を見せず。故に此書著作の時代を以て第二世紀以後に置くの議論は成立せず。此書を以て第一世紀の終りに成りたりとせず者は英國の學者にして、獨逸近代の學者の中にはスピッタ、フオン、ゾーデン及びグーセル又此説を取れり。

【著者の冒頭に「イエスキリストの僕ユダ即ちヤコブの兄弟」の書きたる者もこのことを述べたり。此書を以て第二世紀の產物也とせず人々は、之を以て爲書也となし、然らざればユダと稱する者之を書き、「イエスキリストの僕」なる語及び「ヤコブの兄弟」なる語は後人の挿入したる者也と云へり。又ユウリヤヘルは「ヤコブの兄弟」なる語は「監督」といふ稱號に均ししべしとの説を唱へたれ共、嚴密に過ぎず。最も自然の解説は本文の儘に之を領解することにして、即ち耶蘇の兄弟ユダ(太十三の五十五、

ユの部

猶太書

可六の三)之を書きたりとなすに在り。耶蘇の兄弟は當時の教會、殊にパレスチナの教會に於て勢力を有したりしが如し(哥前九の五、加二の十二、羅一の二)。去れば耶蘇の兄弟ユダが此書を書きたりしとするは最も適當の解説也といふべし。而して主の兄弟ユダ果して此書の作者也とせば、彼の死したるは凡そ紀元八十一年頃のことなれば、彼の成りたるは之より以後なるべからず。而して書中の言語、思想は使徒時代の晩年に相當する者あれば、思ふに教會書翰の成りたる頃此書も亦成りたる者なるべし。【書かれたる場所及び贈られたる人】 此書を以て第二世紀に書かれたりとなす學者は、埃及に於て書かれたりとなし、更に委しく亞歷山に於て書かれたりとなす者あり共、此書にして前に論ずるが如く、主の兄弟ユダの作也とせば、彼はヤコブと共にエルサレムに於て重要な地位を占めたりしこと疑ふ可らず。従て此書が書かれたるもパレスチナの地也となすこと最も自然の推定也と云はざる可らず。此書は何處に向て贈られたる者なりや。挨拶の言の普遍的なるより、回信的書翰なるべしと想像する者あり。然れ共此書を受取りたる人々の中には曾て神の恩の教理の傳へられたることありと云へば(四節)保羅の曾て傳道したりし處なるべし。又彼等は使徒等より觀しく教を受けたりしことありと云へば(十七節)彼等はエルサレムより遠からざる地に住したりしこと疑なし。而して隣りの兄弟耶蘇に彼等の中に入りたりといふ、其兄弟等の誤謬は教義的なるより、寧ろ道徳的なりしが如し。此等の事を併せ考ふれば、此書の贈られたるは、保羅が其傳道の始め及び其終りに往きて教へ、且斷へずエルサレムの教會と交通したりしスリヤのアンテオク教會なりしなるべし。思

ふにアンテオク教會の人エルサレムに來りて、神と耶蘇基督を愛する者教會の中に入り來れりとの事をユダに語りたりしが、ユダは之を以て此書を作り、純粋なる信仰の道を守るべしとのことを書き贈りたるものなるべし。

【著者の時代及び作者】 ナウレンゲン派の批評家は、此書を以て保羅派に反對して書かれたる猶太的基督教徒の作也となし、第二世紀の終の產物也とせり。同派近頃の批評家は、之を以て第二世紀の中頃若くは初年に書かれたる者也とせり。此書の中に「第二世紀に成りたりと爲す主なる理由は(一)此書に依れば「信仰」の道の傳へられてより既に多くの年所を経たりと爲す如しといふに在り。然れ共是と均し言はば加一の廿三、三の廿三、六の十、羅一の八、弗四の五等に在り。此書の思想も要するに加一の六、羅六の十七の思想と異なる所なし。(二)次に神を敬はす、神の恩を賜へて也を志にし、神と基督を愛する者教會に入りたれば、讀者が其一たび傳へられし信仰の道の爲めに力を盡すことな勧めめんとし此書を書き贈る(三、四)我が福音に懐き起さんとする事は、以色列の民が其不信のために滅ぼされたること、天使が其本位を守らざるがために墮落したること、及びソドム、ゴモラの市色が其肉の慾のために滅ぼされたること也と云ひ(五)一七)斯く殷鑑を以て、我等は肉體を汚し主を敬ひ、尊者を誇れり(八)一十)是れカインの途に往き、バラムの迷途に陥る者、風に逐はるる雨なき雲、枯れて果のなき秋の樹、道を放れたる星也(十一)一十三)エノクは彼等の事を預言せり(十四、十五)彼等は惡言を吐く者、是ること知らざる者、私慾を志にする者、誇る者、人に誦ふ者也、爾曹は使徒の語りしことを憶起して靜肅なるべし(十六)一十八)彼等は又自ら區別をなす者、肉に屬する者也、爾曹は其徳を謙き信仰の上に建て、聖靈に感懐を待つべし(十九)廿一)是れ爾曹各自に對する義務也、彼等に對しては其或る者を説服せしめ、其或る者を教ひ、其或る者を憐れみ、其惡は何處迄も惡むべし(廿二、廿三)と述べ、頌榮を以て此書を終れり(廿四、廿五)。

猶太人

【参考書】 註釋としてはブリクテラ、フロンミ

ユダヤの野

ユダヤの野。ユダ王国

ユダヤの野 (The Wilderness of Judah) は、ユダ王国の南西部に位置する地域である。この地域は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この地域で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。この地域は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この地域で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。

ユダヤの野 (The Wilderness of Judah) は、ユダ王国の南西部に位置する地域である。この地域は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この地域で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。この地域は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この地域で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。

ユダヤの野 (The Wilderness of Judah) は、ユダ王国の南西部に位置する地域である。この地域は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この地域で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。この地域は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この地域で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。

ユダ王国

ユダ王国

ユダ王国 (The Kingdom of Judah) は、古代イスラエルの南西部に位置する王国であった。この王国は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この王国で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。この王国は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この王国で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。

ユダ王国 (The Kingdom of Judah) は、古代イスラエルの南西部に位置する王国であった。この王国は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この王国で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。この王国は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この王国で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。

ユダ王国 (The Kingdom of Judah) は、古代イスラエルの南西部に位置する王国であった。この王国は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この王国で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。この王国は、ユダヤ人の歴史において重要な役割を果たしている。特に、ユダヤ人の祖先であるイスラエル人が、この王国で生活していたことが知られている。また、ユダヤ人の宗教的・文化的発展にも大きく貢献している。

ユの部

ユディト書。ユニヴァル

ユニヴァルサリスト派

ユニヴァルサリスト派

ユディト書 The Book of Judith. 書名

舊約外聖書中の一書。アッシリアの將領ホル...

ユニヴァルサリスト派

ユニヴァルサリスト派 Universalists. 宗派名

ユベシと唱ふるものなす。 (一) 教義 此の主義は神に就て特別の觀念を抱く...

人は神の像に於て造られし神の子なり。人は道徳的...

ユの部

ユニヴァルサリスト派

ユニヴァルサリスト派

ユニヴァルサリスト派

や價値を判する能はさればなり。且又人の自由は神...

其所に現はるゝなるべく、然らざるも舊關係は新し...

宣言せり。(一)我等は舊約聖書は神の性格と人類...

ユニテリアン派

ユニテリアン派

ユニテリアン派

ユニテリアン派

廿三(一八九〇)にして、ヨルダ、ヘリン (Geo. L. Perin) はケート (T. W. Cate) ジャーナル (Miss M. C. Scholer) の二人を伴ひ、同年四月來朝し直ちに傳道を開始し、同年十二月東京飯田町に會堂を建築し、之を本部とせり。且學校をも此處に設け「宇宙學院」と稱し、神學、英語の二科を教へたりしが、此學校は後遂に之を閉鎖せり。

此教會は初め「宇宙神教會」と稱し、後「ユニテリアン神教會」と改稱したりしが、後更に「日本同仁基督教會」と改稱せり。明治廿四年靜岡に傳道地を開き、翌年更に大阪及び仙臺に傳道地を開始し、同廿六年千葉縣寶典を獨逸派ミッションより譲り受け、同廿七年には新に名古屋に傳道地を設け、後又九州福岡に傳道地を開始せり。ヘリンは廿七年歸國し、ケート代りて傳道事業を總掌したりしが、彼も亦歸國し、現今はワイ、アイ、ケールン其總理たり。日本人にして初めより此教會の傳道者たりしは星野久成にして、赤司繁太郎は中途獨逸派に轉ぜり。増野悦興は日本組合派より轉じ來り、此派のためは星野久成にして、赤司繁太郎は中途獨逸派に轉ぜり。増野悦興は日本組合派より轉じ來り、此派のためは星野久成にして、赤司繁太郎は中途獨逸派に轉ぜり。

宣教師六人(妻を含む)日本人教師五人、會員百七十九人、教會四箇を有す。(アイン、フアール)の「恩惠と審判」エッダーの「米國に於けるユニテリアリズム」等を見よ。

ユニテリアン派 Unitarianism

宗派名

(一) 主張 此派は三位一體説を否定するより起り、ユニテリアンとは「唯一を唱ふる徒」の義にして、一神論が多神論の正反對なるが如く、ユニテリアン主義は三位一體説の正反對なり。されど之と共に、彼等はアダムを人類の始祖とし、人性の全然墮落説、基

督の代贖説、及び永遠の刑罰説をも否定し、基督の使命は神の愛なること、人の兄弟なること、人性の尊厳なること、其初歩的不完全の状態に在ること、人は自然にして神の子たること、即ち人には自然ならざる不自然なること、神を愛し人を愛するは精神的二大法律なること、凡ての人類は神の恩に由り、聖も來世にもあるべきこと、人間の道徳的訓練は現世にすることを主張す。ユニテリアン主義者は以て、即ち人間を神を被け除くために知字的の意味の代理物として見るべきものに非ず、人を神に引き神と融合するたため、即ち神と一になすために計劃せられたる道徳的動力を見るべき者也、Atonement の字之を表するが如し。耶穌は己が十字架の事を語りて「我れ若し地より擧げられんば、萬民を引きて我に來らせん」と言へり。是或は基督を以て神と人の中間の者、即ち人間以上の力をも與へられ、罪を免すべからず、誤るべからざるものと考ふるものあり、又之を以て單に宗教上の大天才也と考ふるものあり。ユニテリアン派は即ち後説に與みず。又彼等は聖靈は神自身のことにして、人の靈が人を成すが如く神を成すもの、神の心が人の心に働く所の感化を指して言へるものも考へ、未來に就ては、人の靈には先天的不滅性あり、永續的進歩あり、而して人類みな聖と稱せしむるべしと思惟せり。換言すれば、ユニテリアン派の大凡同意すべき要點は(一)無限永遠なる宇宙の源泉、勢力、生命、導師及び其統治者として神を禮拜する事、(二)世界の聖賢師父殊に耶穌基督を尊敬し、之を導師として仰ぐ事、(三)吾人に知得せられたる道徳法に服従する事、(四)完

ユニテリアン派

ユニテリアン派

ユニテリアン派

ユニテリアン派

みたる解釋なりとすのみ。されば此點に於てユニテリアン派は所謂教義なるものに反對する者なり。彼等は教義をば真理進歩の阻害物、心からならぬ承認、若くは偏見の承認に依りて真心を危くするもの、教會に争ひ迫るを嫌すもの、人の心を宗教の根本真理及び平易の義務より引き離して、人類の力の及ばざる事を知力的形而上的に決定したるものに向はしむるものとして、之を心に取るの牢獄なりと認む。故に此派は教會合同の形式として取るものば、教義白りは契約なり。此派には其中心に記されたる信仰の表白物なし。其文學に之を現はせるのみ、教會合同の帯は基督教生活を送り、他人と相違を同し、禮拜、博愛事業、宗教事業の援助、神國の擴張に與に共に勉むるといふ約束のみ。信仰は心の感情なるが故に、一致の帯に外ならず、知力的教義的の言明には非ずとす。彼等は之を以て原初的清教主義なりとし、ユニテリアン派は之を襲ひたるもの也と唱ふ。而して彼等は此立脚地より凡ての宗派及び宗教に對して寛容ならんことを努む。一八九五年米國ユニテリアン國民大會に於て通過したる決議の中に「ユニテリアン教會は耶穌の教訓に従ひ、宗教とは要するに其實際にして神を愛し人を愛するに在り、故に吾人にして此精神を有し實際的に同一の目的を有する者は、其信仰の如何を問はず何人とも雖も吾人の同志協力者として歡迎すべし」と云々と云へる語あり。以てユニテリアン派の態度を知るべき也。

(二) 歴史 ユニテリアン派は、ユニテリアン主義の歴史は基督と使徒の時代に始まりと稱し、基督と使徒は純粋なる一神論者なりと唱ふ。其説に以て爲らく「イスラエルと稱し、主たる我等の神は「一たり」といふは、基督が第一にして且最も大なる誠と

して告げたるものなり。初代の教習師父及び著者等も、言語の形こそ種々異れ、根本には神の一なるを説けり。三位一體と云ふ語は、聖書にはこれなく、紀元二百年頃テラチアアヌスまでは何人も之を用ひし跡なし。されば其名の意味するもの其時までは無かりし也。三位一體説又は正統説と云はるる神學説は、異教が東方思想又は希臘哲學を吹き入れられて基督教會内に入り來りし時より、次第に發達したるものと認めざる可らず。亞歷山派は基督教を希臘化し、プラトニズムと稱せしむるに基督を神とせしめたり。されど之と並びて反對の傾向も併ひ、テオドラス、アルテモン、サモサタのバウロ、アリオス其他は基督教主義を奉じ、神の一なるを唱へたり。基督の性は神と一貫なりや又は同種の質なりやといふ議論に於て、アリオスは基督は神より造られたるものなりと唱へ、此の論は三二五年のニカヤ會議に於て絶頂に達せしが、其時神の一なること、及び基督は神より低き性なることを唱へし説は宣明せられ、父と共に子の神なること定められたり。天主教徒及びプロテスタントの三位一體論者にも、此教義は聖書の中に示されたるものならず、教會の發達する間に起れりといふ者少からず。新舊約聖書の中に三位一體の證明句として引くべき明白の語句なきも事實なり也。

宗教改革前にはユニテリアンと同じき主義は基督教國の所々に存在し、或者は信仰のために殉じたり。アダム、ドック (Adam Dock) は三位一體説を否定して一三二六年愛蘭ダブリン附近にて焚き殺され、ウィリアム、テール (William Tuler) といふ僧は、一四二二年英國にて死に處せられぬ。宗教改革となりて歐洲宗教界の眼を醒ませし時、ユニテリアン主

全なる人類同胞主義を貫徹實現する事、(五)永生の期望を抱有する事に約するを得べし。

以上の結果に到達する方法及び生ける原則として彼等の取る所は(一)宗教に關する凡ての問題の研究に向ては、自由思想を有し、個人の判断の權利を認むる事、(二)宗教的教義が互に争ひ、諸學者の意見異なる場合の終局審判者として、人間理性の無上權を認むる事、(三)道徳上の價值と人格とに依りて人間の價值を判断し、且之を以て宗教的團體の根本義と認むる事是也。而して彼等は聖書をば文字に依りて解釋するよりも、精神に依りて解釋すべきものとなせり。例之「我が父とは一なり」と云ふをば、父と其性と人格とを同するの義に解せず、愛と意志と目的とが父と合ふといふ義に解し、「朽つる糧のため」をば「勞せず」と云ふといふは、生活に於て物質的利益よりも精神的利益を熱心に求めよと勸めたる番伯來風の言なりと解さ、汝等人の子の肉を食ひ、血を飲むに非ざれば、汝等の裏に生命なし」と云ふは、基督が實際に現在すといふに非ず、耶穌の教を以て靈を食ひ之を全く精神の成分に攝收したること、猶食物が消化せられて身體に化せられたるが如くなるべしといふ意なりと解し、ペテロに天國の鍵を授け、繫ぐと解くこの權を與へたりといふをば、聖書の他の所に在る使徒全體に與へたる權と同種のものなりとなし、基督の弟子として受けらるるために父母を憎むべからずといふは、文字通りに父母を憎むに非ず、精神的の事柄と自然的の事柄とを兩立する能はざる場合には、前者を全うせざるべからずといふ意なりと解するが如し。ユニテリアン派は此方法を以て必ずしも聖書の眞義を説明し去らんとするに非ず、唯之を以て其根柢に言はんことを欲する意味を汲

義も亦再び頭を拾ひ、從て主義に殉ずるものを出しぬ。舊教會も新教會も共に之を異端として撲滅せんとして之に闘はれたる者の中に、四四にドクワイ、ヘット (Michael Heiter) エカセル、セルゲエフ (Michael Selvetz) 及びグエンナリ (Guentz) あり、以太利にナライオロネ (Palaeologus) セガ (Sega) キルラン (Kilran) 其他數百人あり。和蘭にファンクワイ (Flekwyk) あり。英國に、ケルン、ジョーン、ボック (George von Parra) のマン、ホッシャー (Joan Bocher) 所謂「セントの處女」バーロネ、バートン (Bartholomew Legate) のマン、ハム (Hammond) のマン (Lewes) とカ (Ke) ライト (Wright) のマン (Wrightman) 其他多數の者あり。蘇格蘭にトマス、エーケンヘッド (Thomas Aikenhead) あり。波蘭に八十歳なりしかタリナ、フォーゲル (Catharine Vogel) あり。佛蘭西にドレー (Dole) あり。ソッチ (Sochin) 其他は以太利を逐はれ、ジョン、ゴット (John Biddis) は英國にて獄死し、フランシス、デビッド (Francis David) もフランスに於て獄死せり。

波蘭にてはユニテリアン主義は迫害の激しき國より來れる過走者に依りて傳へられ、一五五二年には聖書も重にユニテリアン學者に依りて波蘭語に譯せられ、アウスト、ソチナ、スチナ (Ferdinand Schöner) 以太利より通れて同國に行き、波蘭の社會は上下共に此主義に感化せられ、羅馬より激しく嫉視せられぬ。ラカウ市にては「ユニテリアン教會信仰問答」出版頒布せられ、大に世の注意を引き、英國教會は倫敦にて公に之を焚くに至れり。波蘭王シギスムンド二世は自ら同主義に改宗し、斯くて一世紀間繁榮せしり、一六六〇年イニエイト徒「カレディナル」カシ

ユの部

ユニテリアン派

キア王位に登るや、教徒の家を焼き、彼等を追放又は死刑に處しぬ。彼等の神學書は二つ折大の厚き八冊となりて残り、其熱心なりし跡を留む。波瀾より逃れし者は多くトランシルバニアに行きしが、其首領たりしはウィチヌス及びワロルツォ、アラントラマ(Georgio Banfian)等なりき。逃亡先には天主教、改革福音、ルーテル、ユニテリアンの四教會寛容せられたりしが、後迫害ありて監督フランシス、アビッドは一五七九年歿せり。此國にて最も繁榮せし時は四百の會堂あり、高等の諸學院もあり、三の大學もありしが、第十七世紀中皇帝の力ミエヌイト徒の陰謀により、大中小の學校も土地も基本も皆奪はれ、法律上宗教上の權利を失ひたり。されど第十九世紀に至りて幾分反對派、次第に萬事を回復し始め、一八八〇年頃には信徒六萬、教會百二十餘、十二教授を有するコラスツル大學、及び二高等學院あるに至りたり、教會政治は監督制と會衆制とを合はせる體となせり。

英國にてはユニテリアン主義は宗教改革前より存在せしが、改革に激せられて興隆し、一六四〇年には倫敦及びロンドンの兩大會はソチヌス説反對の教會法を定むるに至れり。一六五五年博士オーステンの書きたる所に依れば、此主義は都都府府に浸染し居たりき。メルトンもロックスもニウトンも多少のアイラス主義を其書中に現はし、長老派獨立派浸透派の分離派より成る教會は、早くもユニテリアン主義を根本に識したりき。されど公然其名を以て稱せし最初の教會は、一七七四年牧師セオファラス・ヤンキ(Thophilus Lindsey)の倫敦エケテス街に立てたる教會なり。博士ワグネル、ブリスストル(Joseph Priestley)はサフォルクの一教會の牧師

ユニテリアン派

たり、次にパーキンガムの一教會の牧師たりしが、一七九二年英國に逐はれ、其文書類は暴民のために破毀せられたり。一八一三年ユニテリアンは法律に依て他の分離派と同じ權利を與へられ、一八四四年會堂の所有權をも得たり。一八八〇年頃には英國に三百五十餘、蘇格蘭に十、愛蘭に二十乃至三十、ワエールに三十四、諸植民地にも相應に多くの教會あり、神學校はマンチエスター、カルメルセン、倫敦に立てられたりき。一八二五年五月には「大英及び外國ユニテリアン協會」立てられ、同月同日ボストンにて「米國ユニテリアン協會」創立せられたり、勿論互に獨立なり。一八八二年にはワグナー・ブールにて最初の大英國民ユニテリアン大會催されたりき。雜誌も數種あり地方的新聞も多し。プラティス、サマエル、グラウク、ブリスストル、ベルシヤム、ラドチル、シャープ、パクリンダ、テロル、トム。特にワグネル、マルチノワは、英國ユニテリアン申請者たる人物なりき。現今英國にてユニテリアン派の最も盛なるはランカシャー也。牛津のマンチエスター、カレッジはユニテリアン派に屬し、同校長ウエー、エドウィン、カーンター博士は識見の高邁なる者、徳性の圓滿なるを以て廣く世に知らる。

米國にては清教徒の教會は當初嚴密にカレッジ・イン主義三位一體主義なりし、之と同時にジョン、ロビンソンの「メソヂアリ」號清教徒に對する名高き告別辭の言より射出すべき光は尙其以上存在すといふありて、其より進歩の緒を切れり。一七一七年按手禮を受けしロンガム博士(Gray)はユニテリアン主義の最初の説教者なりしが如し、ボストンの西教會の博士メローウ(Marlow)も自由説

ユニテリアン派

に發し、一七八三年にはボストンのキングスチャペルの博士ウエー、フリーマンは共通新約書より三位一體及び基督の神性及び基督禮拜に關する句を悉く削り、其教會は爾來明にユニテリアンとなれり。一八〇一年米國清教徒の最古の教會プリマス教會も多數決によりてユニテリアンたることを宣言し、信徒に依らず契約に依て新英州教會を組織せり、博士ヘンリー、ウエー(Henry Ware)はユニテリアンにしてケムブリッジの神學教授となり。論争はウグズワエー、チャニンギンクセルセスター諸博士の間に戦はされ、チャニンギンクセルセスターは一八一九年バルチモアに於けるワエド、スパータス任職式の説教にてユニテリアン主義を宣言し、爾來其徒の首領となり全世界の同教徒に仰がれたり。其著書は歐洲諸國語に譯せられ、東西にて讀まる。誕生百年の時には各地にて紀念祭行はれ、文書出版せられ、生地には一教會建てられたり。セオドル、パーカール及びエマソンも亦米國ユニテリアン派の職務として仰がる。一八二五年五月には「米國ユニテリアン協會」組織せられ、其利益を謀るを目的となせり。現今の會長はハーゲアト大學長サマエル、エ、エリオット也。一八六五年「國民ユニテリアン大會」報告に組織せられ、西方大會は一八五二年に遡らる。一八八三年頃には諸種の協會ありて、内外の傳道及び教育傳受事業に活動し、マサチューセツ州ケムブリッジ・ハンシルバニア州ミッドゲイルに神學校を有し、數種の雜誌及び地方新聞を發行せり。教會は當時三百六十箇に過ぎざりしが、ユニテリアン主義は此外ユニヴァルサリス、クリスチアン、ヒクス派友會、進歩的友會等々に浸入し居れば、實力は之より大也

ユの部

ユニテリアン派

とせざるを得ず。一九〇六年の調査に依れば、教會四百六十四箇、教師五百四十四人、會員七萬一千人也。

(三) 日本に於けるユニテリアン主義の發達 ユニテリアン主義の日本に紹介せられたるは、明治十九年(一八八六)にして、矢野文雄が英國より歸朝し、報知新聞紙上に於て、此派は基督教の一形式なれ共、迷信及び超自然説より全く脱却せるものあり、故に、此國を道義の勝地より救済し得べしと云ひ、其教義の大要を紹介したるを以て初めとなす。當時合理的基督教を賛成し、ユニテリアン派の傳道を嚮導する者有名なる教育政治家等の中に在りしが、明治廿年米國ユニテリアンの教師アーサー、メイ、ナッパ(Arthur May Knapp)は米國ユニテリアン協會に派遣せられ、日本に於ける思想界の状況視察のため渡來せしが、諸方面より大なる歡迎を受けたるを以て、明治廿二年一旦歸國し、更にクレイ、マッコリー(Clay McCleary)を伴ひ、同年秋再び渡來し、直ちにユニテリアン、メソヂヤンの運動を開始せり。當時聖職主義教師として新に米國より來りしドロー、バリス、ヨスコム、ウイゲモールの三人も亦ユニテリアン、メソヂヤンの補助として働き、又英國ユニテリアンの教師ハワクスも之と聯合して其傳道を助けたり。且之れより先き米國に留學し、此時ナッパ、マッコリーの一行と共に歸朝したりし神田佐一郎はメソヂヤンの幹事として凡ての劃策に與り、此派傳道事業のために盡力し、加藤覺、佐治實然等又來り加はれり。此派の傳道は他の宗教の如く一定の教義を説き、又は特殊の教會を組織するに非ざるは、ユニテリアン派一般の主義に依りて明也。故に彼等は傳道を開始するに方り日本に於けるユニテリアンの目的を宣言したりしが、ナッパは

ユニテリアン派

「ユニテリアンの日本に於ける使命は、今日一般に認められたる宗教的同情の思想に基きり」と云ひ、マッコリーは「ユニテリアンの日本に來れるは、誠ほすためには非ず成就せんため也、ユニテリアン主義は人を自由ならしむ、吾等も日本の自由人民をして獨に於て自由なる者とならしめ、斯くして爲し得るだけ速に愛と正義の王國を此世に來らしめん」と云ひ、此王國は人類をして吾人の父なる永遠無限の神の下に在りて眞の兄弟ならしむるもの也」と云へり。

ユニテリアン、メソヂヤンは其第二教會擴張、出版及び教育の三部に分ち、明治廿二年春東京第一ユニテリアン教會を設立し、且内地各所に演説講演等を催して其主義の擴張に盡力せり。同年三月又ユニテリアン弘道會なる者を立て、「ゆにてりあん」と題する月刊雜誌を發行せり。其初號には加藤弘之、杉浦重剛、福澤諭吉、中村正直等寄稿せしが、福澤諭吉はユニテリアンの運動に同情を表し、中村正直は當時ユニテリアンの信仰を有したりしが如し。此雜誌は後「宗教」と改題し、明治卅一年三月に至り「六合雜誌」と合併して「六合雜誌」の名を以て發行し以て今日に至れり。「自由神學校」は明治廿四年を以て創立せられ、後「先進學院」と改稱し、大西祝、岸本能武太等之が講師となり、一時盛大に向ひたりしが、後事情ありて閉鎖するに至れり。惟一會館は東京三田に建築せられ、明治廿六年三月獻堂式を行ひたりしが、是れ日本に於けるユニテリアン派の本據にして、毎日曜日此處に説教又は講演あり。機關雜誌は此處に於て發行せられ、先進學院の講堂も亦曾て此處に設けられたり。斯くてナッパは傳道開始後間もなく歸國し、ハワクス及び其他の人々も相續きて歸國し、マッコリー獨り留まりしが、彼も亦明

ユニキイター

治卅二年に至りて歸國し、爾後日本人に依りて凡ての機關運轉せられ、神田佐一郎は傳道幹事とし、佐治實然は講師及び雜誌編輯人として働き、大西祝、岸本能武太、阿部磯雄、村井知至等相續きて此派のために盡力したりしが、又相續きて此派を退き、世人の大なる同情を以て其傳道を開始したりし此派も一進一退に進歩の跡を見ず。明治四十二年夏マッコリー再び來朝し、佐治實然去りて三連良之に代り、且安部磯雄等曾て一たび退會せし者も亦再び入會し、安部は推されて會長となれり。神田佐一郎は四十二年十一月幹事の職を辭して歸郷せり。四十四年春に至り、廣きユニテリアン教會を去りし佐治實然、廣井長太郎等は別に「日本ユニテリアン協會」を組織し、東京神田に於て別に講演を開始せり。(ユニテリアン派の事に就て知らんとせば、チャニンギンクセル、セオドル、パーカール、エマソン等の著書、ゴルドンの「英國ユニテリアン足」ゴット、モリーの「英國ユニテリアン基督教の早き材料」等を見よ)

ユニキイター 基督遍在説 *Univ. Theory*
 學說名 ルーテル、ヘ、ルーテル教會の主張する神學説にして、基督の人性、吾等其肉體の存在を説く。基督に於ける神人兩性の實質的合一より演繹し、之に依りて聖職に於ける基督の内體の現在を説明せんと謀りたり。之を證するためには引く聖書の句は、聖職制定を記する所(弗一の廿一、廿三、四三の十三、彼前三の廿三等)と、基督の教會と共に在るを記する所(太廿八の廿)とあり。

師父の中に、基督の榮光を受けたる肉體の遍在的なるを説きしはオグダクスとニッパのグレゴリウス

ユの部

ユビクイター

ユビクイター

ユフラテ

そのみ。アウグスチヌスは明に之を否定し、神人兩性の實質的合一あれば、其結果として神が何所にも在る如く人性何所にも在りといふことなるならず、神の人は其威嚴と尊等を以て何所にも其教會と共に在れど、「言」が取りたる肉體を以て在るにはあらず、彼は神たるが故に何所にも在り、然れ共彼は其人性の理由に由りて天に在りと言ひ、十字架上の盜賊の語(路廿三の四十三)を説明しては、基督は其日には肉に從へば人として墓に在りたるべし、然れ共神として同じ基督は常に何所にも在るなりと説けり。アウグスチヌスには、神の右といふは一定の場所を意味したり。ダマスコのヨハネスは神の右といふは一定の場所を意味せずと言ひしも、尙基督の榮光化したる肉體は所を限りて存在するを唱へ、此肉體は苦痛と缺乏を受けず、地上の肉體より異れりと言へり。

中世にはアウグスチヌス説行はれ、聖ゲイタルのユーゴーやペテロ、ロムバルドなどアウグスチヌスと同じ様なることを言へり。中世の教義は三條に言ひ別はるべし。(一)基督の神性は遍在的なり。(二)其榮光化する肉體は天の或る部分に限りて存在せり。(三)此肉體が化體の奇蹟に由りて神聖の行はるる所に現在す是也。

ルーターは基督の榮光化する肉體の遍在の説を組織したるものなり。彼は聖晩餐に於ける基督の實際現在の説より之を演繹し、又之を用ひて實際現在を説明せんとしたり。彼は一五二〇年に既に化體説を以て天主教會の人の真心を開き入れし第二の牢獄なりと稱したれ共、然もがヘミヤのピカード徒が聖晩餐に基督の血と血の實際的現在を信ぜざりしとて之を異端と呼べり。其政に曰く、基督の肉と血は離れ難く

葡萄酒の中であり、離れ難く葡萄酒と共に在り、離れ難く葡萄酒の下にありと。又曰く、榮光化する肉體は離れ難く葡萄酒の凡ての部分に在り。宛も離れ難く火と油との異なる實質なれ共、兩者は一片の燒けたる餅に於て合し何れの一部も離れ難く火たるが如し。基督に於て神性人性が一人格に合し、少しの變化なくして互に相透したるが如く、聖晩餐には離れ難く肉體とが禮典の方法に依りて相合し、少しの變化なくして互に透貫せり。此理を説明せんためにルーターは基督の人性と肉體の遍在を確定して、神性のみならず人性も何處にも在り、天と地とは蓋の如く、而して設備が盡きたる如く、基督は天地を充たすなり、我聲は眞に多くの人の耳に達す、況や基督は多くの斷片の中に見えざる間に全然自己を分布せざらんや、神の右は一定の所にあらず、何處にても神の在り所は神の右なり、されば一に神は根本的に一人格に於ける神と人となる故、二に神の右は凡ての所みな其なる故、三に神の言は爲らぬ故、基督の眞實現在に眞ならざるべからずと説けり。

ルーターの聖晩餐説を否定して、基督身體遍在説を排せり。メランクトンは初は此説を教へ、一五三〇年には之に關する師父の證書を編纂し、フワイングリーの基督の身體は一定の場所に存在すとの説を排せり、後之の説を棄て、明に基督は何處にも在り、其は神性を以てなることを唱へたり。一五五二年ヨアキム、ワニストフアルはカルヴィンをツヴァイングリーの説の人なりと攻撃して、聖晩餐論争を再燃せしめ、一五五九年十二月のストックホルム大會はルーター説を再び確定し、其に依りて長き間基督論の凡ての方面の研究全感を見るに至り、アレン

はメランクトンの死後獨逸の最大神學者なりしが「基督に於て二性の合一したる人格(一五六一)」、フワイングリーの書(一六一)、「主耶穌基督の神性(一六二)」を著し、二性の一人格に合一し、神性神格が人性に過じたること、斯くて基督は其性の全體にて天地を充たすことを唱へ、若し基督の神性が其人性なくして何處にても存在し得ば、是れ二人格あるにて一人格には非ずと言へり。

メランクトンに從へるウィットテムベルヒ學派は勿論此ラウレンティウス學派の說を容るる能はざりき。マルチン、ケムニツ二者の中間に立て調和を試み、基督は聖晩餐に於て其全人格(神性人性)を以て現在す、然れ共榮光化する身體は遍在 (omnipresent) に非ず、多數現在 (multipresent) 又は任意現在 (voluntarily) なり。即ち其現在は基督の意志のみにして全然一局部には限られずと説けり。マザ、ダノイス、ウルシヌス其他は之に反對す。フワッテル及びフワニウスはルーター説に歸り此説行はれたる。第十九世紀に入りては此論争は多からざりき、第十九世紀にはフワニウスを再興せんとし、ルーター説を唱へたり。

英米神學者は皆て基督遍在説を大問題とせざりき。第十九世紀の後半教授ロスウェル、デー、ヒッチコックは神の人の「可能的遍在」を唱へ、彼は何處にも何時も在りて、其心ある者に己が神の人の格に於て自らを現はす、此意味に於て彼は遍在的なり、スタバノが説きたる時に見、保羅がダマスコの途上にて見たる如きは、此の遍在説にて最も善く説明せらるる言へり。

ユフラテ *Euphrates* 地名 原語「此河」

ユの部

ユフラテ

ユベールのユリアヌス

ユリアヌス

の義。スミーアノ語にてプラーナン(此大水)或は單にプリー(此水)と云ふ(創十五の十八參照)。是よりセミチクバビロニヤノ語のプラート又はプラーナなる名稱出たり。又プラートは希伯來語のヘラツトにして、彼斯の古語なるユエランより希伯來のユフラテの名出たり。此河は有名の大河なるを以て、舊約聖書中一般に「彼の河」と稱せらる。巴比倫にてはユラツ、又はツマラの河と云ふ。ユフラテに二源あり、其一は上古ユフラテと稱へられ、アルメニア語にてはエフラトと云はる。他は其南東より發するものにして、近世のムラト、スと稱ふものなり。アルメニア語にてアルセニアと云ひ、アッスリヤの辭文にはアラドゼニ又はアルゼニアと云はる。此二流はアルメニアの騎谷海抜六千呎より六千五百呎の處より發す。即ち一はアンチタラスよりし、他はアラフツト山よりす。二川マラチエの近傍に至りて相合し、後流を流れてスリヤに向ふ。之れより巴比倫の沃野に至るまで七百哩の間約一千呎の傾斜あり、舟楫流に洶る能はず。舊約時代に於て東西に通ずる大道はヒルツとカレケシに於て此河を横りたり。又タアサコスの路あり、王上四の廿四のチアザ是れなり。又カレケシの南スリヤ河と合流する地點の南岸にハトルあり。之れより遙かに南下してゴザン地方より來るこのベリタ、カバルの二川と相合する處、カバルの河口にシルセシムあり(方今之をカルキヤと云ひ、アッスリヤ語にてシルキと呼ぶ)。之れより直下してシマラの南に於てチアリス河と接近し、再び離れて此に巴比倫の平原を形成し、終にチアリス河と合して波斯海に入る。昔時は兩河相分れて海に入りしと云ふ。ユフラテの水は水道を以て巴比倫一帶の地の灌溉に供せり。其

河口にカルダ即ちカルテヤ人住みたり。其首府をビトヤンと云ひ、メロダタバダナンと稱ふる王ありしことあり。

ユベールウエーグ フリードリヒ *De Herweg, Friedrich, Ph. D.* 人名 一八二六—一八七二 獨逸の哲學者。ライプツィヒのライプツィヒ附近に生れ、グッテンゲン及び柏林にて學び、一八五二年より六二年迄ガッテンにて私給講師たり、其後は死に至るまでケルニヒスベルヒの哲學教授たりき。重なる著作は『論理大系及び論理學史』(一八五七、テ、エム、リッセルの英譯あり)、『哲學史基礎』(一八六二—一八六六、ワ、エス、モリスの英譯あり)にして、後者は英米にて教科書として廣く用ひられ、又一般の人に讀まれる。其客觀的なる所、文學を多く引ける所を特色となす。

ユリアヌス フラヴィウス クラウディウス *Julian, (Flavius Claudius Julianus)* 人名 羅馬帝(三六一—三六三在位)。コンスタンチウスの子なりしが、三三七年コンスタンチヌス死して其子等帝位を襲ふや、コンスタンチヌスは設され、ユリアヌス及び異母兄コンスタンチヌス(後の帝)は無害として全きを待たり。ユリアヌスはニコメデヤの監督ユウセビウスを師とせしが、三四二年監督死して後コンスタンチノープルより遷されてラオテキヤのマケルムに行き、全く基督教を棄て受く。然れども彼に最も深き感化を與へたるマルドニウスは、表面基督信者なりしも希臘異教主義の思想の人なりしと云ふ。三五〇年コッ府に召還されて、翌年また道はれ、ニコメデヤ、ヘルカモ、エペソを周歴し、リバニウス、マキシムス等に接して異教文明の最高種類たる新プラトニオン教を見、愈基督教を棄

て、異教を取りぬ。然れども彼の勇たる現帝は異教を憎み、神殿を閉鎖し、禮拜を禁じ居りしが、ユリアヌスは心ならずも此處善と見奉るを恐みつつも自己の改宗を隠し居たり。三五五年再び召されて「カイザル」にせられ、帝の姉妹ヘナナと婚し、ガイヤの總督とせらる。軍事と行政の能力は此に發揮す。三六〇年帝はガイヤ軍の精銳を東行せしめんとして、軍隊は之を拒み、ユリアヌスを推して「アラバスト」となせり。ユリアヌスは輕かに事を處し、帝に認定を請ひしも聽かれざるより、即ち全軍を率ひて東向す。然るに帝は途中に死し、ユリアヌスは三六一年十二月コッ府に入て全羅馬帝國の主となりぬ。三六三年軍を東に出して波斯と戦ひ、初め知りありしも六月二十六日の戦に重傷し、敵も味方も知らぬ内に落命す。齡三十三。此短き治世中ユリアヌスは非常の勢を以て異教を回復せり。即位後直ちに假面を脱し、異教の神殿を再開し、基督信徒の文武官を解職し、十字架を軍旗其他より去りて異教の肥體を之に代へ、異教神殿の廢壊せるをば修繕再築せしめ、其没取せられし所得を返し、異教を國教として特權を與へぬ。然れども之を在來の宗教に回復せしむるに止らず、之に新プラトニオン派哲學を注入して神學を造り、其れと神祕主義の上に立たしめ、祭司制度を立て、其首に皇帝を置き、又之を人民一般と區別し、祭司たる者は哲學あり隱者明道徳の嚴なる人ならざるべからずとし、基督教より學びても異教にはなかりし慈善主義を容れず。されば異教徒自身も多くの之を喜ばず、唯だ冷然と之を傍觀せる風なりき。ユリアヌスの基督教に對する感情は如何なりしが一言に盡し難けれ共、確かに之を憎み、蔑めたり。信徒は官職を失ひ、教會は特權を失ひ、蕪

ヨの部 ユリウス。ユリウス二世

列立法土地領有に就ての権利は割られ、僧侶の免租免兵役特権は奪はれ、學校教師任免には政府の認可を要すとして、基督信徒は學校より排斥せられたり。教會の内政には干渉せず、又迫害はなされりしが、信徒の不正の行爲は容赦なく處罰し、暴徒教會を苦むる時も唯消極的に沈黙し居たり。彼類へ對して出軍する時、凱旋の後には帝は積極的に基督敎を攻撃せんとする意向なりといふ風説起り、信徒一般は恐れ居りしが、其實否の現はるに至らずして帝は戰死せり。

ユリウス アフリカヌス **セキストス** **Julius Africanus, Sextus** **人名** 第三世紀初半教會の學者。キリスト教同時代の人にして、ヘリオガバルス及びアレキサンデル、セヴェルスの世に著作し、其一をセヴェルスに献ず。當時の名家なりしが如し。其『テロノグラフイア』は世界歴史にして、天地創造より當時の事まで亘る。ユウセビウスは其記事を自己の年代史に引用せり。今日に殘れる者は其断片に過ぎず。

ユリウス二世 **Julius II.** **人名** 羅馬法王。(一五〇三—一五三三)一四四三年サボナ附近のアレピツラにて誕生す。初め商業教育を受けしも、叔父フランセスコ、ロヴェールが「カル・アイナル」となりし時教會の職に入り、一四七一年叔父が法王となりし時「カル・アイナル」となる。セキストス四世及びインノーセント八世の世には事なかりしが、アレキサンデル六世に至りて互に敵視し、佛蘭西に脱れ、終生相反目し、同法王の晩年には別殺毒殺を恐れて身を隠したりき。ヒクス三世の後選ばれて法王となり、教會領國の擴張を謀り、中央意大利にて法王の下に軍事政治の獨立國を造るこ

ヨウグイアヌス

きに熱中す。然れども其手段として拙劣なる外交、酷なる戦争等を用ひしため、民心離反して意を果さざりき。ローマニヤをグエチネより奪はんとして目耳曼、佛蘭西、西班牙をカムブレイ盟約を結ぶかと思へば、其いよくいふ際に忽ち禍へり、フェラ、を得んため、佛蘭西に對する神聖盟約をグエチネ、西班牙と結び、之がため狀勢危急となる。佛王ルイ十二世は意大利に留り、皇帝マキシミリアンは自ら法王とならんと欲し「カル・アイナル」等も法王を去れり。されど英國を此盟約に加へ、後には目耳曼をも加へしに由り、佛軍は意大利を去り、フェラ、ラ、パルマ、ヒアケンデは法王領となれり。ユリウスは又聖彼得會堂の大部分を建造し、ウァチカン博物館を創設し、羅馬古跡類出をなすこと甚だ多く、プラマント、ミケランジェロ、ラファエル等を能く用ひて其伎倆を揮はしめたり。

ヨの部

ヨウグイアヌス **フラグイウス** **クラウ** **ディオウス** **Jovianus, Flavius Claudius** **人名** 羅馬帝(三六三—三六四在位)。ユリアヌスの親衛なりしが、ユリアヌス死せし時翌日軍隊より帝とせらる。性親切細心なりしも、大人物にも高深の人にも非ず。基督敎者なりしが、ユリアヌスの基督敎反對法を除き、基督の文字を帝旗の中に記し、基督敎僧侶の特權收入を再興せり。然れども又異敎をも寛容し、新プラトーン哲學を保護したり。

ヨウグイアヌス。約耳書

又白らはアマナツワスの説に従ひしも、アウリウス派に對しても公平を持しぬ。在位八ヶ月にして死す。四世紀後半の羅馬の帝。三八八年頃羅馬に在り、弊衣を着、跣足にて歩み、パンと水とのみを飲食し、霜身にて終る。聖書に精通し、多くの小冊子を書き、處女生活、寡居、斷食等凡て外形的の事情は、之を守りも守らざるも道徳的に何等の差なく、神恩を蒙る上に何等の影響なし。パブテスマを受けて基督に入られ、新に生れたる者は、何れも同等に視られ同等に慈よると説きて、當時流行せし隱遁生活に反對したるが、人民はいたく之に動かしされしを見え、三九〇年法王シリキウスは羅馬に大會を召集して之を異端と宣言し、ヨウグイアヌスはミラノの教領に脱れしを、法王は監督アマプロツワスに移讓して決議を通告し、此所にて同じ宣言を受け、アラグヌス、テオドシウス及びイェロニムスは激しく彼を攻撃せる書を書はしたり。

約耳書 **The Book of Joel.** **經名** 舊約小預言書中の一書。其第二位に在り。預言者ヨエルはヘトエルの子とされ共(一の二)父子の事に關しては何事も傳はらず。又ヨエルは何時何處にて預言したりしやに關しても、此書何事も言はず。時に就ては議論尙一定せざれ共、ユダ王國、恐らくはエルサレムが其活動の地なりしならんとは、學者の今日一般に一致する所也。

【預言の爲されたる場合】 此書の預言は蝗蟲の害に由り非常の飢饉起りし場合に爲されたるもの也。蝗害はバレスチナにては珍らざること非ず。故に通常の場合なれば預言の題目となるべきに非ざれ共、此場合に在りては其害非常に甚しく、蝗群全國

ヨの部 約耳書

に及び(一の四)且數年に亘りて(二の廿五)田野、葡萄園、果樹園を蝕ひ荒らし(一の十一—十二)人畜の食ふものなきに至らしめしのみならず(一の十一—十二、十六、十七、十八—廿)エホバに獻ぐるものさへなきに至らしめたりき(一の九、十三、二十の四)是れエホバと其民との間になされたる契約の破れたるものにして、其民の上になされたるエホバの刑罰也となさる可からず。ヨエルは此の如き見地より此書に記されたるが如き、最も興味多き教訓的預言を爲せり。

【内容及び解説】 此書の預言は二部に分る。一、二一—二七及び二八より終り迄是也。初めの部分には先づ預言のなされたる場合、即ち蝗害全國に及び蝗群之に伴ひて來りし事を述べ、而して此は「エホバの日」の近づけることを表する者にして、尙他の恐るべき災害續て到るべきことの徴象なれば、哀み愴き斷食をなしてエホバに請ひ求めざる可らず、時に及びて悔改めなば或はエホバの怒を和らぐことを得べければ也と勧めたり。民等はヨエルの此勸に耳を傾けエホバに祈りたりしこと疑なし。故に二の十八より終りに至る迄には、エホバが其目的を變へ、民等の祈りに答へ給へることを物語體に記せり。即ちエホバは蝗群より其民を救ひ、再び雨降りて地を潤すべく、五風十雨時に過ひて、地は果樹園を豐饒に出し、以て蝗害を償ふべく、之に依りて人々はエホバの以色列の神なるを知るに至るべしと云ひ、而して「エホバの日」は遂に來るべし、然れ共此日の恐ろしきは猶大人のために非ずして其敵のため也。エホバを信する者は此日の禍を免るべしと雖も、以色列を諸國民の中に散し、其土地を分割せる異邦人、及び凡て神の民を處遇せる者は、此日に報

ひられて刑罰其上に及びべしと云ひ、去れば此等の諸國民は戦争の準備をなし、勇士を勵まし、軍人を率ゐてヨシヤバの谷に來れ、エホバは此處にて彼等を審判せしむるにすべしと説けり。諸國民の滅び猶太人の滅まるゝ有様は此處に最も能く描かれたり。即ち曰く「エホバはヨシヤバの谷に轟かし、エホバはヨシヤバの谷に轟かし、天地を震動せし給ふ、去れどエホバは其民の放し、以色列の子孫の城となり給はん……其目山に新しき酒造り、間に乳流れ、ユダの諸の河に水流れ、エホバの家より泉水流れ出で、シヤタムの谷に湧かん、埃及は荒れしされ、エドムは荒野とならん、此は彼等ユダの子孫を虐げ華なき者の血を其國に流したれば也、去れどユダは水道に住ひ、エルサレムは世々に保たん」と。

此書の「蝗蟲」なる文字は如字的に解すべきや、又は譬喩的に解すべきやに關して學者の間に説の一致を缺けり。然れ共第一章の蝗蟲が如字的に解すべきは殆ど疑なし。實際蝗群田野を蝕ひ荒らし、全國大なる災害を蒙りたる也。此實際の蝗害よりヨエルは第二章に於て「エホバの日」の近づけるを想像し來れる也。故に此處に所謂蝗蟲は理想化せられたるものにて、驚くべき大まこと力を備へたる想像的の物也。新約黙示録(九の三—十)の蝗蟲は更に理想化せられたるものなれ共、思ふに其型を此處に取りしものなるべし。二の廿の「北より來る軍」の意義に就ては諸説ありて確定し難し。二の十九、廿五の聯絡より見れば蝗群の義也と解すること自然なるが如くなれ共、蝗群は曾て北方よりバレスチナに入りたることなれば、斯く解し難し。故に或る人々は人間の敵也と解せり。

約耳書

【預言の時代】 書中時代に關しては何事も言はざるを以て、之を定むるには全く内部の證明に依らざるべからざれ共、批評家の異なるに従ひ解説を異にするを以て諸説一定せず。之を定むべき重なる標準は左の如し。(イ) 書中アロ、シドン、ヘリシヤ人、希羅人、サビアン人、埃及、及びエドムの名を記せる事。(ロ) スイヤ人、アッスリヤ人及びカルデア人に關しては全く(含蓄的に)何事も記さざる事。(ハ) 全く十支派の事を言はず、單に「ユダ及びエルサレム」の名を記せるのみにて「イスラエル」と言へる時は猶太の一般名稱を云へるが如き事。(ニ) エホバの民は「異邦人の中の散居したる者」(二の十九)異邦人は以色列人を「國々に散して其地を分ち取りたり」(三の二、三)と記され、且ユダとエルサレムの俘囚人の歸還預想せられたる事(三の一)(ハ) アロ、シドン、ヘリシヤはエホバに關する金銀財寶を取り、ユダの人とエルサレムの人とを希羅人に賣りたりとある事(三の四—六)(ヘ) 埃及、シドン、ユダの子孫を虐げたりしが故に、其報を受けて荒地となるべしとある事(三の十九)(ヘ) 偶像禮拜の行はれたる形迹なく、神殿の奉仕は規則正しく行はれ、祭司は一般に尊敬せられたる如く見ゆる事(一の九、十三、二の十七)及び蝗害のため素祭灌祭を獻ぐることを能はざりしことを大災禍の如く考へたりし事。(チ) 王侯の事を記さず、長老を以て公の集會に重要な地位を占めたりし者の如く記せる事。(リ) ヨシヤバの谷(三の二、十二)と云へるは此名の王より呼ばれたる如く思はるゝ事。(ス) ヨエルとアモスの間に類似點あり、何れも他より借りたりと思惟すべき事(其三の十六)歴一(二、三)の十八と歴九(十三)是也。クレチヤ(Cretia、一八三—)は上記標準の中に含

約耳書

ヨの部

約耳書

預言 預言者

預言 預言者

されたる事件は、ヨアシ王の治世の初めの時代（前八七八―八三九、王下十二）をなすことに依りて満足に解説せらるるを得べしとせり。而して彼は之を以て埃及王シシャタがエドムを攻めたりし後（王上十四の廿五、廿六）スリヤ王ハザエルがエルサレムに攻め上り、ヨアシが神殿の金を取れて之に贈り以て其難を免れたりし前（王下十二の十七）從てエドムがアッシリヤ人又はカルデア人の手に備えされざりし以前の事也とせり。此説に依れば三の二一三、六はエドム普及の時ユダが其所領を失ひし事、及び俘囚人を他國に賣りしことを云へる也。而して彼はヨアシ即位の時七歳なりしと云へば（王下十一の廿一）此預言を以て王幼冲の時代に成りたる者也とせば、一言も王の事に言及せざるは當然の事にて、祭司が一般に尊敬せられ、神殿の奉仕が規則正しく行はれたるは、祭司エホヤダ感化の致す所也と論ぜり。

タレドチルの説は頗る巧妙にして近年迄多數の學者は一般に之を採用したりき。然れ共三の二の「彼等之を國々に散して其地を分ち取りたり」と云へるは、語句頗る強くして、巴比倫俘囚より輕き災禍に適用し難し。此に於てカイルは之を以て「ヨエルが將來起るべき災禍を預言せる也」と言ひたれ共、前後の關係より見れば、此語は猶太人が既に受けたる災禍を云へるものなること明也。且前記標準を仔細に考究すれば、其多くは又均しく俘囚以後の時代にも適用するを得べく、加之書中に示されたる他の事柄も、俘囚以後の事實に一層よく適合せるを見る。即ちエドムの敵を集合的に諸國民と云ひ、或る一定の敵例之アッシリヤ人といふが如き名を指さざりしは、戦後の預言者の特色なりし事（結廿八、廿九、亞十四參照）。

此書中の猶太人が宗教的に一致したる國民として記され、俘囚前の預言者が斷へず遺棄したりしが如き異教的傾向を認めざる事。書中王の事を記さず、祭司的貴族政治を有したる國民として記されたるは、俘囚以後の猶太人の状態に符合せる事。エドムがユダに對して敵意を有したるはヨアシの治世のみに非ず、猶太人のエドムに對する劇しき反情は前五六六年の出來事以後にも尙言ひ顯はされたる事。埃及は單にユダの敵の代表者として記されたる者に於て、三の十七の語はシシャタ王の侵入後より、カルデア人が神殿を潰せし後の事に一層よく適合せる事。ユダ及びエホバの民と云へるは異語同義の語にして、北方イスラエルなる語の見えざるは、初代預言者の特色に非ざる事。書中終末的描寫は多く古き預言の未だ應驗せざる者を結合したるものなる事。以上の理由に依り近代の學者は多く此預言を以て俘囚以後のものとなせり。

【參考書】 ドライゲルの『舊約聖書總論』 叙論 聖書中の『約耳及び亞摩士』 ゲスタフ、プロイスの『ヨエル』 カークトトリックの『預言の教義』 フインレーの『預言書』 ウェルハラツの『小預言書』 フーラーの『小預言書』 ノットンの『小預言書』 エワールの『預言書』 ヴォルツ、アダム、スミスの『十二預言書』等。

預言 預言者

【術語】 預言は以色列人民特有のものに非ず。何れの國民の中にも神と特殊の關係を有し、不思議なる知識と力とを興へられ、神の暗示を受けて事を未だ若くは未見に告ぐるを以て其職業となす一種の人あり。されば舊約はヘブライ人のトラス師のこゝを記し（母前六の一）パアルの祭司は又其預言者なり。

りしと言ひ（王上十八の十九、王下十の十九）又埃及人の中にも預言者ありしこの事を記せり（出七の十一、廿二、八の七、十八、九の十二）希臘、羅馬の諸國にも亦之に類するものありしことは昔く人の知る所也。然れ共以色列の預言者は之に異り、彼等はトラスの事には一切關係なく、單に宗教上の職務のみを行へり。彼等はエホバの宗教を知れる人民の靈的指導者として召されたりしを以て、熱心エホバに仕へ、地上に道徳的靈的王國を建設するを以て其目的となし、人類を救済に導く靈的活動をなせり。今左に以色列預言者の起源、歴史、特質等の概要を叙す。

(一) 名稱及び召命 太古には「先見者」と呼ばれたることありしが如し（母前九の九）然れ共通常用ゐらるる預言者の原語は「ナビー」（נבי）にして、此名はモーセ及びアブラハムにさへ用ゐられたり。「ナビー」の語源は明らかならざれ共、多くの學者の推定する所に依れば、「湧き上る」の義を有する動詞より來り、天來のインスピレーションに充たされ、默せんとして默する能はず、制せんとして制する能はず、遂に叫び出すの義に取れる也といふ。而して此「ナビー」なる語は、神の機關となりて語るの意を有し、神に代りて其神意を傳ふることを以て其本分となすに至れり。後此語は希臘語に翻譯せられ「propheta」となりたり。此希臘語の原意は遊し人々の前に語るの義にして、未だ前に語るの謂には非ざりしなるべしと雖も、後には未だ前に語るの義となり、原語に有せざる意義を附せるに至れり。預言者は又「豫の人」（何九の七）「神の人」（書十四の六、士十三の六、母前二の廿七、九の六、七、十二）「エホバの僕」（書十五の七、十八の七）等とも稱せられ

ヨの部

預言 預言者

預言 預言者

預言 預言者

たり。預言者が神の召命を受くるは、身分若くは階級に依るに非ず、直接に神の召を受けたるものは即ち預言者にして、年齢、職業、男女の差別さへなかりき。即ち彼等の中にはエレミヤ、エゼキヤル、ヘナカリキ、アモスは田舎傳道者なりき。而してホルダ（王下廿二の十四）「ムアヤ」（尼六の十四）は女預言者なりき。神の召命一旦彼等に在りて、彼等は全く自己を忘れ、權勢を畏れず利害を顧みず、起りて神の召に應じ、神の言はしめ給はんとする所を言ひたりき。アモスが「獅子吼ゆ、誰か懼れざらんや、主エホバの云ひ給ふ、誰か預言せざらんや」（摩三の八）と言へるは即ち之を言へる也。而して彼等の神の使命を宣ぶるや至誠の進る處よりし、婉曲の言を用ひず、直言して憚る所なかりき。故に彼等は自ら強なる者狂へる者に比して「預言者は愚なるもの、靈に感じたるものは狂へる者也、是れ汝等の惡多く怨恨大なるに由る」と言へり（何九の七）。預言者のインスピレーションは實に舊約宗教の中心にして、其倫理的・神教的に彼等に依りて明にせられ、彼等に依りて維持し發達せられたりし也。

(二) 預言者の起源及び歴史 預言の歴史の起源は、神政治の創設と關係せり（耶七の廿五）。モーセは預言者と稱せられ（民廿四の十）其姉妹ミリアムも女預言者なりしが如し。ヨシュアは何所に預言者とは稱せられず。士師時代にはアホラ預言者と稱せらる（士四の四、六、十四）又士師記六の八には或る預言者の事記さる。母前二の廿七の「神の人」といふも預言者の事なるは前項言へるが如し。サムエル時代には預言は一層組織ある者となり、彼は舊

約預言者職の開始者と認めらる（徒三の廿四）。當時以色列人は契約の體を失ひしが、之がため却て熱心に求めさへすれば神は何所にも在りしこと、及び神と人の仲介はインスピレーションを受けたる預言者の人格に存することを經驗したり。サムエルは當時生存せし多くの預言者を集め、所謂「預言者學校」となる者を創立したりしが、レビ人も亦此學校に屬したりしは、サムエル自身のレビ人なりしこと、當時マに在りし此學校にて宗教音樂の教へられたりしこと依りて推知せらる。聖文學も亦此處にて教へられたりしなるべし。代上廿九の廿九には聖史學其他に記されある史書の起源も亦思ふに此時代のことなりしなるべし。王國の建設後サムエルは其執政實行の働を辭したりしが、預言者は之れより神政治の監督者となり「守望者」又は「觀望人」と稱せられたりき（米七の四、耶六の十七、結三の十七、廿三の七）。

預言者王政との關係はサムエルのサウルに對する態度に於て現はる（母前十五の十一、十六の一）。ダビヤ、サウルに代りて王となりし後、サムエルはマに退きて餘生を送れり。預言者等はサウルとは何等交通なかりしが如くなるも（母前廿八の六）ダビヤとは親しかりしが如く、母前廿二の五にはナタンと共に預言者ガアの事を記し、又ダビヤが樂師長を任命したりとの事、代上廿五の一、五、代下廿九の三十、卅五の十五等に記さる。此等の人も亦預言者又は先見者と稱せられたれ共、ガアやナタンと同格なりしこと思惟すべからず。然れ共神の靈に依り動かされて心より發する聖歌は、預言と稱せらるることを得たりしなり。ソロモンの世には、預言は重き地位

を占めずなりしが、彼が晩年に至りて其心神に背き初めし時、之を戒むる預言者の聲きこえぬ（王上十一の十一―十三）預言者シメヤヤの事（王上十二の廿一以下、代下十一の二）を見れば、當時預言者の勢力は尙人民の間に感ぜられしを見る。其後數百年間預言者は重に北王國にて現はれ、イスラエル王國の歴史は預言者と言ひて現はる。其の記録なりといふも可也。此宗教政治の争は既にエホアラムの世に起り、其後短くエホシヤ、エホヤキヤ、エホシヤ、ヨナ、アモス、ホセア、イザヤ、オデド、ナナムは何れも神に味方せる「神の人」として記されたり。エホヤキヤ王國に在りては、預言者王との關係大に之に異り、彼等の間には密接の關係あり、且互に相助けたりき。南方には預言者學校なかりしが、感化強き預言者等は其周圍に人を引き（賽八の十六參照）人民が神に背ける中に在りて、彼等は神の言を研究し之を後世に傳へたりしが如し。南方の預言者はレホバアムの世にシメヤヤあり（代下十二の五以下）アサの世にオデドの子アザリアあり（代下十五の一）「ハナニあり（十六の七）エホシヤの世にハナニの子エヒワとエリセルとあり（十九の二、廿の廿七）エホシヤの世には祭司の勢力遂に預言者を凌ぎしが如く、代下十八の七以下に依れば、民を教ふるために遣はされし者の中には預言者あるを見す。ヨアシの世の終にはエホヤダの子ガリアあり（代下廿四の十九以下）ヨアシの相續者アマツアの世には二預言者ありき（代下廿五）大體より論ずるに、南王國に於ける預言者の勢力は、北王國の其より弱かりき。

元來預言者は聖の人にして、口を以て直接に神の使

三の部

預言 預言者

命を宣べ傳ふることに力を盡したりしが、彼等は後文筆に重を置くに至り、預言文書の著作は前第九世紀の初めにすでに始まりぬ。彼等は此文書を記述すべき事を神の命令なりと言ひ(賽八の一、哈二の二以下、耶卅六の二)之を記述するの目的を以て後世に其真理を示さんとするに在りたりしなり(賽卅の八、耶卅の二、三等)時としては口にて語りし事を尙確かにせんため、之を記述せしこともなきに非ざれ共(賽八の一以下、卅の八)大抵文書は口述と關係なくして書かれたるものなり。且アモス、ホセア、ミカ等の預言者は晩年に至りて始めて自己の預言を記述し、斯くて其全體を後世に傳へたり。預言者の断片に失はれたるものあるは、賽二の二、四、米四の一、四、賽十五以下などの如き、古き材料に言及せる者あるに依りて推測せらる。

アモスの預言者が最古の預言文書なることは衆説一致せるが如し。アモスはベツレヘムの南テアアの牧者なりしが、神の召命を受け牧者の杖を携へたる處、北王國の聖所ベテルに赴き、イスラエル王國を初め四隣諸國民の罪惡に對する神罰の免るべからざるを宣言し、言を極めて上等社會の腐敗を戒めたりしが、遂に王ヤラハムと祭司アマツヤとの忌憚に關れ、追放の命を蒙りたりしが、足の塵を拂ふてテアアに歸り、舌に代ふるに筆を以てし、此處に其所信を書き記したりし。諸學者は一般に彼の預言を以て前七六〇―七四六年に其れりとなせり。彼に亞て出で北王國に神の使命を傳へたりしはホセアにして、彼は不貞の妻に對する心情を推して、エホバが其選民に對して有し給ふ愛心を述べ、以てイスラエルの民の悔改を勧めたり。彼の預言はエホアム二世及び彼に繼ぎて王となれる人々の治世になされたるも

預言 預言者

のにして、即ち前七四六年頃に起り、七三五―四四年頃に至りたり。

イザヤは舊約預言者中の最大なる者の一人にして、以賽亞書に思想の偉大なる點よりいふも、高潔なる點よりいふも、舊約文學中の巨擘と稱すべきもの也。彼は南王國ユダの王なるワシヤの朝に預言者たる召を蒙り、ヨハム、アハズ、ヘセキヤの朝に預言せり。彼の時代には東にアッシリヤあり、西に埃及ありて各々諸國を地中海の地に争ひ、又アッシリヤ、アラム等々猶太國の隙を窺ひ居りしに拘はらず、國內更に國事を憂ふるものなく、南北兩王國は其唇齒の關係を忘れて相闘きたる結果、イスラエルは前七二二年にアッシリヤ軍のために滅ばされたり。イザヤは南方ユダ王國の人士が眼前に此悲劇を目撃し乍ら自ら顧みることもなく、或は欺をアッシリヤに通じ、或は好を埃及に求め、一時の苟安を食ふる有様を見、悲憤慷慨に堪えず、起て侃々諤々の論を唱へ、迷へる當代の人心を指導せり。彼の預言したるは前七四〇年頃より七〇一年頃迄の間と推定せらる。

イザヤは大抵同時代に同一の精神を以て著せたりしは、ミカにして、彼はユダの低地ガザに近き一僻邑より出で、事々田舎傳道者たる氣概を吐き、當時國民の腐敗を以て社會の先覺者たる上等社會の墮落に歸し、誇りの聲を以て其罪惡を喝せり。而して彼はイザヤが主として政治上の見地に立ちて國民の迷途を醒さんとしたりしに對し、宗教上の見地より同一使命を傳へんとしたりし。ナホムはアッシリヤ人が遠からず神罰を受けて滅亡に至るべきことを述べ、ユダ王國のために氣概萬丈の敵愾心を發揮したりしが、彼の預言はアッシリヤが敵軍のために襲はれし時、ニニベの攻撃の初まりの間、即ち前六六四年

預言 預言者

乃至六〇六年になされたるもの也と信ぜらる。セパニヤは言を極めてユダ國內の偶像禮拜之に伴ふ不道徳を攻撃したりしが、彼の預言はヨシヤ王治世の第十八年に行はれたりし宗教改革(前六二二)以前になされたるもの也と思惟せらる。以上アモスヨリセパニヤに至る預言者は所謂アッシリヤ時代に屬するもの也。

アッシリヤ時代に次ぎて來れるはカルデア時代也。エレミヤは其書のいふ所に依れば、ヨシヤ王治世の十三年に神に召されしとあれば、其預言はセパニヤと同じくヨシヤの宗教改革以前に始まりしものと見ゆ。ヨシヤを刺殺して改革を始めしめたるは、女預言者フルダの力に由ることも多かりしも、愈々契約を新にしたるは預言者等の助に依りて起りし也(王下廿三の二)。耶十一の一八に依れば、預言者等は特にエルサレム及びユダの市邑にて、人民に此嚴重なる義務を取るべきを熱心説教したり。されど究極の改革は功少かりし。悔改は淺薄なりき(三の十)。眞宗教は起らずして儀式は禮拜と思はるるに至りたり。此を以て預言の矛は此方に向ひぬ。アキム及び其後の王等の世にはエレミヤは太く苦められたり。預言者ワリアも埃及に連れんとして能はず引き返されて殺されぬ。ユダ王國の末路は眞預言者等爲預言者の争にて充たされたりしが、其争は悉く政治問題なりき。エレミヤはカルデアの權力を神意と認めて此異教國に立てたる誓に忠なまべきを勧めれば、爲預言者ハニヤ等は之に反對して、カルデアの軛を破りてネブカドネザルに同置すべきことを説けり。斯くてユダ王國は滅び、其人等は俘囚となりしが、此後モアバブ、セテキヤ、シエマヤ等は民心を乖離せしめ、エレミヤは之を攻撃せり(廿九

三の部

預言 預言者

章及び卅三の九。初めエレミヤは孤立奮闘し、唯ハルタのみ助の中に其預言を記述せしが、俘囚となりて後はエゼキヤ其第五年より預言し始めたり。エゼキヤは神殿もなく犠牲もなき所に、民に神の言を説き聞かせて彼等を教へたり。預言と共に安息日を守るべき法律も此にて嚴守せられぬ。是れ異邦に散れる民を異教に陥らざらしむる爲なりしなり。エゼキヤは民の渾みに關して習慣制度を説き、預言の實行をも外形に現はすべきことを説きたりしが、其結果俘囚の猶太人間にレビ的形式主義を關致するに至りたりき。ハルタの預言したりしは此時代にして、其精確なる時代は定かぎられ共エホヤキムの治世(前六〇八―五九八)カルデア人の運動が尙未だユダ人民の驚慌を來すに至らざりし以前のことなるべしといふ。

一時盛大を極めたりし巴比倫帝國も、富の増加と共に奢侈に耽り、一國を擧げて淫亂遊惰の民となりしが、前五四六年の頃波斯のクロス大王はメデア及びバビヤの王國を覆し、破竹の勢を以て巴比倫に攻め寄せ來りしが、以色列民族は從來一日千秋の思を以て待ち望みつゝありし怨敵巴比倫の屈辱に對するに非ずして、飛立つばかりに喜びたりき。且エゼキヤ以來宗教的方面に於て發達し來れる以色列人は、政治的の救済より自國の運命を宗教的に觀するに至り、間もなく新天地をエルサレムに現じ、神の王國地上に顯はれ、靈と眞を以て天の神を拜するの時刻るべしと信するに至りたりき。故に彼等は異邦の王クロスを以て宛もエホバの特命を帯びたる宗教的人物なるかの如く思惟したりき。第二以賽亞書(賽四十一―六十六章)は即ち此の如き見地に立ちて書か

預言 預言者

れたるものにして、此書の著者の何人なりやば明ならざれ共、此預言はクロス王が尙東、西及び中央亞細亞を征服しつゝありし時、即ち前五四九―五三八年になされたるものなりと推定せらる。

斯くて巴比倫帝國は終にクロス王のために滅ばされ、俘囚の猶太人等は五三八年クロス王の解放令に接したりしが、彼等は多年の宿志此時に成れりて驚喜して勿ヤレスタナの地に歸り、祖國再興の業に従ひしが、一旦顛覆したりし邦家を興すは容易の業に非ざりき。於是彼等は絶望し果て、神の約束にして遂げ得らるべきやと疑ひし時、ハガイとゼカリヤとはダリヨス、フスマスハスの二年に神に召され(爾五の一、六の十四)舊預言者の精神を繼ぎて民を勵まし、凡ては人の力に依らず、神の靈に依る、困難はあらんも神の建築は成し遂げらるべし、異邦人は榮えユダは屈せんも、直ちに世界の權力は互に受け容れらるべしと説けり。其後預言の事は暫く記されず。ネヘミヤに至りて又始めて之あり。されど此時は預言の性質既に著しく墮落し、預言は政治的陰謀の具となりたりき。斯くてネヘミヤはサンパットより訴へられて、彼は預言者等を逐ひて自ら王とせられんとすと言はれ、ネヘミヤは又サンパットを訴へ、彼はシエマヤに附して彼を脅かしたりと言へり。女預言者アブアアもネヘミヤの敵也として記さる。預言者マツキもネヘミヤと同時代の人なりしが如く而して後世ババライ主義に於て結晶せし傾向は此時既に深く民心に入りたりしかば、マツキは死せる行の宗教に反對し(一の六、二の九、三の七十二)の使者現はるべしとの宣言を以て預言を終れり。此より後凡そ四百年、實際に神の使者が現はれて天

預言 預言者

國近しと叫ぶに至るまでは、預言は全く聞えずりき、而して神の靈を受けたる預言者の代りに、記書の學者等は神の言の保存を謀りて速りに記録を作たりたりき。されど眞のメッサヤの時代は間もなく現はれ、預言の眞精神は復活せり。而してエルサレムが最後には羅馬人に依りて破壊せられし時は、爲の預言者等所々に現はれ、昔同市がカルデア人に依りて亡はれし時と同じ状態を呈したりしことヨセフアスの歴史に記さる。以上預言書の事に就ては、各預言書の條を見よ。

(三) 預言の題目及び教訓。預言者は常に其時代の人にして、其相手とする所のものは後世の人には非ず、其時代の自國民也。其語る所の事柄は、其時代の人民に取てて大切な事にして、或は其内の生活及び行爲に關することもあるべく、或は又其外部の關係に關することもあるべしと雖も、兎に角其時代の人民を感化せんとの目的を以て彼等の意識に語る也。或は將來起るべき運命に就て語ることもあるべしと雖も、預言者の直接の目的は、其時代の人民を教化せんとするに在り。而して此目的を達せんため、自國民以外の諸國民の間に行はるる道徳的、國民的勢力をも實際に批評する也(耶一の十)。新約聖書記者が舊約の預言を以て悉く耶穌の一身に就て前言したるが如く使用したりしより、從來の註釋學者は一般に預言と前言とを同一視し、預言の前言的要素に主たる重を置き、預言者の職業はメッサヤと其王國に關する事柄を前言するに在り、預言の用は耶穌のメッサヤなることを證し、天啓の超自然なることを顯はすに在りと思惟したりしが、近代の註釋學者は此の如き解釋を以て預言の内容の大部分を説

三の部

預言 預言者

明すること能はざる者、預言の宗教的・道徳的教訓を看過する者也。預言者の職掌は道徳及び宗教上の真理を教ふるに在り、その見地を取らざるは預言を以て單にメッサヤ其王國に關する事柄を前言するに在り、一方に偏したる見地なること言ふ迄もなきことなれば、一方を以て單に道徳及び宗教上の真理を教ふるに在り、又之を以て何れも偏したる見地を取らざるは、預言の真意を以て、道徳及び宗教上の教訓は寧ろ第二のことに於て、其最も重要なことは其眼界に映じたる將來の出来事なることを發見すべし。大預言者等の教訓の重寶は(イ)國家の滅亡目前に迫れる事(ロ)之を滅ぼすものはエホバなる事(ハ)之を滅ぼす國民は其アサスリヤたり、巴比倫たるを謂はず、エホバが其目的を達せんため使用し給ふの也との事にして、エホバの性質及び國民の義務、罪過に關する宗教的教訓は、未來の光景を眼前に示し、人々をして其真理を悟らしめんがためなるに外ならず。新約の預言者も此點に於ては同様にして、バプテスマのヨハネは『天國は近づけり悔改めよ』と説きて、人々をして天國に入るの準備をなせしめたり。耶穌の説きたりし處も亦同じく神の國にして、山上の説教及び其他の道徳上の教訓は畢竟天國の性質及び之に入るの要件を示したるに外ならず。而して預言者等が見たりし將來は單にエホバの滅亡のみに非ずして、彼等は更に之に對するエホバの救済を見、其結果完全なる神の國の來るべきことを見たり。而して此最後の狀態こそ預言の最大題目たりし也。

(イ) 普通の教訓 概して論ずれば、預言者は直接に人の心に訴へ、人の前に真理を置き、餘儀なき心より非ず、自由の心より之に従ふべしとのことを勧めたる宗教的理想なり。律法に依りて人を強制せんとするが如きは、彼等の曾て夢想せざりし所也。アモスの承認したりし律法は凡ての人の心に書かれたる正義人情の律法にして、ホセアの律法は人を愛する神に對する愛の律法なり。彼等の取りし地位は基督教徒の地位にして、彼等は保護と共に人の行為と生活とは、其裏に在る心の自由の表現ならざるべからず、人の心は神と交り、神の恩恵を感謝することに依りて形造られ指導せられざるべからずとのことを言へり。預言者の最も重なりしものは道徳にして、外形的儀式は道徳を離れて何等の意義なしとせられたり。彼等は又一般にエホバのみ以色列の神なる事、エホバは道徳的存在者にして、宗教的・道徳的生活のみエホバに喜ばるべき事、以色列は神の選民なる事、エホバは唯以色列國民の神のみならず、又各個人の神なる事等に就て教へたり。各預言者の特殊の教訓に就ては各預言者の條を見よ。

(ロ) 前言的預言 預言者は神の運命に其全心を傾注したりしが故に、其前言的預言の題目となりし者は、其歴史、其發達及び其最終の狀態に於ける動力也。彼等は個人の將來を語り、其歴史上の出来事を預言するは甚だ稀にして、サムエルがサウルの一角に起るべき出来事を預言し(母九、十)、エレヤがハナニヤの死を預言したる(耶廿八)等數例あるに過ぎず。之に反して國家の歴史及び其運命に關する預言の例は頗る多し。モカブアハア王のラモトギアドに於ける敗亡を預言し(王上廿二)イザヤがエルサレムを攻めんとすべしと爲せる北方諸國の聯合の失敗(賽七)及びバビロンを滅ぼすべしと爲せる三年以内にアサスリヤの滅ぼされるべきを預言し(賽八、十七)又彼がセンナケリブのエルサレム攻圍の失敗に終るべきを預言し、エレヤがエルサレムがバビロンに陥るべきを預言し、エレヤがエルサレムを陥らざれば、アモスの預言は凡ての人の心に書かれたる正義人情の律法にして、ホセアの律法は人を愛する神に對する愛の律法なり。彼等の取りし地位は基督教徒の地位にして、彼等は保護と共に人の行為と生活とは、其裏に在る心の自由の表現ならざるべからず、人の心は神と交り、神の恩恵を感謝することに依りて形造られ指導せられざるべからずとのことを言へり。預言者の最も重なりしものは道徳にして、外形的儀式は道徳を離れて何等の意義なしとせられたり。彼等は又一般にエホバのみ以色列の神なる事、エホバは道徳的存在者にして、宗教的・道徳的生活のみエホバに喜ばるべき事、以色列は神の選民なる事、エホバは唯以色列國民の神のみならず、又各個人の神なる事等に就て教へたり。各預言者の特殊の教訓に就ては各預言者の條を見よ。

預言 預言者

預言 預言者

三の部

預言 預言者

言文書は特殊の目的を以て特殊の方案に従ひ書かれたる者にして、其言語形式に普通の文書に異り、明白に言ひ顯すこと代りに多く表號を使用したりと思维したり。此の如き解説の起りたるは、主として預言が辨證的に使用せられたるに由ることなれば、預言の形式には決して特殊の結核なく、又其言語にも他の文書と異なる種多の表號あることなし。元來預言者なるものは其當時の國民を教へんがため起りたる實際的教訓にして、其預言なるものは、當時の人々が容易に領解し得る形狀に於て言ひ顯はしたりし也。而して彼等は著しく想像に富みたる人々なりしが故に、其言語は詩的にして、又或る點までは比喩的なり。而して又彼等は特殊の時代に生れ、特殊の事情の下に生息したりしが故に、其思想が舊約時代の特殊なる形狀を以て言ひ顯はされたりしは尠も怪むに足らず。而して此舊約時代の特殊なる事情は過去に於て、彼等の教へたりし宗教的思想は永久に存在せり。故に吾人が舊約の預言を解説するに、須らく吾人を彼等の生息したりし特殊の境遇に置き、彼等の心に入りて、之を如字の如く解説せざる可らず。若し然らずして、單に何れの時代に取られても眞實なる宗教的思想のみ吾人の注意を向くることをせば、是れ吾人は預言を解説するに非ずして、唯之を應用するのみ。

其觀念の一部分に過ぎず。巴比倫がメテヤ人のために掠取せらるることに関する預言(賽十三の十六)も亦理想的にして、此等の事は實際に起らざり。又預言は人民の行爲を感化せんとの目的を以て與へられたる道徳的教訓にして、人民の之を受くること否に依りて歴驗に變化あるべし。例之を以てエホバの人民に向て、其色が四十日以内に滅亡すべしといへる預言の如きは、絶對的命令の如く見たりしも、人民の悔を蒙りて其罪を悔改するに及びて、此預言は遂に應ぜずたりしが如し。以上は主として既に應驗したりし預言に就て言へることなれば、神の民の最後の狀態に関する預言も亦まさしく此の如くなるべし。

(五) 新約聖書の預言者 初代基督教會の聖書は、全く預言的のものなり。ペンテコステの靈的偉大事の第一の結果は、力に充たされた信徒等の預言せしことにして(徒二の四)、其言は休徵と異狀とを伴ひたり(三の六、四の廿、五の十二、十五、十六、九の廿四、四十)而して其預言に審判的の力ありしことは、アナニアとサッパラの物語に於て示さる(五の一、十一)。此の如く教會は人民の中に在りて預言者の如く立ちたり。然れども彼等は此世に關する指導をばなせず、唯主より托せられたる責任を有したりしのみ。即ち神は之に依りて以色列に悔改を促らし、罪の赦を與へんとし給へり。斯くて此教會より多くの預言者出でたりしが、メテヤノは其一人なり。次で迫害に依りて四方に打ち散らされし者等に、ヤコブは書を附たりしが、彼等は預言者にして(雅五の十)ユダヤ、サマリア、ガリヤを遍歴し、猶太人に神の言を説きたり。されば新約の預言思想は意義廣きものにして、即ち

預言 預言者

預言 預言者

耶穌基督の靈に依りて招かれ、真理を人の心に移し、之をして全く神の言なりと悟らしむるは其力を有したるものなり(哥後二の十四、十七)。而して説話の内容及び其形式は神に由りて示されしものと信ぜられたり(太十の十九)。素より之には預言者の主観的活動を容れ(哥前十四の廿二)之を自然の知力能力の程度以上に引き上げ、聖靈の用をなせしめたり。而して預言の目的は會衆の徳を建てることなりしが(哥前十四の四)之も素より聖靈の意に於て然りしなり。

使徒行傳に於て神に召されて預言せしを、アガサス、バルナバ、シメオン、ニゲル、クレネのルキモ、マナエム、サクロ、バルナバとサクロとは聖靈の召せし事業のため選ばれし者也と言はる。ユダシラスはバルナバと保羅と共にアンテオケに選られしものなるが、又預言者なりしと記さる(十五の廿三、廿九)。ヒリヤの四女また預言の力を與へられしとあり(廿一の九)。預言の力は又教會の中にも與へられ、保羅が教會の賜や職務の作用をいふ所には(羅十二の六、八、哥前十二の十四、弗四の十一、歌前五の二十)常に使徒に次で預言者を記せり(哥前十二の廿八、弗四の十一)而して預言者は傳道者教師教師と區別せられたり。其會衆内に於ける活動の事は、哥前十四の一、三、五、十九、廿九、卅三にあり。預言の内容如何なりしかは評ならず。されど預言の純粹に神より來るや否やを見るために教會は靈を看別する力を授けられ(哥前十二の十)此力は預言の力と相伴ひ(十四の廿九)之を別つたための遺傳も定められたり(壹約四の一、三)。

参考書としてはオエレル、シヨルン、ティルマンの舊約聖書神學、フオン、オレリーの『神の國の終結

ヨシヤ

ヨシヤ

約書亞記

約書亞記

に關する舊約の預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言...

ヨシヤ

ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言...

及び民等を集めて律法の書を讀み聞かせ、王自ら律法に従ふべきを誓ひ、民皆同じく其契約に加はりぬ。

約書亞記 The Book of Joshua

約書亞記の中の一書、希伯來人は此書を法律書ト云フ、五經ト云フ、舊約聖書中の一書、希伯來人は此書を法律書ト云フ、五經ト云フ、

ヨシヤ

ヨシヤ

約書亞記

約書亞記

今左に書中の記事の概要を記すべし。(一)パレスチナの征服(一―二十二章)。

ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言...

置きたる事と、河の床に石を建てたる事... 八節は三節に續くべき者、九節は四―七節と續くべき者なるに、斯くして連續を破れり。

ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言...

王を散り、彼マツダグ、アブナ、ラキシ、ゲセル、エダロン、ヘブロン、アビムを略奪せる事... 以上詳細の事は諸君に任せ、此方面に於けるヨシヤの勝利は四十一―四十三節に之を概括せり。

ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言... ヨシヤの預言...

ヨッパ

ヨッパ (Joppa) 地名。パレスチナの邑名。...

預定説

る唯一の聖所なれ共、港内水淺く且険隘也。...

預定説

之を運命又は預定と稱せり。人生の成る方面は最も...

ヨッパ

べきもの也。神は何を爲さるべからざるやを示さ...

預定説

る教義を排斥し、神は其好む處に従ひて自由之恩惠...

預定説

は預定に依りて之を無用の賜となし、人をして不可...

ヨの部

約 拿 書

約 拿 書

ヨナス

合に於て(二章)次にニテメ人の場合に於て(三の五九)其例を見ざるを得べし、而して此は神の愛に基きその事を示せる也(三の十、四の十二)と云ひ、ヨナは此書の目的は一方に在りては一旦神に依りて責められたる罪を免れんとするは無益有害也との事を教へ、他方に在りては預言は條件的也と云へる耶十八の七以下の教訓を敷衍高調し、神の審判は假令預言者に依りて一旦宣告せらるるも、悔改する時は其預言は成就せざるべし、然れ共之がために神の言無効に歸したりといふ可らずとの事を示さんとするに在りて云へり。此等の教訓が此書中に含蓄せられ居るは疑なきことなれ共、第四章に至りて頂點に達せる思想を見れば、作者が特に示さんとしたる思想は向此外に在りしを知るべし。即ち此物語の眞目的は、猶大人民の中に善く行はれりし排外的思想を排して、神の恩寵は獨り以色列人のみに限らるるものに非ず、異邦人も若し罪惡の道を棄て、眞に悔改め神に歸らば、猶太人と同じく神の恩恵に浴すべしとの事を教へんとするに在り。大預言者等も屢々將來異邦人の神の國に入ることを教へたりしと雖も、彼等の最も重き置きたりしは異邦人に對する神の審判にして、殊に以色列人民は屢々外國の邦を窺ひ、其の故に、異邦人を以て本來の敵也と雖も、神の審判の宣告の成就せざるを見て殆ど驚く感じたりき。ヨナは即ち斯る以色列人の思想を代表したる者の如し。故に彼は初めヨナテに往きて説教すること好まず、之を免れんとしたり。而して彼の「たび往きて説教し、彼等の之を聽きて悔改するや、彼は却て審判の宣告の成就せざるを見て之を懼れり。悔改は刑罰に勝つことには以色列人に關して屢々教

へられたる所にして、エレミヤは一般の國民に關して同一眞理を教へたりき(耶十八の七、八)。此書の目的は即ち實例に依りてエレミヤの教訓を明にしたる者にして、作者は其結末に於て當時の人々の有したる排外的精神を排斥したり。アトク曰く「人は國民をも偏見せず、己に來るものを見て憐れみ給ふ交なる神の廣大なる愛を、基督教の精神に近き方法に依りて顯はせる者、舊約書中未だ此書の如きものありず」と。蓋し眞理也。

此書の物語が如何程歴史的なりやに關しても諸説又一定せず。其奇蹟的物語は暫く之を措き、其他の部分にも亦歴史的に記述せざるべしと云ふものあるは明也。例之ニテベの如き大市府の異教徒が俄に悔改めたりしといふが如き、又アッスリヤ神廟に描かれたるが如き國民が、此書に描かれたるニテベ王の如く希伯來預言者の前に立ちたりしといふが如き、共に容易に想像し難し。假りに此書に云ふ所の如く、ニテベ人がヨナの説教を聽て眞に悔改めたりしとすも、其效果は單に一時的なりしが如し。何となれば、舊約は均しくアッスリヤ人を以て偶像禮拜者となせば也。是亦頗る信じ難し。然れ共此書の目的は前云ふが如く教訓的なるのみ。其「ヤ」の記述は必ずしも歴史的事實なるを要せざる也。然れ共此記事が事實に基きたるものなることは又疑なきが如し。假令此書に於て言ふが如くならずとも、ヨナのニテベに於ける説教が成功したりしことは蓋し事實也(路十一の卅、卅二)。思ふに著者は傳説に依りて傳はりたる材料を取りて之に文學的色彩を施し、其傳へんことを眞理を之に寓したるものなるべく、其細目が全く技巧的なるは言ふ迄もなし。

學者の中には此書を以て全く比喩的の作也となすものあり。チエーチ。タイトの如き即ち是也。彼等の云ふ所に依れば、ヨナは單に非精神的以色列人を美するのみに非ずして、國民として以色列人を美する也。以色列人は國民として眞理を證明する預言者の使命を託せられたるもの也。然るに彼等は此使命を行ふことを畏れ、屢々之を免れんとしたり。故に彼等はヨナが大なる魚のために呑まれたるが如く、世界の大國巴比倫のために呑まれたり。彼等はヨナの如くエホバに祈りしが故に、ヨナが陸上に吐き出されたりしが如く、憐れより救はれて國に歸りたり。而して彼等はヨナがニテベ人に對する審判の宣告の實行せられざるを見て之を怒りしが如く、異邦人の安全なるを見て之に失望したり。此物語は即ち以色列國民の此歴史を寓したるもの也と解せり。

【參考書】 アイケホルン。カイル。ブリーク及びワエルハルセン。ワアトケ。ウィム。ロイス。カワレン。クイテン。ケーニヒ。コルニム。ドライエ。カ。ストラック等の舊約聖書論。ヒッセイの「小預言者」マルチンの「預言者ヨナ」ノットツの「十二預言者」ワウルフ、アダム、スキスの「十二預言者」等を見よ。

ヨナス ユストス **Jonas, Justus** **人名**
一四九三—一五五五 ルーテルの補助者の一人。初めエルフルトにて教育法を研究せしが、ルーテル及びエラスムスに接して、一五二七年以後は専ら神學を研究す。一五二一年ウィッテンベルグの長官となり、ルーテルの補助者として最も親しき關係となる。四年ハルレに轉じしが、四年ハルレに在りて、一五年コープホルグの宮廷説教者となり、五三年ワエラの

ヨの部

ヨナタン

ヨハネ

ヨハネ

アイヌフェルトの牧師となる。其創作的著書は大抵争論的なり。ルーテル及びメランクトンの著書中拉丁語の著者ば獨逸語の著者ば拉丁語に翻譯す。ルーテルとの交りは最も深く、ルーテルの結婚には見證者たり。二十五年間書信を往復し、ルーテルの最後の旅行にはアイヌフェルトに從ひて臨終に侍し、後に運葬儀に其機軸を詳報し、且アイヌフェルト及びハルレ兩所に於けるルーテル葬式の説教をなせり。ヨナスは性質激烈の人なりしと雖も、敵にも味方にも信ぜられたりき。

ヨナタン

人名

ヨナタン Jonathan. **人名** 以色列王ダウダの長子(母前十四の四十九)。サウダの如く身體強健にして、且射術を善くし(母後一の廿二、廿三)以色列民族がヘブシテ人のために苦められし時に力り、能く之と戦ひ其勇武を顯はせり。然れ共後戦利あらず、父と共にキルコア山に於て陣歿せり。彼がダビデとの交友は最も濃にして、其相愛せし有様は撒母耳前書に記さる。

ヨハネ

約 翰 使 徒 John the Apostle.

人名 耶蘇十二使徒の一人。其生涯と其傳へたる教義の大概を左に叙す。
【約翰の生涯】 (一) 福音書に顯はれたる使徒約翰、第四福音書の記す處に依れば、ヨハネはアンデレとよばバプテスマのヨハネの弟子なりしが如く、彼等は師の言葉を聞きて耶蘇に從へり(約一の四三)。尤も此處にはアンデレの名のみ記され、他の一人の名は記されざれ共、其が使徒約翰なりしことは明也。彼が召されて使徒となりしことは、共観福音書に記さる(路五の八一—、太四の廿一、廿二、可一の十九、廿)。彼はセベダイの子にして(彼と耶蘇との親戚關係を有するが如く思はるる事)就ては「サロ

メ」の條を見よ)彼も父と共にガリラヤの漁夫なりき。セベダイが舟及び備人を有したりしこの記事(可一の廿)より、彼は相應の富を有したりしと想像せらる。耶蘇傳道中約翰は彼得、雅各と共に特異の地位を占めたりしが如し。即ち此三人はヤイロの娘の視を回復せり(可五の卅七、路八の五十一)。又變態の山に共に携へられ(太十七の一、可九の二、路九の廿八)ゲッセマテの園にても耶蘇に近づき、之を許されたり(可十四の卅三)。又此三人及びアンデレは耶蘇最後の預言は何時應驗すべきやを問ひたりしと記され(可十三の三)雅各、約翰の二人はサマリヤ人が耶蘇の一行に道を貸すことを拒みし時、天より火を呼び下してサマリヤの色を滅さんと言ひて、耶蘇の叱責を蒙り(路九の五十四)又其母と共に耶蘇の所に往きて、耶蘇が志を得たらん時其左右に坐ることを得せしめ給へと請ひたることあり(可十の卅五)。約翰は又彼得と共に逾越節の食の準備を整へんため遣はされたりこの事一たび記され(路廿二の八)又耶蘇の名に依りて鬼を逐出す者あるを見て之を止めたりこのことを、約翰一人にて耶蘇に告げたりこの事記さる(可九の卅八、路九の四十九)。此等の記事は断片的なれ共、耶蘇が嘗て約翰兄弟をゴアゼルゲ(雷の子)の義、可三の十七)と呼びし名に依りて表する性質を見るべし。蓋し彼等は性質急激にして極めて熱心に、愛に強きかばりに人を憎むこと亦劇しく、其中には長所も短所もあり、耶蘇は其短所を責めて其長所を用ひたりし也。

第四福音書にはセベダイの子約翰の名は一回も記されざれ共、受難の週及び復活の記事に顯はれたる耶蘇の愛せる無名の弟子が使徒約翰なることは疑なし。最後の晩餐の記事に「耶蘇の愛する一人の弟子」

耶蘇の胸に倚りてあり」といへる語あり。此記事に依れば、耶蘇は主賓にして、之を圍んで彼得次賓として耶蘇の左に體を傾けて坐し、約翰は第三位者として右に在りき。食事中耶蘇が此中に彼を愛する者ありと言ふや、彼得は約翰をして其體なるやを問はしめんと思ひ、首を以て合圖せしかば、約翰は耶蘇に其體なるやを問ひて答を得たりき(約十三の廿三—廿六)。耶蘇が捕へられて祭司の長の庭に曳かれたる時、耶蘇と共に庭に入り、且彼得を伴ひて入らしめたる「祭司の長の庭の弟子」と云ふは疑もなく約翰にして(十八の十五、十六)彼は又耶蘇が十字架に釘けられたる時、マリアと共に其傍に立ち、十字架の上の耶蘇より其母を托せられたり(十九の廿六)。耶蘇復活の報を得て、急ぎて墓に至りしは、約翰及び彼得なりき(廿の二)。廿一の二には「セベダイの子等」なる語初めて出づ。之より後の記事には、彼得及び「耶蘇の愛せし所の弟子」重要な地位を占め、ガリラヤ湖畔にて復活の耶蘇を初めて見たるは約翰なりとせらる。

(二) 新約の他の文書に於ける使徒約翰、使徒行傳には約翰と彼得と二人共に重要な地位を占めたりしこと二回記さる。即ち彼等がエルサレム神殿の美の門にて、生來の敵者を醫したる事と、彼等が民を教へ、且耶蘇の死より蘇りたることを宣べたりしがため捕へられて衆議所の前に曳かれたる事(三、四章)及び彼等サマリヤに下り、ピリゴの教を聽きてバプテスマを受けたる人々の聖靈を受んことを祈りたる事(八の十五)是也。又保羅が獄中に從ひエルサレムに上りし時、彼得、雅各、約翰の三人に會ひしこの事加拉太書(二の二)に記され、此處には此三人は「柱」と思はるる人(二の九)と稱せらる。此後約

論黙示録の外には、約翰の名は再び新約聖書に記されず。
 (三) 初代教會の傳説に於ける使徒約翰、傳説に依れば、約翰はエルサレムを去り、後エペソに居る定めたりとのことなれ共、何時エルサレムを去り、何時エペソに往きしや等の事に就ては明ならず。テラチアアヌスは約翰が羅馬に來り、大變の沸騰せる油の中に投ぜられたりしに、不思議にも死を免れたりしとのことを傳へたれ共、其何時のことなりしやを言はず。彼は死を免れて後或る島に流されたりしと云へり。ユラセボウスは此連算をドミチアヌス帝の迫害の時に在りとし、イレニウスが約翰黙示を見たると云へりしことを引きて證となし、且約翰はネルヴァ帝の即位するに及びてパトモスよりエペソに來り、此處にて教會を建てトラヤヌス帝の時迄生存せりとのことを言へり。約翰に關する物語の多くは此時代に關することにして、エペソの監督ギョタラテスが羅馬のガイクトルに贈りたる書翰には、約翰はエペソの司祭となり、其處に死して葬られたり云ひ、アポロニウスは約翰はエペソにて死者を蘇らせたりとの事を傳へたり。約翰が其特有の愛心を以て其監督職を行ひたりし一例として、亞歷山のタレメントは一佳話を傳へたり。約翰の教を聽きて改宗せし一青年、誤て墮落の道に入り、盜賊の群と共に或る山中に住みけるに、約翰の之を聞て深く悲み、乃ち自ら山中に入り盜賊の群を訪ひて其青年を救ひ出したりしといふ。又約翰はエペソに在りてセリヤサスの異端と對争し、其徒とは同一の屋根の下に居ることなきに欲せざりしが、彼は此の如き異端を排斥するために福音書を書かんことを志したりしといふ。ムラトリアンの断片にも、福音書の起程に關し稍や之

均しき物語あり。彼が老年迄生存せしこのことは、カッシアヌス及びイコロヌスと共に之を傳ふ。前者は約翰が別たる鷓鴣を飼養せしに、或る人之を誘ひて、鷓鴣に類することをなすものかなと言ひしに、彼は答へて「吾は常に振る可らず」と言ひたりしこのことを傳へ、後者は約翰既に老いて教會に携へ往かれしが、長く語る。此能はざりしが故に唯「小子よ、爾曹相愛せよ」と言へるのみなりしこのことを傳へたり。約翰は死せるに非ず、眠りたるのみ、彼が置かれし土其呼吸毎に動きたりとの傳説は、蓋し約翰傳の末章より生じたるものにて、アウグスチヌスも之を記したれ共、素より之を信じたりしには非ず。
 【約翰の神學】 約翰の書きたる者として新約聖書に記載せらるるは、第四福音書、約翰の名に依て傳へられたる三箇の書翰、及び約翰黙示録なれ共、黙示録は早き時代に書かれたるものにして、其他の文書と一體に論じ難き點あるを以て、約翰の神學を論ずるに當りては、其他の文書と區別して之を論ずるを適當とす。(黙示録に關はれたる約翰の神學に就ては「約翰黙示録」の條を見よ。第四福音書の著者に就ては議論未だ一定せざれ共、現地の福音書を以て使徒約翰の手に成りたりと非ずとする者も、其重なる部分を以て使徒約翰より出でたりとなすに於ては殆ど異議なきが如し。【約翰福音書】の條を見よ。此書に記されたる耶穌の教訓は、其大體に於て共觀福音書に記されたる耶穌の教訓と一致する者あり。故に耶穌の教訓の材料として之を使用すべきは言ふ迄もなきことなれ共、此書の耶穌の教訓が作者の思想の色彩を帯ぶるものあるは又争ふべからず。故に約翰の神學を論ずるに當りては、彼が耶穌の口に置

きたる教訓をも亦取りて其材料となさざる可らず。約翰福音書及び第三書は頗る簡短なる者にして、之を約翰の書とすも、思想上重要な者に非ず。故に約翰の神學を論ずるに當り實際用ゆる所の材料は、第四福音書と約翰壹書との二卷也。
 然れ共此等の書に關はれたる思想の特色を記載するは容易に非ず。先づ舊約との關係を見るに、約翰は猶太教に反對し、猶太人を神の敵也と述べては、其の以ては彼に取ては榮耀ある名にして、舊約の神は又耶穌基督の神也(約一の四十七、四の廿二、廿の十七)。且彼には舊約は毀る可らざる神の言にして(約十の卅五)彼は舊約預言を引きしのみならず、其根本的思想は舊約より出で、其語法は舊約に其模範を取れり。幼よりモーセ及び預言者の教訓に養はれたる彼に在りては寧ろ當然也といふべし。而して彼が「律法はモーセに由りて傳はり、思想は眞理は耶穌基督に由りて來れり(約一の十七)と云へるは、新約を以て舊約の應驗となせる者にして、此點舊約の思想と似通へる者あるを見るべし。然れ共約翰には又全く舊約に反對せる點あり。舊約の記者は外形上よりすれば耶穌に近く駐したりしが、内的關係より云へば、耶穌が死より蘇りてメッソヤたるこの明に證せらるる迄は遠く隔り居たる者也。然るに約翰は之に異り、初めより耶穌の愛する弟子として彼に近づき居たることなれば、彼の文書を讀む者は、斯くして發達せる基督教的生活の鼓動を其中に感ぜざるを得ず。是れ約翰が元始的使徒の範圍を出で、其上一步を擧げたる所以也。保羅の思想及び感情に於ても、基督は其中心を占むれ共、彼に在りては基督の事業殊に其十字架の死が中心たり。然るに約翰に在りては、彼が永遠なる

父の顔を見、永生を發見するを得たりしは、嚴正の意義に於ける耶穌の人格に由れり。約翰は耶穌に對りて其心に深き印象を興へられ、斯くして其特殊なる思想、感情を發達せり。而して彼の此特殊なる心意は屬々思想的なるが如く思惟せられたれ共、彼の思想の方法は哲學的に非ずして寧ろ神學的也。彼は宗教上のことを考ふるに推論の力を以てせず、直覺を以てし、現象世界に其心を向けずして、内的生活に専念せり。故に彼が最も貴びたりし知識なるものは、科學的知識の追求に非ずして、神を求むること也(約十七の三)。其根本的思想は光と生命と愛と也。斯くして「彼に居る者は罪を犯さず、罪を犯す者は神を知らず、彼を信する者には永生あり、世に誇つものは我等が信也」と云へるが如き思想も「道は神と共に太初に在り、道は即ち神也」と云へるが如き基督論も、彼の理想的な心より出でたる也。約翰の教義に於て最も根本的なるものは基督論にして、神、世界、救済、基督教的な生活の教義、及び終末論等は皆其上に立てり。今左に順次此等の教義の大要を述べし。
 (一) 基督論 (イ) 根本の思想 新約の基督論が使徒約翰に至りて其頂點に達したるは疑なしと雖も、其根本の觀念に至りては約翰の思想も他の新約記者の思想も異なる所なし。第四福音書の福音に於ては、約翰の基督論に思想的要素を發見せんとする者あれ共、約翰の基督論に思想的要素及び感情は、神學的思惟より起りたる者に非ずして、歴史的人格の生ける印象に其起源を有する者なることは、彼の福音書の福音に「我佛其榮を見るに實に父の生み給へる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充てり」と言ひ(一の十四)又其書翰の初めに「我佛が聞き又目

に見、懇切に觀、我手測りし所の者、即ち元始より在りし生命の道を爾曹に傳ふ(壹約一の二)と言ひしに依りて明也。約翰の基督論は教會の師父又は宗教會議に於けるが如く、基督の神性を對して、而して其人性に及ぶるに非ず、寧ろ之に反對の方向を取れり。永遠の道内體となりしこの印象を約翰に興へし耶穌は、彼に取ては先づ人として顯はれたる人としての名を用ひしのみならず、基督教徒と基督に對する者との相違は、耶穌の人性を承認することによれりとなせり。即ち彼は「耶穌基督の肉體となりて來り給へることなれば、神より出づ」と言ひ、然らざるものは基督に對する者也と言へり(壹約四の二、三)。彼は又凱高波勞斐亞項問及び「神に祈る等のことを耶穌に歸するを厭はす。又耶穌が自ら全く神に從屬せるを告白せる言を記し、耶穌は自ら「我れ父に求めん」と言ひ「父は我より大也」と言ひたりとなし(約十四の十六、廿八)復活の後尙彼は神を父と呼べりとのことを記せり(約廿の十七)。約翰は耶穌を全智全能也と思惟したりしと思ふも亦誤にて、第四福音書は耶穌が「子は父の行ふことを見て行ふの外は何事をも行ふこと能はず」と言ひ(五の十九)又「ザロの墓に往きて」爾曹何處に彼を置きしや」と問へりとの事を記載せり(一の廿四)而して約翰に在りては他の新約記者に於けるが如く、基督の偉大なる點は其人性に在り、唯彼に在りては比較的に非ず絕對的なを興れりとし、約翰は彼を呼びて「父の生み給へる獨子」と言へり。而して彼の特異なる點は先づ其罪なきに在り(壹約三の五)。約翰は其書翰に於て屬々耶穌の聖と義とに就て語れり。而して其聖と義とが形而上的の

者に非ずして、人としての屬性なることは、彼が我佛も亦「彼の歩みしが如く歩むべし」と言ひし(二の六)耶穌が自らに就て言ひし所の言に依りて明也(約五の卅、八の廿九、十五の十)而して耶穌が斯く道徳上無罪なるを得たるは、彼が父と偲むるがためにして、彼が自ら「我れ父に在り、父我に在り、我語る所の言は我れ自ら語るに非ず」と言ひたりしが如し。是れ約翰基督論の根本思想にして、基督に關して彼が言へる語は皆之に其基礎を有せり。
 (ロ) 耶穌基督 約翰は屬々基督教徒の信仰を耶穌基督なる名稱に概括せり(約廿の卅一、壹約五の一)。此信仰は彼得のカイザリヤ、ヒロビにて告白せし者と同じく、舊約に基き、弟子等の期待したりし所のもの也。彼は又耶穌を「父の聖別して世に遣はしし者」と呼び(約十の卅六)書翰にも同一思想の反覆を示せり(壹約一の五、四の十)。神の遣はせし者とは、神の完全なる知識を有し之を世に示さんため送られたる者の謂にして、耶穌が自ら「我は世の光也」と言ひ「我は途也、眞理也、生命也」と言ひし其意同じ。此等の語は普通人類の經驗に超越せる觀念を示せる者には相違なれ共、約翰が耶穌の人性を假定して言へるものなることは、彼が神を以て遣はす者となし、耶穌を人の中より選びて遣はされたる者となせしに依りて明也。
 (ハ) 神の子 耶穌が耶穌を記すに當り最も能く用ゐたるは「神の子」と云へる名稱にして、彼は之を屬々耶穌の口に置き、又自ら之を用ゐたり(約一の十八、廿の卅一、壹約五の廿)。神の子なる語が、耶穌と神との最も親密なる關係を言ひ顯はしたるものなるは言ふ迄もなきことなれ共、此關係が倫理的のものに外ならざることも、亦耶穌が此關係の

成立せる道徳的要素を示して「我を道はしる者我と共に在り、父は我を獨り置き給はず、蓋我れ恒に彼の心に適ふことを行へば也」と云へるに依りて明也(約八の廿九、十の十七参照)。約翰が耶穌を稱して「生み給へる獨子」といふも、單に耶穌の神子なる關係の特異なるを示せる迄にして、「父の懐に在る者」と云へるも、父なる神の特に愛し特に信任し給ふ者也との意に外ならず。

(二) 道。然れ共約翰が耶穌の人格を神の永遠の存在と生命とに淵源したるは疑なく、福音書の語言は最も明に之を示せり。曰く「太初に道あり、道は神と偕に在り、道は即ち神也云々」と(一の二一、二三)。此思想はフィロソフのロゴス思想と似たる所あるを以て、亞歷山哲學の影響を受けた者也と論ずる者あれ共、其似たるは單に表面のみにして其根本的精神に非ず。約翰のロゴス思想は、神と世界との關係を説かんとして考へ出せる思想に非ずして、彼が依て以て基督の人格を言ひ顯はせる最高最深の信條也。換言すれば、ロゴスは彼が耶穌に與へ得べき最も意味深き名稱にして、彼は彼が以下に説かんとする耶穌に關する物語の總論として此名を提供したるに外ならず。ナゼレの耶穌が世の太初より存在し、神が依りて世界を創造し給へるロゴス也と云へるは頗る奇異なる言語なれ共、神の現現の思想は當時一般に行はれ、保羅も希伯來書記者も共に之に類する思想を有し、各々之を其書に言ひ顯はせり。約翰はロゴスなる名稱を以て最も能く神の自現の思想を表白し得べしとなし、彼に最も深き印象を與へたる耶穌の人格に於て神の自現を見し「我を見し者は父を見し也」と言ひ得し耶穌こそ實に其一身に神を顯現せる者也と思惟し、ロゴスの名稱を之に適用

したる也。

(三) 基督の先在。ロゴスの思想が基督の先在を含む蓄せるは疑なきことなれ共、約翰をして初めて基督の先在の思想を抱かしめたるはロゴスの觀念に非ずして、耶穌自ら永遠の意識を言ひ顯はせる言に依りて、第四福音書は耶穌が直接に其先在を言ひ顯はせる言語四箇を録す。何れも耶穌生涯の途に關する者也。其一は耶穌が「我肉は眞の食物、我血は眞の飲物也」といふを聞き驚ける猶太人に向て「此言に因ていへる者也(六の六十二)」其二はアブラハムの裔に關し猶太人と長き論争の後、耶穌が猶太人に答へて「我はアブラハムのあらざりし先きより在る者也」と言へる者也(八の五十八)。其三は共に耶穌最後の祈禱として記されたる者の中に在る言にして、即ち彼が「我れ爾の榮を世に顯はし、爾の我に委れし所の行はれ之をなせり、父よ今我をして爾と共に榮を得させ給へ、即ち世の初めより先きに爾と共に有りし所の榮を得させ給へ」と祈り(七の四、五)又「父よ爾の我に賜ひし者の我が居る處に、我と共に在りて我が榮即ち爾が我が賜ひし者を見んことを願ふ、そは世の基を置かざりし先きに、爾我を愛したれば也」と祈れる者也(十七の廿四)。此等の言に何れも耶穌先在の意識を顯はせるものなり(一の二一)とて、約翰が耶穌を「元始より在りし者」と(一の二)と呼び、又之を太初に神と偕に在りしロゴスと同一視したりしは、此等の言に基せしこと疑ふ可らず。後世の神學が「子なる神」の思想の淵源を發見したるも亦依しむを要せざれ共、耶穌の此等の言の中には果して子なる神の觀念を含むせりや。學者の中

には然りと答ふる者少からざれ共、ハイショウツツアは、之に歴史的的心理的説明を與へて以爲らく、耶穌の生れたり當時に在ては先在の觀念は放て珍らしきことに非ず、凡て神聖なる事物は天より出でたる者に於て、其地上に顯はれ出でざる先きに存在したりと信じたりき。例之モーセが造りたる幕屋は天に在る者の形と影とを信ぜられ(來八の五)、エルサレムの城も天より降り來れる者也と信ぜられ(加四の廿六、廿七の十)、神の國も耶穌は之を創世より神に遣はるる者のために備へられたりしと明言したりし(如し(大廿五の卅四))。もし耶穌にして神の國の眞理を明にし、之を世に建設するの使命を荷ひたる者也と信じたりしとせば、彼が自己の先在を信じたりしは尙も怪しむを要せず。殊に其生涯の終りに至り、猶太人と争ひて其精神の頗る激昂したりし時に於て、殊に又今や此世を去らんとする刹那の祈禱に於て、永遠存在の意識が其心に閃きたりしとするも解し難きことに非ず。而して彼は更に以上を言に就て一々説明を與へ、要するに耶穌先在の觀念を引出で來れる者にして、神の永遠の計劃の中に理想的に存在したりしとのことを言へるに外ならずと云ひ、ゲントも亦同一の説を取れり。約翰が福音書を記載したる耶穌の自己に關する意識が、共福音書のそれよりも更に明白に大膽なる宣言を有するは言ふ迄もなければ共、其根本的意識に於ては何等の相違なく、彼の意識は疑もなく超人的にして、一方より之を見れば神なれ共、彼は神の子にして、子なる神には非ず。而して約翰が耶穌を解したりしも亦之に外ならず。

(二) 神及び世界。(イ) 神に關する觀念。約翰は耶穌基督に由りてのみ神に關する新知識を得べく、神の眞知識は耶穌基督に由りてのみ神に來れりとのことを最も深く自覺したりき。彼曰く「神の子既に來り、我儕が眞理者なるの智慧を我儕に賜へるを知る」と(壹約五の廿)。而して彼は耶穌に由りて傳へられたる神の知識に比すれば、モーセ、預言者若し云ふに足らずとなし「未だ神を見し人あらず、唯生み給へる獨子即ち父の懐に在る者の分を顯はせり」と言へり(約一の十八)。神の新知識は「父」なる神の名に依りて最も單純に言ひ顯はせる。約翰に依れば、基督を知らざる者に神に關する或る知識を有するを得べしと雖も(約一の九、六の四十五)父即ち愛の神を有するものは、唯基督の神の子たるを信するもののみ(壹約二の廿三)。

約翰は「父」なる名の外に、其特有の觀念を神に附し、之を「光」「生命」「愛」等と呼べり。彼曰く「神は光也、少しの暗處なし」と(壹約一の五)。光とは蓋し神聖の義にして、單に消極的の意義に於てのみならず、又積極的の意義に於て、純潔完全なる善の義を表し、諸各が「凡ての善き賜と全き賜は皆上より降るの光明の父より降る也、父は愛なることなく、又轉動りて顯はる、影なき者也(一の十七)」と云へると同義にて、永遠に善真にして倫理的に完全なる存在者也との義也。此意義に於て神は光なるが故に、彼は又眞理の要素を有す。約翰の思想に於て光より眞理を離す能はざるは、太陽より光線を離す能はざるが如し(約三の廿一、壹約一の六)。故に神は光也と云へる觀念は、神の倫理的性質を顯はすと共に、知識的性質をも顯はせり。

廿六、壹約五の廿)。神は永生也と云へるは、神は生命の根源として自己を交通する者也との義にして、此觀念は神の生命を有せざるものは道徳的靈的死の狀態に在りとの觀念(壹約三の十四)と對照すること依りて明なるべし。神は光也といふも、神は生命也といふも、異りたる方面より神の性質を顯はしたる迄にして、前者は神の自現の方面より、神は光明を與へ且聖化するものなることを示し、後者は神の自交通の方面より、神は生かし且福ならしむるものなるを示せるに外ならず。

約翰は又神を愛也と呼べり(壹約四の八)。愛とは最も深く最も完全なる神の倫理的性質を示せるものにして、最も能く「父」なる名の意義を説明せるもの也。もし神の性質を區別して、神は光として人を輝かし聖化し、生命として人を生かし福ならしむるもの也とせば、愛として人を輝かし救ふもの也といふを得べし(約三の十六)と雖も、愛は神の全性質を言ひ顯はす言として用ゐられ、顯現も交通も救済も皆愛の性質の中に包含せられ、約翰が神の性質に就て云ふ所の事は凡て皆神の愛の觀念より之を取り來れり。故に約翰に在りては、神の義は愛に反對せる者に非ずして、寧ろ神の聖き愛の結果也(壹約一の九)。斯く約翰は神を以て峻絶冷淡にして遠く人類に超越せりとの思想に反し、自己を世に顯現し人類の罪を赦し且之を救ひて永生を與ふる愛の神也とせり。

類世界の義を表す。耶穌がセバトに答へて「我れ之のために生れ、之がために世に來れり」と言ひ(約一八の廿七)、約翰が「凡ての人を照す眞の光は世に來れり、彼れ世に在りし世を照らす」と(約一の九、十)と云へる場合の世は即ち是也。而して此語は更に神に反對する人類の義に用ゐらるる「我れ世の屬に非ざるが如く、彼等も世の屬に非ず」と云へるが如し(約十七の十六)。最も廣き意義に於ける世、即ち宇宙は、神の事業にして、神の道に由りて造られたりせらる(約一の二)。神の觀念の發現、神の意志の所産に由るその義也。約翰は此宇宙を以て直ちに完全に創造せられたりとは思惟せず、ロゴスの管理の下に在りて漸次に成長發達するもの也と思惟したるが如し。故に曰く「之に生命あり、此生命は人の光也」と(約一の四)。其意蓋し神は此世界を其完全の意義に於ける神の國となさんために、ロゴスに其充實せる生命を托したれ共、此は唯人類の歴史に依り道徳的合理的過程に依りて漸次に實現せらるべしと云ふに在り。斯くして世なる語は廣き意味のものより轉じて狭き意味のものとなり、神の像にかたどりて造られ、神の永遠の思想の現實せられ得べき合理的道徳的受造物の義となり、人類の發達の合理的道徳的過程は「之に生命あり、此生命は人の光也」と云へる語に最も強く言ひ顯はせる。即ちロゴスに托せられたる神の充實せる生命は、自現に依りて人の理性と真心とを照し、以て自らを人類に交通せり。而して此交通は常に止まず、光明は常に人類を照せりと雖も、世には又此光明を拒否して受けざるものあり。故に曰く「光は暗に照り、暗は之を曉らざりき」と(一の五)。愛に所謂「暗」は光なる神の性質に反對せる倫理的の意義を有し、人類の罪惡の義也。

此罪惡の故に神の愛の目標となれる世(三の十六)は又不義不徳の義となれり。約翰が「此世或は此世に在る物を愛する勿れ、人もし此世を愛せば父を愛するの愛其裏に在るなし云々」(壹約二の十五、十七)と言へるは此意義に於て也。

約翰に依れば罪とは神の道徳的秩序を破るの義也。故に曰く「罪とは神の律法を犯すこと也」(壹約三の四)。彼が神の律法を犯すことの特種の様式として先づ掲げたるは肉體の慾、眼目の慾又勢より起る淫慾、換言すれば不貞潔、貪婪及び豪奢也(壹約二の十六)。然れ共此等のものは罪の全體に非ず、又其最も恐るべきものにも非ず。此等の罪の背後には更に深く人心に根を植ふるものあり、私心是也。此私心は願はれて虚偽となり情慾となる。神は信實正直の神なるが故に、虚偽は罪也。神は信實の神にして生命の本體なるが故に、憎悪は罪にして、精神的に云へば人を殺すこと也。神は其性質光なるが故に、罪の性質は暗黒にして理性と真心とを眩惑するもの也。神の性質は生命なるが故に、罪の性質は死にして、體を覆ふを滅ぼす者也(壹約一の五、六、一、二の八十一、廿一、廿二、廿七、三の十三、十五)。約翰は罪の起源を惡魔に歸せり(壹約三の八)。然れ共此は唯人類歴史の初めに人を誘ひて罪を犯さしめたる者は惡魔也との創世記の物語に基き遙にして、罪惡の起源を説きたるには非ず。

(三) 救済論。救は先づ神が其生み給へる獨子を世に遣はし給ふことに依りて得らるべしとせらる。神は其生み給へる獨子を世に遣はし、我儕をして彼に依りて生を得せしむ、是に於て神の愛我儕に顯はれたり(壹約四の九)と言ひ「父其子を遣はして世の救主となせり」(四の十四)と言へるが如し。神もし其

子を遣はし給ひしに非ずんば、人は死の中に在り(三の十四)世は亡びたりしなるべし(約三の十六)。而して永生の世に入りしは、實に道肉體となり、耶穌に於て顯現せしに由れり。約翰は此の如き見解に依りて、耶穌の教訓と生活とを吾人に傳へたり。

(イ) 預言者としての耶穌の教訓的意義。以上の見地より耶穌の預言者としての職務は、約翰に在りては他の新約記者に於けるよりも明に教訓的意義を附せらるを見る。彼は其書翰に於てさへも「耶穌の地上の生活に満り」(一の二三、五、二の六、廿五等)福音書に在りては更に多く耶穌の生活及び教訓を教訓的方法として示せり(廿の卅一)。故に福音書に在りて最も重要な地位を占むるは耶穌の言にして、彼等は耶穌の「言も亦去らんと欲ふや」と云へるに答へて「我儕は誰に往かんや、永生の言を有てる者は爾也」(六の六十八)と言ひ、耶穌も亦「我が爾曹に曰ひし言は實に生命也」と言へり(六の六十三)。然れ共耶穌は其言を哲學的に論出したるには非ず、神との交通に依りて自己の内倫生命より之を語り出せる也。換言すれば、神に在りて語り、彼れ神に在りて語れる也。更に換言すれば、是れ實に特異なる人格より送り出たる者にして、彼の言と彼の人のとは相離す可らず。故に彼の言を信するは彼を信することにして、彼を信するは彼の言を信すること也。故に又約翰に在りては、耶穌地上の生活と關係を有するは、其教に與ることとせらる。

「今爾曹我曰ひし言に依りて深くなれり」と言ひ「我が葡萄樹爾曹は其枝也人もし我に居り我亦彼に居らば多くの實を結ぶべし」と言へるが如し(約十五の三、五)。

(ロ) 耶穌の死の救済的意義。然れ共約翰は又耶穌

の教訓と生活とを以て人の救済に充分とせざるを、更に其死に救済的意義を見たり。耶穌が「一粒の麥もし地に落ちて死なば唯一にてあらん、もし死なば多くの實を結ぶべし」(約十二の廿四)と言へりとなせるは、即ち極端の救済的意義を耶穌の死に附したる者にして、約翰は又其書翰に於て「其子耶穌基督の血凡て罪を潔む」(一の七)と言ひ「我儕神を愛するに非ず、神我儕を愛し我儕の罪のために其子を遣はして挽回の祭物とせり」(四の十、二の一參照)と言へり。斯く約翰は耶穌の死を以て人類の救済に缺くべからずとなしたるは、彼には代贖的教義あるなし。彼に依れば神の義は代贖的報償を要求せず、却て罪の赦免を保障せしめらる(壹約一の九)。神も「信實なる公義者なるが故に、必ず我儕の罪を赦し凡ての不義より我儕を潔め給はば、是れ彼の性質に基ける者にして、耶穌がゴルゴタに死したりしがために非ず。父が其子を世に遣はし給へるは、世を審判せんがために非ず、人類を愛する愛に由れり」(約三の十六、壹約四の十)。耶穌が十字架に死したるは、神の方面に在りては兄弟のために自己を犠牲に供したる者にして、共に最大なる愛の證據也。之に勵まれて人は其私心を棄て、神を愛し兄弟を愛するに至るべく(壹約四の十九)。又之に依りて我儕神が實に吾人の罪を赦し給ふことを確信し得べし。是れ耶穌の死が吾人に與ふる救済的結果也。

(ハ) 在天の基督の救済的活動。復活して天に昇れる基督は、其地上に於て初めたる救済の事業を繼續す。耶穌が其生涯の終極の近けるに及び、其死後聖靈を送るべきことを約束し「我れ父に求めん、父必

子別に慰むる者を爾曹に賜ひて究りなく爾曹と共に在らしむべし、此は即ち真理の業也」(約十四の十六、十七)と言ひ「我名に託りて父の遣はさんとする訓慰語、即ち聖靈は衆理を爾曹に教へ、又我ら凡て爾曹に言ひしことを爾曹に思ひ出さしむべし」(十四の廿六)と言ひ、又「真理の業來らん時爾曹を導きて凡ての真理を知らしむべし」(十六の十三)と言へるは、即ち彼が死後尙聖靈に於て人類救済のために活動するを云へるものにして、約翰が其書翰に於て「爾曹は既に聖主より膏を沃がれて一切の事を知る云々」(壹約二の廿一、廿七)と言へるも亦其意同じ。約翰に従へば、耶穌は地上に於て彼を信する者との交通を開始せしめ、地上の生活には限らざる所あり、從て其交通完全なるを得ざりしが、今や彼れ蘇りて自由の業となり、從て交通又完全となり、彼は永遠に弟子と共に教會の中に現存し、彼を信する者をして又彼に依りて父と一體なるを得せしむる也(壹約二の廿四、廿八、三の六、廿三、四の十二、十六、五の廿。約十四の廿、廿三、十五の四、十六、十七の廿一、廿三)。

(四) 基督教生活の教義。以上は救済の客觀的方面を論じたる者なれ共、約翰には其主觀的方面に關する教訓頗る富めるを見る。彼が主觀的要件として擧げたものは信仰、及び愛にして、此二箇の重要な觀念と共に知識、神の子となること、永生を有つこと、神及び基督と一體なる事、義を行ふこと、神の聖意をなす事、神の誠を守る事、自ら潔むること等の觀念あり。而して此等の觀念は交互相錯關係して分離し難し。

(イ) 信仰。約翰は信仰を以て基督教の救済を得る根本的動作となせり。其福音書に於けるよりも約

福音書には此語屢々顯はれ、且約翰書翰にも均しく高調せられたれ共、其觀念は保羅又は希伯來書記者に於けるよりも一層不決定也。信仰の對象としては或は救済の事實、或は神の言又は事業に關する見證、或は耶穌の人格、或は神自らを擧げたれ共、神及び耶穌は單に救済の真理の證者たるのみならず、又其内容其根據也(約一の十三、十四の一)。然らば信仰は如何にして起るや。要するに信仰は神の啓示を信することなるが故に、之を信するは啓示に對する見識あるに由れり。斯くバプテスマのヨハネは世に來れる光を證せんために來り、又實に之を證をなして弟子等の心に信仰を起さしめたり(約一の六、十五、廿二、卅四)。耶穌も亦其見たりし處を證し(三の十一)其言と工とに依りて神を示し(五の廿)又己が神より來れることを證せり(六の四十六)。神は又耶穌に依りて我儕に語り(十四の九、十)、モーセ及び預言者に依りて耶穌の子なることを證し(五の卅七、四十六、十二の四十一)又彼がなさしめ給ふ所の工に依り(五の卅六)又耶穌地上の生活、殊に其バプテスマ十字架の死とに依りて證をなし、聖靈に依りて更に之を確證し(壹約五の六)以て人をして神が基督に依りて人類を救済し給ふ真理を信ぜしめ給へり。

(ロ) 信仰と知識。知る神を知るは基督を知る也。等の言は、屢々約翰の使用せる所の者にして、其書翰に於てのみ廿五回顯はるを見る。然れ共約翰に在りては信仰も知識も其義相同じく、二者區別し難し。信仰を以て知識の結果の如く言ふ處あり、又知識を以て信仰の結果の如く言ふ處あり(約六の六十九、壹約四の十六)。然れ共要するに約翰に在りては二者同義にして區別すべからず。

(ハ) 神に在りて生くる事、神の子となる事。約翰は信仰に來ることを以て、死より生に移ることをなせり(壹約三の十四)。信仰も死を生み出でること也とせば、信すること即ち神に依りて生れ、神の子となる新生の初め也。故に約翰に依れば、信徒は神の子也。信仰は永生を得、永生は神が聖靈に依りて信徒に與へ給ふ神自らの呼吸に外ならざれば也。故に「信する者は生を有つ」と言ひ、又「信する者は神に依りて生る」と言へり。然れ共約翰は神の子の地位と特權に入ることを、入りて後進歩する、その間に區別あるを認め、前者をば「水と靈とに依りて生る」(約一の三、五)又は「水と靈とに依りて生る」(約一の十三、壹約二の廿九、四の七、五の一)と言ひ、後者をば「神に居る」又は「基督に居る」と言へり(壹約二の六、廿七、三の廿四、四の十三、約十五の四)。「神に居る」とは新生に依りて得たる神との交通を繼續するの謂にして、神の方面に在りては其裏に由り、人の方面に在りては心を開きて其恵を受くるに由る。

(ニ) 罪なき事。神に在りて生き、神と一體に在りて其子となること言へる此神格的思想に、理想的倫理的觀念の伴ふは當然也。神は倫理的完全の存在也とせば、換言すれば「神は先に於て少しの暗處なし」とせば、彼に居るものも亦先に在り、光の中を歩まざる可らず。依然欺騙を行ひ、憎悪、私心を蓄へて斯く行ふ者は、神と共に在りと言ふ可らず。故に約翰は「もし我儕神と同心也と言ひて暗を歩かば、我儕が言ふ所は虚にして真理を行ふに非ず」と言へり(壹約一の六)。然れ共彼は更に進みて「凡そ彼に居る者は罪を犯さず、凡そ罪を犯すものは未だ彼を見ず彼を識らざる也」(三の六)と言ひ「凡そ神に依りて

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

生るゝ者は罪を犯さず、善神の種其裏に在るに依る。彼亦罪を犯すこと能はず、蓋神に依て生るれば也(三の九)と言ひ、又「凡て神に依て生れたる者の罪を犯さざることを我信は知る。神に依て生れたる者は自ら守る。かの悪者之に關ることをせざる也(五の十八)」と言へり。斯く約翰は一方に神に依て生るゝ者の罪を犯さず、又犯すこと能はざることを極言したれ共、又「もし罪なしと言はば是れ自ら欺けるにて眞理我信に在るなし」と言へり(一の八)。蓋し後者は信徒の實際的生活に就て言ひ、前者は理想的生活に就て言へる者にして、其間に矛盾あるなし。

(七) 愛は神の誠を守る力、換言すれば正義、聖潔の原理として信仰と均しき力を有する者と思惟せらる。凡そ耶穌を基督と信する者は神に依て生れたる也、凡そ之を生む者を受する者は亦其生るゝ所の者を受する也(壹約五の二)と言へるは、約翰が信仰を以て根本的の見、愛を以て其上に立てる者を見るを示す。其意蓋し信徒は神の子也、神の子なるが故に其父と兄弟と愛する也と云ふに在り。而して此言は又兄弟に對する愛は、神に對する愛の結果也との義を含む。神を受する者は亦其兄弟を受すべし、此誠は我信彼より授けられたり(四の廿一)と言へるも同義也。彼に依れば、神に對する愛の眞なることは、唯人に對する愛に依りてのみ證せらるべし。もし我は神を受すと云ひて、其兄弟を憐むるは是れ偽者也。既に見る所の兄弟を受せずして、未だ見ざる神を如何で愛せんや(四の廿)。然れ共兄弟に對する眞の愛は、唯眞に神を受し其誠に従ふことに依りてのみ得らるべし。故に曰く「我信もし神を受して其誠を守らば此に依りて我信神の兒女を受す

ることを知る」と(五の二)然らば則ち神に對する愛は何ぞ。先づ第一は「此世或は此世に在る物を愛せざる」と也(二の十五)。彼の所謂此世とは「肉體の慾、眼目の慾、又驕り起る驕傲(二の十六)」の謂にして、人類又は現世生活の義に非ず。然れ共是れ唯神に對する愛の消極的方面のみ。愛は必ず積極的に之を顯はさるべからず。即ち宗教的には篤く神を信じ、神の旨に遵へることを求むる也、神に向ひて畏るゝ所なき也(三の廿一、五の十四)。道徳的には基督の遺したる新しき誠に従ひて互に相愛すること也(三の十一、十四、十六、四の廿)。斯く約翰は兄弟に對する愛を高調したれ共、其所謂兄弟とは同一信仰の範圍に在る者の謂にして、彼は耶穌が廣く人に對する愛を説き、さては敢て對する愛に迄及びたりしが如く、廣く世に對する愛を説かず。彼は神の子と然らざる者をも檢別し「我信は神につき奉世は悪者に屬するを我信は知る」と言へり(五の十九)。彼は學季來り最後の戦争に在りて思惟し、其全力の愛を獻げて教會のために盡すを以てよしと見たりと也(二の十八)。

(五) 終末論。約翰は永生、審判を以て現實の事となしたり(約三の十八、壹約三の十四)。然れ共之がために未來の完全を望まざりしと思惟すべからず。彼は教會と世との争闘の尙暗なるを見、其最後の勝利を未來に望みたり。故に曰く「愛する者よ我信今神の子たり、後如何、未だ露はれず、其現はれん時には必ず神に似んことを知る」と(壹約三の二、三の三)。彼は又基督の再來を近きに在るを信じ(二の廿八、四の十七)。此點他の新約記者と異なる所なし(【參考書】約翰に關する比較的最近の著書はレク

レルの「使徒時代及び使徒後の時代」フアールルの「基督教の初代」クローグの「使徒約翰傳」ランキンの「最初の聖徒」等、約翰の教義に關する最近の著書はウァイツ、バインツ、スチーブンス等の新約聖書神學、ホルトンの「天啓及び聖書」ゲメントの「耶穌の教訓」ワグネルの「最初の見證者」スチーブンスの「約翰神學」等也。

ヨハネ バプテスマの(施洗約翰) John the Baptist. 人名。バプテスマのヨハネに關しては、新約全書に記載せられたる外には、ユウセビウスの引けるヨセファスの記事あるのみ。最も詳なるは路加傳の記事にして、馬太傳の記事は大抵之に一致し、馬可傳の記事は甚だ簡短也。第四福音書は其他の福音書が主として耶穌がバプテスマを受けた後以前に於けるヨハネの預言的教訓を記せるに反し、其以後の見聞を記せり。

(一) ヨハネの生涯。バプテスマのヨハネはザカリヤとエリサベツとの間に生れたる子也。エリサベツはアロンの子にして、ザカリヤはアビアの所に屬する祭司なりき(路一の五)。其生れたる時は正確に定め難しと雖も、紀元前六年より同三年迄の間に、耶穌生涯の六箇月以前なりしことは、路一の廿六より推知せらる。其場所に關しては、或はアロン也と云ひ、或はベツレヘムの西北ハインカリムと云へる村落也との傳説ありと云ふ者あれ共、何れも確證なく、吾人は「山地なるユダの邑(路一の廿九)」と云ふことの外確かなることを知らず。ヨハネ幼時の生活及び教訓に就ては、路加が「主の手後と共に在りき(一の六十六)」と云ひ、「斯くて嬰兒は漸成長し、精神益々強健にして、以色列に顯はるる日、野に居れり(一の八十)」と云ひ、又天使ガブリエ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ルが「此子葡萄酒と濃酒を飲まじ、母の胎より生れ出で聖潔に充さる(一の十五)」と云ひたりと云へることの外何事も明ならず。斯くてヨハネは凡そ三十歳の頃に至りて「野に居りて神の命令を受け、ヨルダン川の邊なる四方の地に來りて」傳道を開始せり(路三の二、三)。而して此はテマヨ、カイザル在位の十五年(即ち紀元廿五、廿六年)なりしといふ(路三の一)。耶穌がバプテスマを受けたるは此より幾箇月の後なりしや確かならざれ共、耶穌出現後の最初の過越節が紀元廿七年の過越節なりとせば、バプテスマは其以前の事なるべからず。而して約一の十九、四十二の記事はバプテスマ以後の事に係り、其間福音書の記事は其以前の事に關す。次の問題は耶穌のバプテスマヨハネ因縁との間に如何程の時日ありしやとの事也。路三の十九、廿にはヨハネの因縁を耶穌のバプテスマ以前に記したれ共、此は耶穌出現の事を記す前に、ヨハネに關する記事を終らんとすなりし事明也。太四の十二、可一の十四は耶穌最初のガリラヤ行をヨハネの因縁と連結し、之を其以後の事也とせり。而して約翰傳は耶穌が暫らくガリラヤに留りて過越節のためエルサレムに往きたることを記し「此時ヨハネは未だ獄に入れられざりき」と明言せり(三の廿四)。思ふに約翰傳の記せるガリラヤ行は、耶穌が其處にて傳道をなせし以前の事にして、太四の十二、可一の十四のガリラヤ行は約四の二のガリラヤ行と同一のものなるべし。兎に角ヨハネの因縁は紀元廿七年の過越節の後に起りたることにて、耶穌のガリラヤ行は過越節より久しき後の事に非ず。而して太、可に依れば、耶穌のガリラヤ行はヨハネの因へられたるがため也と云へば、此因縁は紀元廿七年の初めのことなりし

なるべし。入獄中ヨハネは其弟子を耶穌の處に遣はして、耶穌は果してメシヤなりや否やを問はしめたりしこの事太十一の二、路七の十八に記さる。太十四の三以下、可六の十四以下にヨハネの設されたることを記したれ共、此はヘロデが耶穌の風聞を聞き、ヨハネ死より幾れる也と云ひたりしことを説明せんために挿入したるものなれば、之に依りて其時日を定め難し。耶穌がバプテスマの節にエルサレムへ往きし時、ヨハネの事に言及し、既に過去の事の如く言へるを見れば(約五の廿五)彼の死は思ふに此節の前に起りたりしことなるべく、兎に角紀元廿八年の初めより遅かるべからず。傳説に依れば、彼はサマリアに葬られたりしといふ。彼の働きたる場所はユダヤの野(太三の一)、ミヨルダンの隘谷なりき(約三の廿六及び彼がヘロデ、アンテパスの統治權の下に來りし事實より推せば、ペリヤに或る時を遊りたりしなるべし)。

(二) ヨハネの事業及び教訓。バプテスマのヨハネなる者は、他のヨハネと區別するため用ゐられたるものなりや否やは暫く之を問はず。兎に角之に依て彼の重なる事業のバプテスマを施すに在りし事は明也。猶太人の考に依れば、バプテスマを施すことはメシヤ若しくは其前驅者たるエリヤ又は「かの預言者」のみなし得べきことなりしが故に、ヨハネのバプテスマを施す權利に就ては早くより疑問ありしが(約一の廿五)ヨハネは之に答へて、自ら天よりバプテスマを施す使命を受けたりと云へり(約一の廿三)。彼のバプテスマの意義目的に就ても亦早くより争ありしが(約三の廿五)可一の四、路三の三には之を以て「罪の洗滌を得せんがための悔改のバプテスマ」となし、太三の十一には「悔改めさせんとす

のバプテスマ」となし、其意義明了ならず。サパテエは之を説きて「新以色列聖別の式」也とせり。思ふに此は來るべき神の國に對して、猶太教への改宗者が猶太教に對して取りたる同一の地位を取らり、神に對しては各自其責任を負ふべしとのことを表したるものなるべし。耶穌はヨハネのバプテスマは天より來れる者にして、之を否むは神の目的を否むに均しく、之を承くるは神の義の意義を承認するに均しとの意味の言を語れり(太十一の廿、路七の廿九、卅)。

天使ガブリエルはヨハネをマリアの預言と交渉せしめし、之を以てエリヤの再來とせしと云ふに「エリヤの心と才能を以て」先に來れるもの也とせり(路一の十七)。ヨハネは自ら「エリヤなることを否みたりしが(約一の廿一)耶穌はヨハネを以て來るべきエリヤ也とせり(太十一の十四、十七の十一、十三)。ヨハネが自己に應用せしめ(約一の廿三)福音書記者がヨハネに適用したる(太三の三、可一の二)他の預言は賽四十の三也。彼は斯く自ら預言の目標となりたることなれば、預言者よりも大なる者なれ共、亦實に預言者にして、ザカリヤも(路一の七十六)耶穌も(太十一の十一)一般の人々も(太十四の五、廿一の廿六)彼を預言者として承認せり。彼は實に「最後の預言者」預言書の終末」なりし也(太十四の十三、路十六の十六)。彼の教訓の要旨は、比較的充分に路加に記されたり共、之を抽象的に過ぎず。路加は彼の教訓を以て、賽四十の三に預言せられたる準備的の事業を實行せる結果也となし、且彼の宣傳せる教訓を「福音」と呼べり(三の十八)。而して彼の宣傳せる福音は神の國に近かりしことなれ共、神の國の性質如何、神の國は知

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

何にして建設せらるべきや、何人が神の國に入り得べきや等に就ては何事をも言はず。彼は思ふに猶太人の信仰に従ひて目に見ゆべき王國を期待したりしなれば、彼は亦此王國を以て聖的、世界的のものを見なし、之が實現の道を講じたものなるべし。彼に依れば、國民的特權は最早用なし、人は皆悔改を要す。且人は通常の業を爲さざる可らざれば共、之をなすには新なる精神を以てせざる可らず。斯く彼は個人的善徳の責任に重きを置き、個人的善徳の善徳に在りてこそを宣傳したり。今彼の説教の要旨を概括すれば左の諸點に約するを得べし。即ち(一)罪の告白と悔改の大切なる事。(二)先づアブラハムありと言ひて、國民的特權を待む、この無益なる事。(三)個人的善徳の善徳の日近づく事。此諸點は唯以色列人の敵に向ひて顯はるもののみならず、又以色列人に向ひて顯はるものなる事。(四)其日常の業を行ふに新なる精神を以てすべき事。(五)彼はメッシャに非ず、メッシャより劣れるものなる事也。

といふ(十八の廿五、十九の三)亦以てヨハネ説教の感化が亞細亞半島に迄及びたりしを知るべき也。(二)ヨハネと耶穌との關係、最古の福音書なる馬可傳に依れば、ヨハネは耶穌が彼より優れたる者、彼の後に來らんとする者なることを宣傳へたれ共、彼が耶穌を知りて之を後に來るべき教主也として世に紹介せりとのことを言はず。彼が初めより耶穌を教主として承認せざりし事は、彼が後中より弟子を耶穌の處に遣はして「來るべき者は汝なるか、又我等外に待つべきか」といはしめたりといへるに依りて知るべし。然れ共教主の先驅者たりしヨハネは自ら耶穌の教主たるを知りしに相違なしとの思想後に至りて起りしこと疑なく、此思想は既に共観福音書中後人の手に成りし部分に顯はれたり(太三の十四、路二の廿九、四十一)而して此思想は第四福音書に至りて更に發達し、ヨハネは耶穌がアブラハムを受けし時より耶穌の教主たるを知り、之を世に紹介したりとせり。ヨハネ之が證をなして呼び言ひけるは、我れ先に我に來れらんとせば、我より優れる者也、蓋我れ先に在りし者なりは、我より優れる人も、蓋我れ先に在りし者の罪を任ふ神の羔羊を見よと言へり(一の廿九)神の子なるを證せり(二の云ふ(一の廿四)はそれ也)「基督教古事」詩典」及びニコルその他の「聖書詩典」中の「アブラハム」のヨハネの項、ホルトの「猶太的基督教」レナンの「耶穌傳」等を見よ。

△のヨハネス之を傳ふ。ダマスコのヨハネスは第七、八世紀の交ダマスコに生る。市は既にテラセン人の手中に在りき。父セルウウスは彼を以て太利の僧ヨスマスに托して教育す。父の死後回教帝より高官に任ぜられし、七三〇年頃帝レオはマリア像を用ふることを廢せんといふありしに、ヨハネスは像を辯護せし書を著し、之に復讐せられ、隻手切斷の刑に處せらる。然るに聖母を伏拜せしに由て切られし手を再び得、之を謝せんため、前職に再任せられしに拘らず、之を棄て其財産をば親族貧者に與へ、エルサレムに近き聖テラスに退き、後エルサレムの長老とせらる。後又コンスタンチヌス、カパドニヌス帝に抗して熱心に拜像を辯護し、之がために七五四年より七八七年の間に其座にて死す。ヨハネスの大作は「知識の泉」(The Fountain)なり。彼の煩瑣の如く哲學を用ひて神學を組織せり。其神學本體の部には神を知るべからざるものとし、人は唯其無限不可測といふ如き消極的必然性を説き得るに止まる。神の他のものとの關係は善といふ正といふものなり。神の存在は不完全物を推して完全者を知るより論證せらる。三位一體は異教と猶太教との根本思想の結合なり。三位一體は異教と猶太教との如し、然れども第二第三者は第一者に屬し、聖靈は父より子に依りて出づ。神は人の自由意志の行動を先見す、然れ共之を預定せず。基督の中には神性と人性結合し、兩つながら自由なり。基督の事業は罪の破りし所を復するにあり。罪は人の自由に濫用す。人は墮落の後、其神より與へられたる苦に堪ふる方を用ひて清めらる。則ち義の行動な

ヨハネス十二世 John XII.

羅馬法王。本名オクタヴィアヌス。羅馬の貴族なりしが、九五五年十六歳で十八歳にして急に法王とせらる。法王の世上権を獲取るに熱中し、オットー一世をアルプスの外より招きてバレンガル及び希臘人に當り自己を助けしめんとせり。オットーは必ず法王の一身を其法位を危からしめざるべしを誓ひしが、他の諸帝と戦を構ふるに至りしを以て、法王は決してバレンガル及び希臘人と協約せざるべきを約せしめ、出陣し、凱旋して羅馬に入れば法王は前の約束を忘れて逃走したり。此を以てオットーは羅馬人に迫り、爾來皇帝若くは皇子の承認を経ずして法王を擧ぐるを得ずといふ誓約を結ばしめぬ。ヨハネスは放逸の生活を送り、教會の庫裡は不潔なる音響にて騒がしく、賭博の聲にて鳴りぬ。九六三年聖彼得會堂にて開かれし大會は、彼を逐逐逐逐逐逐等の諸罪にて罪し、法王位より廢したり。オットー去りて彼は羅馬に歸り、次の大會にて復位せし、九六四年森涯の床中にて卒中のために死せり。

ヨハネス十三世 John XIII.

羅馬法王。テマキウスに生れ、才能優れ居たりしが、敗徳の人なりき。一四一〇年簡略に依りて法王に選ばる。廢せられてハイデルベルクに禁錮せられしが、脱れてマルチン五世に侍リッスタルムの「カレディナル」にシヨッパにせらる。一四一九年死す。

ヨハネス四世 John IV.

羅馬法王。羅馬のヘラヤリス二世及びグレゴリウス一世が前代法王等の跡を踏んで世界的教長の名を冒さんとするに抗議し、グレゴリウスに對して此はサタンに誘はれし言の現出なりと言へり。されど彼は間もなく死し、希臘教會より聖者とせらる。

ヨハネス五世 John V.

羅馬法王。羅馬のヘラヤリス二世及びグレゴリウス一世が前代法王等の跡を踏んで世界的教長の名を冒さんとするに抗議し、グレゴリウスに對して此はサタンに誘はれし言の現出なりと言へり。されど彼は間もなく死し、希臘教會より聖者とせらる。

ヨハネス六世 John VI.

羅馬法王。羅馬のヘラヤリス二世及びグレゴリウス一世が前代法王等の跡を踏んで世界的教長の名を冒さんとするに抗議し、グレゴリウスに對して此はサタンに誘はれし言の現出なりと言へり。されど彼は間もなく死し、希臘教會より聖者とせらる。

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

り、然れ共調練の目的存す。基督は人を愛せり願ふために死せり。神は之に依りて義と愛とを全うせり。願は我等が自由意志にて之を違ふ心の中に聖靈に依れる基督の絶えざる活動あるに依りて有能なる。アブラハムの時水は新に依りて聖靈と一なる。晚餐のパンと酒とは基督の體と血とに化し、我等の精神の實質となるを説けり。此外尚著者あり。復活に就ての讚美歌あり。

王。敗走女子テオドロの勢力に依りてコロキヤ及びテラセンの監督となり、九一四年羅馬の監督となる。選挙に就り、武裝して軍營に入り、先例なき習を始めた。テラセン人と戦ひて勝を得しが、九二九年獄中に於て死す。

ニコラウス五世を立てたり。ヨハネスはアヴ、マリアスと三唱してマリアを崇むるの習慣を認定し、又都市の監督を選ぶの権利を奪ひぬ。死にし時は僧侶の就職初年収入貢納に依りて生じたる金銭等にて多くの富を殖しぬ。

ヨハネス八世 John VIII.

羅馬法王。羅馬に生れ、八七二年羅馬の監督とせらる。性大膽にして野心に充ち統治の能力に富む。中央及び南部以太利全部に法王領を擴げんと企て、諸帝の権力を法王權の擴張に利用せんとせしが、悉く失敗せり。八七五年には佛蘭西の禿王シャルルを戴冠せしめて多くの領地を附贈し取り、八八一年には其子恩王シャルルを戴冠せしめてテラセン人對抗の助を得んとせしが果せず。次で又以太利經營のため東帝の助を假らん心より、フォーチウスのコンスタンチノープルの教長たることを承認せしが、之も其意の如くならずして承認を取り消せり。彼は又メトアイウスをスラヴの監督として認定せり。八八二年臨にて暗殺せらる。

ヨハネス九世 John IX.

羅馬法王。羅馬に生れ、八七二年羅馬の監督とせらる。性大膽にして野心に充ち統治の能力に富む。中央及び南部以太利全部に法王領を擴げんと企て、諸帝の権力を法王權の擴張に利用せんとせしが、悉く失敗せり。八七五年には佛蘭西の禿王シャルルを戴冠せしめて多くの領地を附贈し取り、八八一年には其子恩王シャルルを戴冠せしめてテラセン人對抗の助を得んとせしが果せず。次で又以太利經營のため東帝の助を假らん心より、フォーチウスのコンスタンチノープルの教長たることを承認せしが、之も其意の如くならずして承認を取り消せり。彼は又メトアイウスをスラヴの監督として認定せり。八八二年臨にて暗殺せらる。

ヨハネス十世 John X.

羅馬法王。羅馬に生れ、八七二年羅馬の監督とせらる。性大膽にして野心に充ち統治の能力に富む。中央及び南部以太利全部に法王領を擴げんと企て、諸帝の権力を法王權の擴張に利用せんとせしが、悉く失敗せり。八七五年には佛蘭西の禿王シャルルを戴冠せしめて多くの領地を附贈し取り、八八一年には其子恩王シャルルを戴冠せしめてテラセン人對抗の助を得んとせしが果せず。次で又以太利經營のため東帝の助を假らん心より、フォーチウスのコンスタンチノープルの教長たることを承認せしが、之も其意の如くならずして承認を取り消せり。彼は又メトアイウスをスラヴの監督として認定せり。八八二年臨にて暗殺せらる。

ヨハネス十一世 John XI.

羅馬法王。羅馬に生れ、八七二年羅馬の監督とせらる。性大膽にして野心に充ち統治の能力に富む。中央及び南部以太利全部に法王領を擴げんと企て、諸帝の権力を法王權の擴張に利用せんとせしが、悉く失敗せり。八七五年には佛蘭西の禿王シャルルを戴冠せしめて多くの領地を附贈し取り、八八一年には其子恩王シャルルを戴冠せしめてテラセン人對抗の助を得んとせしが果せず。次で又以太利經營のため東帝の助を假らん心より、フォーチウスのコンスタンチノープルの教長たることを承認せしが、之も其意の如くならずして承認を取り消せり。彼は又メトアイウスをスラヴの監督として認定せり。八八二年臨にて暗殺せらる。

ヨハネス十二世 John XII.

羅馬法王。羅馬に生れ、八七二年羅馬の監督とせらる。性大膽にして野心に充ち統治の能力に富む。中央及び南部以太利全部に法王領を擴げんと企て、諸帝の権力を法王權の擴張に利用せんとせしが、悉く失敗せり。八七五年には佛蘭西の禿王シャルルを戴冠せしめて多くの領地を附贈し取り、八八一年には其子恩王シャルルを戴冠せしめてテラセン人對抗の助を得んとせしが果せず。次で又以太利經營のため東帝の助を假らん心より、フォーチウスのコンスタンチノープルの教長たることを承認せしが、之も其意の如くならずして承認を取り消せり。彼は又メトアイウスをスラヴの監督として認定せり。八八二年臨にて暗殺せらる。

ヨハネス十三世 John XIII.

羅馬法王。羅馬に生れ、八七二年羅馬の監督とせらる。性大膽にして野心に充ち統治の能力に富む。中央及び南部以太利全部に法王領を擴げんと企て、諸帝の権力を法王權の擴張に利用せんとせしが、悉く失敗せり。八七五年には佛蘭西の禿王シャルルを戴冠せしめて多くの領地を附贈し取り、八八一年には其子恩王シャルルを戴冠せしめてテラセン人對抗の助を得んとせしが果せず。次で又以太利經營のため東帝の助を假らん心より、フォーチウスのコンスタンチノープルの教長たることを承認せしが、之も其意の如くならずして承認を取り消せり。彼は又メトアイウスをスラヴの監督として認定せり。八八二年臨にて暗殺せらる。

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

約翰第壹書

約翰第壹書

約翰第壹書

ヨハネ

ヨハネ

ヨハネ

IIIの部

約翰第壹書

約翰第壹書

約翰第壹書

書には一定の方案なく、唯作者獎勵の言語を論理的に接續なく羅列したるに過ぎずと云ひ、之に反してベングレルは此書には詳細の點に至るまで一定の方案ありて、最も組織的に作者の意見を述べたる者也と言へり。然れ共此二説何れも極端にして、眞理は蓋し中間に在り。即ち此書は連綿な一線を畫めたる者に非ず、又關係なき觀念を交りに羅列したる者にも非ず、作者の目的に従て其言はんとする所を述べたるものなるが故に、自ら方案あり、順序あり。然れ共作者は保護の如く論理的傾向を有せず、寧ろ神秘的傾向を有したりき。故に詳細の點まで論理的の傾向を求めんとするは誤れり。此書の内容は學者之を種々に區分す。即ち或者は之を四部に區分し、道德的冷淡の危險(一の五二の十一)世を受ずること及び基督に敵する者(二の十二、廿八)兄弟的愛の生活の必要(二の廿九、三三)及び基督教的な生活の基礎としての信仰(三の廿三、三三、三十七)を論ぜり。或者は之を二部に分し(一の五二の十一、五二の廿八、二の廿九、三三)前者は神は光也との命題より、後者は神は愛也との命題より、共に父なる神及び主耶穌基督と同心なるべしとのことを論ぜり。或者は之を三部に區分し、生命の問題、眞理と虚偽との争闘及び信仰の勝利を論じたる也となせり。精密に之を區分せんことは頗る困難なれ共、此書にも諸言あり、本論あり、結論あり、又主要の思想あり、而して此の思想より彼の思想に移るの跡決して認め難きに非ず。

【此書の内容】 作者は劈頭先づ、以下に言はんことなる事柄の基礎たる大事實、即ち父と共に在りし究りなき生命の耶穌基督に於て顯現したることを叙し、基督の再来を期待し、偽預言者の發現を以て末世の表徴也となしたり。故に此書の書かれたるは、偽預言者の顯はれたる時なること明也と雖も、抑も此書に所謂『基督に敵する者』とは何人の謂なりや。或學者は之を以て信仰を失墜したる基督教徒也となしたり共、此書の『基督に敵する者』とは、教會以外に起りたる者の謂にして、墮落せる基督教徒の謂に非ず。又之を以て猶太人殊にエビオンの一派也となす者あり共、此書の所謂偽教師の陥りたる誤謬は、單に耶穌の教主たることを拒否せる一事に在るのみならず、彼等は耶穌の基督たることを否むのみならず、又父と子とを拒み(二の廿二、廿三)耶穌基督を認めざる(四の三)耶穌基督の肉體となりて來れることを認めざる(四の二)と云へり。此等の誤謬は耶穌と基督とを區別し、耶穌は其バプテスマを受けたる時基督と結合し、以て其十字架に釘けられたる時に迄玉れり云へるモリシナスの説に最も能く似たり。去れば此書はモリシナスの異端の起りたる場合に書かれたる者也として見るを最も適當也となす。

【此書の作者】 古來此書は一般に使徒約翰の作也として承認せられたり。古代に於てアロヤと稱する一派は、第四福音書及び約翰黙示録と共に此書を拒否したりとの説あれ共明ならず。マルキオヌスは其經典の中より此書を省きたれ共、此は歴史的證據の缺乏せるに依るに非ず、唯自己特有の説と一致せるがために外ならず。第六世紀の頃公同書翰は凡て使徒の作に非ずとの説を唱へたる者ありとのことなれ共、此書の使徒約翰の作なることを否める者は以上數者に過ぎず。第十六世紀に至り、ウエフ、スカウゲル(Johann Scheibel)なる者、約翰の名を貰へるし、又作者が前者に向て有する大目的、即ち彼が此書を書けるは、彼等が父及び其子耶穌基督と同心たることに依りて、其喜樂を充たしめん爲め也との事を述べたり(一の四)而して彼は單刀直入『神は光也』との眞理を述べて其主論に入り、神は光なるが故に、彼と同心たらんとする者は暗中に歩む可らず、但し人は皆罪あるものなれば之を告白せざる可らず、人もし己の罪を告白せば、神は吾人の罪を赦し、諸の不義より吾人を潔むべしと云ひ(一の五、二の二)次に神を知ることに移り、神を識ることは神を守ることと云ひ、神に居る者は基督の歩みし如く歩むべしと勸め(二の三)光に歩むこと兄弟を愛することとは同一也との意を述べ、兄弟を愛すべしとの誠は誠中の誠にして、舊く且新しき誠也と云ひ(二の七、十一)基督教徒たる者は、此世或は此世に在る物を受ずる勿れ、又今既に基督に敵する者出で來り季の世ならんため、我等主の主なる時に其前に立つることならんために常に主に居るべしとのことを勸めたり(二の十二、廿八)斯くて神は光也の思想は、神は我々の思想に轉じ、作者は此新なる觀念に従ひて、義を行ふ者は神の子也、神の如くならんとの希望を有する者は自らを潔めざる可らず、基督は罪なきが故に、基督に居る者も罪を犯すこと能はずと云ひ、神の子と惡魔の子との區別を述べ、凡そ義を行はず其兄弟を愛せざる者は、皆神より出でしに非ずと云ひ、義を行ふこと兄弟を愛すること同一也となし、再び讀者に向ひて彼を受ずること勿れと警告せり(二の廿九、三三)。

IIIの部

約翰第壹書

約翰第壹書

約翰第壹書

【此書の作者】 古來此書は一般に使徒約翰の作也として承認せられたり。古代に於てアロヤと稱する一派は、第四福音書及び約翰黙示録と共に此書を拒否したりとの説あれ共明ならず。マルキオヌスは其經典の中より此書を省きたれ共、此は歴史的證據の缺乏せるに依るに非ず、唯自己特有の説と一致せるがために外ならず。第六世紀の頃公同書翰は凡て使徒の作に非ずとの説を唱へたる者ありとのことなれ共、此書の使徒約翰の作なることを否める者は以上數者に過ぎず。第十六世紀に至り、ウエフ、スカウゲル(Johann Scheibel)なる者、約翰の名を貰へるし、又作者が前者に向て有する大目的、即ち彼が此書を書けるは、彼等が父及び其子耶穌基督と同心たることに依りて、其喜樂を充たしめん爲め也との事を述べたり(一の四)而して彼は單刀直入『神は光也』との眞理を述べて其主論に入り、神は光なるが故に、彼と同心たらんとする者は暗中に歩む可らず、但し人は皆罪あるものなれば之を告白せざる可らず、人もし己の罪を告白せば、神は吾人の罪を赦し、諸の不義より吾人を潔むべしと云ひ(一の五、二の二)次に神を知ることに移り、神を識ることは神を守ることと云ひ、神に居る者は基督の歩みし如く歩むべしと勸め(二の三)光に歩むこと兄弟を愛することとは同一也との意を述べ、兄弟を愛すべしとの誠は誠中の誠にして、舊く且新しき誠也と云ひ(二の七、十一)基督教徒たる者は、此世或は此世に在る物を受ずる勿れ、又今既に基督に敵する者出で來り季の世ならんため、我等主の主なる時に其前に立つることならんために常に主に居るべしとのことを勸めたり(二の十二、廿八)斯くて神は光也の思想は、神は我々の思想に轉じ、作者は此新なる觀念に従ひて、義を行ふ者は神の子也、神の如くならんとの希望を有する者は自らを潔めざる可らず、基督は罪なきが故に、基督に居る者も罪を犯すこと能はずと云ひ、神の子と惡魔の子との區別を述べ、凡そ義を行はず其兄弟を愛せざる者は、皆神より出でしに非ずと云ひ、義を行ふこと兄弟を愛すること同一也となし、再び讀者に向ひて彼を受ずること勿れと警告せり(二の廿九、三三)。

【此書の作者】 古來此書は一般に使徒約翰の作也として承認せられたり。古代に於てアロヤと稱する一派は、第四福音書及び約翰黙示録と共に此書を拒否したりとの説あれ共明ならず。マルキオヌスは其經典の中より此書を省きたれ共、此は歴史的證據の缺乏せるに依るに非ず、唯自己特有の説と一致せるがために外ならず。第六世紀の頃公同書翰は凡て使徒の作に非ずとの説を唱へたる者ありとのことなれ共、此書の使徒約翰の作なることを否める者は以上數者に過ぎず。第十六世紀に至り、ウエフ、スカウゲル(Johann Scheibel)なる者、約翰の名を貰へるし、又作者が前者に向て有する大目的、即ち彼が此書を書けるは、彼等が父及び其子耶穌基督と同心たることに依りて、其喜樂を充たしめん爲め也との事を述べたり(一の四)而して彼は單刀直入『神は光也』との眞理を述べて其主論に入り、神は光なるが故に、彼と同心たらんとする者は暗中に歩む可らず、但し人は皆罪あるものなれば之を告白せざる可らず、人もし己の罪を告白せば、神は吾人の罪を赦し、諸の不義より吾人を潔むべしと云ひ(一の五、二の二)次に神を知ることに移り、神を識ることは神を守ることと云ひ、神に居る者は基督の歩みし如く歩むべしと勸め(二の三)光に歩むこと兄弟を愛することとは同一也との意を述べ、兄弟を愛すべしとの誠は誠中の誠にして、舊く且新しき誠也と云ひ(二の七、十一)基督教徒たる者は、此世或は此世に在る物を受ずる勿れ、又今既に基督に敵する者出で來り季の世ならんため、我等主の主なる時に其前に立つることならんために常に主に居るべしとのことを勸めたり(二の十二、廿八)斯くて神は光也の思想は、神は我々の思想に轉じ、作者は此新なる觀念に従ひて、義を行ふ者は神の子也、神の如くならんとの希望を有する者は自らを潔めざる可らず、基督は罪なきが故に、基督に居る者も罪を犯すこと能はずと云ひ、神の子と惡魔の子との區別を述べ、凡そ義を行はず其兄弟を愛せざる者は、皆神より出でしに非ずと云ひ、義を行ふこと兄弟を愛すること同一也となし、再び讀者に向ひて彼を受ずること勿れと警告せり(二の廿九、三三)。

【此書の作者】 古來此書は一般に使徒約翰の作也として承認せられたり。古代に於てアロヤと稱する一派は、第四福音書及び約翰黙示録と共に此書を拒否したりとの説あれ共明ならず。マルキオヌスは其經典の中より此書を省きたれ共、此は歴史的證據の缺乏せるに依るに非ず、唯自己特有の説と一致せるがために外ならず。第六世紀の頃公同書翰は凡て使徒の作に非ずとの説を唱へたる者ありとのことなれ共、此書の使徒約翰の作なることを否める者は以上數者に過ぎず。第十六世紀に至り、ウエフ、スカウゲル(Johann Scheibel)なる者、約翰の名を貰へるし、又作者が前者に向て有する大目的、即ち彼が此書を書けるは、彼等が父及び其子耶穌基督と同心たることに依りて、其喜樂を充たしめん爲め也との事を述べたり(一の四)而して彼は單刀直入『神は光也』との眞理を述べて其主論に入り、神は光なるが故に、彼と同心たらんとする者は暗中に歩む可らず、但し人は皆罪あるものなれば之を告白せざる可らず、人もし己の罪を告白せば、神は吾人の罪を赦し、諸の不義より吾人を潔むべしと云ひ(一の五、二の二)次に神を知ることに移り、神を識ることは神を守ることと云ひ、神に居る者は基督の歩みし如く歩むべしと勸め(二の三)光に歩むこと兄弟を愛することとは同一也との意を述べ、兄弟を愛すべしとの誠は誠中の誠にして、舊く且新しき誠也と云ひ(二の七、十一)基督教徒たる者は、此世或は此世に在る物を受ずる勿れ、又今既に基督に敵する者出で來り季の世ならんため、我等主の主なる時に其前に立つることならんために常に主に居るべしとのことを勸めたり(二の十二、廿八)斯くて神は光也の思想は、神は我々の思想に轉じ、作者は此新なる觀念に従ひて、義を行ふ者は神の子也、神の如くならんとの希望を有する者は自らを潔めざる可らず、基督は罪なきが故に、基督に居る者も罪を犯すこと能はずと云ひ、神の子と惡魔の子との區別を述べ、凡そ義を行はず其兄弟を愛せざる者は、皆神より出でしに非ずと云ひ、義を行ふこと兄弟を愛すること同一也となし、再び讀者に向ひて彼を受ずること勿れと警告せり(二の廿九、三三)。

ヨの部

約翰福音書

羅と同行したりしがヨハネ(徒十九の廿九)又は亞細亞まで保護に伴ひしアルベのガヨス(徒廿の四)又は保護のバプテスマを施したるコリントのガヨス(哥前一の十四)又は約翰がヘルガセの監督に任じたりと稱するガヨスと同一視する者あれ共、何れも推測に過ぎず。吾人は此書の書かれたる時代と場所を確定すべき者を有せず。然れ共第貳書との類似より之を察するに、是れ又約翰晩年の作にして、エヘソに於て之を書きたること殆ど疑なきが如し。

【此書の作者】 此書は第壹書第貳書と類似する處多きを以て、一般に使徒約翰の作也と推定せらる。外部の證據に關しては第貳書と同じく、ヘシト一譯中には之を缺き、ユウセビウスは之を疑問の書中に置き、オリゲナスは之を引用せず、イェロニムスは第貳書と同じく之を長老約翰の作となしたり。テオドレトス、タプリアヌス、イレニウスは之を引かず、亞歷山のクレメントも此書の事に就ては何事とも言はず。北亞非利加教會にても此書を承認したりし痕跡を見せず。然れ共ムラトリアン聖經、古代拉丁譯の中には之を見出すべく、又亞歷山のデオニシウス及びスリアのエフラエムは之を引用せり。而して此書を承認せる古代教會は一般に之を使徒約翰の作也となしたりき。此の如く此書の歴史的證明は第貳書に比して更に乏しけれ共、此書の私書性的性質は教會が長く之を承認するに躊躇したりし原因なりしなるべし(參考書に就ては「約翰福音書」及び「約翰第貳書」の條下に記されたる者を見よ)。

使徒アンタレンに示されたり。曰く、約翰其名に依りて全體の事を記すべし、而して其他の弟子は之を校閱すべしと云々。之と同一なる傳説は亦亞歷山のクレメント及びエヒファニウスに依りても亦傳へられたり。此の如く、約翰福音書の引用せられたるは紀元一百八十年の頃にして、其以前に引用せられたるの證據なしと雖も、其存在したりし、とは疑を容る可らず。ユスナヌスの「解題論」を著したるは紀元百四十七年前後の事なるが、其書中には第四福音書の教訓の反響せるもの少からず。博士エゾラ、アゴットはユスナヌス書中の言語の約翰福音書中の言語と近似せるものを最も精細に研究して、結論して曰く、「吾人はユスナヌスの時に第四福音書が使徒約翰の著作として承認せられたりしことを認めんば、紀元百廿五年の頃より先きエヒファニウスは其著書の中に、紀元百廿五年の頃亞歷山に其名を轟かしたりしバシライダが『夫れ凡ての人を照す眞の光世に來れり』との言語を引用したりとの事を言へり。此語は耶穌の言に非ずして、約翰自身の語なれば、他より來るの理あるべからず。而して其引用せる言語の約翰福音書と符節を合するものあるを見れば、紀元百廿五年の頃既に此福音書の存在したりしこと疑ふべからず。然れ共以上之證據は第四福音書が早くより存在したりしことを證すれ共、未だ之に依て此書の使徒約翰の作たる事實を證すること能はず。オリカルブは紀元百五十五年頃八十六歳の高齢を以て殉教者の死を遂げたる人なるが、傳説に依れば、彼は其生涯の大半を小亞細亞に於て約翰と共に送たりと云ふ。其弟子イレニウスの言ふ所に依れば、彼は約翰及び耶穌基督を直接に見たりし人々と交りたることを常に其弟子に語りたり

約翰福音書

約翰福音書

ヨの部

約翰福音書

しといふ。而してイレニウスは第四福音書の著者を以て約翰なりとなすを以て其師より得たる處也となし、之に依て第四福音書の使徒約翰に出でたるを證せんとするは、外部の證據に依て此書の使徒約翰に依りて著はされたるを主張するものと主なる論據なるが如し。然れ共内部の證據に依りて小亞細亞に住したりとの傳説を疑ひ、傳説は使徒約翰と長老約翰とを混交せりと論ぜられたり。使徒約翰が晩年ヘソに住したりとの事は思ふに事實にして、彼は又實に其記述する處を回想し、之を記述したりとするも、之を以て直ちに今日吾人が有する第四福音書を以て彼の著作也と断定す可らず。故に此問題を論定せんせば、更に内部の證據に就て之を研究せざる可らず。

言行を回想して、之を當時の教會に認めんため筆記すること能はずと信するを得ず。故に此第一の反對に對しては、吾人あまり重きを置かざるを得ず。多くの批評家が此書に對する最も大なる反對は、書中亞歷山派の哲學を知る人の著作なるを證するの文字有りとのことにて、即ち此書の語言に見ゆるロゴス説は、明かに此書の著者の希臘人なるが、若し猶太人ならばヘブライ語に於ては、非ずして、亞歷山に住し、當時の希臘思想に精通したるものなるを證すと云ふに在り。此書の語言が當時の思想を反映したりしヘブライ人のロゴス説に多少の接觸を有するは明かなる事實にして、何人も之を疑ふ可らず。然れ共ヘブライ人のロゴス説の見ゆるは、單に語言に止まり、之を外にして吾人は此書の他の部分に何等の感化をも認むる能はず。尤も「神の道」なる言語は感化も認むる能はず。此は單に神が曾て以色列人のために聖書に顯はし給ひ(五の卅八、十の卅五)今耶穌に依りて其弟子に示し給へるものと(八の五十五、十二の四十八以下、十四の廿四、七の六、十四、十七)使用せられたるに過ぎず。若し著者に於て實にヘブライ人の思想を顯はさんとしたりしとせば、此の如く此言語を使用したりしことは解釋すべからず。又此書中にはヘブライ哲學の特色たる神と世界の二元的對照あることとなく、耶穌は神の最高なる顯現也と雖も、神は自ら働き、又世界及び人類と直接の關係を有し給ひ、耶穌は唯父の撰選に従ひ其權威に依り、父と共に働きて之を論ぜば、ヘブライ哲學の思想を顯はすも、之を全體より論ずれば、本書の思想はヘブライ哲學の思想との

約翰福音書

約翰福音書

間には大なる相違あり。之をヘブライ哲學の產物也となすが如きは畢竟皮相の見過ぎず。然らば著者は何故に語言に於てヘブライ人に特有せるが如き語調を以てロゴスなる言語を使用したりしや。蓋し當時ヘブライ哲學は一世を風靡するの概あり。基督教は早くより之に接觸し、ロゴスなる語は遂にヘブライ人の意義に於て救主耶穌に適用せらるるに至りたり(九の十三)。於是著者は之を其體に用ゆること可なるを見、之を語言に置きたり。然れ共著者の用ゐたるは寧ろ其名目にして、其思想に非ず。故に彼は其語言に於て「道肉體となりて」人に近き神の性質を顯はしたりとの思想に重きを置き、以てヘブライ人の思想に反對したり。去れば語言にロゴスなる語を使用したりと云ふの理由を以て、此書の著者を希臘人、若くは亞歷山に住せる猶太人となし、使徒約翰の作たるを否むに充分なる理由と認むること能はず。

(二) 使徒約翰の作に非ずとする者の論據、内部の證據に依り全然使徒約翰の著作なるを拒否するものも論據に數箇有り。其一箇條として舉げられたるものは、耶穌がガラヤ湖邊に網を繕へる中より選びて其使徒となしたるセペタイの子約翰が、第四福音書に於て吾人が見る如き深大なる宗教的経験を巧妙なる希臘語に記述するを得べしとは信じ難しと云ふに在り。然れ共吾人はガラヤ湖に網を繕はる漁師が如何なる宗教的天才を有したりしやを知らず。福音書の示す處に依れば、彼は耶穌の選びたる使徒の中最も信任せられたる一人にして(可五の卅七、九の二、十三の三、十四の卅三)且最も愛せられたるものなりしといふ。耶穌の死後彼はエパサレムに在りて最も熱心に耶穌の遺言をなし、紀元五十年の頃彼は猶太人の教會に在りて彼得、雅各と共に柱と稱せられたといふ。吾人は斯る弟子が其晩年に至り、耶穌の

(三) 現形の第四福音書は使徒約翰の作に非ず。然らば即ち第四福音書は使徒約翰の著作なるべきやと云ふに、更に精密に此書を讀む者は、書中使徒約翰以後の手に成る者あるを見出すべし。抑も吾人は如何にして之を見出すや。

(イ) 共觀福音書の記事と對照して之を證す。今日の批評家は共觀福音書の問題を論ずるに方り、一般に二文書説を採用し、共觀福音書中最も古く成りたるものは馬可傳にして、馬太、路加の二福音書は馬可傳及びロヤアより其重なる材料を得たり。此二文書に得ざる部分は、口傳又は稍や後代に成れる文書に其材料を求めたりと言へり(「共觀福音書」の條を見よ)。故に第四福音書が果して使徒自身の手に出しものなりや否やを判定せんせば、此共觀福音書中

ヨの部

約翰福音書

に記せる最古の部分と對照し、以て其異同を檢せざる可らず。而して吾人之を對照せば、書中最古の傳説に反する記事あるを發見すべし。今其一二の例を擧ぐれば、(一) 耶穌の教主たることに關する、パテスマのヨハネの證言、第四福音書はパテスマのヨハネを以て耶穌を教主として世に紹介したるものとて、頭はしたり。即ち曰く「情愛に神の遣はし給へるヨハネ云へるものあり、其來りしは證の爲めなり、即ち光に就て證をなし、凡ての人をして己に因りて信ぜしめんが爲め也(一の六一八)と。又曰く「ヨハネ之が證をなして呼び云ひけるは、我れ先に我に後來らんものは、我より優れる者也、蓋我より先に在りし者なれば也云ひしは此人也(一の十五)と。其他其弟子に告げて、其パテスマは、彼より大なる者を以色列に知らしめんが爲め也云ひ(一の卅一)「世の罪を任ぶ神の熱を見よ」と云ひ(一の廿九)「神の子なるを證せり」と云ひ(一の卅四)更に後に至りて、彼の天より出でて世を救ふ力あるを證せしが如き(三の廿七-卅六)何れもヨハネが初めより耶穌の教主たるを知り、之を世に紹介したるに在りしもの也。然るに最古の福音書なる馬可傳に依れば、パテスマのヨハネは耶穌が彼より優れる者、彼の後に來らんとする者なる事を宣傳したる共、彼が耶穌を知りて之を後に來るべき教主なりとして世に紹介せりとのことを云はず、又耶穌がパテスマを受けた時、靈降りて彼のの上に降りたるを見、又天より聲ありしを聞きたるも耶穌自身のみにして、ヨハネの之に與りたるを記さず(一の七一-七二)而してヨハネが初めより耶穌を教主として承認せざりし事實は、彼が後獄中より弟子を耶穌の處

約翰福音書

に遣はして「來るべきものは汝なるが、又我等外に待つべきが」と云はしめたりと云ふ最古の傳説に符合せり。蓋し教主の先驅者たりしヨハネは自ら耶穌の教主たるを知りしに相違なしとの思想後に至りて起りしこと疑なく、此思想は既に共観福音書中後人の手に成りし部分に顯はれたり。即ち第一福音書が馬可傳より取りて記せる耶穌がパテスマの條下に、ヨハネが「我は爾よりパテスマを受くべき者なるに爾却て我に來るか」(六の二三の十四)と言ひたりとの一節を加へたるは、ヨハネが耶穌の彼れより優れるを知りたりしとの假定より來り、踏加が耶穌の母が約翰の母を訪ひたりし時「其胎孕腹の内にて跳りたり(二の卅九-四十一)」と記せるは、ヨハネが耶穌の教主たるを最も早く知りしに相違なしとの假定より來りし者にして、第四福音書の言は即ち此思想を更に發達せしめたるもの也。是れ第四福音書中後人の手に成りし者ある第一證也。(二) 耶穌のメッシャたることに關する自己の宣言及び人々の承認、第四福音書に依れば、耶穌の最初の弟子は、パテスマのヨハネ證言の後直ちに耶穌のメッシャたるを承認せりとのことを告白し(一の四十一、四十五、四十九)耶穌も亦自らメッシャの婦人、及び生得盲目なりし人に向ひ、明に自己のメッシャなることを告げたり(四の廿五以下、九の卅五-卅八)彼のメッシャたることは又當時多くの人々に依り承認せられたるものとして顯はる。即ち彼がサマリヤに二日逗留したりし後市民は彼のメッシャなるを知りたりしと云ひ(四の四十二)又ガリラヤの群衆がパンの奇跡を見て後此は誠に世に來るべき預言者也と言ひしと云ふが如き(六の十四、十五)是也。然るに最古の福音書なる馬可傳に依れ

約翰福音書

ば、耶穌は其パテスマを受けたりし時天の示現を受けたりしがごとし、自らメッシャたることを公言せず。傳説の終りに近づきし時まで之を秘したり。即ち彼は神の國近けりとの事を以て其傳説を初めたりしがごとし、自己のメッシャたることに就ては一言をせざりき(一の十四、十五)聖鬼に憑れたるものは當時既に耶穌のメッシャたることを知りしがごとし、耶穌は彼等の公言するを禁じたり(一の廿四、廿五、卅四、三の十一、十五)十二人の弟子さへも初は彼のメッシャたることを知らず、カイザリヤ、ピリポに至る途上に於て彼等が之を言願はしたりしは、彼等が耶穌のメッシャたるを承認したりし初なり(八の廿九)而して彼等さへも之を人に告ぐる勿れと誡められたり(八の卅)彼が初めてガリラヤの人々に依りてメッシャなりと宣言せられたるは、彼が最後にエルサレムに入りたりし時にして、此の如きことを曾て此前にありしことなし。而して彼が初めて自らメッシャたることを公言したりしは、捕へられたる後祭司の長の前に立ちたりし時也(十四の六十一、六十二)耶穌の此告白に依りて彼の死に當るべき罪定まりたりと云へば(十四の六十三、六十四)彼が此時まで其メッシャたるを公言せざりしこと明也。馬可傳に依れば、耶穌の最大目的は神の國の性質を顯はすにありて、彼のメッシャたることは彼の教を聞き其行爲を見る者の自然に領解するに任せ、敢て之を公言せざりし也。然るに後に至り、耶穌が初めよりメッシャとして顯はれ出でて自ら之を公言し、人々も亦之を承認したるは自明の事實なるが如く思惟するに至り、此思想は遂に後代の傳説に入るに至れり。故に馬太傳は彼が告白の前、耶穌は既に二人の盲目者に依り(九の廿七)又聖鬼に憑れ

ヨの部

約翰福音書

たる者の愈されたる後群衆に依り(十二の廿三)又カナンの婦人に依りてさへ(十五の廿二)「デビエの子」なるメッシャの稱號を受け、又水の上を歩みたりし後弟子に依り神の子也として拜せられたり(十四の卅三)との事を記せり。是れ即ち耶穌のメッシャたること初めより承認せられたりとの假定に従て、馬可傳の記事を變改したるものにして、第四福音書も亦此假定を踏襲したるもの也。是れ此書が後人の手に成りし第二の證也。(三) 耶穌の奇跡、耶穌の奇跡は第四福音書中最も大切な部分を占む。記者は其福音書の終りに於て「此書に録せざる外尙許多の奇跡をイエス弟子の前行せり、此書を録せるは簡習をしてイエスの神の子キリストなることを信ぜしめん、之を信じ其名に依て生命を得せんがため也(廿の卅一)と云ひ、其個々の奇跡を記すに方りて、耶穌は彼を信ぜしめんために奇跡を行へりとなし、彼等の信仰は奇跡を見しに依りしとの事を附言せり(二の十一、廿三、四の四十五、五十三以下、六の二、十四、九の卅二、卅三、十二の十一、十八)又耶穌の奇跡を行ひし方法を見るに、此書の記載する所に依れば、彼は初めより多くの人々に見られんために、其奇跡を公に行へり(二の廿三、三の二、四の四十五、六の二)故に彼の奇跡は確證の驚愕を以て見たりし處なるのみならず(六の十四、七の卅一、十の廿一、十一の四十五、十二の十七-十九)其敵さへも尙此事實を攻撃すること能はざりき(九の十三-卅四、十一の四十七、十二の卅七)唯は是れのみならず、多くの人々が彼を信じたりしは其驚くべき奇跡の結果にして(二の十一、廿三、四の五十三、六の十四、十一の四十五、十二の十一)彼の奇跡を行ひたるも

約翰福音書

此結果を預期したりしがためなりき。故に彼はパンと魚の奇跡を爲したりし翌日彼に來りし群衆に向て「誠に實に爾曹に告ぐ、爾曹の我を尋ねるは休養を見し故に非ず、唯パンを食して飽きたるが故也」(六の廿六)と言へり。是れ群衆が奇跡に依りて彼を信ぜざりしことを非難したる也。彼が奇跡に依りて人々をして彼を信ぜしめんしたりしは、最も明かにラザロ復活の物語に顯はる。即ち彼はラザロの病めるを聞き、奇跡に依りて弟子の信を増さんために其旅行を猶豫し(十一の六、十五)ラザロの死後四日にして墓に至り、多くの猶太人の前に奇跡を行ひて彼等をして、彼を信ぜしめたり(十一の卅八-四十五)此の如く奇跡は第四福音書中最も重要な部分を占む。之を共観福音書に比せば如何。共観福音書に在りて、耶穌は神の國の福音を宣傳すること共に、奇跡を行ひたりしことを録せるは明かなること也。雖も、其奇跡なるものは自己のメッシャたるを信ぜしめんとして爲したるに非ず、寧ろ病める者、憐れむ者、或は多し念より出でたる愛の働也として記されたり。故に彼は多くの人々の前に之を爲すを欲せず、又之を人に告ぐるを嚴禁したり(可一の四十三以下、五の卅七-四十三、七の卅三-卅六、八の廿二-廿六)又彼は奇跡の故に求められ信ぜらるるを好まず、天よりの休養を求むる者を拒否したり(可八の十一、太十二の卅八-四十二、路十一の十六、廿九)而して又可の記す處に依れば、彼は彼と彼の福音を信するものに向てのみ其奇跡を行ひたり(六の五、六)奇跡に關する第四福音書の記事及び性質が、共観福音書に記載する者と相違すること以上云へるが如し。耶穌は同時に第四福音書と共観福音書とに記載せるが如き異なる精神と態度とに於て奇

約翰福音書

跡を行ふこと能はず。甲にして是ならば乙は非ならざる可らず、乙にして眞ならば甲は眞ならざる可らず。然れ共共観福音書中後代の傳説に關するものは、耶穌の奇跡に對する態度に復する最古の傳説を變改したり。即ちヤイロの娘の復活に關する馬可傳の記事(五の卅七-四十三)中より、馬太が耶穌が三人の弟子のみを伴ひたりしこと及び何人にも告ぐる勿れと誡めたりし言を著きたるが如き(九の廿三-廿六)雙にして變なるものを耶穌が竊かに愈し、且之を人に告ぐること勿れと誡めたりしと云へる馬可の物語(七の卅二-卅六)を、馬太は耶穌が之を群衆の中に爲したるが如く記載したるが如き(十五の廿九-卅一)又パテスマのヨハネが獄中より使者を耶穌の所に送りたりしと云ふ物語の中に、踏加が「此時イエス多くの疾或は病及び聖鬼に憑れたるものを醫し、且多くの者に見ゆることを與へたり」(七の廿一)と附言し、且此物語の前にナインに於て踏加の獨子の死より蘇らせられたる物語を挿入したるが如き、馬可が耶穌多くの病を醫したりしと云へるに對し、馬太、踏加が凡ての病を醫したりしと云ふが如き(可一の卅四-太八の十六、路四の四十、可三の十三、太四の廿四、十二の十五、路六の十七、十九を對照せよ)馬可が耶穌の教訓のみを記せる場合に、馬太、踏加が病を愈したることを附加し、又は教訓に代ふるに奇跡を以てしたるが如き(可二の二、路五の十七、可六の卅四-太十四の十四、路九の十一)可十の二、太十九の二、可十七の十一以下、太廿一の十四を對照せよ)何れも奇跡を以て耶穌のメッシャたる大切な證據となし、且耶穌が之を人々の前に爲したる事明也と思惟したりしを顯はすものにして、其使徒以後の時代に於ける思想なることいふを

ヨの部

約翰福音書

約翰福音書

約翰福音書

要せず。而して第四福音書は更に此思想の發達を顯はしたりとせば、此書が使徒以外の手に成りしものなる事明也。

(ロ) 共観福音書の言語文字と對照して之を讀す。次に吾人は第四福音書の言語文字を共観福音書とそれと比較するに、第四福音書の著者が共観福音書を知らず且之を使用したる跡を發見すべし。彼の之を知りたりとの事は、同一の事實を記するに方りて、屢々同一の言語を使用したることに依りて明なるのみならず、彼の記事には讀者が既に共観福音書を知らたりとの假定をなす者あるを發見すべし。例之彼は「ヨハネ」のヨハネの賦に投ぜられしことに就ては何事をも記さざるに、ヨハネが「ヨハネ」共に「ヨハネ」を施したりとのことを記すに方り「此時ヨハネは未だ獄に入れられざりき」と附言したるが如き(二三の廿四) 彼が共観福音書の記事を知りて、讀者が既に之を熟知したるを假定したりとすに非ざれば領解すること能はず。吾人は又彼が共観福音書に記載せる記事を録するに方り同一の言語を使用したるを見るべし(約一の廿六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇) 而して之を使用するや著者は其材料を撰擇することなく、或時は最古の福音書を用ひ、或時は後代の傳説を採用せり。然れ共概して論ずるに、最古の福音書を變改し、後代の傳説に符合せしめたり。

此の如く共観福音書を採用して其書の材料となし、殊に最古の福音書を變改して後代の傳説に符合せしめたること事實也とせば、吾人は之を以て使徒約翰の手に出でたりとすこと能はず。

(四) 此書の重なる材料は耶蘇の傳説より來り、吾人は以上の理由に由り、今日吾人の有する第四福音書を以て、使徒約翰の著作とすこと能はず。更には更に仔細に此書の内容を研究すれば、吾人は此書の類る信據すべき記述より出でたるものあるを發見すべし。吾人は前に此書の著者は共観福音書を知り且之を使用したりとの事を述べたれ共、彼が共観福音書より取りたる材料は比較的僅少にして、此書の重要な大部分は共観福音書より出でたるものに非ず。且吾人の前に述べたるは此書の歴史的説話に關する部分にして、著者が共観福音書より得たるは主として此歴史的説話也。然れ共歴史的説話は此書に在りては耶蘇の傳説の外廓を形成するに過ぎず。著者は此書の終りに於て、此書は主として耶蘇の奇蹟を記したるものなるが如く云ひたり共(廿の廿) 奇蹟は此外廓に屬し、別に耶蘇の傳説は此書の内部を造り一種の異彩を放てり。抑も著者は此書に記せる豊富な耶蘇の傳説を何れより得來りしや。彼は若くは當時傳はりたる種々の口碑を數行、擴張したる也とすも理論上出來難きことには非ざれ共、彼は之を當時存在したりし文書に得たる也とす方更に實に近し。第四福音書が共観福音書以外に其材料を有するの事は、近時學者の一般に承認する處にして、其材料の使徒約翰に出でたりとの事も亦多くの學者の認むる處也。即ちケルトは曰く「此

福音書は希臘的、究極的要素の外に、最も初代の基督教的思想の貴重にして比類なき傳説、主の眞の言及び直接に使徒約翰より出でたる歴史的回想を有す」と。ケルトも亦此書批評の結果、此書を以て長老ヨハネに依りて著はされたるもの也となしたれ共、其裏面にセバタイの子約翰の立てたることを認めたり。此書の著者が耶蘇の傳説を編輯するに方りて、使徒約翰の回想録とも稱すべき記述を用ひたりとの説を初めて唱へたるはクリスチャン、ハー、グアイズにして、更に之を發達教行し、著者は使徒約翰の手に成れる耶蘇の傳説を土臺として之に歴史的關係と著者自身の説明を附し、此書を著せりと斷じ、其批評的眼光に依り、書中の記事を分析し使徒約翰の回想録より出でたる部分と、編者自身の附加したる部分とを區別したるはハンス、ハイニヒ、ゲントト也とす。ゲントトが此の如く此書の編者が記述を用ひたりとの事を推定するに至りしは二の理由に由れり。二の理由とは(一) 福音書記者の取れる態度と、彼が書中に記載せる耶蘇の傳説中に於ける思想との間に、記者を以て此教の著者とす時解決して得べからざる程の相違ある事。(二) 多くの場合に於て、耶蘇の傳説と其説話の外廓との間に不思議にも距離せるものある事也。從來本書の著者を以て使徒約翰とすものも、又使徒約翰の著作たるを否むものも、共に此書の同一の手に依りて成りたるものなるを承認せしむるも、此思想以上の説に依りて敗られたり。尤も此説は必ずしも此書内部の一致を否むものに非ず、唯其一致が第一福音書若くは第三福音書の一致と種類に於て異り、若くは程度に於て大也とするのみ。今吾人は左に以上述べたる二の理由の大意を略述すべし。

ヨの部

約翰福音書

約翰福音書

約翰福音書

(イ) 記者自身取る處の觀、耶蘇の傳説の中に發見する思想との間に相違ある事。

(ロ) 記者の「休徵」を耶蘇の「業」の相違、記者が其歴史的説話を記すに方り殊に重なる置きたる耶蘇の「休徵」は、耶蘇の傳説中に在る何等の重なる置かれたることなく、ヨハネの奇蹟より眞の生命のパンに關する耶蘇の傳説に移らんとする場合(六の廿六以下)を除きては、一回も耶蘇の傳説中に「休徵」なる文字を用ひたることなし。記者は休徵を以て耶蘇のメッセヤたり、神の子たるを證せんとするに、耶蘇の傳説中に此の如き思想を發見せざるのみならず、耶蘇は我は神より與へられたる生命のパンにして、之を食する者は永生を得べしと言ひ(六の卅二、卅三)生命を與ふる者は我也(六の卅三)我が爾等に言ひし言は我也(六の卅三)と言へり。是れ即ち耶蘇の傳説に神の靈と永生とを保てりとの意にして(五の廿四、八の五十一、十二の四十九以下、十七の二以下参照) 彼が「主よ我等は誰に往かんや、永生の言を説く者は汝也(六の六十八)と言へるも此意に外ならず。此の如く耶蘇は其教訓を以て其メッセヤたるを證せんとすを、又「業」を以て其メッセヤたるを證せんとすを見るべし。即ち彼曰く「父の我に賜ひて成しむる業、即ち我行ふ所の業は是れ父の我を遣はしむる業也(五の卅六)」。又曰く「我父より受けて我れ多くの善事を爾等に見せしに、其中何れの業に依りて我を石にてうたんとするや……もし我れ我父の業を爲さば我を信する……勿れ、若し之を爲さば我を信せず其業を信せよ」と(十の卅二、卅三)。之を稍や均しき言は又十四の十一及び十五の廿四に於て之を發見すべし。抑も耶蘇

の所謂「業」とは何ぞや。本書には耶蘇の休徵に關する記事多きを以て、此書を讀むものは先づ第一に「業」とは休徵に外ならずと思惟することなるべし。又福音書記者は此意味に於て此言を理するに難しきも含有する也。彼が「父の我に賜ひて成しむる業」と言ひ(五の卅六)と云ひたりし「業」なる言は、彼が「我を遣はしむる」旨に遵ひ其工を成し畢る、是れ我權也(四の卅四)と言ひ、又「我の榮を世に顯はし、爾の我に委し所の行は我を成せり(七の四)と言ひし「業」と同意義を有するは明かなることなるが、此兩處に在る「業」なる言が教訓を意義するは以下に云ふ所の言に依りて明也。されば父が耶蘇に賜ひて成しむる業とは、耶蘇の奇蹟に非ずして教師としての働なること明也。

(ハ) 記者が耶蘇の言語を誤解したる事。本書の記者が耶蘇の傳説に附したる説明の中には、記者が耶蘇の眞意を誤解したりと見るべきものあり、今其二の例を舉ぐれば、

(イ) 猶太人耶蘇が神殿より牛羊を賣る者、兌換する者を逐出したるを見「爾此事を爲すからば、我爾に何の休徵を見するや」と言ひし時、耶蘇答へて「爾等此殿を毀て、我れ三日にて之を建てん」と言へり(二の廿) 記者耶蘇の此言に説明を下して曰く「耶蘇の如此いへるは其眞の殿を指す也、死より甦り給へる後弟子たち耶蘇の此事を語りしを憶起し、聖書と彼の言ひし言を信せり(二の廿一、廿二)」。然れ共是れ十九節に記せる耶蘇の眞意に非ず。耶蘇が「此殿」と言へるはエルサレムの殿の謂にして、彼は指を以て自己を指し「此殿」と言ひしならん云へる解説は牽強附會に過ぎざるの

みならず、之にては廿節に猶太人が「此殿」と云ひし言を説明す可らず。且新約全書が一般に用ひたる語法に依れば、耶蘇は神により死より甦り給へられたる者にして、自ら甦りたるには非ず。故に「我三日にて之を建てん」と言へるは此一般の語法に背くものあるを見るべし。畢竟此傳説は耶蘇復活後記者が耶蘇の此言を誤解し、耶蘇の復活に附會したるに過ぎずして、耶蘇の眞意に非ず。試みに吾人此説明を除却せば耶蘇の眞意直ちに明白となるを見るべし。即ち眞に神を拜むべき場所なる此神殿は、貿易の家として使用せられ、而して祭司は公然之を許可せり。此の如くして此神殿は彼等に依りて毀たれべし。否既に毀たれたる也。然れ共耶蘇は最も短日月に、彼等の毀てる宗教を、革新せる状態に於て更に建設すべし。是れ即ち休徵を求めたる猶太人に對する耶蘇の答にして、後猶太人が彼等の先祖が野にてマナを食ひし如く、彼等にも休徵を與へよと要求せし時「我は生命のパン也」とのこを答へたるは其眞意に相違たり(六の卅三以下)。彼等の要求したりしは外部の休徵也。然れ共耶蘇は更に高なる證據を指示したり。彼等の毀てる眞神の宗教を革新して更に高なる宗教を建設す、耶蘇の神より來りたることを證する是れより愈りたる者あるなご、是れ即ち耶蘇の眞意なり。

(ロ) 福音書の終りに耶蘇が「人もし満ちば我に來りて飲め、我を信する者は聖書に録しし如く、其腹より活る水川の如く流れ出づべし(七の卅七、卅八)と言へるを記者は説明して「如此言へるは、彼を信する者の受けんとする靈を指せる也、蓋耶蘇未だ榮を受けざるに依りて靈未だ降らざれば也(七の卅九)と言へり。然れ共耶蘇が満ちるを應せん爲めに與

ヨの部

約翰福音書

約翰福音書

約翰福音書

ふべしと言へる語を以て、耶穌が榮を受けて後降るべき聖靈也と解説するはあまりに強硬の説明也と云ふべし。吾人若し四の十四、六の廿七、廿五に記せる之と均しき耶穌の言を参照せば、耶穌の真意は、彼は其教訓に依りて、誠實に之を受くる者に、水の地上の生命を維持するに必要なるが如く、永生を得且之を維持するに必要なるものを與ふべしとの義に外ならざるを見るべし。而して耶穌の教訓に願はれたる思想に依れば、永生の力は耶穌の死後に至り初めて活動するに非ず、其教訓を通じて現在直ちに活動する也(五の廿四、六の四十七)。故に記者が之を以て耶穌の死後降るべき靈也と解説するは強硬に失せり。

(ハ) 耶穌が禮拜の爲め節經に上れる希羅人に告げて「我れも地より擧げられんば萬民を引て我に來らせん」(十二の廿二)と言へるを記者は説明して「如此耶穌の言へるは其如何なる状態にて死なんとするを示せる也」と言へり(十二の廿三)。而して記者は後耶穌の擧げられてピラトの廳に立ちたりし時、猶太人がピラトの「爾曹之を取り爾曹の律法に従ひて審判せよ」と言へるに答へて「我佛に人を殺すの力なし」と言へるを説明して「是れ耶穌の死んする状態を指して語れるに應へり」と言へり(十八の廿二)。是れ記者は「擧げらる」なる語を以て、耶穌が磔刑を指せりと思惟したるに由れり。此言は耶穌の死の外状を指せるに非ず。十二の廿三に「榮を受くる」と言へる言と同じく、其死に依りて天に擧げらるゝの意に外ならざることは「地より擧げらる」と言へるにても明か也。

の我に賜ひし者を我れ守りしが其中一人だに亡びたる者なし(十七の十二)と言ひたりしは、耶穌が其弟子をして神を信せしめ、其教より洩されしめたることを謂にして、其精神的救済を指したるに外ならざることを明也。然るに記者は後耶穌の擧げられんとしたる時、彼を擧げんとしたる者に向て、其弟子を容し去らしめよと言ひしに附加して「是れ耶穌が我に賜ひし者の中一人だに亡ぶる者なし」と言ひし言に應はせん爲め也(十八の九)と言へり。即ち記者は若し弟子にして耶穌と共に擧げられたらんにば、耶穌と共に死刑に處せらるべし、さすれば耶穌の「一人だに亡ぶる者なし」との言違しくなるべしと思惟したる者にして、耶穌の「亡ぶる」と云へる言を物質的の意義に解釋したることを明也。是れ耶穌の原意を誤れる者に非ずや。

以上の四個の場合に於て、耶穌は何れも外界に起りたる出来事を指したるに非ずして、宗教的意義の範圍に於て起りたることを言ひたりしに、此書の記者は、耶穌の之を語りたる時は尙將來に在りし出来事に之を應用し、之に不思議なる預言の性質を帯びたり。是れ記者が奇蹟に特別の價値を附したるより起りたる者なれ共、原意は記者の説明と異り、且更に高尚なる意義を有したる事以上吾人の指摘したるが如し。抑も此の如きことは如何にして解釋すべきや。吾人も使徒約翰此書の全體を書きたりし假定せば、耶穌の言證明に使徒約翰の記述に殘り、而して其原意亦明に顯現せられ得べく、彼が之を誤解したりしことは信じ難し。然らば則ち耶穌の口に上りたる言の原意と、記者の之に附加したる意義との間の相違は如何にして之を説明し得べきや。或は使徒約翰より後の人此書の全體を著し、而して記者は故意

に耶穌の原意を曲解したりしとせんか。記者は耶穌の言語より意義の不明なるものを改作若しくは除却し(例之十九「之を立てん」とあるを「立てらるべし」に改作し、十二の廿二より「地より」の文字を削除するが如し)以て自己の意に合することを努むべし。然るに之を爲さざるを見れば、此は記者の故意に出でたることに非ずして、誤解に出でたるものなるを見るべし。此事實は即ち耶穌の教訓を録したるものと、之に説明を加へて之を編輯したる者とは同一人に非ずして、此書は使徒約翰の著はせる耶穌の教訓集を基礎として、之に歴史的關係と記者の説明とを附して後人の編輯したる者なることを證するもの也。

(ロ) 耶穌の教訓と歴史的説話との間には矛盾するものある事、耶穌教訓集には之に附加せられたる歴史的説話と矛盾し、之が爲め前後の關係を破るものあり、今左に其例を示すべし。

(ア) 第五章に於ける矛盾、五の十七以下に記されたる耶穌の教訓は、猶太人が彼を以て安息日を破りたりとなしたるに對してなされたものにして、彼は後七の十九、廿四に於て、又猶太人の攻撃に就き及ぼしたり。此教訓の序言に依れば、耶穌は安息日に當り、ベテスタの池畔に於て病者を癒し「起きて床を取り上げて歩め」との命令を與へたりと云ふに在りて、猶太人が安息日に爲す可らざることを爲したりとして攻撃したるは、耶穌が病者を癒したりし事に非ずして、床を取り上げて歩みたること也(五の十)。然るに耶穌は五の十七以下に於ても、又七の十九、廿四に於ても、愈されたる人の床を取り上げて歩みたることに就ては一言も辯護せず、唯自己の安息日に病者を癒したりしことを辯護したるのみ(七

ヨの部

約翰福音書

約翰福音書

約翰福音書

の廿三)即ち彼は天の父は今日に至るまで働き給ふて、嘗て其働を休み給はず、此の如く彼も亦働く也とのことを述べ(五の十七)七章に於ては「安息日と雖も律法を破らざらん爲め罰を受くる時は、何ぞ我が安息日に人の全身を癒ししことを怒るや」と言ひて、其安息日に病を癒したるを辯護したり。此の如く耶穌の辯護と猶太人の攻撃との間には矛盾する所あり。若し耶穌の言語を録したる記者にして、又此歴史的説話を録したりせば、如何にして此矛盾を調和すべきや。思ふに事實は是れ也、耶穌は人の醫す能はざりし病者を安息日に醫し、且之を醫すに方りて、手を其上に置き「如きことなしたり。猶太人は之を見て憤み、是れ安息日を破りたる也」として耶穌を攻撃せり。是に於て耶穌は天の父は今に至るまで働き給ふ也と言ひて自ら辯護したる也。然るに福音記者は耶穌が病を癒したりし時何等かの方法を用ひたりしことを理解すること能はず、唯言語を以て之を意したるが如く想像し、而して耶穌は此時他の福音書に記載せるが如く「床を取り上げて歩め」との命令を附加したりと思惟し、斯くは序言を附したる也。是れ耶穌の辯護と猶太人の攻撃との間に矛盾を來したる所以也。

(ハ) 第六章に於ける矛盾、第六章にも亦第五章と同様の矛盾を見るべし。パンの奇蹟を以て數千人を養へりとの事實に、永生を與ふべき天のマナに關する耶穌の教訓を連結せるは、一見能く適合せるものあるが如く、又福音記者が此事實を教訓の續言として附加したるは細心考慮の結果なること疑なしと雖も、更に深く考ふれば、猶太人が既にパンの奇蹟を見たる後に更に休徵を要求して、耶穌の此教訓を促したるは頗る解し難し。吾人の既に言へる如く、

第四福音書の耶穌は奇蹟に依りて其神より來りたることを證明せんとするに汲々たるが如き有様あり。然らば彼は猶太人の來りて休徵を求めたりし時、何故に其既に行へる奇蹟を説きて彼等の要求に答へざりしや。又前日パンの奇蹟を見「此は誠に世に來るべき預言者」也と言ひ、耶穌を立て「王と爲さん」としたる同一のガリヤ人が(六の十四、十五)翌日來りて「我佛を見て爾を信せしむるために何の休徵をなして我佛に見せしや、何の工を行ふや」と言ひ(六の廿)「爾ハモーセが天よりマナを與へたる言きパンの奇蹟をなすべし」との要求をなしたるは(六の廿一)甚だ奇怪なることに非ずや。此の如き矛盾は如何にして解釋すべきや。いふに、吾人の思ふ所に依れば、福音記者が採用して六の廿七以下に記したる言は、元來パンの奇蹟の物語と連結せるものに非ず。然るに福音記者は之に適當なる歴史的的位置を附せんとして、其福音書に記載せるパンの奇蹟の物語を發見し、之を以て耶穌が此言を語りたる機會なりしと推定し、之を此處に附加したる也。是れ耶穌の教訓を促したりと云ふ事實と、其前に記載せる物語と矛盾を來せる所以也。

(ニ) 七の十五、廿四は五章の終に來るべきものなる事、七の十五、廿四は吾人の既に云へる如く、五章の初めに記載せる事實、即ち耶穌が安息日に工をなしたりしとの攻撃に對し自ら辯護したるものなるが、五章の初めに記載せる事柄は逾越節の前の(六の四)猶太人の節經(五の二)即ちプリムの節經に起りたる事にして、七章に記載せる事柄は捕虜節に起りたる事也と云へば、此間少くも七個月を経過せり。耶穌が七個月前に起りたる出来事を引きたりしこのことは敢て驚くに足らざれ共、彼が其教訓の

神より出でたることを語り乍ら(七の十六、十八)突然「モーセ爾曹に律法を與へしに非ずや、去れど爾曹の中には之を守る者なし、爾曹何故に我を殺さん」と語るや(六の十九)と言ひたりしは、猶太人が彼が安息日に病を癒したることを怒り彼を殺さんとしたること云へるものなれ共、此事にしても七箇月以前に起りたることとせば、耶穌は如何にして、プリム祭の時彼を殺さんとしたりし猶太人と(五の十八)今夜の周圍に立てる猶太人と同一なるを認めたりしや。且此福音書の記述に依れば、耶穌は既に多くの驚く可き工を人々の前に爲したりしと云ふに、此處には「我を殺さん」の事を行はしむる曹みな奇しとせり」と言ひて(七の廿一)彼が安息日に病を癒したることを以て、彼の周圍に立てる人々の前にて彼が爲したるものなるかの如く言へり。此の如きことは耶穌の此言は五章に記したる物語と同時に語りたる者なりと假定するに非ざれば領解し難きのみならず、此數節を以て五章の終りに連結する時は思想の聯絡亦甚だ明白なるべし。故に吾人は此數節は元來五の四十と連結したりしを、此福音記者が或る誤解に由りて之を分離したるもの也と思惟する也。

(ニ) 十二の四十四、五十五は直に廿六の後に接すべきものなる事、十二の廿六の終りに「耶穌此を言ひ畢り彼等を遣りて隠れたり」とあり。廿七、四十三は福音記者が猶太人の耶穌を信ぜざるを見て、預言を引き自己の感想を述べたるものにして、四十四節に至り「耶穌呼はり言ひけるは」との言を發端として、更に耶穌の言を記せり。然れ共耶穌は何人に對して此言を語りたるものなりや、此處にては推知し難し。然るに四十四、五十五に有する思想は廿五、

ヨの部

約 翰 福 音 書

共観福音書の特長なる文章と獨立併行すること能はずと言へり。然れ共同一人の同一思想も其之を傳ふる人の性質如何に由り變化を生ずるは當然の事にして少しも怪むを要せず。且此書に記載せられたる耶穌の教話、共観福音書に記載せられたる者、時と場所を異にせる者にして、多くは耶穌が學者、教師、パリサイ人等に訪げられ、反對せられ、輕侮せられ、譏諷せられたる後に自ら其權威を確保せんとして語りたる者なるを思はば、其間著しき相違を來せるも怪むに足らざるを知るべき也。故に吾人は此外形の相違に依りて、此書に記せる教話の歴史的价值を評定することなく、内部に入りて耶穌思想の内容を呈して共観福音書に類はれたる者と相違せるや否やを檢せざる可らず。

(ロ) 耶穌教話の宗敎的觀念、耶穌の教話は共観福音書を描寫せる者に非ずして、各々獨立せる材料より得たる者なるは明なる事實なりと雖も、兩者思想の内容には著しき一致あり。今其一二の例を舉ぐれば、先づ第一は舊約に對する耶穌の態度にして、彼は此書の教話に於ても、共観福音書に於て取りたる同一態度を取りたり。即ち彼は其使命及び取調を舊約の基礎の上に置き(四の廿二、十の卅五)預言者は彼を指して預言せる者なるを認め(六の四十五、七の廿二、廿三、十の卅四、卅五)而して吾人は文字に依りて制限せらる可らず、唯其精神を取らば、之を教へたり(四の廿一、廿四と可二の廿五、廿八、七の十五、廿三參照)。且耶穌は當時の猶太人及び使徒以後の教會がなしたる如く、舊約の文字を譬喩的に解釋して、之に一種の意義を注入するが如きことなす。又彼は律法と預言を棄つる爲めに非ずしてを成就せん爲めに來れり(山上の説教に於て言ひたるが如く、此書の教話にも同一のことを語りたり(五の卅七、四十七)。次に耶穌の教話が共観福音書と類似せることは、十三章より十七章に至る迄に記されたる耶穌最後の教訓に於て最も明白に現はる。耶穌が其弟子に與へたる最大の戒は相愛すべしとの事にして(約十三の十二、十七、卅四、卅五、十五の十二、十七、十五の廿八、四十八、可九の卅三、卅七、十の四十二、四十五)彼は馬可傳(九の卅五)に於ては自ら嬰兒を取りて之を抱くことに依り、約翰傳(十三の十一、十七)に於ては自ら弟子の足を洗ふことに依り、其例を示したり。又彼は馬可傳(十の四十五)に於ても、約翰傳(十五の十三)に於ても、自己の多くの人に代り其命を與ふべきこと、是れ即ち最も大なる愛の模範なることを教へたり。而して又此の如き愛の模範なる戒也とのことは、太五の四十二、四十四に於るが如く、約十三の卅四、卅五に於て、斯る愛の貴重なることは可九の卅七に於るが如く、約十三の廿に於て語りたり。其他此戒を守るにその外神を拜する特殊の方法を要せず、唯神を信じ、耶穌の名に依り祈るべきこと(約十四の十、十二、十四、十六の廿三、廿四、卅三)信仰を以てする祈禱は應ずべきこと(約十四の十三、十四、十五の十六、十六の廿三、廿四、太七の七、十一、十八の十九、廿、可九の廿二、廿三、十一の廿二、廿三、路十七の五、六、十八の二、八)是れ神は父の愛を有し給ふに由る事(約十六の廿七、太七の九、十一)眞の財寶は天に貯へある事(約十四の二十七、四、五、廿四、太六の廿、廿一、路十の廿)彼に來る者は平安を得べき事(約十四の廿七、太十一の廿八、廿九)等は本書に記されたる教話と、共観福音書に記されたる耶穌の言と符節を合するが如く能く一致

約 翰 福 音 書

るが如く、此書の教話にも同一のことを語りたり(五の卅七、四十七)。次に耶穌の教話が共観福音書と類似せることは、十三章より十七章に至る迄に記されたる耶穌最後の教訓に於て最も明白に現はる。耶穌が其弟子に與へたる最大の戒は相愛すべしとの事にして(約十三の十二、十七、卅四、卅五、十五の十二、十七、十五の廿八、四十八、可九の卅三、卅七、十の四十二、四十五)彼は馬可傳(九の卅五)に於ては自ら嬰兒を取りて之を抱くことに依り、約翰傳(十三の十一、十七)に於ては自ら弟子の足を洗ふことに依り、其例を示したり。又彼は馬可傳(十の四十五)に於ても、約翰傳(十五の十三)に於ても、自己の多くの人に代り其命を與ふべきこと、是れ即ち最も大なる愛の模範なることを教へたり。而して又此の如き愛の模範なる戒也とのことは、太五の四十二、四十四に於るが如く、約十三の卅四、卅五に於て、斯る愛の貴重なることは可九の卅七に於るが如く、約十三の廿に於て語りたり。其他此戒を守るにその外神を拜する特殊の方法を要せず、唯神を信じ、耶穌の名に依り祈るべきこと(約十四の十、十二、十四、十六の廿三、廿四、卅三)信仰を以てする祈禱は應ずべきこと(約十四の十三、十四、十五の十六、十六の廿三、廿四、太七の七、十一、十八の十九、廿、可九の廿二、廿三、十一の廿二、廿三、路十七の五、六、十八の二、八)是れ神は父の愛を有し給ふに由る事(約十六の廿七、太七の九、十一)眞の財寶は天に貯へある事(約十四の二十七、四、五、廿四、太六の廿、廿一、路十の廿)彼に來る者は平安を得べき事(約十四の廿七、太十一の廿八、廿九)等は本書に記されたる教話と、共観福音書に記されたる耶穌の言と符節を合するが如く能く一致

約 翰 福 音 書

せり。自己に關する耶穌の言、第四福音書に記されたる耶穌の教話に依れば、耶穌は自己の神より來り、神と特殊の關係を有し、人類の救済に特殊の地位を有するもの也との比喩なき要求を爲したるに拘はらず、共観福音書に在ては耶穌は自己に就ては多く語り、主として神の國と之に入ることの必要及び其條件に就て語りたるのみ。此相違よりレナンの如きは「もし耶穌にして馬太が願はしたる如く語りたりしとせば、彼は約翰の願はしたる如く語りしこと能はざるべし」と言ひて、此書の價值を疑へり。然れ共仔細に觀察すれば、此相違は調和し難き程の反對を有するものに非ず。共観福音書も、耶穌はパテマスを受けたりし時より、彼が特殊の意義に於て神の愛子たりしことを目覺したることを傳へたり(可一の十一)。太十一の廿五、卅及路十の廿一、廿二は、共にロギアより取り來れる者にして、耶穌は此處に於て、其天父との關係及び其天父を讃るの知識に於て第四福音書に記載せられたるものと同一の特權を要求したり。又馬可の記す處に依れば、耶穌は最後にエルサレムに上り、神殿を潔め、猶太人より何の權威を以て之を爲すやと問はれたりし時、葡萄酒の噀話を語り、己は葡萄酒の主人の愛子也とのことを語りたり(十一の廿七、十二の十二)。去れば共観福音書の耶穌は第四福音書の耶穌と同一の要求を爲さずとのことは眞實に非ず。且本書の歴史的説話の部分に在ては、耶穌は自己を以てメッサヤ也と告白したりしに拘はらず、教話の部分に在ては、共観福音書に於るが如く、直接に自らをメッサヤ若くはデビテの裔也と告白したることなく、猶太人が「爾もし基督ならば明に我儕に告げよ」と

ヨの部

約 翰 福 音 書

云ひし時さへ、彼は直接に肯定的の答を與へざりき(十の廿四)。然れ共彼は特殊の意義に於て自己の神の子たることを宣言したり。猶太人には神の子の名目は又メッサヤの意義を有せしむるも、彼等のメッサヤ的觀念に重要なものはデビテの裔たること也。然るに耶穌のメッサヤ的觀念に重要なものはデビテの裔たることに非ずして、神の子たること也(可十二の卅五、卅七)。神の子とは即ち神との親交及び神を知ることに於て特別の地位を有するの意にして、此點に於て本書教話中に耶穌の爲したる要求は、若し共観福音書中に於て爲したる要求と異なることなし。

(二) 預言的言語のなきこと、最古の共観福音書には、耶穌が事を未だに預言したりしことなく、其之れあるは多くは比較的後代に成れる傳説に基けり。本書耶穌の教話を記せる部分にも、同じく事を未だに預言したりしが如き言語なきは頗る注目すべき事實にして、此部分が最も確實なる人の手に依りて成りたるものなるを證すべし。

以上の事實は即ち此書の内部を形づくれる耶穌の教話が、最古の共観福音書と一致せることを示すものにして、此事實は即ち書中の教話が確實なる傳説より來り、歴史的耶穌を傳へたる者として、其價値の大なる者なるを證するもの也。

【耶穌教話の作者】 次に來る問題は耶穌教話の部分の作者は何人なりやとの事也。吾人は先づ第一に作者自らの言に聞かざる可らず。而して作者は福音書及び書簡の初に於て自己の目撃者たることを明言せり。即ち曰く「我儕其榮を見るに云々」(約一の十四)又曰く「我儕皆彼に充ちたる其中より受けて恩寵に恩寵を加へらる」(約一の十六)又曰く「我儕が聞き又目に見、懇切に見、我手觸りし所の者云々」

約 翰 福 音 書

(「約一の二三」)と。此等の言は即ち作者自ら耶穌の目撃者たるを表明せる者也。抑も此目撃者は誰なるべきやと云ふに、吾人は耶穌と共に在りて、彼と最も親しき關係を有したりし彼の弟子の一人也と想像せざるを得ず。第四福音書記者は書中耶穌と最も親密なる關係を有したりし一人の弟子に就て語りたりと雖も、彼は其名を明示せず。十九の卅五に之を見し者證を立つ」と云へるは、十九の廿六、廿七に、耶穌が十字架より其母を托したる所謂「愛する所の弟子」を指せること疑なし。而して記者は其他の場所に於て、同じく其名を明示することなくして此弟子に就て語りたり。即ちパテマスのヨハンの處を去り耶穌に従ひし二人の弟子の一人(一の卅五、四十一)最後の晩餐の時耶穌の胸に凭りて食せし弟子(十三の廿三、廿五)耶穌の捕へられて祭司の長の庭に引かれ行きし時彼得と稱に之に従ひし、祭司の長の識る所の弟子(十八の十五、十六)耶穌の死後一週の首の日に彼得と共に墓に奔り往きし弟子(廿の二、八)にして、此弟子は亦此書の補遺の部分にも同一の筆法を以て記載せられたり(廿一の二、七、廿一、廿三)抑も此耶穌の愛する弟子は何人なりやと云ふに、當時の基督教會に密接の關係を有したりし弟子にして、此書の著はられたる時代には、一般に其者に依らずして「耶穌の愛する弟子」として知られたる人なりしこと明也。而して古代の傳説に依れば、此弟子はセベダイの子約翰也と云ふ。而して教話の著者は耶穌の弟子の中最も耶穌と親密なる關係を有し、最後の晩餐にも彼と共に在りたる者ならざる可らず。去れば教話の著者を以て使徒約翰也と云ふは自然の結論にして、吾人は其然るを信ぜずんばならず。

約 翰 福 音 書

【現形の第四福音書の作者及び目的】 古代の傳説に依れば、使徒約翰は老年に及びエボソトに赴き、トラキア帝の時迄其處に生存したりしといふ。思ふに此傳説は正しきものにして、彼はエボソトに在て、其認罪するに従ひ、耶穌教話の回想録を著はしたることなるべし。而して第四福音書の記者は、エボソトに在る基督教徒の團體に屬したる者にして、彼は約翰の死後即ち第二世紀の初め約翰の遺したる教話を基礎とし、之に彼が自ら約翰より聞きたる、若しくは約翰より出でし口傳として傳はりたる傳説を加へ、且歴史的關係と自己の説明とを附して此書を編したるものなるべし。當時既に小亞細亞に於ては一種の教義を教達せしかば、此書が當時の思想を帶ぶるは當然の事也と云ふべし。此書の重なる目的は使徒約翰の傳へたる耶穌の教訓を基督教會に明ならしめんとするに在り。而して其直接の目的は、作者自ら云へる如く「耶穌の神の子基督なることを信ぜしめ、之を信じ其名に依りて生命を得せんが爲め」(廿の卅一)にして、作者は始めより終り迄此目的を有し、此目的に適應する材料を拾集したり。然れ共此作者の何人なるやは明ならず。

【參考書】 ウァイズ、ユウツッヘル、ツァン其他の「新約聖書總論」マイエル、ゴーター、マルカス、ドップ(エキスポジツトル、マイナル)、ウエストコフト(スピーカー、コムメンタリー)等の註釋。ヴェントの「約翰福音書」ヘルトンの「メソラベリア、オフ、ウーラス」シアアの「基督の心」及び「ヨハネ」の餘下に記されたる者を見よ。

【約 翰 福 音 書】 The Revelation of John the Divine. 經名、新約聖書中の末卷。

【默示的文學の性質】 「默示録」なる名は、猶太教

三の部

約翰黙示録

約翰黙示録

約翰黙示録

を一貫せる神の運理の大法を示したるものなるは明白なる事實にして、此書を學ぶ者は比較的緊要ならざる想像的物語を解釋せんとして苦心するより、寧ろ此大法を會得すること適に優れること論なし。而して吾人が此書に依りて、善惡の長き争闘に於て、神は常に善の味方たり、不義は永く榮ゆ可らず、基督と其王國とは終に勝利を得べき者なることを學び、之に依りて確信を得ること緊要なる又云ふ迄もなし。然れ共此理想的解説法も亦充分に此書を解説し難し。何となれば默示的文學なる者は、前既に云へる如く特殊なる歴史的状态の産物にして、迫害若くは壓抑の下に在る基督教徒を慰藉、激動せんために成りたる者なれば、單に歴史の大法を與ふるを以て満足すべからず、其中には必ず具體的なる歴史的事實に言及する者勿べからず。然るに之を以て單に神の運理の大法を示したるに過ぎずして、著者は初めより具體的人物若くは出來事之を應用するの意なしとするは、默示的文學の精神と書中の現象とを領解する能はざる者也と云はざるを得ざれば也。此書が他の時代、他の状態に在る他の多くの人々を慰藉、激動することを得べき一般の法則を有するは明なることなれ共、眞に此書を解説せんせば、先づ此書の書かれたる時の状態、及び著者が其言語又は表象に依りて言ひ顯はさんとしたる本來の意義を確めざる可らず。書中具體的の記事は必ず先づ之を著者の時代及び讀者に關聯して解説せざる可らず。此事は亞細亞に在る七の教會に贈られたる書翰に依りて明也。此等の書翰は最も明に具體的狀態を述べたる者也。又船の坐する七の山は(十七の九)羅馬の山を指したる者にして、パピロンに就て記されたる處を見れば(十七、十八章)是れ又羅馬を指して云

へる者なること明也。此の如く其指示せる虚明白なる者の外、書中に記載せる表象的事實を歴史的事實に應用すべからずと云へる點に於ては、理想的解説法の云ふ所眞也と雖も、默示的文學を解説せんとする者は、單に一般の法則を其中に見出するを以て満足すべからず、又須らく其中に在る理想的要素と歴史の要素とを區別せざる可らず。於是此書の眞の解説法は理想的歴史のならざる可らず。

(四) 理想的歴史の解説法。理想的歴史の解説法とは、書中に多分の理想的要素あるを認め、其細目を悉く預言的に解釋せんせず、寧ろ其多くの細目を單に詩的表明に過ぎずとせ共、之と同時に歴史的人物及び歴史の出來事に關係を有すること明白なる場合には、之を著者の時代に存在したる歴史的状态、若しくは其近き將來に關係したる者として解説する者云ふ。之を理想的といふは、書中に記載せる預言の多分を以て、最も精確に或る一定の歴史の出來事に關係したる者として爲さず、一般の法則を畫的若しくは詩的に表明せる者となせるが爲めに、換言すれば、其描寫せる處の者は眞實なれ共知字的に非ざるがため也。然れ共是れ單に理想的に非ず。著者は唯一般の法則を表明したるのみに非ず、又其當時の現象を神の國との關係の光明に照して考へたる也。此點に於て吾人の解説法は又歴史のならざる可らず。吾人の既に屢々云へるが如く、默示的文學は其歴史的地位より離れて領解すべからず。故に吾人が此書を領解せんとするには、先づ此書の歴史的地位を定め、著者が其地位の困難なる中に在りて、基督教の信仰と勇氣とを鼓舞作興せんために、如何に基督教の主義精神を之に應用したりしかを見ざる可らず。

【理想的歴史的方法に依れる此書の解説】 此書の書かれたるは、基督教會古代の證明と、此書内容の示す所々に依りて考ふるに、テロ帝迫害の後間もなき時(六八年頃)然らざればドシマス帝治世の晩年(九五年頃)なりしなるべし。當時羅馬帝國は耶穌の徒を殺害し、其血に酔へる時なりき。吾人は全體より之を考へ、之を以てテロ帝時代の作也となすを以て可也とす。今此假定に従て書中の記事を解説すべし。著者は此殘酷なる迫害の時に方り、教會と世との争闘、神の助と基督の再來とに依れる教會の勝利、及び神に忠實なる者の神の國に於て受くべき幸福に關する異象を神より受け、當時の基督教徒をして、善き戦を戦ひ、世に勝ち永生を得せしめん爲めに、巧に此等の異象を描出せり。彼は之を爲すに方りて一部分は自己の見たりし異象より、一部分は舊約聖書より、一部分は他の默示的文學より其材料を得たり。

此書が舊約的色彩を帯ぶるは甚だ明也。其舊約に關係を有する所五百箇所以上にして、殊に屢々引用せるは以賽亞、以西結及び但以耳也。基督教會の運命は常に舊約の言語を以て記載せられ、又以以色列國民の歴史に擬せらる。以色列の各支派より一萬二千人宛、合せて十四萬四千人印せられたりといふは(七の二八) 其一例にして、基督教會の事を記するに舊約の語を以てせる者也、之を以て單に猶太人信徒の事を云へる者と思惟すべからず。又基督教會が十四萬四千人の中に立てり云ふも(十四の一三)彼が基督教會の中に立てりとの義にして、シオンの山と云へるも基督教會の義に外ならず。故に此數節は馬太傳(廿八の十八、廿)に「天の中部の上の凡の權を我に賜はれり……夫れ我は世の終常に爾曹

三の部

約翰黙示録

約翰黙示録

約翰黙示録

と併に在る也」と云へるに同じ。又舊約教會の大敵なりし巴比倫は、此書に在りては基督教會の敵、即ち羅馬帝國を表せり。舊約時代の巴比倫の以色列國民に於るが如く、此書の著者時代に於る羅馬帝國は、基督教會に取りては甚惡なる強敵にして、甚しく之を迫害せしを以て、著者は巴比倫の有りたりし性質及び其運命を羅馬帝國に移し、最も明白に之を記載せり。基督教會の敵がユフラテ河を涉りたるが如く記載せられたるは(十六の十二)以色列國民の敵が屢々此河を涉りたりしが爲めに、基督教會の敵軍がハルマゲドンに集りたるが如く記載せられたるは(十六の十六)テホラ及びパラク此地にて大にカナン人に勝つたれば也。又「城の外にて此敵を踐みしに、血腫より出でて馬の聲にぞく程に至り、廣がれること七十五里に及びべし」と云へるは、舊約聖書歴史の色彩を假りて基督教會に敵せる凡ての勢力の滅亡を記載せるに外ならず。爰に「城」と云へるは基督教會の中心を表明せる者にして、之を如字的に解釋すべからず。天のエルサレムといふも(廿一章)亦基督教徒の幸福なる状態を云へる者にして、猶太の邑の謂に非ず。此の如く著者は舊約の言語及び歴史を假りて基督教會に關する事實を表明せり。故に此書を解せんとする者は、書中の歴史的要素と詩的要素とを區別し、悉く之を如字的に解釋せんと爲す可らず。元來預言者は詩人にして、他の詩人と異なる點は唯其詩題の全く宗教的にして、最も深く神と正義との勝利を信じ、且來らんとする出來事に關し、驚くべき先見の明を有するに在り。詩は元來創造的にして、詩人は其豐富なる想像力に依りて、諸種の光景を描出し、出來事を創造すれ共、是れ單に之に依りて靈的眞理を表明せんために、之を

如字的に取られんことば彼等の本意に非ず。此書は新約聖書の詩にして、即ち基督教徒の希望を詩的に表明せる者也。メルトンに於て此書を評し、之を以て一種の戯曲也となし、テニンソンも亦詩として最も壯大なる思想を顯はせる者也とせり。故に此書を解せんとするに方りて思想の論理的精緻、事實の歴史の確證を求むるが如きは、此書の性質を知らざる者也。吾人は既に此書を以てテロ帝時代の作也とし、之を解説せんとする者は、其當時の状態を離る可らずとのことを言へり。然れ共吾人は亦書中に記載せる細目を悉く當時の歴史に求む可らず。具體的事實の明白なる場合には之を爰に適用すべしと雖も、其明白ならざる場合には、争闘、苦悶、及び勝利を描ける詩中に、信仰と希望の光明を求むるを以て満足せざる可らず。

亞細亞に在る七の教會に贈れる書翰及び書中許多の言語は、此書の書かれたる當時の具體的歴史的地位を示す。『七』は完全の數なれば、此等の教會は凡ての公同教會を代表したる者なるべけれ共、特殊の歴史的地位を指せられたる者なるべしとせらるる者なること明也。全體として之を云へば、此等の教會は忠信にして繁榮し、熱心にして凡ての善き事に忍耐せしが如し、又初めの信仰を離れ、或は異端を寛容し、或は冷淡くして冷にも熱くもあらざる状態に陥りし者あり。此等の教會に在りて最も著しき状態は其受けたる迫害の或る場合には猶太的なりしが如し、概して一般的にして、或る場合には明に羅馬的なりしこと也。例之六の九、十一に「祭壇の下に曾て神の道のため、及び其立てし證の爲めに殺されたる者等の靈魂あり、大聲に呼ばりて、聖き誠の主よ何時まで地に住む者等を審判せず、且之に我儕の血の報を

爲し給はざるや」と言ひしとあるが如き、當時基督教徒がテロ帝より受けし迫害を指せる者なること明也。十七の六に「我れ此婚の聖徒の血に酔ひイエスの證を作し、者等の血に酔ひたるを見たり」とあり、又十七の九に「此七の首は婚の坐する七の山也」とある「婚」は疑もなく羅馬のこと也。十八の廿四に「預言者擲及及び凡て地に在りて殺されたる者の血は此色(パピロン)に見えたり」とある「此色」といふも羅馬の謂也。廿の四には「我れ又イエスの證及び神の道のために首斬られたる者の靈魂を見たり」とあり「斬首」は當時羅馬に行はれたりし死刑の一方なりき。然れ共教會の敵は單に地上の勢力權威のみに非ずして又サタンなりき。争は單に教會と羅馬帝國との争のみに非ずして、又一方に在りては神及び基督と他方に在りては惡魔及び其代表者との間の争なりき。十二章に一人の日を看たる婦、子を産みたりとあるは、教會にメッサヤの生れたるを云ひ、赤龍其子を食はんとせり云ふは、サタンがメッサヤ及び其徒を滅さんとするを云ふ。此の如くして人類歴史の舞臺は、メッサヤ及び教會と惡魔及び其代表者との間の争闘となり、最後の勝利は神の國に歸する也。地上に於るサタンの代表者とは云ふ迄もなく羅馬帝國にして「底なき坑より上る獸」(十一の七)と云ひ「海より出づる獸」(十三の一、二)と云ふは、何れも羅馬帝國を指せる者なること近代學者の共に一致する所也。サタンは此獸に世界を治むる權威を與へ、人々は之を拜せり(十二の四)。是れ即ち當時羅馬帝を神化し、人々をして之を拜せしめたりし事實を云へる者なること亦明也。十七の八一に「爾が見し獸は昔に在りしが、今はなし、後無底坑より上りて沈淪に往かん……七の王あり、

ヨの部

約翰默示錄

其五に既に傾れて一は尚在り、餘の一は未だ來らず、來らば暫く止まらん、昔に在りて今在らざる獸は第八也、即ち七の王より出でし者にて終に沈淪に往かん」とある、既に傾れたる五の王の一人にして、再び來り第八の王となるべき者は、テロ帝の謂にして、テロ帝は眞實死したるに非ず、東方の或地に隠れ居り、後再び羅馬に歸り來るべしと云へる當時一般の信仰に基きて斯く云へる也。又十三の十八に『此獸の數目を知る者は智慧あり、才智ある者は此獸の數目を數へ、獸の數は人の數也、其數は六百六十六也』とあるもテロ帝を指せる也。何となれば希伯來語にて記せるテロ帝は亦六百六十六と讀むを得べければ也。記者は此の如く基督教會をサタン及び其地上の代表者に依りて迫害せられつゝあるを見るとき共に、又適に『天に一の寶座設けあり、其實座の上に座する者あるを見たり』是れ即ち神にして、其周圍に在る四の活物は其創造し給へる萬物を表し、廿四人の長老は教會を表す。又寶座の前に在る『水晶に似たる玻璃の海の如き者』は、海の深くして探るべからざるが如く秘奥なる、而かも神には水晶の如く明なる、人類歴史に關する神の命令を表す(四章)。此命令の記されたる活物は、七の印と共にユダの支派より出でたる獅子、鷹に殺されたる羔に與へらる。是れ即ち耶穌基督、天啓の根源たるを表す。斯くて四の活物と廿四人の長老は羔の前に俯伏して斯く歌を歌ひ『爾は此物を取り其封印を解くに堪ゆる者也、蓋汝曾て殺され其血を以て諸族、諸貴、諸民、諸國の中より我佛を贖ひて神に歸せしめ、且我佛の神の爲めに我佛を王となし祭司となし給へば也』と言へり(五章)。是れ云ふ迄もなく世界萬民の基督に對する渴仰を云ひ顯はせる者也。是より著者

約翰默示錄

は是れ耶蘇基督が時あるまで人類の歴史を支配せる有様を描き、且彼が凡ての敵に勝り、世を審判し、新天地に於て其完全なる國を建設せんがために再び來るべきことを記せり。然れ共著者が之を爲すに方りては其想像極端にして際限なし。故に著者は同一の表號を異りたる場所に於て異りたる意義に用ひ(十の角が十三の一にては權力を表し、十七の十二にては十の王を表するが如し)又年代を無視し、同一の出來事を異りたる處に記せり(巴比倫の滅亡を十四の八及び十八の二に二回記載し、又十四章に神の國最後の勝利を記載し乍ら、十五、十六章に更に新に世界終極の前に來るべき審判を記載せるが如し)。要するに著者の最も重んじたる處は歴史のなるより、寧ろ靈的にして、彼は世界終極の前に來るべき審判、迫害、争闘、勝利、審判を吾人に示さんとしたる也。封印、蓋及び金瓶に依りて表示せる事柄も亦歴史的、年代的に非ず。此は唯恐懼の念を惹起さんために、自然の現象及び舊約の歴史より其英爽の例を取りたるのみ。此等の恐るべき光景の中に在りて、教會は宛も往古以色列人が埃及に於る災禍の中より救はれたるが如く救はれたり(七の二一八)、『神の殿と香壇並に其處にて拜する者を度り、殿の外は遺して度る可らず(十一の一、二)』と云へるは、即ち猶太教的基督教會が滅亡を免れ、不信なる以色列人が國民として異邦人に征服せられたるをいふ。四十二ヶ月の間異邦人が聖域を蹂躪せられたるに方り、神二人の證者を送り以色列人を悔改せしめんとせしに、彼等異邦人の爲めに殺されたりしが、後死より甦り雲に乘り天に上り(十二の三、十二)といふは、思ふに教會は假令異邦人の迫害を蒙り破壊せらるるも、神は之を棄てず、最後の勝利は必

約翰默示錄

す其上に在るべしとの意を寓したる者なるべし。斯くて著者は教會と羅馬帝國の争を示したる後十九章に至り、メソジヤを獸、諸王及び其軍勢と戦ひ之を全滅せんとして天より降れる神の言、王の王、主の主として顯はし、彼れ來りて獸及び偽預言者の火の池に投げ入れられ、神に敵したる帝國の滅亡せることを叙し、廿章に至りて更に他の形狀を以て教會勝利の有様を記載せり。即ちサタンと稱する龍執へられ、千年の間縛られて底なき坑に投入せらる。多くの坐位あり、其上に坐する者審判の權を與へらる。又殉教者の靈魂は皆生きて基督と共に千年の間王となれり。是れ第一の復活也。千年終りてサタン其囚より釋放せられ、新なる争闘初まりしが、凡ての敵は遂に滅ぼされ、白き大なる寶座之に坐する者あり、死にし者凡て蘇り、神の前に立ちて審判を受け、永遠の運命爰に定まれり。千年王國の説は即ち此處より來りたる者にして、其説に依れば、基督再來し己に敵する者を悉く制服したる後、地上に千年間の王國を建設し、基督を信する者は彼と共に世を支配するの權を與へられ、其千年の終に於て最後の審判あるべしと云へり。然れ共此説は基督の神の國に關する靈的教訓を俗化せる者にして、新約全書全體の教訓に反する者なれば、現今の學者の中には此の如き説を信する者なし。此は單に著者が基督及び其教會の勝利の完全を詩的に云ひ顯はせる迄のことにして、千年といふは完全の表號、千年の後サタン其囚より釋放せらるること云ふは、理想的に云へば勝利は完全なれば、實際に於ては世界歴史の終極に至る迄の勢力尙存在し、善惡の争闘尙繼續すべきを云ふに過ぎず。斯くて著者は更に進みて新天地の光景を叙せり。曰く『我れ聖城なる新しきエルサレム

ヨの部

約翰默示錄

備へ豐ひ神の所を出でて天より降るを見る……神の幕屋の間に在り、神人と共に住み、人神の民となり、神又人と共に在りて其神と爲り給ふ也、神彼等の目の涙を悉く拭ひ取り、復死あらず、哀み哭き痛みあることなし』(廿一の二四、七の十五、十七、七の二一)又曰く『重ねて見らるることなし、神と羔の寶位其處に在り、其處に事へん、僕共神の面を見、神の名彼の額に在るべし、彼處に在ればあることなく、燈の光と日の光を用ゆることなし、蓋主なる神彼等を照し給へば也、彼等は世々究りなく王たらん』(廿二の三、五)是れ即ち神の國の理想的現實を描ける者にして、著者は此の如くして此驚くべき異象の書を終れり。此書を如字的に解せんとすれば、幾多の困難あり、又誤謬迷信を生じ易しと雖も、以上云へるが如く、當時の歴史的事實に照し、此書の如き默示的文學の性質を考へて之を解説すれば、此書は吾人に慰藉、希望、勇氣を與へ、且神の人類歴史を支配し給ふ大法則を示す最も莊嚴なる一大詩歌也。

約翰默示錄

ち左の如し。(一) アロギと稱する書百六十年頃小亞細亞に存在せしが、其書中には此書を以てコリントより出でたる者となし、使徒の著作たるを否めり。(二) 此書の著者は何處にも自らを使徒と稱せず、又自ら取直直接の弟子若しくは目撃者とも云はれず。(三) 著者が十二使徒のことを語るを見るに(廿一の十四) 自己は其中に屬せざるが如しなり。(四) 書中基督のことを記すを見るに、耶穌直接の弟子に依りて書かれたる者として解釋し難き者あり。然れ共ハルナツクは此書を以て通常の意義に於る爲作也と思惟せず、又使徒以外のヨハナなる者の存在をも確證せざりしが故に、彼は元來書中には著者の名なかりしものを後に至り挿入したる者也と言へり。又此書を以て一記者の手に成りたる者に非ずと論する者あり。即ちウァイツェルは此書の結構に於て調和を缺ける所あるを指摘し、一人の默示録編者なる者ありて、數個の小默示録より其材料を集集し來り、分ちて之を廿一段(三異象各七箇の小異象を含む、故にいふ)のドラマに組上げたる者也と言へり。或は又此書以前に猶太教的又は基督教的默示録ありたるを、此書の編輯者之を改正増補したる也となす者あり。是れフョルセル、フイツセル及びブライデルの所説にして、フョルセルは其原書を以て基督教的の書となし、フイツセル及びブライデルは之を以て猶太教的の書也と説けり。然れ共此等の諸説何れも是なるや未だ明ならず。

約翰默示錄

法とが、此書の根柢をなす思想たるべきは當然也。斯く神と基督と關する此書の主なる論題となれり。(一) 神 此書の根本的信仰は、神のみ永遠にして全能也、故に神のみ禮拜せらるべきもの也といふに在り。斯く『神はアルバ也、オメガ也、始也、終也』今あり、昔ある者也』と稱せり(一の四、四の八)又『世々究りなく生くる者』(四の九、七の十二、十の六、十五の七)萬物の造主、萬有の根源(四の十一、十の六、十四の七)『主』全能者(一の八、四の八、六の十、十一の十七)等として記され、之に反して惡の力は『昔には有りしが今は無し、後無底坑より上りて沈淪に往くべき』もの也として記さる(十七の八、十一) 神が世を統治し給ふは其倫理的屬性に依る。故に神は又聖き者、誠なる者、義しき者等と呼ばれ、神の聖と義と誠とに關する觀念は全書を一貫せり。又此書は神を以て畏るべきもの、怒と審判とに於て自己を顯現するもの也として記し(六の十六、十七、十一の十八、十四の九、十一、十九、廿、十五の七、八) 其義と權力とは信仰と希望の依て生ずる憑據也となされたり(六の十、十五の三、十六の七、十九の一、二)。(二) 基督 基督は羅馬帝國(十九の十一、廿一)を滅す者として、舊約の語を以て、戰士又は王として記され、其目より劍を出す(二の十六、二の十二、十六、十九の十五) ユダの族の獅子(五の五) 諸邦の民を治むる者(二の廿六、十二、十六等)と稱せらる。然れ共惡の力の處に羅馬帝國に非ずして、サタンなるが故に、基督は單に王中の最大なる者に非ずして『王の王、主の主』也(十七の十四、十九の十六) 彼は天使に優れり。故に彼は神に歸すべき者を自己に適用して『始也終也』と言ひ(一の

ヨハン 約翰 示 録

八、廿一の六)又神と同じく『生ける者』(四の九、十、十六)復活に依りて最後に滅ぼさるべき敵即ち死と陰府とに勝つる者也(一の十八)彼は又爾り近く神の寶座に立ち、又神の聖旨を記せる巻物を聞き得る者也。神の七の靈は彼の目にして(五の六)又彼の手に在り(三の二)而して此は彼が其罪の死に依りて自ら得たるもの也(五の九)斯くて萬物は神に歸すべき靈美を彼に歸せり(五の九、十四)天使は此書に在りては尙重要な地位を占め、無底坑の鍵は其の手に在り(九の一、廿の一)ミカエルは重大なる働を委せられたれ共(十二の十七以下)天使を拜することは明に禁ぜられ(十九の十、廿二の八、九)基督は神と共に崇拜の對象とせらる。彼は一たび神の子と呼ばれ(二の十八)又一たび『神の言』と名づけられたり(三の十四)又一たび『神の言』とも呼ばれたり(十九の十三)。

約翰 示 録

智慧をを表す。メツシャは一たび十字架に釘けられたれ共、尙王者の力を有し、強き戦士、義しき審判者たり(六の十六、十四の十、十七の十四)十字架はエルサレムの犯せる罪の最も大なるものなれ共、之に依りて人々は神の祭司となり、神の國に入ることを得ることとなり(二の六、五の十)此効果は『贖』なる語を以て表せらる。此の如く此書は贖罪の事實を認められたれ共、書中何處にも贖罪の教義なし。此書の著者の心中に描きたるものは道徳的の善なりしや、又は賽五十三の七の善なりしや明ならず。代贖的の死に就ては此書何等の暗示なし。(三)基督教的な生活 贖はれたる者は『曾て善の血にて其衣を濯ぎ、之を白くせざる者』と記さる(七の十四)善の血にて洗ひたる白き衣とは道徳的の純潔の義にして(三の四、五)道徳的の純潔は基督教會の義務也。濯ぐして光ある細布は聖徒の義しき行為の義にして(十九の八)斯る衣は基督より買ひたる者、又は與へられたる者也(三の十八、六の十一、十九の八)基督が信徒に向て要求せらるは、神の誠を守ることにして、神の誠を守るは基督の誠を守るに均し(二の二、九、十二の十七、十四の十二等)純潔なる道徳(五の十四、廿、三の四、十四の四、五)と純潔なる禮拜(二の十四、廿、十三の十二以下、十四の九、十)とは相関係する者に、追善の時代に在りては堅忍、耐久、忠信は最も必要の徳也(十三の十)均しく忠信の義は有ること明也(十三の十三、十四の十二、十七の十四)而して此等の徳は最も能く殉教に於て顯はる。基督は其血を流すことに依りて『忠信なる證人』となり、其應報として權威の座に坐りし如く、基督教徒も亦殉教に依りて最高の榮光に達するを得べし。斯く此書の作者は基督の死を以て聖徒の模範の力となせり(七の十四、十二の十一、三十一、廿の四、六)。

ヨハン

【参考書】 ルーケ、ブリーク、エラド、スチア、アルト、グイッシュ、スピツ、アンケル、ボワ、セット(マイエル註釋書中)、ホルツマン、シュエ、グス(創世聖書)等の註釋、ワイズ、ホルツマン、エライツ、ヘル、ファン、ペーコン等の新約聖書註釋、ワイセー、マツヤフ、エルト、バルト、ワット等の使徒時代の歴史、ワイズ、バインツ、スチーグンス、ホルツマン等の新約聖書神學を見よ。

ヨハン 確立者 John the Constant

【人名】 一四六八一—一五三三 サクセンの選舉侯、宗教改革の擁護者。少にして武人的に育てられ、マクシミリアン帝の下に屢々匈牙利人及びゲチチナ人と戦ひて果敢勇猛の質を表はせしが、勅五旬を越えて宗教改革の渦中に真先に身を投じ、早くより信仰を告白し、ルーテルを敬愛し、領内の僧侶に福音を説かしめ、又基督の設定に従て聖體典を行はしめたり。一五二八年ブレスラウにて結ばれたる加特力侯伯の同盟は、彼を脅かすにルーテルを引渡さずんば領地人民を奪ひて追放すべきを以てせしめ、彼は己が軍備を懸にして敢て主權を第二回侯伯會議に於ても多數に抗して改革主義を維持せり。皇帝に對しては神の愛を傷つけ己が罪の幸を著する事の外は忠順を守りしが、一五三〇年ワグスマルク會議にてカルル五世は頗る無禮の處置をなせしも、彼は一步も福音的の立場より退かず、三一年には新教諸市及び諸侯と六年間有効の攻守同盟を結び、皇帝をして三二年七月ニレンブルグの平和條約を結ぶの

ヨハン 子ボムク John Nepomuk

【人名】 一三三〇乃至一四〇一—一三九三 サヘンヤの國民的聖者。其傳は不明なり。イエズイト僧がフスラフ、マルビヌス(一六七〇)の説に依れば、ヨハンはプラゲ大學にて學び、女王ヨハンナの告白師となりしが、女王の夫ヨハン王は妻の告白せる事をヨハンの口より知らんと焦りて、隠れざりしに依り禁獄せられ、懲罰を加へらる。然も尙其目的を達せざりしに依り、王は暗夜に乗じて彼を引出しモルドー河に投ぜしめたり(一三八三)然るに無數の光河に現はれ、洲に流れ着き遺骸よりは妙香籠たり、其より病は其國殿にて癒されしと云ふ。此は素より神聖の傳にして信するに足らず。一説にはヨハンが河に投ぜられしは一三九三年の事なりといひ、又彼は女王の告白師たりし事なしといふ。既に第十六世紀中に此異説を認めて二人のヨハンありしとまで言ひし者もあれど、一七八七年ヨハン、ダプロウスキーは一人説を確めたり。兎に角チボムクのヨハンは第十四世紀中高き教職に擧げられ、後モルドー河に投ぜられしと思はる、一七二九年チボムク十三世彼を聖者に擧ぐ。

【人名】 一五〇三—一五三四 サクセンの選舉侯。ヨハン フレデリック John Frederick

約百記

確立者ヨハンの子、改革の激戦の中に育ち、其不動の擁護者となれり。父と同じくルーテルと親しく、絶えず相書信し、又爾後より没収せし財産にてワイテンベルク大學の支給を増し、一五四八年にはイエナ大學を創立す。皇帝との關係は固より潤滑ならず。一五三六年シマールカルト條約を再締して十年間新教侯伯の相互保護すべきを約す。一五四四年皇帝カール伯の力を専ら日耳曼に注ぐを得るの事情となり、乃ち戦は開けり。フレデリックは終に敗れ、一五四七年ニレンブルグにて捕せらる。甥ヨハン代りて選舉侯職を行ふ。五二年自由の身となりしが、二年後まで一臣下として生活したり。

約百記

【著作の目的】 此書はヨブと稱する敬虔なる族長が、前古無比の災禍に罹りたる事、及び之より彼と彼の朋友との間に災禍の意義に関する問答ありし事を記せるものにして、人生問題を論ずるもの、近代の語を以て云へば宗教哲學の書といふべきもの也。此書の解説せんとしたるは、義人は何故に苦むやとの問題にして、著者の主目的は、當時以色列人の間に一般に行はれたる、災禍に神の怒を表明するものにして、災禍を受くるは即ち自己に犯せる罪あるを證するもの也と云へる説を排斥せんとするに在り。義を行ふ者は榮え、惡を行ふ者は罰を受くべしとの事は、舊約聖書中屢々見ゆる所の思想にして、國民に關しては出廿三の廿以下、申廿八、利廿六に記されたる勸戒の言の中に含まれ、個人に關しては舊約の諸處に散見せり。義を行ふものは人の尊敬と信用とを受くべく、從て其爲す所成功すべく、之に反して惡を行ふものは道徳的勢力を喪失せしめ、個人に在りても國民に在りても、均しく繁榮を來すべき條件に向ひて其眼を閉ざしむるものなるが故に、不幸災害の之に備へべきは當然の事にして、大體より之を論ずれば此教義の眞理なること疑なし。故に此教義は深く希伯來人の心に浸染し、除外の場合には深く彼等の心を悩ましめたり。殊に希伯來人は自然及び人類社會に行はるる一般法則に關する觀念極めて不完全にして、彼等は自然及び人類一切の出來事に神の現存を信じ、神は直接に凡ての行為に干渉するもの也と思惟したりしが故に、惡人榮え善人苦むを見るが如き場合に方しては、竊に天道の是非を疑はざるを得ざりき。耶十二の二、廿一の廿九、卅、卅八、哈一の十三、十四、詩廿七、四十九、七十三は、即ち天道果して善人と與ふや、何を故に善人は不遇にして惡人は多福なりやとの疑問を提出せる者也。然れ共希伯來人は元來獨斷的にして、長く懷疑の地位に立つこと能はざりしが故に、強て此問題を解釋せんとして、惡に惡人の榮ゆるは當時のみにして滅亡忽ち來るべく(詩卅七の廿、廿一、卅六、七十三の十八—廿)義人は遂に地を嗣ぐべく、此世のものに僅れる耀の輝を享くべし(詩卅七、四十九、七十三)との結論に達したりき。而して彼等は更に進んで此議論を倒用し、以て義人の受くる苦難を解説し、罪を犯すものは苦難を受くべし、故に苦難は必ず其犯せる罪惡の結果ならざる可らずと論結するに至れり。斯る結論の非論理的なるはいふ迄もなけれ共、此思想は遂に猶大神學の正統説となり、耶穌の時代に至る迄も舊く彼等の信する所となりたりき(詩十三の一一五、約九の二)。ヨブの苦難の連したりし結論は即ち是にして、彼等はヨブの苦難を見て、是れ彼が犯せる罪あるがために外な

ヨの部

約百記

らすと云ひ、ヨアに向ひて悔改を勧めたり。ヨアは之に對して、其受くる非常の災禍に相當すべき罪を曾て犯したることなしと云ひ、其友等が神の賞罰は暗々として明也と云ふに答へて、蓋人の苦み罪人の榮ゆる例は決して少からず、賞罰は神の人を治め給ふ唯一の政策に非ずとの事を述べて、彼等所論の誤を明にしたり。

此の如く此書の主目的は積極的にして、凡ての不幸災難は罪より來りしとせず、實罰は神の人を治め給ふ唯一の政策也とせず思想その誤謬を明にするに在りしと雖も、此書の積極的に教ふる所の教訓も亦少からず。即ち(一) 此書は先づ第一に、義人も不義の罪に達ふことあるべしと雖も、此は其犯せる罪に對せる懲罰に非ずして、其義を試み、以て其品性を鍛錬せしめんがため也との事を教ふ。山の旌旗なく水の狂瀾なき坦々たる平道は、景色の最上なる者に非ざるが如く、幸福なく苦痛なく流離なく轉變なき生涯も、亦人生の高貴なる者に非ず。故に正直にして敬虔なるヨアも、更に興味あり、更に完全に、更に高貴なる人生の歴史を造らんとすには、悲哀と艱難の経験を有せざる可らず。此書の著者は此の如き見解を以て、ヨアが途に熱火の渦中に投ぜられ、如何に其品性を試みられたりしかを描ける也。(二) 此書は又神及び神の攝理に關して興隆なる見解を抱くこと危険なることを示す。ヨアの友等は神を以て單に賞罰を行ふ者也と解し、更に之を以て至上權を有する無慈悲なる警察官の如く思惟したりが故に、ヨアが苦難を受けるは大罪を犯せるがため也と臆断し、強て悔改を迫りたりし結果、深く自己の無罪を自覺せるヨアを驅りて不義を神に歸し、彼をして全く神に對する畏敬の念を棄てしめんとするに至

れり。幸にしてヨアは其身心に受くる苦痛の大なりしに拘はらず、此の如き誘惑に從はざりしと雖も、實際にして且虚偽なる宗教観は、唯獨り神を拜禮し、宗教を擁護し能はざるのみならず、屢々人をして神を怨み宗教に遠ざらしむる者也。著者はヨアの三人の友を點出して此危險を示せり。(三) ヨアの物語は又吾人に最も健全なる信仰の動機を教ふ。著者は其巧妙にして清浄なる筆を以て、天上の光景を描き、平生人類に敵するサタンをして、ヨアが神を畏れ惡に遠かるを以て、爲めにする所ありとなし、神の前に之を訴へて「ヨアを求むる所なくして神を畏れんや、汝彼と其家及び一切の所有物の周圍に藩屏を設け給ふに非ずや、汝彼が手に爲す所を悉く成就せしむるが故に、其所有地に逼り、去れど汝の手を伸べて彼の一切の所有物をうち給へ、去らば必ず汝の面に向ひて汝を阻はんと云はしめたり。思ふに著者は當時以色列國民が、災禍を遭れ幸福を得んがために宗教を信する傾向あるを見て、サタンの口に此言を置き、以て其國民と世界とに向て、此地主義を此實利主義を排斥し、更に高尚なる信仰の動機を興へんとしたるものなるべし。果然ヨアは其有する幸福を悉く奪ひ去られたるも、尙神を畏れ正義を行へり。彼が神を畏れ正義を行へば、幸福を受けたりしが故に非ず、是れ實になすべきことなりしがためなりしに外ならず。著者は斯くして人は無私の念を以て善をなし得べきことと、而して是れ實に最も高貴にして且最も健全なる信仰の動機なることを教へたり。(四) 著者は又ヨアの口を藉りて、自由研究の必要を教ふ。神の攝理及び人生に關する問題の解釋は、人の理性の承認する所のもの、人生實

約百記

約百記

際の經驗に符合する所のものならざる可らず。宗教は一個の有心者(神)と他の有心者(人)との間になされた合理的交通也。故に人は思慮し研究し、眞らしく見ゆる所のものに非ず、人生の實際に眞なるものを捕捉せざる可らず。故に著者はヨアをして自ら「我は全能者に言はん、我は神と論ぜんことを望む」と云はしめ、又彼の友等が理性に依らず、實験に依らず、唯傳説に依て神と其攝理との問題を論ずるを嘲りて「汝等は無用の醫師也」と云はしめたり。彼の説に従へば、眞の敬虔は最も大膽に眞理を研究するに在り。正直にして謙遜なる研究は寧ろ神に忠義なること也。之に反して理性と實驗とに依らず、唯傳説に依りて此大切なる問題を定めんとするが如きは眞の異端と云ふべきもの也。(五) 然れ共神の智慧と神の力はあまりに廣大にして、あまりに狭小なる人類の智慧と經驗とは悉く之を領解すべからず。故に吾人は神と神の攝理と人生とに就ては、其一斑を知るを得るを以て足れりとなさざる可らず。自然萬有界に於て尙秘密の中に閉ざれつと、其發見を他日に期するものあり。況や人生に於てや、又況や靈界の消息の一層秘密に屬するものや。吾人もし神を以て最も廣大にして最も複雑せる宇宙の造主、支配者となし、最も完全に最も充實せる意義に於て之を信するを得ば、道德的困難の問題も尙之を解説し得べし。於是信仰の範圍を信し、其敬虔なる生涯は即ち全智の神の賢き經驗を信し、其聖意を體して之を實行するに在り。彼れ著者が最後に到達せる結論也。(六) 著者の實際的目的は、又恐らく當時國歩の艱難に心を悩ましつゝありし人々の疑念を解き、之を奨励せんとするに在りしなるべし。神の選民たりし以色列國民が、屢々敵國外患の

ヨの部

約百記

ために苦められ、殊に國民を擧げて他國の俘囚とならざるが如きは、敬虔なる以色列國民の解釋に苦みたる所なりき。故に著者はヨアを借りて以色列國民の儀表となし、以て此困難なる問題を解説し、希望を將來に置きしめんとしたりし也。

【此書の結構】 此書四十二章より成り、初めの二章と最後の二章を除くの外は韻文を以て記さる。書中の記事は口碑に依りて傳はりたる一事實に想像を加へたる者にして、一字一句歴史的事實を書きたる者に非ず。然れ共又ヨアを以て全く小説中の人物也と思惟すべからず。預言者エゼキエルはノア、ダニエルと共にヨアの名を列し(結十四の十四)使徒ヤコブも亦ヨアに言及せり(雅五の十一)。此書の著者は人生問題を解説せんとして此書を書きたるものなれば、思ふに讀者が全く其名を知らざる人を選みて其主人公となすが如きことなく、當時の人々が其事歴の大體を熟知せる人を選みて、之を讀者の前に置きたりしなるべし。去らば書中の物語は如何程迄歴史的なりやといふに、正確に之を定めんことは素よりなしと雖も、思ふにヨアと稱する極めて敬虔なる人あり、非常なる災厄に遭遇し、神の攝理を疑ひたりしが、其友等が之を以て其犯せる罪の結果也とせざる議論を承認すること能はず、而して又神に於ける信仰を全く棄てざりしが、再び其健康と所有を回復してこそこの幸福に立ち歸ることを得たりしと云へる事だけは、少くとも口碑の傳へたりし事實なりしなるべく、著者は此傳説を骨子として、當時の疑問たりし苦難の倫理的意義を解説せんことを試みたりしものなるべし。

最正なる意義を以て云へば、此書を以て純粹なる劇詩と稱すること能はざれば、其性質は劇詩的にし

約百記

約百記

て、之を劇詩的文學と稱するを得べし。今之を戯曲の體裁に排列すれば左の如し。

序記中の人物
エホバ 神の子 サタン ヨア ヨアの妻 ヨアの友 使者
同上場所
天上 ヲアの地に在るヨアの家の
本記中の人物
ヨア テマン人エリヤブ シュヒ人ビルゲテ
ナアマ人マル アジ人エリフ 傍觀者、大風の中よりの聲
同上場所
ラツの地に於ける村落
第一 序幕(一、二章)。
一景 天上に於て神の子等エホバの前に立つ。サタン來りてヨアを試むるの隱許を受く。
二景 ヲア家に在りて、所有の家畜を敵人に奪はれたりとの報に接し、續て大風家屋を覆し、其十人の子女を壓殺したりとの報に接し、尙神を讚美す。最後にヨア自ら贖物を患ひて之がために大に悩む。其妻神を呪ひて死するに如かずと言ひしかども、ヨアは尙我神より福祉を受くるなれば、災禍をも亦受けざるを得んやと言ひて自ら忍べり。
第二 二幕目(三、四章)。
一景 ヲア日を詛ふ(三章)。
二景 三人の友ヨアと第一回の談論をなす(四、一、十四)。
三景 第二回の談論(十五、一、廿一章)。
四景 第三回の談論(廿二、一、廿一章)。
第三 三幕目(廿二、一、廿七章)。

【此書の内容】 以上記す所の結構に従ひ、更に書中の物語の梗概を述べ左の如し。
(一) ラツの地にヨアと名くる人あり。其爲人完全にして正しく、敬虔にして惡に遠かる。彼れ多くの富を有して、都蘭里に豊饒せられ、許多の子女を有して一家團圓の幸福を極めたり。彼の老いたる父母が曾て天年を全うして此世を去りしより、死の使は既に久しく彼が家を見舞はず、彼は未だ遠境の何物たるを知らず、其家はエテンの國の如くなりき。一日神の子等來りてエホバの前に立つ。サタンも亦其中に在り。サタン、ヨアの敬虔にして正義を愛するを以て求むる處あるがため也となし、エホバもし彼に禍を降さば、彼必ずエホバに報きて之を阻ふに至るべしといふ。エホバ即ちヨアの身に其手を觸ることを禁じたるの外、サタンをして其爲すがまゝを爲さしめ給ふ。斯くて重き災禍は相續してヨアの一身に降りかされり、即ち彼は一朝にして其有する財産を悉く敵のために奪はれ、次で又其十人の愛子を不慮の禍に依りて悉く一時に喪へり。而かも彼は平然として「我れ理にて母の胎を出でたり、又理にて彼處に歸らん、エホバ與へエホバ取り給ふ也、エホバの聖名は讃むべき哉」と云ひて「全く罪を犯さず、神に向ひて患なることを言はざりき」と他日又神の子等天上に會せし時、サタンはヨアの災に違ひて

ヨの部

約百記

向罪を犯さざるを以て其身に苦痛なきがため也となし、エホバも彼の骨と肉とを撃たば、彼必ずエホバに報きて之を喰ふに至るべしといふ。エホバ即ちヨアの生命を害ふこと勿れとの条件を以て、サタンをして其爲すまゝを爲さしめ給ふ。斯くて更に殘酷なる運命はヨアを襲ふし、彼の身體を撃ちて其足跡より頂迄に惡しき腫物を生ぜしむ。彼は苦痛に喘え、灰の中に坐し、土瓦の碎片を取り、之を以て其身を掻けり。其妻之を見て殆ど絶望し、汝は向も己を全うして自ら堅くするや、神を喰ひて死するに如かずと云ひしが、彼は妻に向ひて、汝の言ふ所は愚なる婦の言ふ所に似たり、我等神より福祿を受くるなれば災禍をも亦受けざるを得んやと云ひて、此事に於ても亦罪を犯さず、奮勵一番能く其苦痛を戰へり(一、二章)。

(二) エリヤブ、ビルダテ、ゾバトと云へるヨアの三人の友は、ヨアに臨める此一切の災禍を聞き、彼を慰めんとして來りしが、既に來りてヨアの苦痛の甚だ大なるを見、七日七夜ヨアと共に坐して一言をも發せざりき。ヨア乃ち先づ口を開きて其日を盟へり。ヨアの三人の友は當時の正統説を代表せる者にして、福祿を以て神の賞罰に歸したりしが故に、ヨアの受けたる災禍を以て罪惡の結果也と断定し、其苦痛のあまりに大なるに由り、彼は如何なる大罪惡を犯したりやと疑ひ給ひ、殆ど言語を發すること能はざりき。ヨアは乃ち彼等の意中を讀み、彼等の神學果して正當ならば、彼は大罪惡を犯したるものなりとざるべからず。然れ共彼自ら顧みるに、彼は此の如き可憐なる災禍を受くべき罪惡を犯したることなし。然らば義なる彼を苦しむ神は不義なるべきや。彼は素より神の義を信ぜり。然らば彼の身上に

約百記

降り來れる災禍は何がためなりや。今や彼は其三人の友の誠實なる非難に接して、神の攝理に疑を生じ、自ら割せんとして割すること能はず、遂に自ら其生れたる日を盟ひ、寧ろ死せんことを願へり(三章)。ヨアの此悲訴は其三人の友には不慮の如くに響きたりき。此に於て彼等は各々口を開きてヨアを責め、ヨア又一々之に答へて、遂に彼等との間の大議論はなれり。ヨアの三人の友は多少其性情を異にせるを見る。即ちエリヤブは三人の中最年長者にして最も權威を有せるもの如く、且最も雄辯にして預言者風を帯びたりき。彼は幾分ヨアの苦痛に對し同情を有したりしが故に、其言語比較的溫和にして、且其言ふ所にも多くの眞理を含みたる共、彼の缺點は假借にして其議論のあまりに偏斷的なるに在り。彼は其自ら信する所を確信せりと雖も、其言ふ所の眞理は屢々中面に過ぎざることあり。ビルダテは冷なる哲學者にして、議論の人也。而して彼の議論は自己の實驗より來らずして、先人の言を所とし、古聖賢を以て其證據となせり。所謂傳説家也。ゾバは前二者と異り、エリヤブの雄辯と預言者の態度なく、又ビルダテの如き理論家に非ず。彼は極めて直截單純にして唯信する處の人、換言すれば寧ろ實際的人也。此の如く其性情の異なるに從ひ、其議論の方法も亦相異れり。其所論の要旨に至りては相同じ。即ち其第一回の談論(四十四)に於ては、三人の友は共に主として神の義に對して善なる事を述べ、神の世界を治め給ふや眞理と公平とを以てし給ふが故に、惡人は其現せる罪のため苦しめ、義人は神の恵に依りて福を享くべしとの事を論じ、ヨアは之に答へて、自己の罪なきことを述べ、最も痛切大膽に世の秩序の彼等がいふが如くに非ずして、惡

約百記

人榮文善人苦むが如き事實あるを論ぜり。第二回の談論(五十一)に於ては、彼等は更に進んで歴史を經驗的に訴へて、世の災禍苦難が常に罪惡に伴ふものなることを指摘し、ヨア既に斯る重き災禍に悩まざる以上必ず何等の罪惡其根柢に横はらざるを得ずと論ぜり。ヨアは更に堅く前説を固執して其罪惡を辯護せり。第三回の談論(五十二)に於ては、彼等は益々直接明白にヨアを攻撃し、彼が斯る刑罰を受くるに相當せる特殊の罪惡を犯したること亦疑なしと云ひ、頗る激越せる口調を以てヨアを責めたり。彼等は斯く益々激越せるに從ひてヨアは益々平靜沈着の態度を取り、人争はんよりも寧ろ神と論じ、此至難なる人生の問題を解決せんことを試みたり。斯くて彼は全く此秘義を釋くこと能はざりしと雖も、開口一番其日を盟ひたりし沈痛なる悲訴は、やがて漸くに平靜に向へり。以上は三箇の談論の梗概を述べたるものなれ共、ヨアも其友等も其熱せる深き感情を語り出したる者にして、感情は素より之を論理的ならしむること能はず、從て其中には重複あり、又時々矛盾あるを免れず。且此等の談論は抽象的議論の形式に書かれたる者に非ずして、詩形を以て書かれたるものなれば、議論に一定の順序あり進歩ありと思惟すべからず。以上は唯精簡の大體を示せるのみ。

(三) 斯くてヨアと三人の友との三回の談論終るや、更に斯なる辯論家來りて此辯論に加はりぬ。彼は其名をエリフと呼び、ヨアと其友との間になされたる人生問題に嘴を寄せ、頗る長き辯論をなしぬ(廿二、廿七章)。彼は先づ己れ年少きが故に、黙して年老いたる三人の友の辯論を聴きたれ共、彼等終にヨアを辯護すること能はざりしことを述べ、彼等の議論

ヨの部

約百記

の不充分なることを非難し、遂んでヨアが自ら義とせるを責め、其多くの誤謬を矯正せんと試みたり。彼がヨアに對してなしたる議論は四箇に分つを得べし(廿三、廿四、廿五及び廿六、廿七)。彼れ共其大體の主義は、神を正義にして且惡ある支配主となし、其大なること其惡深きこと、は人智の領解に過ぎざなし、神が其民を苦しむるは或は之を懲さんため、或は之を純化せんがため、或は之を警告せんがため也として、神と其攝理とを擁護せんとするに在り。彼が災禍を以て神が其民を鞭撻せんがために遣る者也とせざるや、當時の正統説に一步を抜きたる者也。

(四) 此に於て「エホバ大風の中よりヨアに答へ給ふ」即ちエホバ先づ語りて(廿八の二、四、十の二)ヨア之に答へ(四十の三、五)エホバ又語りて(四十の六、四十一の廿四)ヨア又之に答ふ(四十二の二、四)。エホバの語り給へる要旨は、彼が天地萬有を造れる時に顯はし給へる榮光にして、其莊嚴にして廣大なる有權を語りて、ヨアをして深く神の大なること人の小なること、及び神の智慧と其力の測り難きこと、人の無智無力なることを悟らしめんとするに在り。著者は或る事柄に關しては頗る詳細に記述せり。例之四十の十五、廿四に於ける河馬の如き是也。廿九の十九、廿五に記せる戰馬の記事の如き、又頗る詳細にして且詩的也。然れ共全體的目的はヨアをして神の莊嚴にして犯す可らず、且攝理の正義の道に導いて諷すべからざることを深く悟得せしめんとするに在り。而して此目的は直ちに完全に達せられ、ヨアは黙して神の言を聴き、深く自ら思ひて自己の罪と惡とを承認し、謙りて神の大能の

約百記

手に自らを托したり。

(五) 自ら神の聖意を領解して之をヨアに傳へたりしと思惟したりしが故に「エホバの言ひたること」の如く正しからざりしが故に「エホバの怒に觸れたる」而してヨア彼等のために祈りしが故に、彼等は其罪を赦され、ヨアは前に二倍するの所有物を與へられ、又男子七人女子三人を得、且後永く生存して四代までの子孫を見、年老い日満ちて死たり(四十二の七、十七)。

【著者之著作の時代】 此書の著者は何人なりや、以色列の歴史に之に就て何事をも傳へず。嘗て聖書批評の學未だ開けず、天啓を發せありとのことを知らざりし時に在りては、此書を以てヨア自らの著作となし、若くはモーセの著作也と信じて居りしことありしが、今日に至りては此の如き説は一顧の價なしとして棄てられたり。序記及び結末の物語は、其文體創世紀の或る部分に似たる所あり。又著者はヨアを以て古代に生存したる族長として顯はさんため、其時代の彩色を施し、務めて當時の特色を失はざらしめんと苦心したれ共、仔細に之を檢すれば、著者は遂に自己と自己の住したる時代とを陰蔽すること能はずして、此書が以色列史の晩代に至りて書かれたる者なることを露出したり。去れ共著者の何人なるやは遂に之を知ることは不能す。唯彼は以色列人にして、嘗て遠き古の世亞刺比亞のウツに住したりしと傳へられたるヨアの事蹟を借りて自己の思想を述べたるを推定し得るのみ。

此書の著作せられたる時代を精密に定めんことも亦なし難し。然れ共近時聖書批評の進したる結果として、多數の學者の信する所に依れば、此書の著はされたるはイスラエル王國の没落したる時より後、猶

約百記

大人が巴比倫の俘囚より歸り來りし迄の間に於て、之より前にも後にも非ず。エー、ビー、デーヴィッドソン。チー、ドワイグ、エル等最も有名なる舊約聖書學者の説に従へば、猶太人が巴比倫に俘囚となりし時代、即ち前七百年代に著はされたるもの也。此書は舊約聖書中最も完全せる文學にして、詩篇又は預言の如く一箇の題目を捉へて簡短に之を説明せる者に非ず。其結構の壯大にして議論の機軸なる、其組織の整然として變化の自在なる實に千古の大文學といふべく、此の如きは文藝の進歩したる時代に非ざれば決して生出すること能はず。又此書を一貫せる思想は前既に論じたるが如く、義人も亦苦しむことありとのことにして、此書は即ち此問題を解決せんことを試みたるもの也。而して之と同一の思想はエゼキヤ及びイザヤの預言書中にも亦之を發見するを得べし(耶十二の二、廿一の七、九、五十五の六、五十三の三、四、十一)。去れば約百記が此二書と殆ど同時代の作なるべきは想像し難からず。其他書中に散見する社會的狀態、宗教聖に道德に關する觀念、及び著者の使用せる言語等亦一として此書の晩代の作なるを示すに非ざるものなし。是れ學者が此書を以て併因時代の作也と推定せる所以也。

【參考書】 約百記に關する著書は頗る多し。葡逸語にてはアマブライト、シュロットマン、フランク、デーリツチ、ヘンダステンベルグ、エマルド、ツエーケル、アッア、アイマン、ドーム、佛語にてはナン、ロイス、英語にてはグレイク(スビーカル、コムメンタリー中)、コックス、ライト、エー、ビー、デーヴィッドソン(劍橋聖書中)、アール、エー、ワットソン(エクスゴジタル、パイナル中)、ロウソン(フルビット、コムメンタリー中)等の註釋、

ヨハネの書、陰府、誕生

チエー子の『ヨア及びソロモン』アブラハムの『約百記講義』ドライウエル、アーク、ライム、メル等の『舊約聖書論』は其最も重なる者なり。

ヨハネ Year of Jubilee. 『安息年』の條を見よ。

ヨハネの書 又は小創世記 The Book of Jubilees or Little Genesis. 書名 舊約

経外聖書中の一書。エトオビヤ語譯のみ全部を有す。作者の時代の立場より書かれたる天地創造物語にして、其特色は天使がシナイ山にてモーセに語りたるものとして示されたる事、書中の記事は年、週、ヨハネに依り年代に従て書かれたる事(例之『第三ヨハネ』の第一週にカイン、アベルを殺せり』といふが如し)、メドラシムの中に属する多くの物語の附加せられたる事、猶太の祝節に重なる事、之を以て族長時代に立てられたる事、モーセ律法の中の法度、例之新月、安息日、献物等に關する規定に重なる事等に在り。作者は猶太人にして、猶太教の權威の衰へたる時に之を回復せんとて書かれたる者にして、紀元五六十年度の作なるべしと思惟せらる。

陰府 Sheol. 『終末論』の條を見よ。

誕生 又は復活 Resurrection of the Dead. 『終末論』の條を見よ。

ヨルダン The Jordan. 地名 パレスチ

ナの河。亞利比亞人はエリシエリヤ河と稱す。對レパノン山中四箇の湖より發し、一千四百三十四哩を降りてエルフレ湖となり、更に八百九十七哩を降り、九哩の間を流れてガリラヤ湖に入る。ガリラヤ湖は地中海より低きこと六百八十二呎中也。又ガリラヤ

ヨルダン

ヤ湖水を出で、一千二百九十二呎を降り、百三十六哩を流れて死海に注ぐ。ヨルダン河の事は舊約に記さるゝこと一百八十回にして、ロトがヨルダンの低地を望み見しに、ゾアルに至る迄善く能く潤ひてエホバの國の如くなりしといふを以て初めとす(創十三の七)。又新約に記さるゝこと十五回にして、ヨハネがヨルダン河に於てバプテスマを施したりといふを以て初めとす(太三の六)。以色列族の二箇中支派はヨルダンの河東に定住したりしことなれば、此河が以色列人に熟知せられたりしこと言ふ迄もなし。此河はヤコブ之を過ぎり(創卅二の十)以色列人約東の地に入りし時之を渡り(書三の十四)ヤアオンはセバ及びザルムナを追ふて(士八の四)アモン人はユダを襲ひて(士十の九)之を渡り、アアゼル(母後二の廿九)ダビデ(十七の廿二、十九の十五)アサ(六の十四)エリヤ及びエリヤ(王下二の六、十四)等も亦之を渡りし。耶蘇がバプテスマを受けたりしベタニヤ(又はマダナ、約一の廿八)は何れの地點なりしや確かならざれば、ヨルダン東側、ユダヤの野の對岸にして、サマリヤより北にはあざりしなるべし。耶蘇は後又此ベタニヤを訪ひ、此處に泊りしことあり(約十の四十)。ヨルダン河は航行し得べき水流に非ず、又曾て之を航行したるものなかりしが、近代に至りカスチガ(一八三五)モリッ(一八四七)ギンナ(一八四八)マツタケ(一八六九)等は航行を試みたりき。

ラ の 部

ライオン、ライオ

ライオン メアリー Lyon, Mary. 人名

一七九七一八四九 米國の女流教育者、ホリイグ山婦人學校の祖。マサチューセツツ州ボタランドに生る。同州バウアイイーランドにて教育せられ、アソフイーランド學校に奉職せし後、一八二四一八二八年アグハス婦人學校にてグラント女史と共に力せしが、三四年更に高等にして能くまで基督教主義の婦人學校を立つるの要を認め、自ら之を起さんと決心す。其計劃中には學校の家事的事務は生徒自ら之に當ること、教師は極めて薄給にして唯教育の心を得て奉職すべきことなど、初め行ひ難く見えしことありしが、幸にして基本金も集り、三六年十月サウスハドレーに定礎し、翌年十一月竣工直ちに開校す。ライオン女史は其より死に至るまで十二年間其長として健全伶俐明敏無慾の質を現はし、殊に敬虔の篤きを以て其校より出でし幾百の女子は強き感化を受け、校は宣教師養成所として永く其信仰と力とを世に認めらる。

ライオン ヘンリー フランシス Lyon, Francis. 人名

一七九三一一八四七 愛蘭の讚美歌作者。ケルツに生れ、ダブリンのトリニチ、カレッツにて教育を受け、一八一五年按手禮を受け、所々に牧師となりし後、一八二三年アホンのローアブリスラムの終身牧師となり、水夫漁師の牧會に成功す。小兒時代より詩才あり。

りしが、遂に讚美歌作者として著るゝに至れり。『主の祈に就ての語詞宗教的詩』詩篇の精神と其他を著す。讚美歌中にて『日くれて四方は暗く』(A. With me, fast falls the evening) は我國のものに譯せらる。此歌は彼の最後の日曜病苦の中に其會員等に別辭を述べ聖晚餐を行ひし後、夕に及びて作りたるものなりと云ふ。

ライトフット ジョセフ パルバル Lightfoot, Joseph Barber. 人名

一八二八一八八九 英國の監督、新約聖書學者。イグアールに生る。劍橋トリニチ、カレッツに學び、一八五二年フエローせられ、六一年神學教授となり、ホイトホーレ説教者(六六)を叙め。後聖保羅教會の『カノン』(七一)牛津の説教者(七四)を経て、ダラムの監督となる(七九)。ライトフットの加拉太書、腓利比書、並に哥羅西及び腓利門書の註釋は、註釋書の上乗にして啓蒙する所頗る多く、彼が聖書に關する學識の豊富なるを示す。彼の事業の最も著しきは使徒的教父文書の出版に在り。羅馬のクレメントの文書は六九年に、補遺は七七年に、イグアナナス及びポリカルプの文書は八五年に出版せらる。『超自然的宗教』(八九)も亦基督教のために著す所多し。其他『英語新約改譯に就て』マンセルの『ノスタック異端派』の出版、説教集、論文集等皆有名也。

ライトフット ジョセフ ライトフット, John Lightfoot. 人名

一六〇二一七五 英國の大なる番伯來學者。スタッフフォードシャーのトレント河畔ストークに生る。劍橋のクライスト、カレッツにて雄辯術及び古典學を學ぶ。一六二一年卒業してデルビーシャーのレプトンにて助教師をなし、二年後按手禮を受けシユロプンヤのヘールズ下ノルトンにて牧師たりし

ラ の 部

ライトフット

ライトフット

ライプニッツ

が『サー』ロランド、コットン彼の説教を聴き、ペラゴルトなる自己の私邸牧師に轉す。コットンは希伯來學の篤志研究家にして多少の造詣ありしに、牧師たるライトフットは全く之を知らざりしが、之を恥らしむの熱心研究を始め、瞬く間に進歩して直ちに英國に於て後のパストルを凌ぐは比肩する者なき大希伯來學者となり。コットン家を去りて二年間スタッフフォードシャーのストーンにて牧會し、次でホルンビーに移り、二九年同地に於て初めて著作を公し、三〇年コットンの世話にてアスレーの牧師となり、四二年倫敦の聖パルトロミア教會の牧師とせられ、ウエストミンスター牧師會議員とせられ、少數のユラスタス派に屬せし、其學問に依りて勢力を有し、普通信徒の權利、女執事、牧師を選ぶに當りての會衆の權利を承認すること唱へたり。同會議にて二回説教す。四三年劍橋タザン學館長とせられ、ヘルトフォードシャーのマチマンの牧師を兼ね、五二年神學博士號を受け、五五年劍橋大學副長とせられ前職を兼ね。王朝回復は何等の變動を彼の地位に及ぼさず。六一年にはサコイ會議に於ける長老派委員たりしが、六二年國教會に合す。七五年エリーの教領俸を受く。プールの『一覽』カルトンの『萬國聖書』カステルの『字書』をも助けたり。ライトフットの書は今や既に舊くして用ひられず。されど今日の學者が『セルムド』を研究するときは、ライトフット、セルテン、シエツトゲンの研究に據りて知る所を以て満足するを常とせり。ライトフットは大なる學者なりし、又能辯の人、靈的の力に富める人、エラスタス説の熱心なる主張者、私生涯の愛すべき人なりき。著作の重なる者は『エリービン』『創世記觀察』『出埃及記四光』一巻四編

ライプニッツ Gottfried Wilhelm Leibnitz. 人名

一六四六一一七一六 獨逸の哲學者。ライプニツに生れ、ライプニツ及びイェナにて法律數學哲學を研究し、一六六六年イェナで博士の推戴にてマインツの選侯に事へ、種々の勤務をなし、其後イェナの子等の教師として巴理に行き、又倫敦に行き、再び巴理に行きて七六年迄留まり、博物及び數學を研究す。有名なる微分學の大發見は既に七六年頃より始りたる者にて、其發表を八六年まで延期したりしなり。七六年中マインツ選侯死し、プレンスウィツ侯に招かれて圖書館長となり、托せられて同家の歴史を書かんとし、獨逸以太利の所々を歴遊し、夥しき材料を蒐め、編輯をなせしが、彼は之を完成する能はず、百五十年ほど後に至りヘルツ之を完成せり。ライプニツは數學哲學學上多くの議論をなせしが、其『モナド論』を最も能く説明したるもの、唯一七一四年補遺在中イェン公のために作りし大體のものに外ならず。ライプニツの神學意見は『神の善と人の自由と』の起原に於て最も能く代表せらる。もこペールの辭典に對する論議的のものにて、女王ソフィア、シヤールロットに依頼せられて書きたるものなり。彼は又凡ての基督教宗派を合同せんとせし當時の運動に與りたり。三十年戦争後には一體に斯かる思想熱し、ホズエーの『加特力教會の信仰』出でて此精神

ラ の 部

ライトフット

ライトフット

ライプニッツ

ラの部

ライプニッツ

ライプニッツ

ライプニッツ

を示し、西班牙出身のフランシスコ派僧侶にしてレオポルド帝の告白師たりしロウヤス、デ、スピノザ此計劃の熱心なる唱道者として立ち、帝の紹介を携へて麗々ハノーフェルを訪ひ、侯エルンスト、アウアストも之に傾きて會議を開き、モラクス及びライプニッツをスピノザと會議せしめたり。ハノーフェルにても羅馬にても會議にても會議の前途は樂觀せられしが、二年すきてライプニッツの『システム』、オロギタムに出でて彼が新教信仰の人なること明となり、更に二年にしてゴズエーとライプニッツとの文通始まり、前者はトレント會議の權威を絕對的に主張し、後者は之を絕對的に否認し、斯くて新舊兩派合同の交渉は全く断絶せり。次で伯林及びハノーフェルの兩廷より發議せるルーテル派と改革派との合同の計劃にもライプニッツは與ひり、モラクスと共に普蘭士宮廷説教者ヤアロンスキとハノーフェルにて會議し、一七〇三年『合同研究所』(Constitutio Koenigum) 伯林に設けられしが、其結果は唯諸派の改革教會を一種に『福音的』といふ名を以て呼び、羅馬教會を別つといふに至りしに過ぎざりき。ライプニッツが哲學に於ける主要の動機は、スピノザの萬有神論に現はれたる結論を避け、又デカルト、ホッパス、スピノザ等が取り來りし機械論に對して、目的觀をも之と共に攝取せんとするに在り。而して彼は之をなさんために實體を以て唯一不變なす觀念を排し、實體は多にして活動する者也と見たり。多元的活動的は即ちライプニッツの實體の特質也。而して彼が斯く無數なる不可分の獨立の原子を以て萬有の實體と見たる處、頗る希臘原子論者の思想と似通へる觀なきに非ざれ共、原子論者の原子は物質的にして、ライプニッツのは非物質的精神的な

るの點に於て異れり。ライプニッツは機械論と目的觀とを其根本に於て調和せんと力めたる所より、其所謂モナド(原子)の活動を以て進歩發達と見たり。而して彼に依れば、各モナドの發達する状態は、自己以外のものに依りて起るるに非ずして自發自展する者、即ち其可能性として本來具有せる者が漸次開發し來れる也、而して既に開發したるものは其現在の状態に含まれ、其將來に開發せられんとする状態も亦其現状態に於て豫想せらる、故に各モナドの現状態は其凡ての發達の段階を表現す。各モナドの現状態は唯に過去と將來との状態を表現するのみならず、又他の凡てのモナドの状態を表現す。故に各モナドは宇宙の縮圖也。各モナドが斯く宇宙を映寫するは、各モナドが本來其如く相一致するやうに造られたるがためにして、斯く相一致するやうに之を造れるものは神也。以上言へるが如くモナドの自發する状態は、本來全く無きもの、出で來るに非ずして、其可能性として本具するもの、次第に開發し來る也。而して其開發は決して間隙をなして飛躍し來る者に非ず、層々相聯繫して發達する也。ライプニッツは此法則を連續律と名けたり。此連續律に從ひて、一切の物連續たる程度の差等をなして變化推移す。是れ一切の存在物が皆夫々に殊相を具へ、一物として全く他物と同じきものなき所以にして、其等一切の差別は種類に於ける絕對の差別に非ずして、程度の差別也。故に一物は他物と異り乍ら又必ず相似たり。其相似たるは各モナドが凡て同一の宇宙を縮寫するものなるに由る。而してライプニッツに依れば、一モナドが全宇宙を縮寫するといふは、外なるものに含まるるの謂にして、是れ即ち思想の作用に外ならざれば、彼の所謂表現は思想すといふに同じ。

而して思想即ち各モナドの寫象には明不明の差あり。而して其之れあるは各モナドの活動に制限あり、其限制せらるる處あるに依る。モナドの發達は阻礙の方面少く活動の方面に進行す謂にして、モナドは一として純粹に活動的方面のみものなし。純なる活動にして他の阻礙なきものは唯神あるのみ。故にライプニッツは神を以て一切のモナドの頂上位する者となし、又は最高のモナドと名けたり。宗教論に於てはライプニッツは當時教會の唱へたる教義を辯護せんと努めたり。當時の懷疑家ヘーデルは天啓の教義を以て道理に背反せりと論じたりしが、ライプニッツは之に答へて、天啓の教義は道理に背反せるに非ず、理性に超越せるのみ、吾人以上の理性を有するものより見れば、吾人の解し難しとする所のものも亦解し得べき也と論じ、此説久しく教會の維持する所となりたりき。以上は天啓の教義に就ての論なれ共、ライプニッツの言ふ所に依れば、吾人が自然に具ふる理性を以て宗教上吾人の知り得る所のものあり。而して此等のものは凡人の宗教的精神體にして、吾人の本具するもの也。凡人を開發して明に認識するに至れば、所謂自然神學となる。自然神學の綱領は世界以上に造物者ありとの事及び吾人の靈魂は不滅也との事にして、靈魂の不滅なることは、靈魂がモナドなることに依りて知らるべく、神の存在に就ては、宇宙に於ける調和より推して其原因として神の存在を知るべく、又神の在り得べしといふことより實に在ることを知るべし。ライプニッツは凡ての物の究極は神にして、神はあらゆる真理と徳徳の淵源也と論ぜしが、然らば何故に世界には災禍ありやとの問題に答へて、所謂不善は有限なる個々物に伴ふ制限より來れりとなし、而して不善

ラの部

ライマルス

ライマルス

ラオデキア

は存在すれ共、全體より云へば世界は最も善なるもの也、人もし此世界の最善のものたるを見ずば、それは唯其一部分のみを見て全體を考へず、人類の目的及び幸福のみを標準として考ふるに由る。世界の善なる所以は、其が全體を見、其が全體の目的よりして考へざるべからず。且人動もすれば此世界には不善なること多き様に言ひ置け共、實際は然らず、唯吾人は善事には慣れ易く、災禍苦痛は幾少にても之を大きく言ひ置けり傾向あるのみ。吾に實際に不善なる事の少きのみならず、大なる善を來さんばためには不善は必要なること、宛も食物に少許の鹽味を加ふるに過ぎず、却て全體の風味を増すが如し、去れば世に多少不善の存在するは世界全體の調子を害ふものに非ざるのみならず、却て之を高むもの也と云はざるべからずと説けり。是れライマルスの有名な樂天論也。(前掲彼の著書の外、各種の哲學史、フイッシャルの『ライプニッツの傳及び教訓』、スマインの『ライプニッツとスピノザ』、メルトの『ライプニッツ』、ラッダの『ライプニッツ』、其モナド論、他の哲學文書『ラッセルの『ライプニッツ哲學の批評的考察』等を見し。

は聖書に天啓也との觀念に反對し、若し天啓にして果して示さるべしとせば、精細嚴密の言語を以て言ひ顯はせる系統をなせる教義の形式に於て與へらるべく、又其言行に於て非難せらるべき點なき人々其啓示者として選擇せらるべき可らざるに、聖書は充分に此等の要求を充つこと能はざるが故に天啓の書也といふこと能はずと論ぜり。

ラオデキア Laodicea. 地名 スリヤ及び小亞細亞に此名を有する市邑數箇あり。新約聖書に記されたるラオデキアはフルギアとリアディアとの間の境界に近く、ルカス河岸に在る市也。羅馬共和國の終り、帝國の初めに當りては、此市はフルギアの首府にして商業繁盛の地なりき。基督教は早くより此地に傳はれり。市は數度の地震の大損害を蒙り(六四年)終に土耳其人のために滅ばされ、今は全く廢墟となれり。三四三年と三四四年との間に一團此處に宗教會議開かれたりき。

ライマルス ヘルマン サムエル Reimarus, Hermann Samuel 人名 一六九四—一七六八 獨逸の學者。有名なる『ラッセルのメビウツタル、フランクメンツ』の著者。ハムブルヒに生れ、イェナ及びウィッテンベルヒにて博言學を修め、一七二三年ライマル大學豫備校の長とせられ、二九年ハムブルヒの希伯來語及び數學教授となる。ラッセルの徒にして、獨逸偏理主義者の最も急進的分子の一人なりき。Diss. de aemersonibus Spracht Magi 及び『自然宗教の眞理』を著す。彼

ライル ヘルベルト エドワード Eyle, Herbert Edward 人名 一八五六 英國の神學者。倫敦に生る。ラムプナルの聖アグライド、カレッジの校長(一八八六—一八八八) 勸導大學の神學教授(一八八七—一九〇二) タインズ、カレッジの長(一九〇一—一九〇二)を経て、エキセテルの監督(一九〇三)となる。其著書には『舊約の正典』(一九〇三)『創世記の初代物語』(一九〇三)『以士喇書及び尼希米記註釋』(一九〇三)『イロニヤ及び聖書』(一九〇五)『英國教會論』(一九〇四)『聖書論』(一九〇四)等あり。

ラオデキア Laodicea. 地名 スリヤ及び小亞細亞に此名を有する市邑數箇あり。新約聖書に記されたるラオデキアはフルギアとリアディアとの間の境界に近く、ルカス河岸に在る市也。羅馬共和國の終り、帝國の初めに當りては、此市はフルギアの首府にして商業繁盛の地なりき。基督教は早くより此地に傳はれり。市は數度の地震の大損害を蒙り(六四年)終に土耳其人のために滅ばされ、今は全く廢墟となれり。三四三年と三四四年との間に一團此處に宗教會議開かれたりき。

ライマルス ヘルマン サムエル Reimarus, Hermann Samuel 人名 一六九四—一七六八 獨逸の學者。有名なる『ラッセルのメビウツタル、フランクメンツ』の著者。ハムブルヒに生れ、イェナ及びウィッテンベルヒにて博言學を修め、一七二三年ライマル大學豫備校の長とせられ、二九年ハムブルヒの希伯來語及び數學教授となる。ラッセルの徒にして、獨逸偏理主義者の最も急進的分子の一人なりき。Diss. de aemersonibus Spracht Magi 及び『自然宗教の眞理』を著す。彼

ライル ヘルベルト エドワード Eyle, Herbert Edward 人名 一八五六 英國の神學者。倫敦に生る。ラムプナルの聖アグライド、カレッジの校長(一八八六—一八八八) 勸導大學の神學教授(一八八七—一九〇二) タインズ、カレッジの長(一九〇一—一九〇二)を経て、エキセテルの監督(一九〇三)となる。其著書には『舊約の正典』(一九〇三)『創世記の初代物語』(一九〇三)『以士喇書及び尼希米記註釋』(一九〇三)『イロニヤ及び聖書』(一九〇五)『英國教會論』(一九〇四)『聖書論』(一九〇四)等あり。

ラオデキア Laodicea. 地名 スリヤ及び小亞細亞に此名を有する市邑數箇あり。新約聖書に記されたるラオデキアはフルギアとリアディアとの間の境界に近く、ルカス河岸に在る市也。羅馬共和國の終り、帝國の初めに當りては、此市はフルギアの首府にして商業繁盛の地なりき。基督教は早くより此地に傳はれり。市は數度の地震の大損害を蒙り(六四年)終に土耳其人のために滅ばされ、今は全く廢墟となれり。三四三年と三四四年との間に一團此處に宗教會議開かれたりき。

ラの部

樂天觀

樂天觀 厭世觀 Optimism, Pessimism.

學說名 世界及び人生の價值に關する相反せる見解也。樂天觀は又樂觀說ともいふ。世界及び人生を以て徹頭徹尾善なる者となし、此世界を以て可能的世界中最善なる者として、天を樂み優々自適する也。厭世觀は又悲觀說ともいふ。世界及び人生を以て徹頭徹尾惡なる者となし、此世界を以て可能的世界中最惡なる者として、人生を悲觀し、世を厭離せんとするもの也。基督教は樂天觀を取る宗教なりや、又は佛敎の如く厭世觀を取る宗教なりやといふに、聖書の中には此世を罪惡と災禍とに満てる汚土と見、人生を不幸と悲哀とに満てる果敢なき者と見るが如く思はるる言語少なからざるより、之を厭世主義の宗教と見て、聖書中の厭世的敎訓を過重し、基督教の此方面に向て同情を表し、之を稱讃するのみならず、之を皇張廣大して、真正なる基督教の意義及び價值は佛敎の如く世を否むに在りて論ずる者あり。中世の基督教徒の中には此見解を取り、此世は汚れたり、汚れたる世に在りて徳を修めんことば極めて難しとなして、財産を擲ち親戚戚友を棄て、山中白雲深き處に隠れ、又は曠野人なき處に退きて冥想三昧に其一生を送りたる者も少からざりき。此の如き見解は羅馬敎會の中に在りて今日でも尙勢力あり。彼等は聖書の中の厭世的敎訓を過重し、真正の基督教的生活は唯僧院的生活を遊ることに依りてのみ送げらるべしとなせり。而して此の如き見解を取るものは、新敎徒の中にも亦全く之れなきに非ず。シウペンハウエルは基督教を以て、佛敎と同じく厭世的の宗教となし、而して其稱讃すべき所以も亦唯聖アントニー又は聖フランセスコの如き、厭世家を生じ得るがため也となせり。トル

樂天觀

ストイも亦基督教の厭世的要素に至大の重を置き、之を以て其行爲の標準となせり。基督教を以て厭世主義の宗教となすものは、聖書の中より許多の句を取り來りて之が證となす。舊約聖書殊に『傳道之書』の中には人生を悲觀せる言語少からず。此書の作者は其生活したる時代の沈鬱なる状態に失望したりしが故に、主として人生の悲哀の方面を描寫したりしが故に、其觀察は不完全なるを免れざりしと雖も、彼こそ聖人が今日用ゆる語の意義に於ける厭世家には非ず。彼は此世を以て徹頭徹尾惡也と信ぜず。彼は神に於ける信仰を有し、世界には道徳的秩序ありとのことを知り、神を畏るる者は之を畏れざる者に優れりとのことを確信したりき。『傳道之書』の餘參照。又使徒等の書翰にも一見厭世主義の口調を帯ぶるが如く思はるる言語少きに非ざれ共、此は何れも其思想の一面を示す者に過ぎずして、之を全體より見れば健全なる樂天觀を示す者に外ならず。耶穌が『もし右の眼を罪に陥らば之を斷りて棄てよ』と言ひ、富める少年に答へて『金からんことを思はば、往きて爾が所有を賣りて貧者に施せ、さて爾が天に於て財あるん、而して來りて我に従へ』と言ひ、『天國のため自ら寺人となれる者あり』と言ひ、又『凡そ我に來りて其父母兄弟姉妹又己の生命をも惜む者に非ざれば、一見基督教の本質は世を厭離するに在るを教へ、不自然なる憂己生活を獎勵する者の如く思はる共、耶穌が此世に於て取りたる生活の方法を見れば、彼は決して厭世觀を抱き、遺世主義を唱へたる者に非ざるを知るべし。即ち彼は富める者貧しき者婦人小兒に

樂天觀

約はらず、何人の家に往きても食事を共にし、婚姻の席にも列し、其足を洗ひ其頭に膏ぬることさへも許し、斯くして『食を嗜み、酒を好む人稅吏明あるものも友也』と嘲けられたりき。彼は又人々の彼を信じて來る者を喜びて受けたりしがごとし、彼等をして其職業をなし、其地位に止まらしめ、敢て其所有を賣りて彼に従へよと命ぜず、又彼は其弟子を僧侶とはなさざりき。且夫れ耶穌の生涯は最も悲愴なる者にして、彼は其生るるやベツレヘムの旅會馬槽の中に於てし、稍や長するや早く父を失ひ、其父は手を取らば母と數人の兄弟とを養ひ、勤々たる雄心を擲へて糊口の事に忙はしく、其一たび世に出で道説くや、親戚戚友も彼を解せず、鄰黨隣里も彼を狂せりとなし、時の宗教家は異端を唱ふる者となし、時の執政者は平和を亂る者となし、道未だ天下に明なるに至らずして、早く既に弟子の一人に賣られ、無法の手に捕はられ、三十二歳の壯齡を以て空しく十字架上の露と消えたり。彼は實に古人の言へりしが如く『惡の人苦の教主』なりしが、彼は貧苦、困難、不幸、災害、悲哀と戦ひて、未だ嘗て天を怨みず人を咎めず。世界を以て汚土となさず、人生を以て果敢なきとなさず、優々自適死に至りて尙且『我れ既に世に歸てり』と絶叫せり。是れ豈最大なる樂天家に非ずや。耶穌の樂天觀は其宗教の根本思想より來れり。善なる天父の觀念は即ち彼の宗教の總論にして、彼に依れば、世界は盲目なる運命若くは科學者の所謂勢力なる者に依りて支配せらるる者に非ずして、善真にして愛心に富める天父の攝理する所のもの也。故に其勤くや目的あり、意志あり、其目的や善真にして、其意志や愛也。星の天に輝く、花の地に咲く、人の

ラの部

樂天觀

生るる、人の死する、悉く善真なる天父の愛の發動に非ざるはなし。吾人は素より悉く天地の秘密を領解すること能はず。故に吾人は時として何が故に此の如き不幸は我が身に臨めりやと疑ひ、何が故に此の如き幸福は臨められざりしやと疑ふことあるべしと雖も、此は宛も三歳の兒童が何が故に父母が其爲さんとする所を制止し、其求むる所を離れざりしやと疑ふが如し。吾人の之を疑ふは知識足らず思慮足らざるがためのみ。善真なる父母は其子のために惡を謀らんや、況や天父に於てや。猶太教は神を以て萬物の上に超然たる者となしたりしが、耶穌は善に萬物の上に神を認めたりしのみならず、亦其中に之を認めたり。故に彼は『天國の鳥を見よ、穀くことなく、慮ることせず、倉に蓄ふることなし、然るに留曹の天の父は之を養ひ給へり』と言ひ、又『野の百合花は如何にして其つやを思へ、剪めず紡がざる也、我れ留曹に告ん、ソロモンの榮華の極の時だにも其裝此の花の一に如かざりき、神は今日野に在りて明日塵に投げ入らるる草をも此く裝はせ給ふ』と言ひて、天の鳥、野の花に神の働を見たり。彼に依れば、鳥の歌ふは神の愛の顯はるる也。花の咲ふは天父の善の現はるる也。雲も樹も溪も海も悉く天父の愛と善とを顯はるるに非ざるはなし。自然尙且然り、況や人類や。彼曰く『留曹の天の父は此等のものも養ふてならぬことを知り給へり』と。此根本的思想に基きて彼は樂天觀を鼓吹したりき。耶穌の此思想は中世に入りて悲觀的方面の過重せられたりしがため、看過せられたりしこと既に言へるが如くなれ共、アンセルム及びトマスは樂天觀を唱へて福音の本旨を全く失はざりき。而してライブニッツに至りて此樂天觀は最も明確なる形狀を以て顯はれたりき。

樂天觀

彼以爲らく、世界創造以前に一切の存在及び一切の可能的事物の相は觀念として神の心中に顯はれ、而して無限數の世界の觀念を組成せり。而して神の無限性は此中より最良のものを選べり、造化とは神の心中に於て觀念せられたりし最も圓滿なる事物の相に存在を與へしことに外ならず。彼は此の如く凡ての物の究極は神にして、神はあらゆる真理と徳徳の源也と説き、世の所謂不善は有限なる個々物に伴ふ制限より來れりとなし、全體より見れば世に不善なるものなしと論ぜり。ヘーゲルは其汎理論に基きて樂觀說を唱へ、現實の世界は宇宙性的の發展也、故に現實的のものには凡て合理的、合理的のものは凡て現實的也、世には真正の意義に於て惡と稱すべきものなし、一切の事物は皆存在せざるべからざる必然的意義を有して存在する者也と説き、シュライエルマツヘルも亦、若し宇宙にして神の活動の顯現也とせば(勿論宇宙は神の活動の顯現也)全體として其は善真ならざるべからず、吾人が世界に於て不完全と稱するものは、有限の事物に遡るべからざる結果にして、惡と稱する者は單に圓滿の度の足らざる者に外ならず、一切の事物、一切の出來事は存せざる可らざるが故に存し、起らざる可らざるが故に起る者にして、其が能ふだけ善なるもの也と説けり。西洋の思想史に於ける厭世觀は其萌芽をプラトーンに發し、新プラトーン派に至りて發達し、中世の神學に至りて更に發達したれ共、之を組織的に説きたる學者は至て少なく、多少學理的の考究に基きて之を説きたるはゲルテールを以て初めとす。彼は其名著『アンティッド』に於て其主人公をして(當時リスボン市の激烈なる地震のために慘狀を極めたることを其意中に含めて)若し斯るをだに善美なる世

樂天觀

界也とせば、其他の世界が造られたらば如何にかあらんと言はしめたり。彼は善なる神の存在を信ぜざりしに非ざれ共、世に災禍苦痛の多きこと故を以て、神を以て全能なる者と見做さずして、常に其所爲に對し障礙を與ふる物質なりと考へたりし也。シウペンハウエルは厭世觀の最も非凡なる代表者にして、彼はヘーゲルが其汎理論に基きて樂觀說を説きしに反對して、其汎理論に基きて悲觀說を説けり。彼に依れば、意志は宇宙萬物の本體にして、一切の現象皆此處より發し來る。而して意志の本體は盲目的活動に在り。意志は其れ自らの性質として盲目的に自我を客觀に表現せんとしつゝ迷ひ。水の流る、石の落つる、花の開く、鳥の歌ふより一切の現象觀じ來れば皆一盲目的意志の止むことなき活動ならざるはなし。意志の最高實現は願望を有し意識を有する人に在り。生物界に在りては此意志は生に對する欲となりて現す。生欲は生物の根柢に潜する深奥なる實在也。され共意志の本體は絶くことなき活動、熄むことなき盲進に在るが故に限りなき不満足は之と共に常に後より追逼し來らざるを得ず。追求は不満足を増し、不満足は又追求の意欲を鼓して轉々究りなき、是れ實に人生の状態也。故に三界は火宅にして人生は苦也。殊に人間は智慧を有するがために、多くの不満足多くの障礙を意識し來りて一層の不幸を増す也。人は苦痛の動物にして世は苦難の境也。是れシウペンハウエルの厭世觀學の概略也。ハルトマンは一方に於てシウペンハウエルと共に、此世に在りては會に大體に於てのみならず、最も幸福なる境遇に在る個人の場合に於てさへ苦痛の實際快樂よりも過かに多きことを説きたれ共、他方に在りては此世界はシウペンハウエル

ラ

ラコルデア

ラサール

ラザロ

の云へるが如く盲目的のものに非ずして、善良なる目的に向て發展しつゝあるもの也、苦痛多き世界の現状態も此目的に達する方便としては適當なる行路を取りて進みつゝあるもの也と説きて、一種の樂天觀を容れたり。彼は即ちヘーゲルとシウワレンハウエルとを調和したるものにして、其説を悲觀的發展説と稱す。(ヘン、ラットソンの『唯心論』基督教ハルナツクの『基督教の本質』ライプニッツの『Theodicae』、ケーンンの『論理學』、ウヘンベックの『意志及び觀念としての世界』、トルマンの『無意識哲學』、フワイテレルの『厭世主義』(一八七〇)スウレーの『厭世主義、歴史及び批評』(九一)ウヘンレーの『厭世主義の諸相』(九四)等を見よ)。

ラコルデア

Laodiceae, Jean Baptiste Henri

人名

一八〇二—一八一六 佛蘭西の神學者。コート、ドル州のレセーユールに生る。ティンマン及びバ理にて法律を研究し、辯論士を開業せしが、ラメチーの『無頓着論』を讀みて基督教は人類社會の發達に必要なものと信じ、一八二四年聖シヨルピスの神學校に入り、二七年僧となり、ラメチー及びモンマルムバールに於て一種特別の運動を開始し、『神と自由の關係』に由て極端羅馬主義と急進主義、法王政治と民主政治、法王不可謬主義と普通選舉を一致せしめんと稱す。然れども彼等の聞きし學校は三〇年の革命後大學の反對に依り警察權を以て閉鎖せられ、三一年には其雜誌『未來』法王より否認せらる。ラコルデアは羅馬に赴き無條件に法王に服従し、歸りて天主教の教義の講演をなし大なる感動を興ふ。三五年ノットルダムの説教者とせられ、聽衆常に滿堂となる。其説教は佛蘭西未曾有の雄辯と

稱せらる。三八年また羅馬に行き、四〇年ドミニコ派に入り、歸りて佛蘭西に同派を再興せんとせしが、思ふ程には成功せざりき。されど其説教は益々人望を得、四八年には國民議會の議員に選ばれ、急進黨に加はる。然れども其政見は上級僧侶の喜ばざる所なりしかば、政治より退き、更に五二年に至りては説教を止め、ソレゾの學校長となりて終り。

ラサール

La Salle, Jean Baptiste de

人名

一六五九—一七二〇 佛蘭西の神學者。ラサールの神學校の始祖。レンスに生れ、僧となり、巴理大學より神學博士位を贈られ、レンスの『カノン』となる。一六八一年少年自由學校を起し、成功して宗教の教師分派起るに至り。ベチアイト十三世は此計劃を賛し、其分派は基督教徒學校兄弟(Freres des Ecoles Chretiennes)なる名を取れり。又イグノランチン(Christians)なる名を取れり。一八五二年ラサールの聖者とせり。

ラザロ

Lazarus of Bethany, Samuel

人名

一六〇〇頃—一六六一 蘇格蘭の神學者。契約説、ロタスホルグのニスマットに生れ、一六〇七年にはエナンバラにて修學しつゝありしが、如し。二一年マスター位を得、直ちに美文學教授とせられしが、二五年職を離れ、神學を研究せし後二七年アンワルに定住教會し、有力の説教者と認めらる。三四年ケンニエアの臨終に侍し、十五年後其最後の美しかりしことを寫したる書を公にす。三六年 Resurrectione de Graie を出し、アルミニウス説に反對して神の恵の說を主張す。之に依て大陸に知られ、ワトレロト及びハーテウイタより神學教授に招かる。三六年

非國教主義のため及びアルミニウス説反對のために高等法廷に喚び出され、アンワルに於て其地位を奪はれ、アムステルダムに逐はる。三八年契約説復た勝利を得し時アンワルに歸り、三九年聖アンドリスの教授とせらる。四三年ウエストミンスター會議蘇蘭委員として出席し、四年其任に在り、『長老會當然の權』、レタス、『信仰の試練』と勝利を著はす。『レタス』は六〇年聖アンドリスにて彼の部下にて焚き死せられ、彼は直ちに其職を奪はれて最高無運の罪名にて次期國會の前に出頭を命ぜられしが、未だ其時に至らずして死せり。自ら之に就て曰く、余は一の高き判官の前に喚ばれたり、此初召喚に我は應ずるの要あり、而して數日の到らざる前に我は王等の種に來り民衆の多く來る所に在らんことを生命の契約の生活』等をも著はす。スタンレーは彼を契約説の眞聖者と呼べり。彼の書翰集は頗る面白く信仰を刺戟する所多し。

ラザロ

Lazarus of Bethany, Francois de

人名

第四福音書にのみ記せる。イエスマアアの兄弟にして、三人の中マルタは長姉、ラザロは幼弟なりしが如し。此三人は特に耶穌に愛せられ、耶穌は屢々其家を見舞ひたりき(路十の卅八—四十二、約十一の一—五十三)。思ふに其家は富みたりなるべく、マアが價貴き香膏を持ち來りて耶穌に塗りしことは此事實を確かむるに似たり。ラザロが死して耶穌に蘇せられたる次第は、約十一に記せらる。

ラシエス

Rassias, Francois de

人名

一五二六年歸國して重用せられ、三六年王よりリクワヤヴィエン監督とせられんせしも之を辭し、改革教を奉ずるを公言して本國を去り、フリーシャに至りて傳道し、四二年エマデンの牧師とせられ、全國の總管とせらる。一方には天主教徒陰謀を退かし、他方には宗派の争ありて地位甚だ困難なりしも處理ふるに巧み、幾年ならずしてフリーシャ教會は改革主義の上に確立するに至り。四九年の協約成立してフリーシャを逐はれて倫敦に行き、外國プロテスタント會衆を起し、非常に興味多き文書として今日に傳はれる教會憲法を立つ。然れどもエドワード六世死しメアリー即位して國會を許さず、乃ち其徒とす抹に殺せしに、五三年十月エムデンに至れば其國に冬を過すことを許されず、泣く泣く進みて降誕節にロストック及びリヒベックに到ればフリーシャ派牧師及び官吏は一層辛き迫害を彼等に加へぬ。五四年の復活節に至りて始めてエマデンに居を定むるを得たり。此に餘生を送らんせしに波蘭より招き返さる。王シギスムンド、アウグストは改革主義に傾き、五六年波蘭の改革主義信徒の總管とせしラスコを用ひ、彼はフリーシャに定住し、學者を督して聖書翻譯等をなして終り。

イェニイト派に入り、ヨハン及びゲレノヴァルにて哲學及び神學を教へて大に成功す。七三年ルイ十四世の懺悔師とせられ、其地位に依て佛蘭西教會の事情に大感化を興ふ。即ちナント令及び新教徒迫害の撤回、ボズエー及びフネロンの争論、法王と王との間の確執等に關係したり。彼は事功端正、道徳平易、且機敏にして忍耐の人なりき。王の真心をば王に都合よき所に安まるを得しめ、之が真の一員及び其宗派に屬する所甚だ多かりき。巴理に近く王より賜はりたる地面には此大なる家屋を建てしが、後墓地に變じ今尚其名を留む。

ラスキン

Ruskin, John

人名

一八一九—一九〇〇 英國の散文記者。倫敦に生れ、牛津に學ぶ。其最初の名著を『近代畫家』とす。廿四歳の時の作にして卒業論文也。此書主として近代の英國派の風景畫を辯護し、風景畫に於ては今人却て古人に優れりことを論ずるものなるが、此書の第一巻の公にせられし時は贊否兩極の議論を喚起し、一時文學界を震動したりき。彼は又別に建築論を草して陸續出版し、熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんを努めたりき。『Seven Lamps of Architecture』及び『Stones of Venice』即ち『建築の七燈』及び『技術の經濟』は當時の建築論草也。爾後引き續て『Unto the Last』、『Miners Polveris』、『Sesame and Lilies』、『The Centus of Aglain』、『The Ethics of the Dust』、『The Crown of Wild Olive』、『Time and Tide by Wear and Tyne』、『The Queen of the Air』、『St. Mark's Beak』等の著あり。彼の美術に關する批評的特質は、其美術論以外に出で、人生論に及ぶ所に在り。換言すれば、彼は其審美論に倫理的と社會的と美術的と

ラ

ラスキン

ラスコ

ラッセル

を結合せり。彼の美術の職分及び其功用として論ずる所に頗る高尚にして、彼は美術の批評家たると同時に道徳論者たり。彼の美術品を品評するや、多少倫理問題に干渉し、人間の義務に説及せざることをなし。而して彼は美術を以て單に道義に關するものとなすのみに非ず、又之を神聖なるものとなし、又道義を以て唯眞善なるもののみなきを、更に之を美なる者となせり。彼の審美論の要を一言に約すれば、圓滿に美なるものの中に圓滿に善なる者存す。故に人もし眞に美なる者を知りて全心を以て其を愛することを得ば、以て私慾の發動を防ぎ其生活を潔くするを得べし。夫れ善と美とは一ならずして相背けるが如しと雖も、其根柢には相親和すべき性質を有し、相契合する所あり。抑も人は何故に此此兩多き人間界に在りて美の研究に其一生を委せんとするや。他なし、道義を重んずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ。蓋し道義をして愛重すべく若くは鞏固ならしめんせば、獨り美を知るを以て足れりせず、その研究し且愛好せざるべからずと言ふに在り。彼の所説は最近の科學的眼光に照せば、不正確の點少からずと雖も、美術と宗教とを以て相離るべからざる姉妹也となし、兩者に關する眞正の領解の孤立して得難きを論じたる處は千古不磨の見也といふべし。

ラスコ

Rasco, Johannes A. or Jun Laschi

人名

一四九一—一五六〇 波蘭の宗教改革者。マルツに生る。波蘭の富みて有名なる舊家の裔なれども、幼少ならぬため僧侶となる教育を受け、二十五歳にして外國に遣はれ、レーヴェン、ナウリヒ、パリセルに遊び、メランクトン、エラスムス等に接す。

一五二六年歸國して重用せられ、三六年王よりリクワヤヴィエン監督とせられんせしも之を辭し、改革教を奉ずるを公言して本國を去り、フリーシャに至りて傳道し、四二年エマデンの牧師とせられ、全國の總管とせらる。一方には天主教徒陰謀を退かし、他方には宗派の争ありて地位甚だ困難なりしも處理ふるに巧み、幾年ならずしてフリーシャ教會は改革主義の上に確立するに至り。四九年の協約成立してフリーシャを逐はれて倫敦に行き、外國プロテスタント會衆を起し、非常に興味多き文書として今日に傳はれる教會憲法を立つ。然れどもエドワード六世死しメアリー即位して國會を許さず、乃ち其徒とす抹に殺せしに、五三年十月エムデンに至れば其國に冬を過すことを許されず、泣く泣く進みて降誕節にロストック及びリヒベックに到ればフリーシャ派牧師及び官吏は一層辛き迫害を彼等に加へぬ。五四年の復活節に至りて始めてエマデンに居を定むるを得たり。此に餘生を送らんせしに波蘭より招き返さる。王シギスムンド、アウグストは改革主義に傾き、五六年波蘭の改革主義信徒の總管とせしラスコを用ひ、彼はフリーシャに定住し、學者を督して聖書翻譯等をなして終り。

ラッセル

Russell, Charles William, D.D.

人名

一八一〇 愛蘭出身の天主教神學者。愛蘭カウチナ、クワンケルローに生れ、メアリスにて教育を受け、一八二五年同校の美文學教授となり、四五年教會史教授となり、五七年總理となり。牛津運動の首領等と親しく相知りしに非ざりしも、互に文通し、ニクマンの言ふ所に依れば、ニクマンをして天主教に改宗せしめたるはラッセルの力與かりて最

ラ

ラスキン

ラスコ

ラッセル

ラの部

ラッドのラティチウディナリアン派

ラティマル

ラティマル

も多かりし云ふ。ラッセルはフアイズマンと共同して『ダブリン評論』を編輯し、史料會の會員ともなり、又フアイズマンの『神學體系』を翻譯し、『カ...

ラッド ジョージ トラムブル Ladd, George Trumbull, D.D. 人名

米國の神學者、心理學者。オハイオ州ヘンズウィルに生る。一八七一年キルワウキヤ會衆教會牧師となり...

ラティマル ヒュー Latimer, Hugh 人名

一四九〇—一五五五 英國宗教改革の有力なる首領的説教者、殉教者。レーセスターのサルカストンに生る。父は紳士にして、ラティ...

の教會が監督の支配權外に在るを以てラティマルを招きて説教せしむ。法王黨は此を以てウルウーに訴へし...

に適用したる名にして、イエロニムスも亦此意にて此語を用ひ、且之を七十八人譯より重譯せるラティ...

ラの部

ラテラン會議

ラテラン會議

ラテラン會議

彼は直ちに息を絶たたり。彼は大學者には非ざりしも、改革者として其實際的な大膽なるに於て大なり。...

ラテラン會議 Lateran Councils. 事 蹟

羅馬ラテラン聖約翰教會にて開かれたる五回の世界會議をラテラン會議と稱す。ラテラン教會は天主教會の最も有名なる教會にして、もとラテラニ家王宮の立ちし場所にて建てられたるより斯く名けらる。...

ラテラン會議 Latin Version of the Bible. 書 名

舊約聖書の七十人譯より重譯せる者にて、從て七十人譯に含まれたる經外聖書を...

ラテラン會議 Latin Version of the Bible. 書 名

ラテラン會議の初代に在りては、希伯來語より希臘語に翻譯するもの少かりし、新約聖書のラテランを企つるものは...

ラの部

ラドベルトス

ラドベルトス Radbertus, Paschasius. 第九世紀の教皇使徒者。...

ラハマン Karl Laichmann, Karl. 一七九三—一八五一。獨逸の批評學者。...

ラハマンのラバディー Labadie, Jean de. 一六〇一—一七〇四。佛蘭西の神祕學者。...

ラの部

ラハブ

ラハブ Rahab. 人名。ヨシヤアがエリコを圍む時、...

ラハマン Karl Laichmann, Karl. 一七九三—一八五一。獨逸の批評學者。...

ラバディー Labadie, Jean de. 一六〇一—一七〇四。佛蘭西の神祕學者。...

ラノ部

ラルド子ル

ラングトン

ランゲヨ ランステル

三〇年に創刊せる雑誌『未來』にては、頻りに教會は自己を自由にするため國家を分離すべく、全く民主主義を以て攻撃すべしと論ぜしむるが、法王グレゴリウス十六世は之を悦ばず、三三年八月回書を發して之を否認し、雑誌は廢刊し、彼は公生涯より退けり。されど之に服従せしむる非ず。三六年には『一信者の言』を出して意を羅馬を離れ、獨立の態度を取り、宗教にも社會にも急進主義を唱へたる小冊子を頻りに發す。最後の大作は『哲學概論』及び附註福音書にして、共に四六年に出づ。四八年國民議會議員に選ばれしが、其計劃を實行するの餘地なく、終に五二年の『ターデマー』の後は全く望を絶ちて公生涯より退きぬ。

ラルド子ル

ナサニエル Lardner, Nathaniel 人名 一六八四—一七六八 英國の神學者。セントのホートハーストに生る。倫敦ホカストン街專門學校に學び、ワトソレト及びレヘンにて研究し、倫敦に歸りて一時トレヒト卿夫人の家附教師となりしことあり。彼は説教に於て其夫如く、少しも聽衆の心を動かすを得ず、此を以て前後教會に從事せしことは唯少時交りチャルド、ワルド子ルの副教師となりしことあるのみ。且彼は非常の聲にして會衆の讚美歌うたひつゝあるや否やへ聞き分けがめる程なりき。されど長所は講演に於て發揮せられ、一七二三年より著はれたり。二七年より五五年まで前後十二回に其學生の大作作たる『福音史の信憑すべき事』を出す。是れ實に彼の一生を語るもの、又基督教に關する學問の寶庫と稱すべきものにして、ペーリー其他の人々に其資料を供給し、ギッギンも之に負ふ所あり。此外『新約聖書の眞義』は基督の人格を論じたる者にて、ロコスには不

議に耶穌の人性に在りて説けり。彼の著書は凡ての種類に學問をして就て學ばしめたるものとして甚だ著し、其題せし教派は英國長老教會なりき。

ラングトン

スティーンズ Langton, Stephen 人名 一二二八年死。カンターベリ大監督、政治家。生年所不明ならず。英國人なりしが如し。巴黎大學に學び、在學中ロッセイ即ち後のインノーセント三世と交友を結ぶ。一三〇六年羅馬に行き、聖グレゴリウスの『カルティナレ』とせらる。カンターベリの大監督セウベルトの死に時、レフナルド僧侶數人を率ひて法王の前に至り、自己の後任に當選せらるるを言ひ、認定を請ひしに、やがて王ヨハン一の使節きたりて、レフナルド監督を後任せんとすを請ふ。法王は兩つながら選舉に不法ありとて之を棄て、其前前にて僧侶等に選舉を行はしめ、ラングトンを認めしむるが、彼は即ち當選し、王の抗議にも拘はらず一〇七年認定せらる。されど六年間佛蘭西のボンナニーに留まり、何となれば彼の選舉は法王と國王との間に英國未前の争議を引き起し、フランスは大監督を受くることを肯ぜざりしため、法王は英國に禁令を布き、會堂は閉鎖し鐘さへ打たずなりたればなり。されどフランスは終にインノーセントに服し、ラングトンは國に入り、ウインナムスターにて王に迎へられしが、王は彼の前に平伏せり。ラングトンは初より英國舊習慣法律の擁護者又憲政の抵抗者なりき。史家ジョーンは彼を以てフランスの暴虐より國を救ひし者とし、アンセルム及びチオバルドと相比せり。彼は下級貴族等の聯合を助け、一四年には倫敦聖保羅教會の會合にてヘンリー一世の舊憲法を作り『マグナカルタ』の基礎を作りし一人となれり。法王代進ラングタル法王の

大監督、第十一世紀に於ける英國佛國の宗教の大感化者、ウイリアム征服王の補助者。以太利マゲイニヤにて教育せられ、マゲイアにて法學教師となる。されど野心大なるを以て一〇三九年ノルマンディーに行き、アヴランシにて一學校を起し運來を來たせしが、心算一變して四二年世を棄て、ベタのメチアイグリス派僧院に入り、庵主レヒューインに敬待せられたり。三年を全く退隱の中に過し、世人をして彼は全く死にしのと思はしめたり。四五年副院長とせられ、僧院を振興し、且神學哲學を奨励す。後カンターベリ大監督となりしアンセルム、及び後法王アレクサンデル二世とせりしレウカのアンセルム等は其時の學生なり。此時代彼の有名な敵手はジョアのベレンガルなりき。ベレンガルは四六年より晩年化體説を論じて注意を引きたり。ラングタルはベレンガルとは初め相友たりしが、四九年の末頃後者は前者に書を贈りてラトラムヌスの文書中の晩年説を異端と認むるを告げ、兩人の友情は破れ、其書面を受けぬ。五九年ベレンガルはラトラム會議にて服従の意を表せしむるが、尙會議を攻撃し、特に自己に屈服を強ひられし條文の作者カルティナルファンベルトを攻撃せしむるが、ラングタルは『リベル、テ、コルゴル、エト、サンギン、ドミニ』を著して之に答へたり。此時には彼はカインの聖ステパノ僧院の長となりて名聲益々高かりき。其頃よりノルマンディー侯ウイリアム宗教上及び政治上に彼の意見を容れ、侯が羅馬を同盟して貧窮なる英國の教會を救ふを名として試みたる英國征服の念には、彼は實に其神備なりき。其一〇六七年に於てルーエンの大監督

命によりて此憲法を撤回すべき宣言文を教會に傳へて讀ましめんとするや、ラングトンは之を拒み、爲めに停職せらる。自ら羅馬に行きしむるが、法王は前令を改めず、彼は國事犯人として囚へられ、一八年まで羅馬に在りき。二〇年ヘンリー三世即位の時には戴冠式を行ひ、其治世中に其地位に堅く立ちぬ。彼は博愛敬虔にして、愛國心深き人なり。政治家としての能力にも秀でしを見る。多少の文書を遺せり。兄弟ジョン、ラングトン又當時に勢力あり、ヨルグの大監督に選ばれしヨハンは之に就かしむるを肯ぜずして止り。

ランゲ

ヨハン Peter 人名 一八〇一—一八四 獨逸の聖書註釋學者。エルベルフェルト附近のピエヒルに生る。ボン大學に學び、相續てツアルド、ランゲンヤルグ、ドワイスマルグの牧師となり、一八四一年ツワッヒ、五四年ボン神學教授となる。彼の著書中最も有名なるは『耶穌傳』(四四—四七)『基督教義』(四九—五二)『使徒時代史』(五三—五四)『神學的說教學的聖書註釋』(五七—五九)等に於て、何れも其想像の明白豊富なるを示す。其註釋書はヒョッブツァフ監督の下に英譯せられ、最も廣く頒布せられ、大なる利益を興へたり。

ランステル

ヘンリー Lansell, Henry 人名 一八四一—英國の神學者、旅行家。病院、監獄を訪ひ、傳道士の觀察をなさんため、歐羅巴諸國、亞細亞、亞非利加の大部分及び米國大陸を旅行し、露西亞及び土耳其坦にては動物の採集をなせり。『教職者雜誌』(Clergyman's Magazine)の創設者及び記者にして、其著書には『西比利亞紀行』(The Sacred Central Asia)『支那領中央亞細亞』及び『The Sacred

ラノ部

ランデレル。ランフランク

ランフランク

ランフランク

ランデレル

マキシミアン アルベルト von Landerer, Maximilian Albert 人名 一八〇一—七八 獨逸に於て超自然的哲學と神學的現代神學との中間の神學を取りし學者の代表的人物。ウエルトムベルヒのマルクプロンに生れ、公衆の耳目に觸るゝ生活を避け、靜かに著作せし人なり。チロリンにてデルセル等と同時代に學び、一八三九年ワルドの牧師たる父の補助者となり、次でマルブアロンの教師次でチロリンの講師となり、三九年グロヒンゲンに牧師となりしも、聲疾漸く暮るる説教の拙きことのため辭職して七七年に再びチロリン教授となり、マルク及びコート、デー、ベッタの中間に席を占め、絕對知識に關するヘーゲル説を否定し、組織神學の方面に於ける宗教經驗の重きを説く。然れども聖書中の天啓を棄てず。ナザレの耶穌に於ける神之人との全き合一を以て組織神學の中心とし、基督の人性を特に重じ、之と共に超自然的誕生と全然的無罪とを主張せり。ランデレルは忠實なる講演者なりしが、其スピアラ時は時として他の地方の學生を困しめたり。容貌はマルクやベッタの様に醜陋ならざれども、其感化は尙強くして學生は彼を重じ彼に親しみたり。文學的活動は生存中には唯ヘルツォグ版十三篇その他に一編ありしのみ。非常に講義に念を入れたること、衆人の耳目に觸るゝを厭ひしこと、批評に刺激せられ易かりしこと故にして之に止まらしめしなり。死後『宗教に就て』(Walden's Memorial)『説教集』(最新教理史)等出版せらる。

ランフランク

Laufmann. 人名 一〇五—一〇八九 英國カンターベリ第三十四代の

大監督、第十一世紀に於ける英國佛國の宗教の大感化者、ウイリアム征服王の補助者。以太利マゲイニヤにて教育せられ、マゲイアにて法學教師となる。されど野心大なるを以て一〇三九年ノルマンディーに行き、アヴランシにて一學校を起し運來を來たせしが、心算一變して四二年世を棄て、ベタのメチアイグリス派僧院に入り、庵主レヒューインに敬待せられたり。三年を全く退隱の中に過し、世人をして彼は全く死にしのと思はしめたり。四五年副院長とせられ、僧院を振興し、且神學哲學を奨励す。後カンターベリ大監督となりしアンセルム、及び後法王アレクサンデル二世とせりしレウカのアンセルム等は其時の學生なり。此時代彼の有名な敵手はジョアのベレンガルなりき。ベレンガルは四六年より晩年化體説を論じて注意を引きたり。ラングタルはベレンガルとは初め相友たりしが、四九年の末頃後者は前者に書を贈りてラトラムヌスの文書中の晩年説を異端と認むるを告げ、兩人の友情は破れ、其書面を受けぬ。五九年ベレンガルはラトラム會議にて服従の意を表せしむるが、尙會議を攻撃し、特に自己に屈服を強ひられし條文の作者カルティナルファンベルトを攻撃せしむるが、ラングタルは『リベル、テ、コルゴル、エト、サンギン、ドミニ』を著して之に答へたり。此時には彼はカインの聖ステパノ僧院の長となりて名聲益々高かりき。其頃よりノルマンディー侯ウイリアム宗教上及び政治上に彼の意見を容れ、侯が羅馬を同盟して貧窮なる英國の教會を救ふを名として試みたる英國征服の念には、彼は實に其神備なりき。其一〇六七年に於てルーエンの大監督

職任命を辭し、三年後カンターベリと同職を拜命せしむ。預めウイリアムと默會する所ありたればなりと史家フリーマンは言へり。就任後僧侶の粗野なること、教會の支配者に外人を欲する好まぬアンゲロサクソン人の謀叛のため少少の困難を起せしむるが、彼はカンターベリに僧職を集中し、ヨルグを大都監督地となし、ウインナムスターとウイングを大都監督地として之に服従せしめ、外交的任務を以て漸次土着の高僧長等を罷免し、唯ウルフスタム監督のみアンゲロサクソン人たるまでに至らしめ、斯くてノルマンディーの支配権を確立し了れり。されど彼は一方には有識の高僧にして、僧院生活を改良し、文學を興すことをなせり。法王ホルヘラランドの改革には賛成し、七六年には僧侶獨身生活を履行し、高僧には之を強ひ、教會僧侶は現在妻帯せるもの已むを得ずと雖も、將來は結婚すべからずと令せり。然れども國王の獨立を主張し、或る場合には法王に反對までせしことあり。八一年羅馬に喚ばれし時は、若し之に應ぜざれば停職せんと脅かしされし、出でざりき。彼は文學に於ても後世の讚美を受けた。唯かに著作者として大なるには相違なく、殊にノルマンディーにて其僧院を文學の講究所たらしめ之を奨励したる點は偉なりとすべし。されど其文學には思辨的能力の現はれたるものなし。其『リベル、テ、コルゴル』は最大作なるが、晩年のマンと葡萄酒が基督の肉と血の化したる者なるを主張したるもの也。

リ

リ

リヴァイヴァル

リヴァイヴァル

リ

リーアン Lee, Ann 人名 一七

三六―八七 米國戦艦派協會 (Gale's Society) の創立者。英國マンチェスターに生る。父は鍛冶師にして其女に教育を施す。之を紡織會社工女たらしむ。アンは後養病院の料理人となり、次でアブラハム、スタンレーに嫁す。一七五八年ジョージス、マドレーの統率せる友會に入りしが、天性の多感質は忽ち其會の行法に影響せられ、苦行をなし幻を見默示を語るに至る。七〇年結婚を否認し、凡ての人間の腐敗不幸は肉慾の満足より來ることを説き唱へて獄に投ぜらる。獄中にて自らは基督の第二の現身なり凡ての婦人の首なりとの默示を受け、以來其徒より宗教的に完全なる者せられ『アン母』と呼ばる。終に夫と離別し、七四年其徒を率ひて米國に移り、七六年紐育州ウォーターブリーに定住す。革命戰爭中は英人に叛逆の通信をなして投獄せられ、後八〇年には紐育州へ忠信の誓約をなすを拒みて投獄せられしが、兩回とも總督クリントンに依て赦さる。七九年の信仰復興は此徒をも益して多くの悔改者を得しめ、八〇年には彼等と同州ニッパノンに移れり。其後一七九一年新英州の所々に傳道旅行をなし長く其感化を遺せり。

リー Samuel H. Lee, Samuel D.D. 人名 一七八三―一八五二 英國の東方學者。シロアシヤのロンダノルに生る。慈善學校にて形は

かりの教育を受け、十二歳の時大工の弟子となる。其傍ら特に語學を研究し、教師なくして二十歳前に拉丁、希臘、希伯來、カルデア、ペルシア、スリヤ諸語に通じ、後更に亞刺比亞、波斯、印度、佛蘭西、獨逸の諸語を知る。一八一三年劍橋マインス、カレッジに入る。一九年同校の亞刺比亞語教授せられ、三一年希伯來語の王室支給教授せられ、死にし時にはパーリーの長たりき。ハルレ及び劍橋より共に博士號を與へらる。著書は其博學と才能を示し『聖書的萬國語序言』亞刺比亞書『イブアン、パチュマの旅行』の翻譯『希伯來文法』及『註解約百記』等最も佳なり。

リヴァイヴァル

Religion. 術語 此語は基督教徒の間に於て、一般に宗教に對する熱心を強くし、信者は心に活氣を注がれ、墮落者は信仰に立ち返り、未悔改者は信仰を呼び醒まされて悔改し、確信を得、斯くして神の力を著しく顯はれたる精神状態を指して言へるものなり。
(一) 信仰復興の意義 世界に於ける基督教には整然たる一致といふもの殆どあるなく、個人の中に發達し、社會の中に發達すれば、其状態千差萬別となる。從て變遷あるものとなり、種々の感化を受け、又反對の感化さへも受くることあり。時には罪ある世の成行と戦ひつゝ迅速に進歩すれ共、又時には種々の障害に遭ひて進歩停止し、業的危機に瀕する。ともあるなり。凡て自然的のものは精神的のものに相敵す。故に個人にしてもし進歩の中に發達せんとせば、不徳不息の精神を以て努力奮闘せざるべからず。之に反してもし罪惡との戦を休む時は、罪は善に勝ち、宗教的熱情は衰へ、精神は冷却し枯死すべし。

元老をも宮殿をも裁判廷をも皆な充たせり、神の言は斯くも力強く發達して行き且れり」と言ひしは即ち聖靈の此活動の結果をいへる也。
(二) プロテスタントの信仰復興 斯くして教會は一進一退して中期に至り、種々の事情のために全く俗了したりしが、第十四世紀にウィックリフを生じ、第十五世紀にフッスを生じ、第十六世紀に至りて終にルター、ツウィンゲリ、メランクトン、カルヴァン等を生じ、所謂宗教改革の運動を喚び起したりき。此運動は抑も何を意味する。是れ實に聖靈の特殊なる活動にして、之に依て基督教國に於ける人心は神の言の方向に轉られ、法王制度の誤謬は發見せられ、非難せられ、教會は再び福音の信仰に依て築かれ、之に依て多くの人は悔改し、神の靈に依て更生したり。其勢甚だ盛なりしかば折角燃やしたる迫害の火も其甲斐なく、王侯や高僧等の壓抑ありしに拘はらず、悔改者は獨逸、瑞西、佛蘭西、和蘭、大英國の全體に起り、西班牙、以太利にさへ起りたりき。是れコンスタンチヌス大帝以來世界の見たる所、教會の受けし所の信仰復興の最大なるものなりき。
(四) 大英國及び愛蘭に於ける信仰復興 プロテスタント信仰復興以來、教會の記録は此等聖靈の特殊なる活動の實なることと其力を示す。これ何れの時代に在ても豊富なり。蘇格蘭の教會はワゴン、ノッダス及び其徒の下に起りたる信仰復興に依て新に生れたりき。第十六世紀の終に近く、ウィッシュヤルト、ターメル、ワエルシュなどの宗教家に導かれて、蘇格蘭全體は又聖靈の特殊の降臨を見たりしが、其結果は頗る偉大にして、總會全體四百の教師長老等が嘆息を呻かざらざりて嚴肅盟約及び契約を新に確定した

教會亦然り。例之教會が世俗的感化を受け、商業の振興に際して利益を貪らんとして、政争の激烈なる時に方り、其熱に浮かされて之に加はり、國際的戰爭又は内亂の時戦争心に捕はれ、社會一般の俗化せることに方り、教會も亦只管快樂を求め此世の一時の福利に心を専らにするに至れば、教會の神らしき力は著しく衰へ、聖靈は輕ぜられ、基督の王國の進歩は停滞するに至り、靈的永遠のものも世俗的一時的のものより下に至るに至るべし。是れ基督教の歴史に屢々起りたることに於て、珍らしき事に非ず。昔以色列人民が預言者祭司のために嚴責せられしも此精神的衰頹の故にして、モーセの時、士師の時、諸王の時、俘囚の前後此靈的危機は絶えず現はれたりき。アモラとバラク、サムエルとダビヤ、エリヤとエリヤ、ヨナとダニエル、エズラとネヘミヤは皆な是れ此頹弱を回さんとしたる者に外ならず。而して之を回して靈の火を祭壇の上に燃え立たせ、之をして斷絶ならしめたるものは、實に神の活動にして、其結果が常に宗教の復興たりしなり。基督教の歴史も亦初より此事あり。エヘソの教會は其初を受え失ひ、ラオデアアは生温くなり、サルマスは其衣を汚し、ヒヨヒソコリントは此世の快樂の誘惑に從ひたりき。熱き信仰あり、神らしき熱情あり、聖なる生活ありしものが、間もなく肉慾に陥り、精神枯死するに教會に於ても個人に於ても常に有り得る。ことに於て、個人の歴史も教會の歴史も之を證するものに非ざるはなし。抑も之を止むるの途如何。曰く唯精神的復興の時を與ふるに在るのみ。此精神的復興の時即ち宗教復興と稱する者にして、斯くの如き顯彰は聖靈の特別な働に歸せざるを得ず。凡そ社會的個人の、教會のものとの間

リ

リヴァイヴァル

リヴァイヴァル

リヴァイヴァル

民のものとの間はず、凡ての精神的生命、凡ての精神的生活の進歩は神の靈に依れり。ヘンテコソテの日より終りの審判の日に至るまでの基の時代の全體は、聖靈の感興なり。聖靈は常に教會の内に在り、教會と共に在りて神の國建設の事業を進歩せしめつゝあるなり。而して時に顯著なる活動をなすものは是れ所謂信仰復興也。
(一) 聖書時代の信仰復興 聖書の中には特殊の時に聖靈の特殊の感興あり、靈の典型的注臨あるべきを記して『後我れ我が靈を凡ての肉の上に注ぎん時來らん』と言へり。而して此預言は使徒彼得の證言せし如く、ヘンテコソテの日が始まり、非常な強大なる力を以て一時に三千人を更生せしめたりき(徒二)。然も是れ第一着歩にして、其より大群衆の靈を新にし潔むる神の惠の不思議なる顯彰は絶えず引き續き、其に依て教會は種々付けられ、根を下し、到る處に祝福の果を結びたりき。是れ實に宗教の大復興なりしなり。されど是れ基督教の第一信仰復興にして其より種々の時々の機會に於て、神は教會の顯と福音の勝利ある進歩のために常に自ら手を下し、精神的衰頹の時至りて罪惡世に行はれ世界を席捲したる後には、一新聖化の惠の波は再び打ち寄せて國を浸し、之に依て群衆の心は目を醒まし、多くの怠り眠りし者は救の確信を得、相率ひて悔改し、教會は斯くして一新せられたりき。唯にエルサレムのみならず、使徒及び其徒が福音を傳へたる所には、異邦人の中にさへ到る所々る光景呈せられぬ。サマリヤ、カイザリア、兩アンテオケ、ルステラ、アルベ、エヘソ、羅馬少なかりき。第三世紀の初チヨリアヌスが『我等は君の領地のあらゆる所、即ち市をも島をも法人をも會議をも軍隊をも民族をも

リヴァイヴァル

リヴァイヴァル

リ の 部

リヴァイグスタ

リヴァイグスタ

リヴァイグスタ

諸教會に復興あり、殊に一八二七年より三二年まで
 ナトルトン。フィンチー其他の説教に依りて復興は
 全国に起りたり。一八五八年の初旬市より始ま
 りし聖的暴徒の波は特に著しきものにして、経済界
 の破産頻々たりし後に起り、市より市に邑より邑に
 傳はり、全合衆國に波及し、僅に一年の内に五十萬
 の悔改者を教會に加へたり。而して此復興は教派
 宗派階級の別なく一般的のものなり。之より先き
 一八三七年には布哇ロロの宣教師に於てコーンの説
 教に依りて大復興起り、五年間繼續し、其間に七十
 五百五十七人の悔改者を生じ、一八三八年の七月一
 日の如きは一時に一千七百五人悔改入會したり。是
 れ使徒時代以後曾てなき光景なり。一八七八年
 には印度テレグ、マッソロンに復興起り五年間に二
 萬人以上教會に入りたる。こゝあり。最近に於て最
 も著しき信仰復興はウェールズに於てエヴァン、ロ
 マックと稱するロンゴルの坑夫の説教に依りて起り
 たるそれとす。此復興は一九〇六年秋に始まり
 數箇月間繼續し、甚深の影響を英國の宗教界に與へ
 たり。

也。
リヴァイグスタ **ジョン・ヘンリー**
 Livingstone, John Henry, D.D. **人名**
 一七四六一八二五 英國に於ける改革和蘭教會
 の祖。福音州キーンアプシーに生る。一七六二年エ
 ール大學を卒業し、二年間法律を研究せしが同心し、
 フルチバド、レーディーの助言により六六年和蘭
 ウトレクトに渡りて神學を研究す。六九年アマステ
 ルダムにて按手禮を受け、聖年博士號を得て歸國し、
 福音の改革和蘭教會の第二英人説教者として就職す。
 革命のため一時福音を去りキングストン、アル
 バニー、リヴァイグスタ、メア、キーンアプシー
 等に歴遊せしが、暇止みて市に歸り八四年總會に依
 て教育及び論争の教授せらる。一八一〇年總會
 は更にニワアルスワイクに神學校を開くために彼
 を招きし、彼は同時にラインス、カレルナの總理
 に選ばれ、死に至るまで此兩職を兼ね。彼の和蘭教會
 會に入りしはも其分職を故はんとする動機に出で
 しと言はるるまでに、彼は其教育學問信仰職に依
 てよく兩高潔より尊敬せられ、其手宛に依て一七七
 一年兩派は合併し、斯くて英國の和蘭教會は獨立す
 るに至れり。彼は又主となりて同教會の憲法を作り、
 八七年には最初の讃美歌集を草せり。説教も亦大に
 頌讚を受けたり。

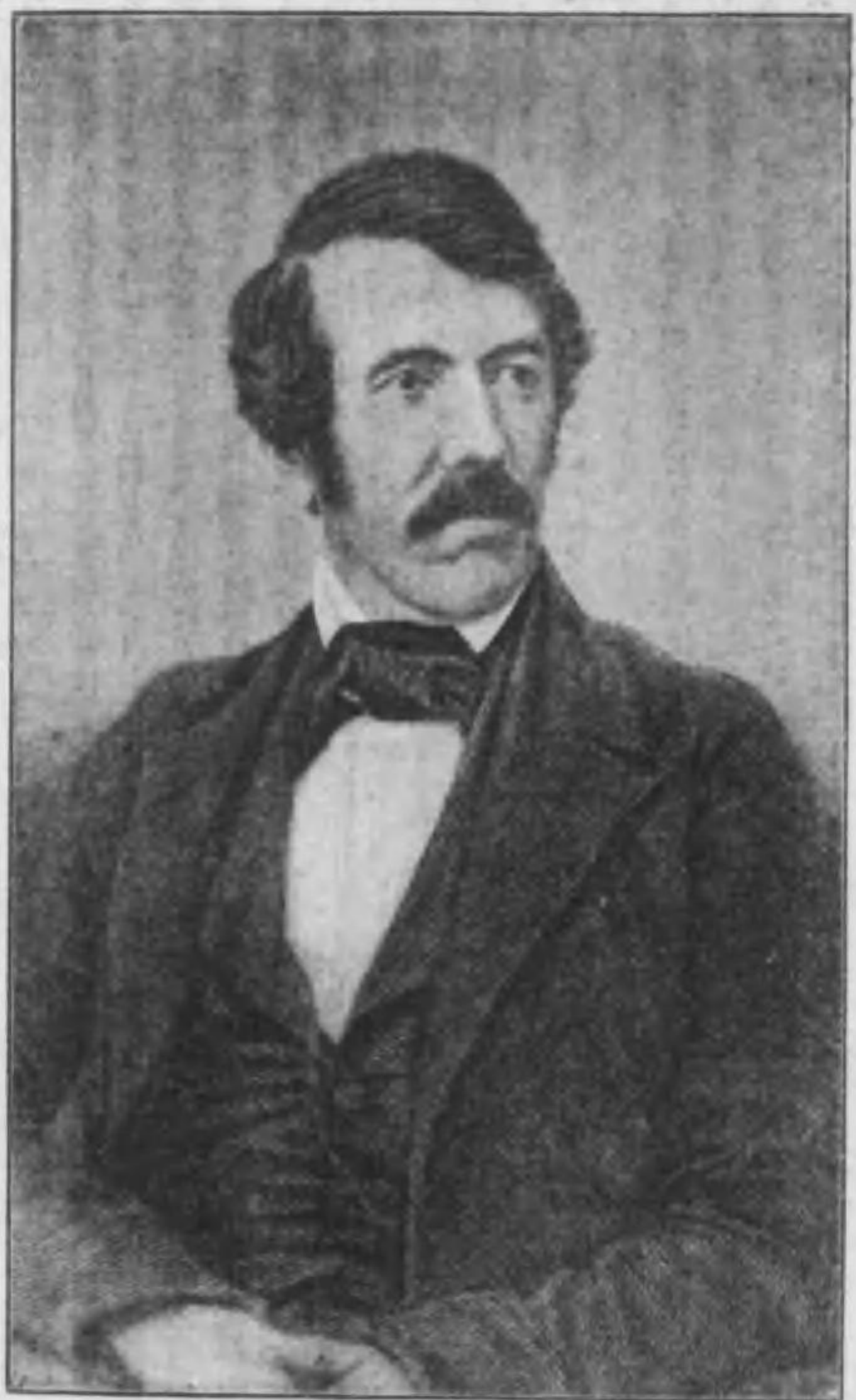
したり。アグワッドは暫く小學に學びし後、十歳
 にして紡績會社に雇はれ爾後十二年間其業に従ふ。
 アイタの『未來狀態の哲學』を讀みて同心し、又
 グラッアの支那宣教師切要の譯を讀みて、宣教師
 たらんことを決心するに至る。乃ちグラッアにて
 二期間神學講習會に出でし後、倫敦宣教師社に
 採用を申し出て試験せられ、尚エケタスのオンガ
 ル及び倫敦にて研究し、一八四〇年グラスゴーにて
 醫士の免許を得、同年十一月倫敦宣教師社宣教師と
 して按手禮を授けらる。初め支那に行く心なりしも、
 鴉片戰爭ありて支那傳道中止し居りし際、偶々倫敦
 にて教師ロバート、モファットに會ひしが、亞非利
 加の事を開き大に感動して同派宣教師となる。
 暫くはモファットの傳道地たるケルマーンにて傳道
 せしが、初より未だ白人の往かざる地に傳道を新聞
 し、又其狀態を知らんと心強く、且土地の産物に就
 て科學的研究の精神盛なり。一八四三年モガッ
 ンに定住し、危くも獅子に殺されんことを免れり。同
 地にモファットの長女メアリーと結婚す。次でチ
 ニエエンに移り、更にコロメンガに移る。何所に於
 ても其醫術及び動作に依りて土人の信用を得たり。彼
 は早くより土人傳道者を得るに至らんことを熱望し
 居たりしが、コロメンガにては土人の酋長セチエ
 ルの改革せり。トランスマール共和國はアフリカの占
 領する所なりしが、リヴァイグスタンは土人傳道
 師を得たるに屬し同國まで赴きしも、其功を得ざる
 のみ、却て妨害を蒙りたり。此を以て彼は方面を
 轉じて北方探險を企て、カラハリ大砂漠の横たはり
 て旅行に水の缺乏を感ずる困難あるに拘はらず、三
 度の横斷を遂げ、ヌガオ湖グレイ河アマナラ河を
 發見せり。同地方にて大酋長セチエエンは彼を歡

リ の 部

リヴァイグスタ

リヴァイグスタ

リヴァイグスタ



リヴァイグスタの肖像

迎せしに、彼れ到着後數日にして死せり。リヴァイ
 グスタンは其領内に傳道地を設けんと欲し、先づ其
 民のために海岸までの途を開き、之をして文明の商
 業及び基督教に接せしむるの念なるを感じ、此目的
 を達せんとて妻と四子をば英國に送り歸し、自らは
 大旅行を企てたり。出發前アフリカの東部に遣ひ、

る末、一八五六年五月廿六日キリマントンに達す。此
 旅行に四年を費し、發見せし所少からず。就中中
 央亞非利加に高原存し、其中心は回ひ、之に二山脈
 の突入り、山脈に當れる高地は健康に害なきことを
 發見したりしが如きは其最も著しきものなり。此後
 彼は故國を訪ひぬ。宣讀と名譽は雨の如く一身に注

所有物悉皆を破壊せらる。されど二十七人の従者を
 伴ひてリニヤンチより西方に向ひ、筆紙に盡し難き
 困難を累り、二十七回の熱病に冒されし後、ラオンダ
 に於ける白人の植民地に達す。其より離れを別らして
 リニヤンチに歸り、更に大陸の東海岸に突出せんと
 決心し、非常なる辛勞と有らん限りの力を勵ました

げり。宣教師旅行は此間に著はる。やがて政府は
 ゼムベシ河探險隊を起し、彼は其隊長に命ぜられ、
 倫敦宣教師社の關係を以て再び亞非利加に渡
 航す。此行は又非常の困難を感じ。殊に葡葡牙商
 人がザンベジ河附近に幾多の定住地を有し、土人を教
 導して他族の土人を滅ぼせしめ、之を奴隷に賣りつ

ありし事は最大の妨となりぬ。されど此探險にて
 ニヤツ湖及び其附近の發見をなせり。リヴァイグ
 スタンは此邊を亞非利加中心の要地と考へ、宣教師
 及び植民を希望し、之がため津及び銅構出身者より
 成れる大學宣教師ニヤツ湖附近に設けられしが、此傳
 道は其長たる監督其他のなくなりしため其面白
 ざりき。斯かる内にリヴァイグスタンの妻も死れ
 り。探險隊は召還せられリヴァイグスタンは尙暫
 く留まり居りしも、終に西班牙商人の暴狀を公にし、
 ログナ河頭に植民地設立の方法を求むるため歸國せ
 るに決心し、一八六四年英國に歸る。途中ニウステ
 ッド、アペーに滞在して『ザンベジ及び其國』を
 書けり。然るに英國に於て又も舊友『サー』ロア
 リック、マルチソンより中央亞非利加の分水嶺を精
 探し、ニル河の眞水體を定むるは地理學上の大功な
 りと認められ、地理學の目的を主眼とするこゝは之
 を欲せずと言ひしも、土人に基督教を傳へ奴隷商賣
 の外に正業を奨ますために復た遠征の途に上り
 る。此行は従者の不忠實のため大困難を受け、加ふ
 るに土人が彼を奴隷商人と區別せざりしより之がた
 め妨害を蒙り、或は藥劑商を失ひ、或は飢え、或は病
 み、精神殆ど沮喪したり。然れ共モロ湖バングワ
 ニオ湖の發見は此行に於てなりき。彼が世に知ら
 したる奴隷商賣の恐ろしき有様を見ては、世人は
 非常に恐怖し、彼の所在の久しく不明なりしより、
 極度の懸念を抱くに至りしが、一八七一年マンガン
 ニカ湖のワワにて『福音ヘラルド』社派遣の
 ヘンリー、エム、スタンレーは彼を見出せり。之より
 先きリヴァイグスタンの救済の目的にて遣はされた
 る者どもは、彼を死せしものと信じ其供給物を私し
 て之に達せざりしため、彼は此時非常に窮乏の中

リ

リッケ

リグオリ

リシエリウ

在りしを、スタンレー發見して彼を救ひ、且自己の忠實なる従者を分ちて之に従はしめ相別れたり。...

リッケ ヨットフリード クリスチアン フリードリヒ Lincke, Gottfried Christian Friedrich 人名 一七九二—一八五五...

をも満足せしむる能はざりしと雖も、其人格的眞性は能く其大成し、時代の神學に大なる感化を與へたり。...

リグオリ アルフォンゾ マリアダ Ligouri, Alfonso Maria da 人名 一六九一—一七八七 第十八世紀の羅馬教會の最も人望ありし有力なる信仰的著作家、道徳的論者。...

八三九年にはアレゴリウス十六世終之を著者とすし、七一年にはピウス九世また『教會博士』の號を彼に贈し、トマス、アタイナス及びクレアポールのペネター等と比べ置けり。...

リシエリウ アーマン ジャン デュプレシー Reichelien, Armand Jean Duplessis de 人名 一五八五—一六四二 佛蘭西の高僧又宰相。...

リ

リース

リッチェル

リッチェル

には禮拜は自由に許され、ユウゲンノー徒も天主教徒も民法上には同權を與へられたりき。

リース スタンレー Leathes, Stanley 人名 一八三〇—一九〇〇 英國の希伯來學者、パキスタン、カレパの希伯來語教授となり、...

リチモンド

リチモンド リッチモンド Richmond, Leigh 人名 一七七一—一八二七 英國教會の神學者、ウヰリアムに生る。...

リッキ

リッキ マテオ リッチー Riccio, Matteo 人名 一五五二—一六一〇 イエズイット派支那傳道宣教師。...

の時法研究のため巴理に送られたりしが、早くもイエズイット社に入らんと志あり、一五七一年父の許可を得ずして之を實行し、...

リッチェル アルブレヒト Reichel, Albrecht 人名 一八三二—一八九九 獨逸の神學者、柏林に生る。...

リッチェル アルブレヒト Reichel, Albrecht 人名 一八三二—一八九九 獨逸の神學者、柏林に生る。父は初め柏林の或る教會の牧師にして、...

感化を受け、四年ハルレに轉じ、更にトールツェ、ユリウス、ミューラ、エルドマン等の感化を受く。...

リッチェル アルブレヒト Reichel, Albrecht 人名 一八三二—一八九九 獨逸の神學者、柏林に生る。父は初め柏林の或る教會の牧師にして、...

リ

リド

徳義の思想の起原の研究 中の或點を批評せる論文を著して倫敦王會に提出し、報告書に於て公にせらる。ハッチソンは其時グラスゴウ倫理學教授なりき。一七五二年リドはアベルティンのケンブリッヂ、カレツテ哲學教授に選ばれ、約に依り生理心理をも共に教ふ。十二年後一七六四「常識の原則に於て試みたる人心の研究」を公にし、同年グラスゴウ大學倫理學教授に選ばれる。其地位は即ちハッチソンの曾て保ちし所に於て、ハッチソンの後には「富國論」の著者として名高きアダム、スミス之を襲ひ、次でリド、スミスの後を襲ひたるなり。『人心の研究』は知識の條件たるものを論究したるものにして、當時の思想を取りて立説せしヒウムの懷疑論に反對し、斷乎として人間知識の確かなることを唱へ、大に印象を興へたり。此の『常識』なる語を明に用ひたることは、次第に蘇國哲學が『常識哲學』と稱せらるるに至りぬ。此語は曖昧なるがため屢々誤解せられしが、リドの意にては、人心を適當に研究すれば凡ての靈智に共通なる原理又は自明眞理を發見すべく、此れやがて健全なる知力にも堅固なる哲學にも實質たるものなりと云ふに在り。ロバウターの哲學にては凡ての知識は感覺と反省とに發源せしめられしが、リドは感覺を廣き意味の知識とし、常識をば凡て人類に共通なる知識とせり。されば其研究の意味は合理的存在者に共通なる原則に於て試みたる人心の研究といふことなり。彼は約百記の『全能者の息は人に悟性を與ふ』といふを警語とし、靈智の創造ありし以上は知識の第一原理知られ得ざるべからずとせり。

リドはヒウムの『人性的研究』に對する論文を書きつゝある間、彼は原稿を成るに従つてヒウムに送る。ヒウムは鄭重に之を受け、自ら愉快と注意を以て讀み及言ひ、且斯くの如く深き哲學的事が、斯くの如く精神に充ちて書かれ、讀者に喜を與ふるは古來稀なりと稱へ、リドは又ヒウムに答へて、余は他の凡てを合はせて得たるよりも多きを、此種の事に關し君の文書より學べりと言へり。ヒル、ボルトンの言へる如く、リドは英文學中ヒウムに反對したるものも最大者なり。而して其大なるは彼がヒウムの書を爭者萬人の心を以て讀まず、正直なる研究者の心を以て許容したる所に在り。リドの『研究』は特殊の感官と心との關係の研究にして、興味聽聞視と順序を立て論ぜり。彼は感官生理に非常な注意したるを示す。當時にては心理學者は生理的事をば知りもせず頓着もせざりしを、彼は五官より集められし報知の信用すべき理由あるを示し、かくて合理的原則の適用に依る事物に關する説を立てんとしたり。形式の上より言へば、常識の成るを以て懷疑論に衝らんせしめしものなり。不幸にして此常識てふ語が曖昧に用ひられ、時としては哲學に反對するが如く、時としては哲學の實質なるが如く言はれたる共、根柢は明白確實なり。彼は當時の『傳來哲學』即ち觀念哲學を駁ひ、甚だしく之を非難せり。彼は傳來哲學の人々が其哲學の裁判領分を有らぬ方に擡げて、常識の命する所のものをまて其哲學の裁判に附せんとするを非難し、常識は哲學の那點をも有せず、哲學の助を要せず、されど哲學は却て常識の原理以外の根本を有せずと言へり。換言すれば、彼は靈智の實質的構成要件は萬人に與へられ居れるが故に、之が發動に依るは哲學の證明を待つを要せず、却て凡ての健全なる哲學は、靈智の原理の全たる認承即ち彼が常識と稱するものを

リド

リド

基礎として立てざるべからずと論じたる也。懷疑論を駁し、又自ら満足する説を建設せんため、彼は進んで人生に對して凡ての人類の信仰及び行爲を不可抗的に支配する所の原理を明にせんせり。其原理は如何なるものなるか。彼は之がため人の知力に就ての論(一七八五)を書き、約百記の『内部に智慧を播み附けし者は誰ぞ』といふ句を中表紙に記し、更に『人の積極力の論(一七八八)』を著し、米迦書の『人よ彼は汝に善の何なるかを示せり』を中表紙に記せり。此等三箇の書に依りて第一には五官を用ふといふ時には、既に判斷の起るる作用行はれつゝあるを意味し、此は又思想の根本的原理ありて、此は言ひ願はずべからず、争ふべからず、斷すべからざるものなるを意味すといふ事論明せられたり。第二には靈智に根本的に存する理論の第一原理を示せり。曰く、判斷は必ず之を考ふることに伴ふ。兩者は等しく自然のなす所、又我等の原力の結果なりと、此等即ち第一原理、常識原理、自明眞理なり。第三には道徳界の事に關し、彼は道徳眞理に關する我等の知識に於て、他の學問に於けるが如く、既在の他原理に依らず直覺的に證明せらるるものあらざるべからずと言へり。リドの説は時々不明に隔りたりと雖も、然も再び其内より出で來り、明白に前後と連るを見る。彼はカントの如く明に理性と理論とを別たすに難し、實際は此區別をなせり。曰く、理性には二作用もしくは二程度あり。第一には自明なる事物を判斷することなり。第二には自明なるものより自明ならぬものも討論を取るることなり。第一の方は全く常識に關す。故に理性の全體を歸一す。彼の著作には多少哲學的精緻等を缺く所ありと雖も、慧敏にして思想壯大なり。其英傳來

リ

リド

リベリウス

リベリウス

に感化を與ふること大なりしも故なきに非ず。彼の著書はライプツィム、ハミルトン第二冊として出版せり。此外フレイセルの『リド』ブリンケル、ハッチソンの『蘇國哲學』等を見よ。

リド

ニコラス Ridley, Nicholas

人名

一五五五年 英國の改革者、殉教者。第十六世紀の早き頃ノルサムムールランドのウイキヤムンストラに生れ、タイン河上ニウカッセルの語學校にて學び、一五八一年領事のヘムプロット、カレツテに入り、二年其フエローとなり、二七年教職に入り、ソルボン、巴黎、レゲーンに行きて修學し、二九年領事に歸り、三三年幹事長となり、同時に説教者として名あり。フエックスは彼の説教を種多き説教と稱べり。グラナマルは彼を自己の家族附教師とし、ヘルン及びイースト、セントの司牧とせり。四〇年王室教師となり、ヘムプロット校長となり、四一年カンターベリーの受給師となる。此頃『六箇條』條例反對の説教をなせしめて監督ガイディナルの指揮に依て告訴せられしが、事件がアイナルに關係ありしためリドは免訴となり。四五年ウエストミンスター受給師、四七年ローチエスター監督となり、五〇年ソルボンを繼いで倫敦監督とせらる。四五年晩年體弱を公然否認せり、是れベルトラムの『聖禮典に關する書』を讀みしに由る。五三年七月二十六日塔獄に入れられ、次でラティマルと共に牛津のガカルドー監獄に移され、十月十六日パリオル館前にて焚き殺さる。處刑の前夜數友と晚餐を共にし、語て曰く、余は臥床に行かんと思ふ、而して神の心に依り、我が一生中常になしたる如く安らかに眠らんと思ふ。共に處刑せられしラティマルが刑場に行く途上其友を祝して『リド君喜べかし、樂

めかし、我等は今日神の恵に依り英國にて永く消されぬ燭を點すべければなり』と言ひしに比すれば、リドの方は一層平靜なりしを示せり。フエックスも彼を立派なる人物として記し、クアールスも詩を作して彼を頌せり。リドの著書は少し。

リベリウス

リチャード、アデルベルト

人名

一八〇九年 獨逸の神學者。ザラに生る。ヘーゲル派の中立派に屬し、相續てフイブチ(一八五九)ワインナ(六一)キール(六五)及びイェナ(七二)の教授たり。イェナにては又教會顧問を兼ねたりき。『新約聖書講義』の共編者にして、自ら加太書、羅馬書及び腓利比書の註釋を書けり。其他の重要な著書は『イェナナチラス書翰』ノストラクテ教團福音的プロテスタント神學教科書『哲學及び宗教』及び『獨逸的使徒歴史及び使徒物語』等也。

リベリウスの監督キョプフェル外二人を遣はして抗議し、ケルケリのユウセビウスの會議の決議に反對を論明せし、三五年のミラノ會議にてアマナシウス派は全く敗北し、ユウセビウスもキョフェルもミラノのアイオニシウスも追放せられ、リベリウスはアマナシウス否認に署名すべきを迫る。リベリウスは之を肯ぜざりしに、敵は羅馬人が彼に同情せんことを恐れ、之を秘密に捕へてトラキアのメレアに追放し、フエリクス代りて羅馬監督となり。然れども二年後帝が羅馬を訪ひし時、貴女等はリベリウス歸任を懇願せしむ。實にリベリウスも帝の言ふ所を善く人となり居たり。帝の前にてアマナシウスを否認し、宮廷神學者ウラキウス、グアレンス、サレミニウス等を平和の人と識し、反對者たりしエヒタテス及びアウクセンチウスを聖職を共にし、三五八年のシムウム會議にて全くアマナシウス説を棄却し、羅馬へ歸るを免さる。皇帝及び會議の處置に従へば、フエリクスと共に並びて監督するべかりしも、人民は之を肯ぜず。神一つ基督一つ監督一つと叫び、フエリクスは已むなく退職して隱居し、三六五年に死れり。リベリウスはかくて監督位に復せしが、既に復すれば再び初の説に歸り、『マケドニア』派の使者をばニカヤ告白を確乎として維持せし故に之を眞の兄弟として受けたり。然れども其死後ウラシムスを首とせる彼の徒とダマスを代表者とせるフエリクスの徒とは激しく相争ひ、ダマスを等しく漸く勢を得るに至るや、一の擧げ起れり。曰く、リベリウスとコンスタンチウスとを共に正統派の迫害者にして、フエリクスは實に殉教者たりしなりと。之がため羅馬加特力教は不利益を蒙りたること少

リノ部

リベルテンのリームホルム

両意説の両性派のローレンテ

リンガルド

リベルテン

Libertines 雜語

使徒行

傳六の九に『リベルテンと稱する會堂及びクレテ人、

亞歷山人、キリキア人、アヂヤ人の諸會堂より人々起

ちてステパノと言ひ争ふ』といへる。このリベル

テンの何なりやに關しては諸説あり。或は之を以て

亞歷山人又はキリキアの如き亞非利加の市又は國の名

也となし、或はリベルテンと稱する學派の名なるべ

しとすものあり共、拉丁語 Libertini は『自由』の

義なれば、其文字の意義に従ひ、解放せられたる奴

隸の裔と解する方自然なるが如し。コンペルがパレ

スチナを攻めたりし時、多くの猶太人捕にせられ羅

馬に携へ往り、奴隸として賣られたりしが、後復

ならずして解放せられたりき。彼等の多くは羅馬に

留まりしが、其子孫の多くはエルサレムに歸り、其

處に自己の會堂を立てたりき。リベルテンの會堂と

稱するは即ち彼等の會堂なりしなるべし。

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リムボルク

Limburg 人名

一六三三—一七二二

和蘭の神學者。アムステルダムに生る。神學、哲學、

博言學、數學を生地及びライテン、ウトレヒトにて學

び、一六五七年ゲーダの、六七年アムステルダムの、

リムボルク

フリップ

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リンボルク

リノ部

ランテ

倫理學

倫理學

リノ部

ランテ

倫理學

倫理學

リンチ

Lynch 人名

一八一七—一八一七

英國の牧師、

讃美歌作者。エスケスのダンマウに生れ、倫敦イ

スタンガトンにて成長し、一八四七年ハイネット、

四九年倫敦市ホルン街、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

リンチ

Lynch 人名

一八一七—一八一七

英國の牧師、

讃美歌作者。エスケスのダンマウに生れ、倫敦イ

スタンガトンにて成長し、一八四七年ハイネット、

四九年倫敦市ホルン街、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

リンチ

Lynch 人名

一八一七—一八一七

英國の牧師、

讃美歌作者。エスケスのダンマウに生れ、倫敦イ

スタンガトンにて成長し、一八四七年ハイネット、

四九年倫敦市ホルン街、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

リンチ

Lynch 人名

一八一七—一八一七

英國の牧師、

讃美歌作者。エスケスのダンマウに生れ、倫敦イ

スタンガトンにて成長し、一八四七年ハイネット、

四九年倫敦市ホルン街、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

リンチ

Lynch 人名

一八一七—一八一七

英國の牧師、

讃美歌作者。エスケスのダンマウに生れ、倫敦イ

スタンガトンにて成長し、一八四七年ハイネット、

四九年倫敦市ホルン街、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

六二年アムステルダム、五二年アムステルダム、

リ

倫理學

神意に服従するを以て道徳の根本的條件となせり。然れ共基督教の所謂神法に従ふことは、外部の律法に従ふの謂に非ず。耶蘇は一面より云へば猶太教の繁...

倫理學

に對する歸依の情と其圓滿なる性行を撰絶する義務の念と合して、道徳を行ひ得べき根本條件となるべきもの也。然れ共信仰は基督教道徳の中心動機...

倫理學

己の貴重なることを知らずんば、他人の貴重なることを知る可らざれば也。故に自己に對する愛は必ず他人に對する愛に先き立たざる可らず。然れ共人...

ル

の部

『基督教倫理學』等を見よ。

ルイ 聖 Louis IX. 又はルイ九世 Louis, St. or Louis IX. 人名 佛蘭西の王(1214-1270)在位。十一歳にして父死し、二十歳まで母ア...

ル

倫理學

又基督教は希臘人の勇氣を貴びたりしに反し、無抵抗主義を教へ、惡に敵する勿れ(太五〇廿九)と云ひ其仇を報ゆる勿れ、退きて主の怒を待て(太五〇廿九)と云ひ...

倫理學

て、實に富貴、名譽、權力、其他世俗の一切を賤しきたりしのみならず、更に家族及び社會の關係にも重を置かず、基督教徒が此世に對する唯一の態度は...

ルイ

ルイ 聖 Louis IX. 又はルイ九世 Louis, St. or Louis IX. 人名 佛蘭西の王(1214-1270)在位。十一歳にして父死し、二十歳まで母ア...

ルカ

ルカオニヤの路加福音書

ルカ

ルカオニヤの路加福音書

の手段にて其裁判權を行はんと欲しし時には、其等
の門徒に其の所得を没収することに依りて破門を
取り消すことを迫り、佛蘭西監督が彼に訴へて破門
せられし者共の財産を没収して、破門を有効ならし
めんとせし時には、全然之に従ふを拒絶せり。兎に
角彼は王者としては珍らしき基督教品格の人物なり
き。二七九年にニアキウス八世は彼を聖者とな
せり。

ルイスアレーク 又ルイスアレーク Rayn-
brook, or Rainsbrook. 人名 一八九三—
一三八一 和蘭の神学者。ブルッセルズに於てその

間のルイスアレークに生れ、ブルッセルズにて教育
を受けしが、拉丁語を多く學ばざりしも、其著書
にはアレオ山のデメトリオスの文書や獨逸神学者等
の文書を知る見ゆ。長くブルッセルズの聖アブ
ラハム教会司牧たりしが、一三五三年附近のヴァンニ
ー森林中のアラグスチヌス派僧院グレナデルに退き
て餘生を終れり。重なる著書あり。即ち『精神高
潮時の聖書』、『福音の鏡』、『福音の石』、『福音の
海』。何れも和蘭語にて書かれしが直ちに拉丁語に
翻譯されたり。彼の神學思想は聖アブ
ラハムのニューボー及びリシャールと反對し、獨逸神学者
と一致して神の方より人に至る運動を記し、而して
人よりまた神に歸ることを思ふし、凡神論の境界
は不明なるものなり。其神學は『福音の鏡』に著し
たり。されど固より不透明にして重苦しき所あり。

ルカ 福音書記者 Luke the Evangelist.
人名 人名 (Lukka) といへる名は新約
以前には之れあるを見ず。此名は拉丁名ルカヌス
(Lucanus) を約めたるものなること疑なし。此名の
人は新約に三回記載せらる。即ち四四の十四、提後

四の十及び門廿四是也。此等の章句に依れば、ルカ
は此等の書翰の書かれたる時保羅と共に羅馬に在
り、而して最後まで獨り保羅と共に在りしこと推知
せらる。四四の十四に依れば、彼は保羅の愛する醫
師なりしといふ。而してコロサイ人に向て其安否を
問へるを見れば、コロサイの教會に知られたりし者
なること明也。又彼が割禮を受けし者より區別せら
るるを見れば(四四の十一)彼が異邦人の出たりし
こと推知せらる。從て彼は羅十六の廿一のルキ
(Lukios) 同一視し、又ルカは猶太人也と云
へるテイレ其他の説は承認し難し。イエロニムス
はルカは猶太教改宗者也との傳説を傳へたれ共、彼
は猶太教に入らずして直ちに基督教に改宗したりし
なり方真に近きか如し。門廿四に於ては、ルカはヒ
レモンに問安の辭を述べ、且保羅の『勤勞の信』と
稱せらる。去ればルカは保羅が羅馬に於て二回獄に
繋がれし時彼と共に在りしなるべし。然れ共勝利比
書にルカの事記載せられざるより、ライトフットは
ルカは斷へず羅馬に在りしに非ざるべしと論ぜ
り。使徒行傳がルカの作にして、彼は『我僕』に
自己のことを言へりせば、彼はスミヤのアントオ
タにて保羅の一行に加はりたりしやも知る可らず。
然れ共更に確かなるは、紀元五十年頃トロアスにて
保羅の一行に加はり、保羅がヒレモリ第二傳道旅
行に向て出立せし時より(徒十七の一)再び其處に
歸着せし時(廿の五)迄の間を除き、五十九年頃羅
馬に到着せし時迄保羅と共に在りしこと也。而して
ルカが第三福音書を著ししこと、ルカも云へば、其結
語より彼は『始めより親く見て道に役へたる者』の
中に屬せざりしことを推知すべし。オリゲヌスは哥
後八の十八にテトスと共に書翰を携へてコリントに

遣はされたる『福音書』を以て諸教會の中に頌美を得た
る一人の兄弟』と云へるはルカのこと也と言へり。
新約以外の傳説に依れば、ルカは耶蘇の道はしたる
七十人の一人なりと云ひ、又路廿四の十三以下に記
されたるクレオパの友なりしと云へり。然れ共此等
の傳説の信するに足らざるは、其路一の二の言々
盾せるに依りて知るべし。又ルカは富家なりしとの
傳説も亦、確かなる根據なし。早き傳説に依れば、
ルカはアントオタに生れたるスミヤ人にして、使徒
等の弟子となり、後保羅に忠實に仕へたり。彼は妻
子を有せず、七十六歳にして聖靈に充されてピスニ
ヤにて死せりと云へり。彼の特殊の働き場所はアカ
ヤなりしと云ひ、又亞歷山にして彼は其處にて第二
の監督に聖別せられたりしとの傳説あり。其死の状
態に就ても、一の傳説に依れば平和の死を遂げたり
しと云ひ、他の傳説に従へば、ドミシアン帝の時殉
教の死を遂げたりしと云ひ、何れか眞實なりや確定
し難し。

ルカオニヤ Lyconia. 地名 小亞細亞
の一地方の名。北はガラタヤ、東はカパドキヤ、南
はキリキヤ、西はフリギヤに界し、高山に圍繞せら
るる高原にして、野驢馬及び羊を産するを以て名高
し。使徒保羅が此地方に巡教せし頃は羅馬領に屬せ
り(徒十四の一、廿三、十六の一、一六、十八の廿三、
十九の一)。其方言はスミヤ語を交へたる希臘語なり
し如く、使徒等は之を領解せざりしが如し(徒十
四の十四)。

路加福音書 The Gospel according to St.
Luke. 經名 新約聖書四福音書中第三の福
音書。

【著作者】 第三福音書は最も早く世に承認せられ

ルカ

路加福音書

路加福音書

路加福音書

たるもの、一にして、第二世紀の前半には許多の記
者に依りて引用せられ、其後半には明に保羅の伴侶
なるルカの著はしたる者として知られたり。即ち
ユスチヌス(一三三—一六七)は此書中の記事を引
用し、ユスチヌスの弟子マテウスも亦其福音書對觀
に此書を編入し、マルキヤヌス(一四四—一五四)
は此書を改作したり。而してムラトリアン聖書には
『保羅が其伴侶の中に加へたる福音書ルカの書』として
記載し、イレニウス(一三〇—一八九)は『保羅の
伴侶ルカ、保羅の宣べ傳へたる福音書を著し、』
と云ひ、テルチウリアヌスは『路加の書は保羅に眞
へり』と云ひ、且『路加の福音書は其初めに世に顯
はれしより常に教會の信用を有せり』と云へり。オ
リゲヌスは『路加の福音書は保羅之を寫したり』
と云ひ、ユラセビウスは『保羅が我の福音』と云ひ
たりしは、即ち路加の福音書を指せる也と教會の
一般に信じたりし所也』と云へり。

然らば則ち初代教會が第三福音書の著者として指名
したりし者は、哥羅西書(四の十四)に所謂『我僕
が愛する醫者』勝利門書(廿四)に所謂『我が勤勞
の伴侶』而して提摩太後書(四の十)に云へる如
く、保羅に羅馬に伴ひ、終りまで彼と共に在りた
る忠信の友ルカなること疑ふ可らず。且保羅が哥羅
西書(四の十一、十四)に於て、ルカの名を記すに
方り、之を割禮を受けし者と區別したるを見れば、
ルカの猶太人に非ずして異邦の出たりしこと亦明
也。ユラセビウスはルカはアントオタに生れたりし
こと云へり。此説はルカがクリスチャンの名はアンテ
オタより初まりたりと云へる事實(徒十一の廿六)
及び初めて擧げられたる七人の執事を記すに方り、
獨りニコラを猶太教に入りしアントオタの人と云へ

て記したる事實(徒六の五)に依りて確めらる。
ルカを以て徒十三の一に記されたるクレオパのルキ
ヤ又はシラスと同一人也と記されたり。又ルカを
以て耶蘇に依りて道はしたる七十人中の一人也と
するは、此福音書の緒言に自己を目撃者と區別した
る言と符合せず。又ルカを以て、エママに往きたる
二人の弟子の一人也と云ひ(路廿四の十三)又節義の
時エサレムに上り、耶蘇を見んとしたりし希臘人
の一人也(約十二の廿)と云へるは何れも臆論に過ぎ
ず。蓋しルカはトロアスに於て初め保羅の一行に
加はり(徒十六の十一)、保羅の一行を稱して(彼等)
と云ひ(徒十六の十一)に於て『我僕』に變じたり。
保羅の指揮に従ひてヒレモリに留まり、後五六年を經
て、保羅がエサレムに向ひ最終の旅を行なさんた
めヒレモリに來りし時、再び其一行に加はり、是より
常に保羅と共に在りたる人にして、終に羅馬に於て
保羅と共に其終りを遂げたか如し。傳説に依れば
ルカは畫工にして、彼は常に其自ら畫ける耶蘇及び
マリヤの畫像を携へ、之に依りて許多の異邦人を改
宗せしめたりしと云へり。彼はヘロウチサスのエ
ラアに於て十字架に釘けられたりと云ひ、又希臘に
於て死したりしと云ふも、其死に就ては確實なるこ
とを知るに由なし。

【此書と保羅との關係】 此福音書の内容が此傳説
と一致する所あるは明なる事實なれども、如何なる
程度保羅的なるべきやは、學者の議論區々にして一
定せず。ゴデーは之を以て實に保羅の福音書也と
なし、ロイスは之を以て全く保羅の福音書となすの
非を唱へたり。チリペンゲン派の先輩なるバウル及
びホルタルは之を以て全く黨派的著書となし、保
羅を擧げ、猶太人的基督教を拜へん爲めに著はされ

たるもの也と論じ、ヘルゲンフェルト及びホルステ
ンの如き同派近世の學者は、保羅派及び猶太派を調
和せんために著はされたるもの也と論ぜり。蓋し此
福音書が猶太派に反對するが爲めに著はされたる者
に非ざるは、書中の記事、用語に依りて明也。例之
エサレム聖殿の光景(二、二章) 耶蘇を以てデビ
ヤの子となし(十八の廿八) 若しくは猶太の王となし
て(十九の廿八) 之に尊敬を歸するが如き(十三の
十六、十九の九) 若しくは聖書の經驗を記す(十三の
四の廿一、廿四の四十四) 皆猶太教に反對せんとの
目的より記されたるものに非ざるを證す。然れ共之
と共に貧窮を稱賛し(六の廿、十六の十九) 若しくは
斷定するは亦他の極端に走れり。吾人は右の如く一
方に於て、猶太教に類似するの點を見出すと共に、
更に他方より觀察すれば、此福音書の異邦人に宣教
するに慣れたる手に依りて記されたる跡を見出す
べし。即ち耶蘇が其傳道の初めに於て宣べられたる
有名なる宣言(四の廿五—廿七) 異邦人を招くべしと
する約(十三の廿八、廿九、四十七) サマリヤに於
ける耶蘇の光景(九の五十二、五十六、十七の
十一) 及び耶蘇が猶太人よりもサマリヤ人の行爲を
稱賛したる事(十の卅一、卅三、十七の十一—十九の
九) 等は、此書が異邦傳道者の手に依りて成りたるを
現はす者也。且吾人の注目すべきは、耶蘇生誕の日
的的世界的なりし事の著しく此書に依りて顯はるる
こと也。即ち彼は『義ひし者』を尋ねて救はん爲め
に來りし(十九の十) と云ひたりしが、此『義ひし
者』とは即ち世界萬民の謂にして、彼は墮落せる人

ルの部

路加福音書

路加福音書

路加福音書

類の有様と、神の愛を以て之を招き給ふことを説き(十五章)而して此愛は彼が世に棄てられ、人に認められたる望なき罪人税吏を招きたることに依りて顯はれたり(七の廿六、五十九、十九の十一、十八の十)。凡て此等の言説、教訓、譬喩及び事實を讀むものは、此福音書が如何に保羅の神學と關係せるかを了解すべき也。

然れ共吾人は亦此福音に走る可らず。即ち吾人は右に云へるが如く、本書の保羅的要素を否むこと能はざれば、之と共に又更に保羅に關係を有せざるものあることをも忘るべからず。耶蘇が七十人を遣はしたるが如き(十の一)或る批評家は之を以て本書の保羅的なる證據也とし、フリークスの如きは『猶太人は創世記十章に記載せる諸國民の目錄を標準として、異邦人の數を七十とせり、去れば十二使徒の以色列十二種族を表するが如く、七十弟子は異邦人を代表するものにして、ルカが七十人の宣教を記載するは、即ち異邦人も猶太人と同じく神の國の教に與るべきを示せるもの也』といへり。然れども此七十人は以色列十二種族に遣はされたるものにして、異邦人に遣はされたるものに非ざるを記憶せざる可らず。又夫の十二使徒は皆以色列人の中に選ばれたるに非らずして、世界萬國の民に遣はされたるものなることを記憶せざるべからず(廿四の四十七)。此七十人の數の如きは他に深き意味を有せず。モーセの事業を助けたる七十人(民十一の十六)と異なることなし。然るに之を以て異邦人を代表するものとなし、依て以て本書の保羅的なるを證せんとするが如きは牽強附會の甚しきものなりと云はざる可らず。

【此書の性質及び目的】 然れ共此福音書が保羅と

關係を有するは明也。即ち此書は救の普遍的なるを示せるものにして、保羅の調大にして世界萬民を包容せる心は、此書の裏面に存在するを見るべし。見よ、此福音書は謙遜にして教主の誕生を待ちたりし人々の教を頌するの歌を以て初まり、而して全篇を通じて耶蘇が貧しき者、病める者、婦人、小兒、罪人、及び税吏に對して顯はせる愛情を示すに非ざるはなし。萬民の教主は身自ら旅舎の外に在りて生れたり(二の七)。彼の誕生を祝したるものは卑賤なる牧者なりき(二の八)。彼の両親は貧しき者の捧ぐる獻物を彼の爲めに捧げたり(二の廿四)。而して彼は遂に統する所をも有せざりき(九の五十八)。貧しき者は彼に依りて祝せられたりき(六の廿五)。而して富める者必ずしも幸福には非ず(十六の廿五)。實に此福音書はフリークスの云ひたりし如く、希臘人の福音、未來の福音、寛大の福音、讚美及び祈禱の福音、救主の福音、世界的福音、恩惠的の福音、宏量の福音、宗教界の認め得る福音、外道となすもの爲めの福音、税吏、罪人の福音、悲めるマゲダラの婦人、十字架の上の罪人の福音、而して又善きサマリア人、放蕩息子の福音也。レナンは此福音書を以て小説的分子を含めりとなし、之を馬太、馬可の兩福音書に比すれば歴史的價值甚少しと論じたりしに拘はらず、尙古來の著書中最も美麗に記されたるもの也として、力を極めて之を稱賛せり。此福音書が異邦人の爲めに著はされたるものなることは、以上論ずる本書の特質を學ぶものも直ちに承認する所なるべし。著者は自ら簡短なる序言に於てテモヒロに此書を獻する旨を明言せり(テモヒロはアンテオケの人にして、權威ある官吏なりしと云は、クレメント及びユワセビウスの説する所也)。此書が初めテモヒロ

の爲めに著はされたるものなるは疑なしと雖も、延きて多くの人々の讀むに至らん事は、著者の豫め期したりし處なるべし。去ればパレスチナ以外に在りて領解し難き地理、風土には説明を附し(一の廿六、四の廿一、廿一の廿七、廿二の一等)時日を記すにはカイザルの在位を以てし(三の一)クレネオの戸籍調査を記載し(二の二)耶蘇が羅馬の兵士より受けたる鞭撻、處遇を書きたり。凡そ此等の事は此書が異邦人の爲めに著はされたるものなるを證するものにして、此の如き注意は使徒行傳に均しく顯はされたり。

【此書の材料及び著作の時代】 此書の最も主なる材料は馬太福音書と同じく、馬可福音書にして、其大部分は之を馬可福音書に取用する。馬太福音書に似たる處は馬太福音記者の用ゐたる「ロギア」より來り、其他の六分の一は記者が口傳又は記録より自ら得たるものなること、近時學者の一般に承認する處也。本書特有のもの、即ち耶蘇の誕生及び其幼時に關する最初の二章、耶蘇復活後の顯現に關する記事、及び馬太、馬可二福音書に見えざる譬喩にして、ルカは何れより此等の材料を得たりやは今日より之を詳にすること能はずと雖も、第一福音書中の夫等と同じく比較的歴史的價值少しとのことは近時批評家の一般に許す處なるが如し。

此書は何時、何處に於て著はされたりやは、古來學者の多く論じたる所也。蓋し之を定むるには又使徒行傳の著はされたる時を定めざるべからずと雖も、使徒行傳著作の時代も之を確定するに由なし。現に角此書があまり早き時代に成りたるものに非ざるは、著者が其序言に於て、此書の成りたる時既に許多の文書の存在したりしを明言したるに依て知るべ

ルの部

ルキアヌス

ルキアヌス

ルキアヌス

し。レナンは之を紀元七十年後の作なるべしと云ひ、カイムは紀元九十年の作也と云ひ、マイエル、ブリーク及びロイスは共に之を七十年以後とせし、ウアイズは之を七十年より八十年の間に置けり。此の如く學者見る處各々異也と雖も、其紀元七十年以後の作なるは明なることにして、ハルナックが之を紀元八十年とせざるは蓋し當らずと雖も疑はらざるべし。其著作の場所に關しては、コリント、亞歷山、羅馬、カイザリア、小亞細亞等諸種の説あり共ウアイズの云へる如く何れも想像説にして信するに足るものなし。

【參考書】 ウアイズ、ツァン其他の新約聖書總論。ゴーター、マイエル、プラムメル(インターナショナル)、クワチカル、コムメンタリー(中)等の註釋書。

ルキアヌス

サモサタの Lucian of Samosata. 第二世紀後半の人。キリヤ

マに生れ、法律を研究し、アンテオケに住み、羅馬帝國の全面を旅行し、埃及にて仕官して死す。再度の帝國周歴の記事と、アテナ哲学者デモナクスと親しみ、凡ての哲學宗教に反對せしと云ふ記事に依りて、彼の生存の年代察せらる。其文書は、ヘレグリス、プロテウスに據りて、第二世紀後半の羅馬の教育ある社會は基督教を輕視し居たるを推知するを得べし。ケルツス及びフロントは基督教に反對して書著し、マルクス、アウレリウス、エピクテテス、ガレーン、アリスチアス等は唯だ之を輕視せしが、ルキアヌスの此書にても、當時彼等が基督教徒をば誹罵者罪人又は革命黨と見ず、唯だ盲信狂熱の徒、同輩のために犠牲たるを喜ぶ徒と見たりしを認む。ケストチルは著者を秘密なる信者なりしならんと言へ共、ハ

ルキアヌス

Lucian the Martyr. 第三世紀の中頃サモサタに生れ、キリヤ

マにて教育を受く。エファサの學校は亞歷山に次で當時の基督教界中最も繁榮し、マカリウスやバルデササスなどいふ聖書解釋の學校を起し、ニコメテアアンテオケにいふ聖書解釋の學校を起し、ニコメテアのユワセビウス、カルケドンのマリス、ニカヤのテオクレス、アンテオケのレオンチウス、マルツのアントニウス、カパドキアのステイウス、及びアソワ等其弟子となる。サモサタのバルドセアアソワとの間の過激な言ひから、ルキアヌスは二七五年より三〇三年迄といふ長き間アンテオケの正統教會と交り絶ち居りしが、後相合したる者の如し。後マキシミヌスの迫害の時殉教の死を遂ぐ。ユワセビウスの文書にはルキアヌスの著書の事少しも記されず。去れど此はルキアヌスがアソワの祖なるべしより故らに掩はれたるものと思はる。イエロニムスの文書には彼の聖書の句の評訂や『ア、フィア』や書翰のこと記さる。此聖書評訂はビザンチウム帝國の西部全體に用ひられ、埃及に行はれしヘシキヤの評訂、スリア及びパレスチナに行はれしオリゲヌスの評訂と相違び存したるなり。イエロニムスは新約の評訂をば甚しく貶し、七十人譯の評訂をば稱賛せり。其他の文書は如何なる者なりしと雖も、

ルキヤ

Lyca. ローツ島に相對し、地中海岸に沿ひて、西カリヤより東パムフリアまで

延張せる小亞細亞の一地方の名。セルキダの没落後は獨立して一時繁榮を極め、東方諸國の政治上に大勢力を振ひし。羅馬帝クラウデオス之を征服し、使

ルステラ

Lystra. 小亞細亞ルカ

ニアの色。保羅は二回此地に巡教せり。即ち初めはバルナバと共に往き(徒十四)次にはシラスと共に往けり(十六)。思ふにテモテの生れたる所なりしなるべし(提後三の十一)。紀元三二五年テモテはルステラの監督なりしとの事なり共、其後の事は明らかならず。此地今は全く荒廢して其跡を留めず。

ルソー

Jean Jacques Rousseau. 一七一二—七八

フランスの文學者、哲學者、瑞西のジュヴラに生れ、不幸の内にて成長せり。母は其生れし時に死し、父は時計商なりしも而も其後、ルソーは意圖に日を送る、小説を讀み、然も幼より天才の没すべからざるものあり、九歳の時アルセルを讀みて感奮する所あり。銅版彫刻業者に奉公せしが、虐待せられ、森林中に入りて空想に耽るを唯一の慰めとせし。終に出奔してジュヴラ附近のコンフィニヨンの天主教僧の處に隠れしが、僧は彼をアンチシのローレン夫人の處に携へ行けり。夫人は新に天主教に改宗したるものにて、表面淑徳を裝ひ、内實甚だ不徳なる女なりき。彼等はルソーをアンチシの僧院に入れしが、ルソーは此に其カルヴァン主義を改めて天主教とせられ、自由を得たり。十六歳の時或る家の侍僮に雇はれし、切望して逐はれ、他に雇はれしも復た爾情のために逐はれたり。此を以てローレン夫人の所に歸り、一學校に入れられ、少しく音楽を學び、其より幾年間を冒險的に生活し、重にローレン夫人の寵者として過ごせり。されど此間數學、拉丁語、音樂等を學び、ロツタ、ワイブニツ

ルの部

ルソー

ジャン・ジャック・ルソー。アカドミエを讀み、一七四一年二十九歳にしてワレン夫人の處を去りて巴里に行けり。巴里にてテレス、ルッパシエと關係を結ぶ。此はオルラン出身の酌婦にして、月の名を知らず、普通の貨幣をさへ區別する能はざる女なりき。彼は晩年之を妻とせしも、其生みたる五人の兒女をば棄兒養育所に入れたり。ルソーは巴里にては音樂を草して生活し、著作者として顧はれし後までも之を繼續したり。而して一七四二年には *Le Devin de village* を公にし、劇場に登され、又佛蘭西音樂に關する書翰をも書けり。此に於て其名頗る揚がりぬ。五〇年最初の論文『科學と藝術の進歩』を著し、デイウソンの學校の懸賞を得たり。其根本の原理たる自然と文明との關係に就ては思想混亂し居れ共、自然を熱切に愛し居れる點と、議論の活氣に充てると、觀察の鋭利なる點、無限なる雄辯とに依て大に人心を打ちたりき。自然に就ての知識は一百年以前より日に増進し、社會の作爲的なる點も心頗る感なる時なりしやば、デフオーの『ロベソソ、ケルソソ』等は大ムソンの『四季』グスチエルの『イデール』等に大に成功したりしが、ルソーの此書も亦同一の理由に因りて成功したりし也。五三年『人間不平等の起原と基礎』を公にし、貴族の問題を論じ、又大に世を動かせり。暫くしてワエテグアに歸り改革教會に復歸し、一時失ひし市民権を得たり。續て『エロアスの通知』(六〇)『社會の約束』及び『エミール』(六二)出づ。是れルソーの三大作と稱する者也。『エロアスの通知』は小説歴史に一體機を作れるものにて、實にローマンチク派の曙光を劃し、自然のままの兒を型に取りたるものなり。『社會の約束』と

ルソー

『エミール』とは相續き出でしものなれ共、互に明白に矛盾し居れり。『エミール』の方にては、國家も教會も其他人類歴史の生じたる凡ての組織體も、悉く自然のままなる完全なる人を生ずるために犧牲となるべきものなりと論じ、社會の約束にては、人性の凡ての要素は、宗教の自由に至るまでも、悉く國家の欲する完全なる市民を生ずべきために犠牲となるべきものなりと論じたり。されど兩者は別々に恐るべき感化を與へ、『約束』の誤れる前提、即ち國家は治者と被治者の約束より成立せりといふことは、佛蘭西革命の一警語となり、歐洲の凡ての王位を震盪したり。『エミール』の感化に至ては一層著しく、教育を説きて超越神論を唱へ、當時の無神論及び唯物論をば激しく攻撃し、三大根本真理、即ち神の存在、意志の自由、靈魂不滅を説きて甚だ強く時代の教育法、即ち學究的機械的方法を非難せる所は教育に一大進歩を與へたり。されど此書は巴里にてはワエテグアにても興へられり。才氣の發達と共にルソーの品性は墮ち行きたり。天性感覺鋭かりし、此は病となり、而して其放縱なる生活のために必然的に起りし虚榮と疑心とに依て、自由高明の途を以て其友人と相語る能はざるに至り、憂鬱と厭人の情に歴せられ、自己は當時廣く行はれたる徒黨のために苦められつゝあるものなりと想像したり。五六年ゲルテアに運はれてワエテグアを去る。ゲルテアは之より先きフェルネーに定住せしが、内心彼を憎みしなり。ルソーは巴里に歸り、モンモンシーの閑居に六年を送りしが、六二年巴里國會は『エミール』を神を無みする書なりと宣告し、著者捕縛の命を發せしが、ルソーは逃れてヒウムの所に匿じて英國に行きしも、直ちに

ルタールト

ヒウムを以て實際は最悪の敵なりしなりと想像したり。六七年巴里に歸り、其よりは全く精神常ならず、其死も急遽なりしが、毒を仰ぎしもの疑はれた。されど精神の異常なりしに拘はらず、晩年告『白録』を著せり。アラケフナヌの『告白録』と比して其悪行を少しも包まず告白せし所など相似たれど、勿論彼は聖者の品性を顯はし、是は放縱を以て終せし生活を顧はす所に大なる差あり。されど兎に角大なる著作家として傳ふべきものなり。晩年また『宗教起原論』あり。『エミール』時代に比すれば頗る基督教に近づきたり。ウォン、モワレー、バドワイン、テッキスト、ホドソン等のルソーに關する著作を見よ。

ルタールト

クリストフ エルンスト Luthardt, Christoph Ernst 人名 一八三二—一九〇二 獨逸の神學者、新ルタール派の神將。フランコニアのマロドフワ、新ルタール派の神將。一八五四年マロドフの教授となり、二年後アイプナヒに轉じ死に至る。其著書は博識を示せ共明白平易也。『基督教神學論』『約翰福音書』は共に英譯せらる。外に『終末學の教訓』『神學要論』の著あり。

ルツ

Ruth. 人名 舊約聖書路得記の女主人公。士師の世ユダの地方に飢饉ありければ、エリメレクなる者其妻ナオミと共マロン及びキリオンといへる二人の男子を携へて、モアブの地に死にりて住みけるが、エリメレクを死して其處に死にりてマロンとキリオンはモアブの婦人を妻に娶りしが、ルツは即ちマロンの妻と成る者也。斯くて彼等モアブの地に住むこと十年許りして、マロンとキリオン二人も亦死にり。於是ナオミはユダの地に歸

ルの部

ルツ

らんとしてモアブの地を出で立ちしが、二人の地に向ひて、往きて各々母の家に歸れといふ。一人の地は汝の宿る所に宿らん、死別には汝の往く所に往き、汝と言ひて之を言せざりしが、ナオミは彼を作伴して共にバツレハムに歸れり。時正に大麥刈の初めなりき。ナオミの夫の知己にゴアズといへる者あり。バツレハムにて大なる力ある者なりき。ルツは穂を拾はんとして出で往きしに、彼意は亦もゴアズの畑の中に入りたり。ゴアズ之を見て、彼が夫の死に於て以來其畑に盡したる事を憂め、彼に他の畑に往く勿れ、又此處より出づる勿れと言ひ、又之に食事を與へ、且己の少者に向ひて、故らに穂を摘みてルツに拾はしめよと命ぜり。ナオミ乃ちルツを動して、身を洗ひ着をぬり衣服を纏ひてゴアズの禾場に下り、ゴアズの臥す時其臥所に入りて臥せしむ。ルツ乃ち斯くなしぬ。ゴアズは彼より近き蹟者あれば、先づ彼等に謀るべく、彼等もルツのために願ふこと、を好まずば彼れ自ら之を願ふべしとこのことをルツに告げ、大麥六斗を量りて之に負はせ給ひ、長老十人を招きて證人となし、ゴアズより近き蹟者に向ひてエリメレクの地を贖はんことを求めたりしに、之と共にルツをも買ひて死者の名を其産業に残すべしとこのことを聞きて、何れも之を辭し、ゴアズに向ひて汝自ら買ふべしと言ひて、其靴を脱ぎ之が證となしたりしが、ゴアズは長老及び凡ての民に向ひて汝等今日見證をなす、我れエリメレクの凡ての所有及びキリオンとマロンの凡ての所有をナオミの手より買ひたり、我れマロンの妻なりしモアブの女ルツを買ひて妻となし、かの死れる者の名を其産業に残す

路得記

べし、是れかの死れる者の名を其兄弟の中其處の門に絶えざらしめんため也、汝等今日見證をなす」と言ひ、斯くてルツを娶りて妻となし、男子を生み、オバアと呼べり。オバアはデビダの父なるエッサイの父にして、即ち耶蘇の祖先に當れり(得四の十三以下、太一の五)。

路得記 The Book of Ruth. 經名

舊約聖書中の一書。ルツの物語を述べたるもの也(前巻の終を見よ)。匿名の書にして、平和の時代、舊習慣の尙維持せられ守られたる時、希伯來人の間に行はれたる遊牧的生活を叙せる牧歌的著作也。(一) 著作の時代 此書の書かれたる時代は、書中に記載せられたる歴史の時代よりも適かに後ならざる可らず。書中に記載せられたる出来事は『士師の世を治むる時』に起りたること也と云ひ(一の二)昔時以色列に行はれたる慣例に言及し(四の七)ゴアズの畜をデビダ送たり(四の廿二)。然れ共此書の書かれたる時代に就ては此書何事をも言はず。言語の上より此書を早きものとなし難きこと、就ては、ドワイゲル之を論ぜり。言語を外にして、四章の慣例が既に久しく廢棄せられたるものなるが如く書かれたるを見れば、此書が俘囚以後の作なること殆ど疑なし。

ルツ

をいはず、又其言語中七の三の律法と相異れり。故に此書を以て俘囚以後の作となすもの中中には、此書を以て政治的小冊子となし、エツラ及びナヘミヤの所爲に對する抗議となすものさへあり。(二) 正經に於ける此書の地位 ヌルツは此書を聖文學の首め、詩篇の前に置けり。希伯來聖書に在りては、此書は五の特殊の日に會堂にて讀まれたる五卷の卷物の中の第二位に在り。現時の如く此書を士師記の次に置けば、ゲルゲイト(拉丁譯)七十人譯及びモファスに測り得べし。而して此書此書の初めに、書中の記事が士師の時代に起りたる者として記され、從て士師記の附録の如く思惟せられたるに由る。(四) 參考書、ドワイゲル、コルニル、ワイルト、ゴエルの舊約聖書總論。オエトリ、ノルドラッゲン、ノラタ等の註釋。ライル、ワイルト、ゴエル、プーレル等の舊約聖書の正經等。

ルツ

ライムンヌス Lullus, Raymundus (Don Ramon Lull doctor illuminatus) 人名 一二三二—一二五二 地中海アリカ島パルマに生る。西班牙高家の子。アラビアの宮廷にて教育を受け『アラブセチスカル』の地位に上り、詩人及び高位の人として名聲を博す。然るに何事か生命を無なりと感ぜしむることあり、又一二六五年聖フランシスコの記念日に聞きし説教に感ぜしことあり。之がために志一轉し、コムオステラの聖イヤーゴに參拜し、家族を維持するに足る外の財産をば貧者に施し、隱者となりてマリョルカのラング山中に退く。七一年又幻に接し、具よりはサラセン及び異教人等の改宗をふこと其一生の目標となり、之を達せんため異教徒をも首服せしむる書

ルの部

ルーテル

ルーテル

ルーテル

汎的理學の組織甚だ必要なりと、其豊富なる精力を斯かる理學の組織及び之を教へ又東方諸國を教ふべき宣教師養成學校の設立に集中す。教會と法王とに對しては常に調和的に行動せしめ、其助を得ず。然れ共一二年の補納會議にては巴理、牛津及びサマシカにて東方諸國を教ふることを期し、佛蘭西及びアラゴニアの王等と諸大學とは又同情を表するに至り、彼は諸所にて其理學を教へ、されど獨力其志を行ひ、自ら亞細比亞語を學び、一九二二年一三〇九年及び一四年の三回サラセン人間に宣教師旅行を試み、アギア、ボナマで行きし、二度は追ひ歸され、最後には石にて打たれ、市内より引き出して海岸に棄て死するに委されたり。ルッセルの文書は拉丁、亞刺比亞、西班牙語にて書かれ、四百三十部と數へらる。多くは發行せられずして西、佛、葡諸國の圖書館に傳はれり。

ルーテル

マルチン Luther, Martin
 一四八三—一五四六 獨逸の宗教改革者。一四八三年十一月十日を以て、サキソニアのワイツテンベルヒに近きアイスレーベンに生る。父はハンズと云ひ、ツリーツヤア森林の近傍なるメーア村の農夫なりしが、アイスレーベンに移りて坑夫となりたり。母マーガレタは謙抑と神を畏るること新を常にすることにして、メウクントンの稱讃を受けし人なり。ルーテルも生れて後數月、ルーテル一家は更にマンスフェルトに移住せり。此地に來りし頃より生活上稍や餘裕を生じたりしが如く、ハンズはマルチンの稍や成人せし後該市の一名警職に擧げられしが、ルーテルの幼時には具に貧苦を嘗み、彼は母と共に山林に入りて薪を拾ひしことありと云へり。父ハンズはマルチンに對し極めて嚴格にして、

マルチンは飾りなき正直と誠實の實を印せられたり。彼は先づマンスフェルトの拉丁學校に入り、一四九七年マゲアブルヒに移り、九八年親戚の住めるアイゼナハに移り、爰に三箇年を費しぬ。彼は他の貧しき少年等と人の家の前にて歌を歌ひて難題を乞ひしに、クラン、コックの妻ワルブルアの注意する所となり、其家に招かれ、親切に待遇せられたり。教師にはトレゴニコスありて、ルーテルは知力の明徹と能辨の才を顯はしめぬ。一五〇一年エルフルト大學に入り、〇二年「マテネコロ」號を、〇五年「マスタル」號を得たり。父母は彼を法律家とせんとし、彼も亦其目的にて尚深く法律を専修せんとして、故郷よりエルフルトに歸りしが、偶然志を變じ、父母の許諾を得ず、朋友にも謀らず、〇五年七月十七日廿一歳にして、エルフルトなるアウグスチヌス僧院に入りて僧となり、〇七年に至りて接手續を受けぬ。ルーテルは斯く俄に心機を轉せしは、エルフルトに歸る途中劇しき雷雨に逢ひ、同行の友人は之がため實死し、自己も亦一時氣絶せしが、後幸に蘇りたりしに、身を獻げて僧となりたる也といふ。之れより先きルーテルはエルフルト大學の圖書館にて拉丁語の聖書を讀みしと云へば、彼は既に人の運命や自己の教に關して深刻なる靈的奮闘を経験したりしなるべく、且彼の從來師事したりし教師は概し僧侶なりしが、其受けし教育も多少宗教的にして、人生最大の問題を思慮し居りたりなるべく、偶々友人の念死と自己の幸に死を免れたることとに逢ひ、富貴名譽を忘れ、俄に僧となるの決心を起したりしものなるべし。彼れ既に僧院に入り、其規則を熱心に守り、又神學を研究し、ガブリエル、ビールやデイリの著をば殆ど誦讀し、オ、カマやゲルソンをも食讀

解釋と我等の父と十誡に就ての說教「說教集」及び書翰等は之を證す。然るに被罪券の販賣始まり、其販賣使テツツセルはワイツテンベルヒ近傍に來れり。ルーテルは此に於て起て講壇より、懺悔室に於ても、之が不法を唱破せり。而してブランテンブルヒ監督、マインツ大

の力なし、唯だ既に神の與へたるものを宣言するに過ぎざるのみと言ふにあり。其說教をも之と同時に出版せり。然るに三千言を越えざる此條文はルーテルの夢にも思はざりし歡迎を受け、僅か二週間に於て全獨逸に普及せり。是れ何人も被罪券に不平なりしに、監督や博士等の默して言はざりしを、ルーテル獨り起て其非を喝破したりしが故也。於此テツツセルのドミニコ派の僧ブリーリアス、インゴルスタト大學長ヨハン、エック及びホルゲストライテン等は起ちてルーテルを反駁せり。ルーテルは乃ち小冊子を著はして四人に答へし、之に依て更に二箇の論争添ひ起れり。即ち一は懺悔室は唯だ受くる者の如何に依て有功となり無功となること云ふこと、二は法王は至上權威を有せずといふことにして、ルーテル之を唱へしを、反對者等は之を以て異端となし、羅馬に出頭を迫り「カルティナル」カエタンは之を取調ぶる法王代理に任ぜられたり。されど尚ルーテルを屈服せしめんとの意ありしが、其目



ルテール

ルの部

ルーテル

ルーテル

ルーテル

監督其他へは書翰を贈り、之と共にテツツセルに反對する九十五箇條文を送り、且之をワイツテンベルヒのシコロツキルへ(教會の門扉)に掲出せり。是れ一五二七年十月三十一日の事にして、九十五箇條の要は、罪惡の懺悔せよと言ふは一生活を懺悔の行とせよと言ふの意なり、法王の被罪券は小冊なも去る

だ受くる者の如何に依て有功となり無功となること云ふこと、二は法王は至上權威を有せずといふことにして、ルーテル之を唱へしを、反對者等は之を以て異端となし、羅馬に出頭を迫り「カルティナル」カエタンは之を取調ぶる法王代理に任ぜられたり。されど尚ルーテルを屈服せしめんとの意ありしが、其目

的を以て一五二八年十月アウグスブルヒ會議開催されたりしが、ルーテルは我こそ教會の嫡子なりとて固く前説を堅持して風をさししかば、之がため法王は世界會議に訴ふるに至れり。然るにサキソニア選侯はルーテルを法王の手に委するを欲せず、一九年一月其大臣ミルティンを遣はしルーテルに就きて、暫く編纂すべきを約し、法王に書を贈りて教會に對する尊敬を表はさしめたり。ルーテルは之に従ひし、其書中に聖徒への祈と懺悔とをば信する、被罪券が懺悔に在る者の状態を變化することをもば信すること能はずと言へり。されど法王もサキソニア選侯と絶つ事なば欲せざりしが、未だルーテルに手を下すことをせざりき。然るにエックはルーテルの同盟カールスマットにライプツヒにて討論せんことを申込みしが、ルーテル今は默すること能はず、六月七月に亘りてエックと討論せり。エックはルーテルの言論を引きて、彼が教會より離れ居れることを指摘せしに、ルーテルは歸する所なく法王の至上權威を否定し、天國の鍵は一個人に托せられたるに非ず、全教會に托せられたる也と言ひ、フッス又はアウグスチヌスが唯一個神聖普遍の教會あり、而して此は選ばれたる者の總計なりと言へるは真理也。故に希臘教會も亦異端に非ず、又コンスタンツ會議が異端なりとせし罪せしフッスの説の中には純然たる福音的のものあり、去れば世界會議も亦無謂といふを得ずと論ぜり。其頃ルーテルは研學のため身體衰せ居りしが、說教は辭意共に豊富に、人に交はるや快活にして友誼厚く、討論にては驚くべき氣力と清新と大膽とを顯はし、又抑へ能はぬ粗朴と猛烈とを發露せり。一九年加拉太書の大書講義と詩篇に關する書を公にしぬ。

ルートの部

ルート

今やルートの名譽を以て揚り、學生はワイッテンベルヒに對し、ボヘミヤのウトラクテ(兩種晩餐派)及び以太利より福音派及び代表者を送り來り、人文學派も亦ルートに同情し、其派の青年メランクトンは一八八一年以後彼を助けて其改革事業をなせり。ロイヒリン。エラスムスへはルートより書翰を贈りぬ。貴族も保護を申出で、ワッキンゲン、フランツ、シャウエンベルヒのシルゲヌステルなどは、城内に來りて危を避けよと言へり。ルートは二〇年『獨逸國の基督教徒たる貴族に與ふる書』を發して、貴族等が平人として教會改革に従事すべきことを勧め、且尼院設立を仰へ、禁令及び宣明令を廢し、俗權の獨立を承認し、晩餐化體説を否定すべきことを説き、其頃著せる『巴比倫俘囚』に於ても、儀式は晩餐洗禮體のみなるべしと説き、『基督教徒の自由』に於ては教論に、基督と人格的に合一すべきことを高調したりしが、此三大論文が社會人心に及ぼせし影響は迅速にして濃厚なりき。而して是れ實に法王に對する挑戰狀なりしが、法王は遂に二〇年六月十五日の附を以てルートに宣明令を發し、其年九月エッタは之を廢してマイトに變換せられたりき。ルートは之を廢したることを以て、宣明令は法王廷の最後手段なりしが、獨逸國民は上下舉げてルートに擁護せしが、流石の法王も如何にせん。此能はず、皇帝カール五世に歸り、其權力を藉りてルートに處罰せんとしたりき。於此皇帝は折しも開會中のワケルムス國會へルートの出頭を命じ、且自らも之に臨まんため、ワケルムスに向へり。ルートは豫別し居りたることなりしが、心中に死を覚悟せしもの如く、發するに臨みて後

ルート

事をメランクトンに托し、二二年四月二日ワイッテンベルヒを發せり。沿途ルートに親しく欲して集まる者堵の如く、獎勵の聲稱讚の語は常に同行者の耳を打ちたりしが、策士の權謀、敵敵の陰險手段も斷へず彼を陥らしめんとしたりき。故に彼の親友等は彼に百難を排して年來の主義を一貫すべきことを勧めたりしと共に、内外の事情を彼に報じ、且彼を保護して災なからしめたり。斯くてルートは十六日ワケルムスに到着し、翌十七日午後四時彼を見んとして難送せる老若男女の中を通過して議場に達せしが、議場の周圍にも數多の人々待ち居て彼を助めし、中には有名なる勇將フロンツスベルヒも在り、身も其擧の正しきを信ぜば、神の名に依りて勇進せよ、神必ず御身を護て給はざるべしと言ひて彼を勵ましたりき。ルートは僧衣を脱ぎ、僧服の態度を以て皇帝と諸侯との前に立ちしが、ヨハン、エッタは机上に列れたるルートの書きたる甘誓計りの書翰を指して、其書中に書き記せる意見を取消すべきことを命ぜり。ルートは正當適當なる答をなさんため一日の猶豫を與へ一場の演説をなし、最後に『我は聖書の證據と明晰なる理論とに依りて我が誤なることを證明せらるゝに非ざれば自説を取り消すこと能はず。余は宗教大會の決議者くば法王の命令に従ふこと能はず、何となれば此兩者は實に誤りし事あるのみならず、又互に矛盾せる事あれば也。我は我真心に背きて何事をもなすこと能はず、神よ我を助け給へ、アーメン』と言へり。帝は諸侯を召集して其意見を徵せしに、其多數はルートに庇護して調停を謀らんと欲したり。帝は何處迄も法王宣明の旨を貫徹せんとし、トレウエスの監督をして私にルート

ルート

ルを説かしめし、彼は斷乎として調和を肯ぜざりしかば、五月二十五日彼は猛烈に宣明せられ翌日ワケルムスを去る。途中一隊の騎士不意に現はれ彼を執へて何處に運び去れり。此れ實はマクシミア選侯の命に依れるものにて、侯はルートに保護せんを許さずしてワケルムス城に入らしめ、此處に彼をしのばしめたりし也。此の時よりルートの改革的活動は建設時代に入りたるものと謂ふべく、彼は自らマイトモスと稱せし城中に在りて靜かに内省し、又新約全書の獨逸譯に従事せり。是れ即ち其後永く獨逸聖書譯文體の模型となりし者なり。外にては時勢は著しく變化しつつありき。メランクトンは僧立誓の無功を論じ、ワイッテンベルヒにては禮拜にミサを廢しぬ。ルートは連りに小冊子又は書翰を發して此等の意見を公にしつゝありしが、然も彼は守舊的態度を取り時の破壞的動搖を抑へ、ツワイクカより來りし三友信者が見たりし稱し、小兒の受洗を非とし、彼等が明白なる證明を説きし時には、之に反對し、凡て神の御出なる證明を缺くを責めたり。三月ワケルムスを出でワイッテンベルヒに歸り、愛と秩序と抑捺の義務に就て八回の説教をなす。此に於てツワイクカ信者は終に足の塵を拂て去り行けり。二三年ルートは新禮拜順序を公にし、獨逸讚美歌を復興し、二四年讚美歌集を發行す。ルートは此の四つの中に在り。其頃マクシミア侯カールはルートに對する風俗の範圍を公にし、世上權は世上權力に對する風俗の範圍を公にし、世上權は世上權力に對し、禁止の命には服すべからず、彼等は精神の事に關して法律を定むるの權なしと論ぜり。彼は又

ルートの部

ルート

英國王ヘンリー八世が自己の聖職論に反對したる書を著ししに於ては、無禮の言をも之に交へしが、後其の過を謝せり。エラスムスは初め親しかりしが、後エラスムスはルートの無作法なるを苦め、ルートはエラスムスの神學を輕蔑せし、積極的ならず、勇氣なきを責むるに至り、二五年エラスムスは一書を著し、意志の自由を唱へてルートに反對せり。ルートは『ア、セルゲ、アルビトリオ』を以て之に答へ、神は全知なれば凡てを預定し、人に意志の自由なし、是れ信仰の最高所なりと論ぜり。教會内には此時誤れる自由の思想侵入し來れり。カールスタットは此思想を代表し、晩餐に於ける基督の體の現在でふことを否定し、極度の精神主義を唱へしのみならず、多妻主義をも許すべしと説けり。更に又猶太教のヨベルを復し、其年には凡ての財産を舊主に返すべきとせんと唱ふる者あり。ツワイクカ信徒の首領ミンクワルは又聖徒の國を造らんと稱して共產主義を唱へ、殆ど革命を起さんせり。ルートは『天來の預言者に對して』を公にして、凡て此等の諸説に反對し、我等の律法は基督自身也と言へり。然れ共火の手は益々擴がり、あはや百姓一揆は熾發せんせり。ルートはミンクワルを獨預言者と呼び、南部の百姓へは基督信徒の自由は肉の自由ならぬを告げ、侯伯を獎まして、其領内に類々起つよある殺戮掠奪を目的とせる徒黨を壓するに極端手段をも辭せざるべきを説けり。是れ試惑の時に於て彼は己が生命をさへも奪はんとする者あるを聞き、二五年六月曾て尼たりしかマリナ、フォン、ボラと結婚せり。愛の經驗ありしには非ず、死に先立ちて自己が結婚を尊敬する事を示さんため

ルート

と、法王の定めし獨身生活の規定を蔑視して、天使笑ひ聖寵注かんことを望みしがためなりし也。教會組織と禮拜の形式とは今やルートの考慮に上り來れり。二六年『獨逸禮拜』を出し、毎週の禮拜と聖書の研究を勧め、又開會の教育を奨励し、洗禮に關しては二三年、二七年に小冊子を著し、二五年五月にはワイッテンベルヒにて最初の按手禮あり教會の規程も次第に整備せり。高級教職も侯伯に依りて任命せられ、二七年と二九年には視察も行はれ、二九年にはルートの二つの問答書も出來れり。聖餐に關して獨逸改革派と意見を異にし、議論を闘はしたるも此頃なり。眞にはカールスタットの説を攻撃せしが、今やツワイクカ、レタ、ツワイク、エコマ、アヤウスの又カールスタットと同説なるを發見し、二六年より彼等に向ひて猛烈に反對を表せり。二九年十月ワケルムスにてツワイクカ、及びエコマ、アヤウスと會見し、聖餐の意見の外は案外にも凡ての點の一致せるを見出し、愛と平和とを約束せしが、然もツワイクカ、アヤウスの言を斥け、友情の握手を拒みて別れたり。ルートは以爲えらく、晩餐の體態と葡萄酒とは基督の實の血と肉とに化するにあらざり、基督の體は唯かに其所に現在する也、但し信仰に依て之を受けずば益なしと。主の晩餐の條(參照)獨逸改革者等もルートとの此不一致は、改革運動全體を悲運に陥らしむる恐ありければ、新教の諸侯等は三〇年アウクスブルヒにて帝と會見し、新教に對する帝國の態度を一定せんとせり。此時ルートはアウクスブルヒに在りて成行を觀望せしが、アウクスブルヒにて成りたる信仰告白は、メランクトンの書きたる者なれ共、實は久しくルートと相譲りし所を書きたりし也。唯だメランクトン

ルート

の書きただけに相なるのみ。然れ共ルートはメランクトンの緩和の精神を非常にごちしく思ひ、メランクトンの餘りに妥協的なるを疑ひ、法王が法王制度を廢するに非ざれば自己には調和の望なしと極言せり。折しも外にはツワイクカ人の選なごりしたる、皇帝はシマールカド協約にて同盟せる新教徒に烈しき壓迫を加へず、法王も亦尙世界會議を開くの意あるを示し、ゲネラリウスを以て之をルートに選ぜしめたる共、ルートは之を信ぜず、法王は非基督的なりといふ文章を書き、又會議は無理的ならずと論ぜり。やがて新教徒合同の實力は試みられ、ルートも亦之を贊し、三七年にはマール市の市長へ、三八年にはアインゲルへ、友情的の書を贈り、又ボヘミヤ宗徒の信仰を辯護する書をも前後二回書けり。内に在りては彼は重に聖書解釋の書を著し、創世記、利未記に就ての説教、申命記に就ての講義、詩篇註解、何西亞、亞摩士、約耳、阿巴底亞、拿翁、馬拉基、以賽亞(以上拉丁語)、哈巴谷、約拿、撒加利亞、以西結(廿八、廿九)但耳(以上獨逸語)の講義を書き、再び何西亞、米迦、約耳、傳道之書、雅歌講義を書き、又彼得前後書、猶太書、使徒行傳十五、十六章に就ての説教、約翰第壹書、提多、提摩太前後書の講義、約翰傳に就ての説教、馬太傳五、七章に就ての説教、加拉太書講義、大註解等を著せり。又ワイッテンベルヒの會堂にてはアインゲンハーゲンが牧師となりし後までも説教せり。彼は神恩に感謝すこと雖も、終りに至るまで自己に就ても教會に就ても世界に就ても現狀に満足せず、常に其改良を熱望し、之がために盡力せり。彼の目には世は洪水前の世界の如く、ワイッテンベルヒの腐敗を嘆きては四

ルの部

ルーテル

五年の夏には旅行地よりソドムへは歸らずと言ひ、貴族をも百姓と同じく攻撃し、教會に敵する者は彼等なりと言ひ、時には法王政治こそ斯かる世界には恰適すと言へり。其頃ヘッセルのフリードリヒ其妻に懐たらずして、他の女を愛し、ルーテルの意見を求めし時、彼は一妻は神の初よりの定めなれ共、此場合は特別に副妻主義を認可すべきものなりと答へ、之を秘密にすべきを約せしに、四〇年三月結婚して事公となり、非難甚だしく、相談に與かりしメランクトンは死なばかりに真心の同責を感じしを、ルーテルは祈りて彼を慰め、己れは人の前には彼を防ぐ能はずと言ひ、神の前には満足に保護するを得るを信ずと言ひて其友を救へり。

新舊教合同の實力は四〇年再び起り、一方にはメランクトン新教合同を謀りし、ルーテルは其成るべからざるを告げて眞理を守るべきを勧め、四六年一月ルーテルは或る伯爵等の間の調停のため、故郷アイズレーベンに招かれ、首尾よく其使命に成功せし、二月十七日同地にて胸に壓傷を蒙り、友人包圍の中に於て詩世一篇の五節「汝が手に我を託す」を屢々唱へ、平和の中に死せり。遺骸はライプツェンベルヒのシロツスキルへに葬れり。

ルーテルは信義に於ける神學者とはいふ可からず。素より學者的能力なきには非ざりし、組織形成するよりは、生ける如く實現して之を立證するに於て最も大なりしなり。其説教の氣力が溢れたるは此故なり。故に其神學説の如きは、時として或點を強く主張し、時として他の點に力を入れ、一體的なならす。一五二〇年と一五二五年との間には、其一體の態度に大變化ありたり。唯だ預定説に至ては前後少しも變らざりしが、然し後には神を基督に於て顯はれたる愛の神と認め、直接に之を仰ぎたり。彼の文體は簡單明白にして、氣力に充ち、常に新鮮なり。世情に通じ、説明に巧みなる又其特色也とす。家庭に於て温かき人なりしは、書翰及び講話に依りて明なり。夫と父として情厚く、詩や音楽を愛し、好んで小兒と共に戯れ、遊戯滑稽に長じ、祝日を共に祝しぬ。其小食なりしは常にメランクトンを驚かせり。其會話は極めて質朴誠實なり。宗教經驗に於ては彼は絶えず心中に戦闘あり、自ら惡魔と角闘しつゝあることを感ぜし、然し惡魔は己を害し得ぬことを確信して、中心には動かすべからざる平和を有したり。自ら以て爲らば、我は惡魔と世に太く憎ふべしとされたる者なりとせば彼の信念なり。我等の神は聖き城なり(Edin feste burg ist unser Gott)は一五二九年に書かれたる讚美歌なるが、神に信賴して世界に對立せる彼の徳の之に依りて信ぜらるゝに共し、ルーテルが讚美歌作者とすも亦非凡の人なりしを示せり。彼は又一個の國民的英雄なり。偏逸生活の理想なり。彼は實に私人として、常に清く氣高く正しく又親しむべかりしが、公人として思想の大なる、行爲の大なる、恐れず能く度れる者、實に獨逸性格の模範たる者なりしなり。『宗教改革』の條參照。ルーテルの傳記にはメランクトン、ミケレット、フライタガ、コールバ、ハウスラート、キンゼー等の著あり。又フイツツ、キンゼー其他の宗教改革史を見よ。邦文にては村田勤の『ルーテル傳』及び『宗教改革史』あり。

ルーテル教會 Lutheran Church. (宗派名)

第十六世紀の宗教改革より起れる福音主義教派の最古にして且最大なる宗派。此名稱は初め羅馬教會

ルーテル教會

る愛の神と認め、直接に之を仰ぎたり。彼の文體は簡單明白にして、氣力に充ち、常に新鮮なり。世情に通じ、説明に巧みなる又其特色也とす。家庭に於て温かき人なりしは、書翰及び講話に依りて明なり。夫と父として情厚く、詩や音楽を愛し、好んで小兒と共に戯れ、遊戯滑稽に長じ、祝日を共に祝しぬ。其小食なりしは常にメランクトンを驚かせり。其會話は極めて質朴誠實なり。宗教經驗に於ては彼は絶えず心中に戦闘あり、自ら惡魔と角闘しつゝあることを感ぜし、然し惡魔は己を害し得ぬことを確信して、中心には動かすべからざる平和を有したり。自ら以て爲らば、我は惡魔と世に太く憎ふべしとされたる者なりとせば彼の信念なり。我等の神は聖き城なり(Edin feste burg ist unser Gott)は一五二九年に書かれたる讚美歌なるが、神に信賴して世界に對立せる彼の徳の之に依りて信ぜらるゝに共し、ルーテルが讚美歌作者とすも亦非凡の人なりしを示せり。彼は又一個の國民的英雄なり。偏逸生活の理想なり。彼は實に私人として、常に清く氣高く正しく又親しむべかりしが、公人として思想の大なる、行爲の大なる、恐れず能く度れる者、實に獨逸性格の模範たる者なりしなり。『宗教改革』の條參照。ルーテルの傳記にはメランクトン、ミケレット、フライタガ、コールバ、ハウスラート、キンゼー等の著あり。又フイツツ、キンゼー其他の宗教改革史を見よ。邦文にては村田勤の『ルーテル傳』及び『宗教改革史』あり。

ルーテル教會

が嘲弄的の意義を以てルーテルの徒に名けたる者に於て、ルーテルは宗派的の意義を以て彼の名を用ゆることを嫌ひたりしが、ルーテルの徒は遂に之を以て自ら名くるに至れり。其通常の名は『福音ルーテル教會』(Evangelical Lutheran Church)にして、ルーテル教會とレフォルム教會との合同の行はれたる(一八一七)以後福音主義及び獨逸の他の聯邦にては、ルーテルの名を棄て、單に『福音教會』又は『合同福音教會』(Evangelical Church)と稱す。此派の本據は獨逸に在り。獨逸に在りては其會員の數過かに他のプロテスタント諸派に優れり。スカンディナヴィヤ諸國に於ては國教として採用せられ、バルチック沿岸の露西亞領にも擴張せられ、獨逸人民の對する所に蔓延し、殊に北米合衆國に於ては其強大なる宗派の一となり。日本に於ては明治廿五年(一八九二)其傳道開始せられ、九州の佐賀、熊本、久留米、大牟田等に教會及び講義所を有せり。(最近の調査に依れば、日本に於ける此派の教會四、講義所十一、按手禮を受けたる邦人教師二人、傳道者三人、外國宣教師六人也。)

(一) 歐羅巴に於けるルーテル教會 (イ) 歴史 五期に區別するを得べし。即ち(ア) 一五二七年ルーテルが九十五箇條をライプツェンベルヒ教會の門戸に掲示して羅馬教會に挑戰したりしより、一五八〇年『アクト、オフ、コンコルド』の公にせられたる時迄、即ち宗教改革の形成的時期。(ハ) 次は一五八〇年より一七〇〇年頃迄の時期にして、此時期には羅馬教會及びカトリックに對して教會の教義一定せられ、カトリックに依りて代表せられたる溫和寛大のメランクトン型の教義採用せらるゝに至れり。此時期は破邪顯正的の時期と稱するを得べし。

ルの部

ルーテル教會

得べし。(ハ) 次は一七〇〇年頃より第十八世紀の中頃に至る迄の時期にして、此時期は死せる正統神學に反對して實際的敬虔主義の勃興したる時代也。之を稱して敬虔主義の時代と稱するを得べし。此敬虔主義の運動は英國に於けるメソヂスト運動と同一なるものなれ共、獨逸に在りてはメソヂスト教會内に限られ、且長く繼續するを得ざりし。(ニ) 次に来れるは偏理主義の時代にして、此偏理主義は漸次大學及び教會に侵入し、神學及び教會の生活に大革命を起し、一時獨逸に於ける實際的敬虔主義は唯僅少のモラヴィヤン教會に残れるのみとなりたり。(三) 次は福音主義神學復興の時代にして、クラウス、ハルムスは一八一七年偏理主義に對する九十五箇條の非難文を公にし、又此年を以て福音主義に於けるルーテル派レフォルム派合同の運動起り、福音主義及び其他二三の聯邦にては合同成就せしが、之がため『福音ルーテル派』の反動を提起したりし。爾後今日に至る迄福音主義と偏理主義との争は絶ゆることなし。

ルーテルの小問答書。後者は小兒及び入會志願者用のため作られたる者にして、ルーテル譯聖書に次ぎ最も必要にして且最も能く知られたる者也。(ハ) シュマルカルト信條。一五三七七年ルーテルの草せる所の者にして、著しく反法的也。(イ) コンコルド信條。ルーテル及びメランクトンの死後、久しく論争せられたる主の晩餐及び其他の教義を一定せんため、六人のルーテル派神學者の草したる者也(一五七二)。(ニ) ルーテル派とレフォルム派との關係。レフォルム派との關係に就て、ルーテル派内には常に二箇の傾向あり。一は即ち嚴峻なる排外派にして、コンコルド信條に依りて代表せられたる人々、第十七世紀のルーテル派頑固學者、及び『新ルーテル派』と稱せられたる人々之に屬す。他は溫和寛容派にして、メランクトン、カリクスタス、ヨハン、アルンド、スベーター、フランケ、アルノルト、モスハイム、ベンゲル、スワアベヤのルーテル徒、及び近代に至りレフォルム派との合同を企圖實行せる人々之に屬す。ルーテル派はプロテスタント教會の中英國教會に次ぎ最も保守的なる教派にして、クワインガリー、カルヴァン、ノックス等が非聖書的也として排斥せる中世の儀式慣例の多くを維持せり。

ルーテル教會

運也とのことを信する事是也。(二) 政治。ルーテル教會の教義的發展は其組織及び政治的發展より速かに早かりき。元來ルーテルはカトリック又はウエズレーの如き組織家には非ざりしが、教會組織の必要を深く感じ、一五二九年サキソニアの教會を巡視し、教會及び學校を總管せんため『總督』を立てたりしが、サキソニア教會の條例は他の模範となりたり。信徒皆祭司といふはルーテル教會の根本思想にして、教職は皆平等とせられたり。瑞典にては全國ルーテル教會となりし時、羅馬教會の監督は依然其職名を保持し、丁株教會も亦監督の稱號を保持したりしが、使徒的傳承をば要求せざりし。獨逸にては教會の政治は教職と信徒とより成立せる教務院と總督とに依りて執行せられ、此等の役員は政府之を任命し、教職の候補者を試験し、牧師を任免し、其俸給を定むる等の事をなさしむ。福音主義の宗教總務院は一八五二年以來ルーテル派とレフォルム派とより其會員を出すこととなり。『獨逸』丁株と瑞典の條參照。(三) 北米合衆國に於けるルーテル教會。歐羅巴より最初に米國に移住せる者の中にルーテル派に屬する者ありて、此派米國に傳はり、爾後獨逸、スカンディナヴィヤ諸國より移住長續々入り來りしより長足の進歩をなし、現今にては會員の數よりすれば、プロテスタント諸派中第三位を占む。(一九〇七年の調査に依れば、米國に於けるルーテル派は廿三派に小分せられ、教會一萬三千一百六十九箇、教師八千四百人、會員二百二十萬二千六百五人を算す)然れ共組織の不完全なるを、極端なる保守主義と、依然外國語を使用する等の理由に依り、其國民的勢力は他の比較的小派より少し。

ルーテル教會

ルの部

ルーテル教会

米國最初のルーテル徒は和蘭より來り、一六二一年今の紐育市の立てる地方を占領せし最初の和蘭殖民地の一部をなしたりしが、彼等はレフォルムド派の信條に異れる信條を固執せるより殖民地政府の迫害を蒙り、一六六四年英國政府の管轄に歸せし迄は禮拜の自由を有せざりき。一六六九年ヤコブス・フアリッス最初の牧師として來着し、七一年粗村なる教會を建て、其處にて禮拜を開始したりき。和蘭より移住せるルーテル徒の外に、瑞典より亦一團のルーテル徒一六三六年来着し、テラウェーア河岸に殖民せり。之れより稍や後れて南送より多數のルーテル徒移住し來り、漸次ペンシルヴァニア、メリーランド、ヴァージニア、中央紐育、北カロリナ等の諸州に殖民せしり、此等のルーテル徒は先發者にして、一七一〇年には更に數千のルーテル徒來着してホドソン河岸に殖民し、一七一七年にはペンシルヴァニアに多數の南送人移住し來り、更に一七二七年及び一七三四年に多數のルーテル徒來着したりしが、斯く數回に南送より南送せしルーテル徒の多くは牧師なく、從て教會の組織もなく、僅に信徒相集りて禮拜を行ふに過ぎざりしが、ロバート・ヒア、ニウ・ハノーヴァル、ニウ・プロビデンス等に組織せる教會を有せる人々は、一七三三年途に人を歐羅巴に遣はして適當なる指導者を送らんことを請ひたりしに、其結果ハイネリッヒ、メルキオル、ミラニエル、一七四二年米國に到着し、愛に米國ルーテル教會の新紀元を開けり。彼は敬虔と熱心と智慧とを以て奮闘し、偉大の感化を興へ非常なる成功を納め『米國ルーテル教會の教父』なる稱號を得たりき。『ミラニエル』の條を見よ。彼實ならず數人の補助者願より來り、ミラニエルを助けて働き、至

ルーテル教会

る所に覺醒を起し、新なる教會は組織せられ、教會の學校は設立せられ、紀綱は振肅せられ、斯くて一七四三年には廿箇の組織せられたる教會を有するに至り、教勢大に振起したりき。然れ共此状態は長く繼續すること能はず。真類の時期は間もなくして來り、ルーテル徒は殖民に依りて漸へず増加しつゝありしが、一七五〇年には一萬二千の南送人ロラデアニアに來り、翌年又同數の殖民來着し、ペンシルヴァニア州のみにて六萬人を數ふるに至りしが、牧師の數は容易に増加せず、一七四八年には米國全體にてルーテル派の牧師は僅に十一人ありしに過ぎず。五〇年には十六人となり、六八年には廿四人となり、ハルレ大學より漸へず卓越せる教師を送り來りしと雖も、教師の増加は殖民の増加に伴ふこと能はず。之がため宗教的教會殖民の全體に普及せり、從て教會の組織完全なること能はざるより、一旦振興せし教勢も長く繼續すること能はずして、再び沈頓の狀態に陥り、以て第十九世紀の初に至りたりき。ルーテル教會の最初の聯合團體は一七四八年ロラデアニアに於て組織せられ、ペンシルヴァニア獨逸福音ルーテル教務院(German Evangelical Lutheran Ministerium of Pennsylvania)と名け、六人の按手禮を受けたる教師と之同數の普通信徒とを以て組織し、毎年一回會合せることなせり。之と同體の團體は相續て諸處に組織せられ(紐育州は一七八五年、北カロリナ州は一八〇三年、オハイオ及び附近諸州は一八一〇年、メリーランド及びヴァージニア州は一八一九年に組織せらる)。其地方々の教勢を進步するに與りて大なる力ありしが、地理上遠隔せるより各々獨立して、其間に聯絡を強ゆること能はざりき。然れ共此等の諸團體を聯合して更に一大

ルーテル教会

團體を組織するは、教會全體の進歩を謀る上に必要なりしが、遂に一八二〇年に至り、オハイオ州を除くの外以上の諸團體は聯合して『總會』(General Synod)なる者を組織したりしが、此聯合に加はれる教師は一百三十五人、信徒三萬三千人なりき。總會の組織は米國ルーテル派の第二新紀元をなし、其職掌は單に勸告を興ふるに過ぎざりしが、全國に在るルーテル派の中心となりて教會の發達進歩に大なる刺激を興へ、是より大學、高等學校、神學校等の設立となり、傳道會社及び其他の慈善會社も起り、教會は之がため著しき進歩をなし、一八二〇年には教師の數一百五十人に達せざりしもの、六三年には一千三百六十五人の教師、二千五百七十五箇の教會、凡そ三十萬人の信徒を有するに至れり。總會の初めて組織せられたりし時は、總會は信仰團體に關しては絕對に誠實を守りたりしが、後アウグスブルグ告白を大體承認することなし、一八六四年ヨルタに開きたる總會にてはアウグスブルグ告白は聖書の教義と、其上に立てるルーテル派の信仰とを正當に表明したる者也とのことを評決したりき。然るにルーテル教會の信徒に對する此態度は尙茫漠に失する者ありし論する者ありて、爾後論争絶えず、一八六六年には極端なるルーテル徒は分離して別に『總會』(General Council)を組織し、凡そ十四萬人の信徒を代表する十二會議之に屬せり。一八七二年には更に極端なるルーテル徒更に分れて『The Evangelical Lutheran Synodical Conference of North America』を組織し、南北戦争の起るに及び、南部諸州のルーテル徒は、北部より分れて『The General Synod of the Confederate States』を組織せり(後此名は『The General Synod of North America』と改めらる)。此の如

ルの部

ルネーサンス・ルネーソ・靈魂創造説

靈魂不滅説

靈魂不滅説

く米國に於けるルーテル派は分離に次ぐに分離を以てし、以上四大團體の外に之に加入せざる許多の團體ありて、廿三派に分れたり。

ルネーサンス

Renaissance. 『文藝復興』の條を見よ。

ルネーサンス型の建築

Renaissance Architecture. 『建築』の條を見よ。

ルネーソ

人名。『以色列の族長』の條を見よ。

ルの部

靈魂創造説

Creionism. 學說名。個人

の靈魂の起源に關する神學上の一説にして、其説に依れば、個人の肉體は兩親の肉體より生ずるものなれ共、靈魂は神の個々に之を創造して、出産の瞬間若くは其少し以前に其肉體に宿らしむる者也。アンセルム・トマス、アタナシウス・ヘトリス、ロムマルドス等は此説を奉じ、教會の正統説と思惟せられたり。此説に對して靈魂の起源を解説せんとする他の學說二あり。一は靈魂前生説(Precristianism)にして、他は靈魂生前説(Prænatantism)也。前生説は各個人の靈魂は永遠若くは天地創造の時より存在するものにして、人の出生は即ち肉體を靈魂が一人に於て結合すること也と説き、オリゲナスは此説を奉ぜり。思ふに彼はプラトーン及びピタゴラス派の輪廻説より之を採用したるものなるべし。近代の神學者の中にも此説を取るものあり(ヘンリクス、

靈魂不滅説

Imortality of the Soul.

靈魂不滅説。靈魂は不滅也との言は古來人類多數の信に承りし所にして、聖書も亦明に之を教ふれ共、其理由を證明せず。之に關する舊約聖書の教訓及び基督教會の信仰の大要は、之を『終末論』の條下に述べたり。此處には聖書以外此信仰は果して合理的基礎を有するや否やを略論すべし。カントは靈魂不滅の信仰の根據を道徳上の必要に求め、以て之を、吾人は理性以外感情をも有するが故に、吾人の意志は理性の立つる道徳法のみに従はずして、稍すれば感情の誘惑に陥らんことを斯くして常に感情の束縛を受くる吾人の意志が、全然道徳法と契合する理想の境に達せんは容易の事に非ず。所詮有限の現世にて意志と道徳法との全然相契合するが如き聖なる境涯は未だ得べからず。且勇猛道に參するの士が不幸中道に夭折せるが如きは世に珍らしからざる事實なれ共、道徳的生活は斯くして之と共に煙消する事也とせば、人生は餘りに無意義也といはざるべからず。故に此道徳的要求をして無意義に歸せしめざらんば、靈魂の無限生活を許さざるべからず。吾人は無限の生命を有して始めて能く道徳上完全なる生活に達するを得べく、又斯くして始めて圓滿に幸福と道徳との二者を調和し得べき也と。此説も靈魂不滅の信仰の一理由となし得べしと

靈魂不滅説

雖も、もし靈魂にして果して無限に生活する者也せば、單に道徳法との契合上之を必要とすのみならず、吾人の存在其もの性質及び構造の中に、無限を指示する者なかるべからず。而して吾人の性質の中には果して無限を指示するものありやと云はば、吾人は之に答へて、吾人の性質の中には真正の意義に於て『永遠』の二字を適用し得べしを要あり、而して此要義は吾人の靈的生活の原理をなし、知識、道徳及び宗教の源泉をなす所の者也といふを得べし。而して此要義は時間的障礙を超越するものにして、單に神に依りて造られたりやと云ふべきものに非ず、神自らの永遠の性質を反映し再現するもの也といふも誇張の言に非ず。人の性質には有限にして且一時的なる存在に似たる方面と、頗る之と相異なる方面とあり。即ち一面より之を見れば、人は單に無數の有限なる物體の中に在る有限の一物體に過ぎずして、時間と空間とに限られ、絶えず變化し移動し生死し、其他の物質と同法則の下に在り、又下等の生物と共に飲食其他の性慾及び衝動に支配せらるる者也と雖も、更に他の一面より之を見れば、人は單に無數の有限物の中に在る有限の一物體に非ずして、其中には宇宙の有限なる諸物の依て關係し、天地間の萬物の依て其存在の意義とを有する原理を有す。吾人は通常其觀察する所の事實及び現象を以て自ら存在する者の如く思惟し、吾人は單に受動的觀察者として此等の事實及び現象に圍繞せらるるものとして考ふるべし。然れ共、斯る世界の存在し得る所以のものは、畢竟吾人が之を觀察するに當りて暫らく吾人の心意を抽象し、事實及び事實の關係を以て客觀的に實に存在するが如くなすに由れり。凡そ事實なる者は思想と關係する

レの部

靈魂不滅説

ここに依りてのみ存在するものにして、思想との關係を離れては存在すること能はず。故に或る意味に於ては、世界を創造するものは思想也といふも可也。而して觀察の對象が自身なる時に於ては、生理學及び心理學の材料は之を包容し之に超越せる自意識の原理と關係することに依りてのみ存在するを得べし。

吾人今もし此原理に包含する所のものを考察せば、二箇の點に於て人を時間と有限の存在との範圍以上に出せしめ、之をして永遠無限の存在と均しからしむるを見るべし。先づ第一に、時間の中に存在する事物を觀察し領解し得る者は、それ自ら時間の中に在るものなるべからず。事物を測る標準は、測らるる事物の一たること能はず。世上の出来事を領解する知識は、其出来事の上に立つものならざるべからず。其等の出来事の變遷よりなきものなるを認め得る者は、流轉變化するものなるべからず。時間の上に出し、永遠の要素を有するものに取りての外、時間といへるが如きものあるべからず。吾人の知識は或る意義に於ては進歩的のものにして、其之を得るや一時的に非ず、多くの時を費し、連續の過程を経て達するものなれ共、其思想に入らば、連續それ自らに連續的に非ず、時間の中に在る出来事は同時に把住せられ、時間の形式なき處に入り來り、全然理想的關係に於て領解せらる。觀察の對象が變化流轉を伴ふ吾人の個人的生活なる場合に在ても、吾人が個人として自己を知る所の原理なるものは、特殊の個人たる吾人に屬すること能はず。吾人が吾人自己の一時的存在を考ふる時には、吾人は一時的存在の上に出で、斯くして初めて吾人の一時的なることを領解し得る也。されば吾人が自ら一時的存在なることを知ることを其れ自ら、吾人が一時的存在に非ずして、變化死滅に超越し、凡ての有限物に特有なる動搖消失に依り影響せらるることなき不朽の範圍に屬する者なることを證するもの也といふを得べき也。更に他の方面に於て人の性質には不朽に生くるの資格あることを示す點あり。人は其性質上、之を制限するが如く見ゆる者に自己を實現するの力を有するが故に、無限の知識及び善の將來は其前途に横れり。一面より見れば、知識の範圍は廣大無邊にして、到底人智の達し得べからざるものなるが如くなれ共、他面より見れば、假令如何に廣大無邊なるも吾人に縁なき領地に非ずして、吾人が自ら所有し得べき版圖たる也。吾人が不可知の境に進むは、吾人に縁なき若くは吾人に敵するものを征服するには非ず、初めより吾人の所有物たるのみならず、或る意義に於ては吾人自己たる範圍を圍むに外ならず。何となれば心意又は精神は無限の内容の形式にして、凡ての存在の關係的なる原理を其中に保有するが故に、其の進歩は單に其知識を増大することに非ずして、それ自らの潜める富を開發するに外ならざれば也。故に其進歩は假令如何に長く繼續するも、吾人は思想の之に入るに能はざる範圍あり、又連續すべからざる藩籬を設け得べしと思惟すること能はず。思想の生活をなし得るは即ち永遠の生活をなし得る也。凡ての物の存在の基礎たる大知識(神)の生活に與り得る也。

靈魂不滅説

を公にし、二六年之に改正を施して編纂に發行し、カルグインは三八年其正式文をストラスブルグ教會のため、四年シエネガ教會のため發行し、ジョン、ノックスは五年蘇格蘭教會のため之を發行せり。英國教會の「新約書」は四九年ラムムル及びリッドレーの共編に成り、其後多少の改正を施せり。其後百年を経て長老主義を奉ずるものが英國教會と分離するに及び、後者は確信自由の新約をなすを以てよしとし、式文を廢止せり。然るに第十九世紀の中期に至りて編纂の非監督教會は式文を用ゆるを以て可となし、合同福音教會は英國王の認可を経て Article を採用し、蘇格蘭教會も兵士、水夫等のために一定の式文を編纂せり。米國にては監督教會、ルーテル派、レフォルム派、モラヴィアン教會を除くの外禮拜式文を用ふ。

靈魂不滅説

る飲食其他の性慾及び衝動の與ふる満足なるものは到底永遠なること能はずして、時々刺々の感情と共に過ぎ去り、斯る經驗を如何に稱讃するも何等の富を將來に與ふるに能はざるべし。然れ共吾人は之を共に、此世の存在を如何に長くするも測度す可らざる無限の將來を標準とする生活を返ることを得べし。何となれば吾人は道徳生活に於ても知識生活に於けるが如く、時間の範圍を脱出し、見ゆる一時的のものの上に超越し、永遠の生活と一なる靈的生活に入るを得べければ也。最善なる人も尙完全なる道徳的満足を得ざるは、即ち此事實を證するものにして、彼等は過去の生活の不完全なるを感し、後に在るものを忘れ、只管前に在るものを望み、之に達せんとして進む也。而して彼等が斯く不完全を感ずる所以のものは、要するに信仰に依りて自らを同化する道徳的理想に照して其實際的生活を測るがために外ならず。精神的生活は其進歩と共に之を測る標準も亦擴大せられ、聖徳勇氣も之に比して漸次其光を失ふに至る也。

以上述ぶる所を略言すれば、人の知識的進歩的能力は短き此世の要求するよりも遙かに大にして、最も高貴善美なる人も此世の生活に於て達し得る所の知識道徳を以て満足すること能はず。此不平均は此等の能力が適當の地位を有し、適當に使用せらるる未來生活の觀念に依りてのみ説明するを得べしとのこと也。尙此等の説明に對しては唯物論よりする反對あるべしと雖も、爰には之を評論するの餘白なし。

『唯物論』の條參照。此問題に關する參考書として「エフ、エチ、ブラッドレー」の「外見」を讀む。『ヒスロップ』の「科學と未來生活」ジェームスの「人間靈魂の不滅」アートの「基督教の根本的觀念」

レの部

靈通。禮拜學。禮拜式文

等を見よ。此條キープアドに貢ふ所あり。

靈通 Inspiration. 『インスピレーション』の條を見よ。

禮拜學 Liturgics. 實際神學の一科にして、禮拜に關するものを教ふ。

禮拜式文 又は禮文 Liturgy. 術語。教會に於ける禮典、儀式等執行の順序、規模、式文等を記載せるものにして、一定の方式に従て之を行ふべく定められたるは頗る早し。最も早く新約の式文を有したるは東教會にして、其最古のものは「レメント」舊書第八卷「使徒的憲法」の中に發見するを得べし。尤も此は應正の意義に於て禮拜式文と名くるを得ず。早に教師用として使用せられたりしのみ。之に次で多くの禮拜式文出て、歐羅巴、亞細亞、亞非利加諸國の教會に行はれたりしが、此等の式文に共通せる特質は、其凡てが主の晚餐に關することにして、犠牲が禮拜の中心なる事、及び死者のための祈禱ある事にして、此等の點に於て此等の式文はプロテスタント教のそれと異れり。スリヤ及び埃及の諸教會に於て廣く用ゐられたる重なる式文三あり。即ちカイザリヤのパシラの式文、アレキサンドリアの「テオロギス」及び亞歷山のクリオスの式文にして、第一の式文の中には又亞歷山教會の「マウラ」式文、クリオスの式文等を含著す。四教會の式文の發達は第七世紀の初めケレソリウス式文に淵源し得べしと雖も、此も亦其以前に存在しありし式文を改正したる者にして、即ち四九二年にはアラウシウスのものあり、四五一年にはレオニヤの式文あり、更に其以前に教父の間に祈禱の方式ありたるが如し。宗教改革時代に至りて改革者等は式文改正の必要をも認め、ルーテルは一五二三年其 Liturgia

レオ一世

レオ一世 Leo I, the Great. 羅馬法王。四四〇—四六一在位。少時の事は明ならず。法王となる前羅馬に於て勢力を有し居りしが如く、當選の時皇帝よりエリナツス及びアルビヌス間の仲裁者としてカリヤに遣はされ居たり。在位中は治績著し。法王を以て凡ての僧侶の首長となし、其理由として彼得が使徒中の首にして支配權を有せしこと、及び彼得の後繼者たる羅馬の監督は又之を有せしことを挙げ、之に類する者は自らを地獄に投げ入るゝなりと主張せしは彼を以て初とす。而して此説は彼に依りて實行せられたり。羅馬領亞非利加にては基督教會は次第に力を失ひ、帝國に屬してニカヤ告白を奉ずるはマウリタニア、カイザリヤのみとなり居りしが、勢ひ外部より助力を望み、助力者さへあらば容易に之に服従せんとする傾ありければ、レオは監督カレンテウスを

レオ一世

遣はして觀察せしめ、其報告に陰謀擧行はれ不適當の人物教職に在りといふを見るや、レオは激しく同教會を攻撃し、少しく前に亞非利加の大會議に禁止せられたる羅馬上告の習慣を復活し、凡て大會議の決議は羅馬の裁可を経べしと命令したり。レオは更にイタリヤが曾てインノーセント一世によりてカソニカ教職に屬せしめられたるに拘はらず、自然の力に依りてコンスタンチノープルに引かれ居る有様なりしを、愈々テサロニカに引き入れたり。次はカリヤ方面の統一なり。之より先き法王アウグスティヌスに七年カリヤの支配權をアールの監督パトリックに與へたり。カリヤにては羅馬の勢力漸くアリウス説の諸王も立ち、種々の民族の侵入に依れる混亂等ありて、隔る統一の必要ありしなり。然るにパトリックの相續者エウリウスはベザンソンの大都監督ケリドニウスと争ひ、後者は罷められて羅馬に訴ふ。當時は原告者を受するを法王の政界とせしこととて、四四五年の羅馬大會はケリドニウスを復してエウリウスの権力を制し其教領内に限らしめ、レオは此決議を勵行せんために羅馬政府の助を請ひて之を得たり。同年六月六日帝ヴァレンチニウス三世は有名なる法律を發行す。曰く、彼得の功を羅馬市の威嚴とニカヤ會議の決議により羅馬の監督は基督教會の首長と認むべく、其訓令は法律として立てらるべく、之に反對する者は大逆の一種となすべし、而して法王に召喚せられて出頭せざる者はば政府の力にて捕縛禁錮するを得と。此に於て法王制度は確立せり。亞歷山の教會に對してもレオはマウラその師たる彼得の下より脱せんや、マウラの建てたる亞歷山の教會は宜しく羅馬に従ふべしと論じたる文書を送りしが、對手教會は之を顧みることなかりき。羅

レオ一世

レオ一世

馬集權主義の實行は東方教會との關係に於て益々其頂點に達せり。ユウチケスはキリストリウス主義の再興せるをレオに訴へしことありしが、コンスタンチノーブルの教長フラゲイアヌより否認せられて後、全くレオに依り其處置を委することを申し出たり。レオは此懇願を帝テオドロスの助くる所なるを知りしものから、初めの程はフラゲイアヌを冷遇せしが、やがて大會議にてユウチケスを否認する等の事實を見るや、取調の上此否認を撤回し、四四年基督教に於ける神人兩性の結合を説ける文書をフラゲイアヌに送れり。此を以て同年のヘルツ大会議はレオを破門せしも、其結果は唯東方教會の壓迫を受け居れる少數者を益々密にレオに近づけしめしに過ぎざりき。同年また羅馬大會議ありてエペソ會議を「變質の窟」と言ひ、其立てたる法律を悉皆否認せしが、間もなくアレクサンドリアと其夫マルキアヌ帝位に登り、此に大反動起りて東方教會の監督等は皆レオの教義に従ふべしと皇命あり。四五年カルクエドンの世界會議に於ては羅馬の代理者主筆し、レオの文書を基として告白を作り、大會議の法律は法王の裁可を受くることなりしが、唯だ一つ其法律中に羅馬監督の最上權を認むるは善けれ共、コンスタンチノーブルの教長にも同等の權力を與へ、亞細亞、ポント、トラキヤを其治下に置くこといふ條に就てレオは頗る不満足を感じ、其討論の時に其代理者等は在席を拒み、愈々可決せられし時は激なる抗議を申し込めり。レオは代理者等の行動を是認し、同會議の教義的決議のみを裁可し、更に帝をして四五四年此法律を撤去せしめたり。されどコンスタンチノーブルの教長は東方教會を治すること依然たりき。レオは匈奴の王アツチラとの會見は人口

レオ三世

レオ三世

に贈與せる史蹟なり。アツチラは四五二年のカタラウニア戦争の後以太利に侵入し羅馬を師の如くに引き割らんとする。皇帝の命によりてレオは行きて之に會見せしが、其印象する所強かりしを見えて平和の條約成り、アツチラはドノ河北に退けり。是れ一説なるが此史傳と共に東ゴート人の王テオドロクスの發せし命令書としてカシオドルスの「ゲアリエ」に記されたる所によれば、アツチラに使して條約を結びしは長老カシオドルスなりとあり。何れが眞なるの明ならず。思ふに兩説とも眞なるべし。當時の事情を察するに、アツチラの退軍にはヴァレンチニア三世の女と夥しき贈引手物とに依り得られたる位なれば、多くの使節は遣はされ種々なる條約結ばれしものならん。四五六年にはレオは又ヴァンダ人の王ゲンセリックに會見交渉せしが、此時は効なく市は二週間掠奪に委され、幾千の住民は執へ去りて奴隷に賣られたり。

レオ三世

レオ三世

レオ三世 Leo III. 人名 羅馬法王。(七九五—八一六在位)。位に即くや先づ聖彼得の墓の鍵と羅馬市の記章と多くの贈物とをシヤールマン子に贈りて王の臣下を羅馬に來らせ、人民の忠信の誓約を受けんことを請へり。羅馬にはレオの當選に太く反對せし黨派ありて、一日行列の途を棄して襲撃までしたることあり。スレト侯之を救ひ、マテルホルンなるシヤールマン子の宮廷に至らしむ。同所にては大なる歓迎を受く。されど敵黨は隠しき告訴をなし、レオが七九九年羅馬に歸りし時には王の全權委員審査をなし、其結果は追放せらる。翌年王自ら來りし時審査は再び行はれしが、レオの冤罪なりしこと分明となり、二日後に王は聖彼得會堂にてレオより冠を受け羅馬帝國皇帝となる。然れども

レオ九世

レオ九世

此場合に於けるレオの地位は單に市民の代表者として立ちし者の如し。王がレオの調印を得て定めたる法によれば、羅馬はラヴェナ、ミラノ等と同じく大都監督地となり居り、皇帝の高等政廳は羅馬に在りて司法行政を掌り、法王の官吏の訴をも受けるを見る。然れども王の計羅馬に連するや反對黨は再び蜂起せしも、法王は嚴酷の手段を以て之を押へしかば、王は之を喜ばず、法王の舉動を審査すべき命令を下せしが、法王は之を受くるに先ちて死せり。彼は又一人が神の子とせらるる「説」及び「聖靈は子なる神より發するといふ説」の論争にも與はれり。

レオ九世

レオ九世

レオ九世 Leo IX. 人名 羅馬法王。(一〇四九—一〇五四在位)。アルサースの貴族の子にして、父は皇帝コンラド二世の従兄弟なり。ツリアの監督なりしを一〇四八年十二月皇帝アンリ三世と羅馬市民の代理者ミウケルムスに會し、一致してレオをダマッソ二世の後繼者たらしめん。彼は全爾及及び全市民の一致を條件として之に従ひ、四九年二月一巡拜者の服裝をなし、若き僧ヒルデアランドを伴ひて市に入りぬ。其治世は教會内部の改革に於て著しく、タルニの始めた改革は愈々彼に依りて教會全體に普及せり。彼の用ひし手段は會議なり。會議が活ける機關となりしこと三二五年より三八一年迄の間を除きてはレオ九世の時ほど活潑なりしはなし。獨逸の北隅より以太利の南端まで渡る所に會議を催さしめ、人民をして教會の事情に注意を起さしめ、僧職賣買を廢し、僧侶の獨身生活を行はしめんとせり。或時には買職せし僧を悉く驅めんとして三分の二までを驅めんとせしことあり。又獨身生活は補助アアコノまで守るべしとし、人民は漸く結婚

レオ十世

レオ十世

せる僧侶を不潔僧と呼ぶに至れり。然れ共レオ九世は教會外の事には成功せざりき。ノルマン人既にベネントを占領し居りしに、皇帝は羅馬防衛のため來ることを好まざりしが、自ら以太利備兵とスアピア義勇兵とを率ひて進み戦ひしが、アヌアゲンにて敗れ捕せられ、一〇五三年六月より九月間ベネチヤに在りき。待遇は甚だ厚かりたり。

レオ十世

レオ十世

レオ十世 Leo X. 人名 羅馬法王。(一五二一—一五二二在位)。ローレンツ、ド、メデイキとダフリサ、オルシニとの間の第二子。七歳の時制式を受け、翌年佛蘭西王ルイ十一世よりエルクスの大監督とせられしも、幼年の故を以て法王シクストス四世はパツシニヤの富める精舎其他に長たらしむ。一四八八年十三歳にしてドミニカの聖マリア教會の「カルテイナル、デアコノ」せせられ、法王インノーセント八世より十六歳まで教皇及び事務を執らざるべしといふ制限のみを附せらる。此間若く教育を受け、ギリシアより拉丁學を、ロハチス、アルギロフィルスより希臘學を、マルシリウス、アイキヌス及びミランダラのピクスより哲學を學び、純文學及び復興文學に養はる。九二年カルテイナル團に入られ、法王代理としてトスカニアを治む。アレキサンデル六世の治世中はメデイキ團のフイレンチネより逐はるゝに座して、又免れ、獨逸フランテルス及び佛蘭西を遊歴せしが、ユリウス二世の時又志を得、其羅馬の導師は詩人學者美術家の數酒となりぬ。ラヴェナの戦にて是司令權を握りしが、敗れて捕へられ、佛蘭西へ送られんとせしをラノにて脱れ、フイレンチネに歸る。一五一三年二月ユリウス二世の死せしを聞き、病を冒して羅馬に急行し

「カルテイナル」中の一派と交渉し、法王に逐はれしが、人民は大なる喝采を以て之を迎へたり。レオ十世の外交政策は單にメデイキ一家の私を謀りしが如き觀あり。其弟ウヰリアノをバチスタ王に、甥ロレンツをバチスタカニア、フエララ及びワルビノ王にせんた佛王ルイ十二世と結託し、レオの對ミラノ策を助けたり。フランソワ一世即位の時この同盟を新にせんとし、ウヰリアノをナポリ王とすことを條件とせしに、佛王之背せざりければ、レオは直に對佛蘭西同盟を遣りぬ。然るに一五年マリンニヤナの戦にて大敗して和を請ひ、ゴロニヤの會見に依り王に迫られて國王の發令に法王の裁可を受くる制度の廢止、國王及び法王の協定制の設立に同意し、國王は領内の教會を裁判し教職を任免するを得るに至りぬ。又同條約によりてナポリの王位はグアラア家に與へられしが、メデイキ家の所得に就ては條文極めて曖昧なりき。一六年弟ウヰリアノ死しかば、レオは専ら甥ロレンツの榮華を謀り、屬々陰謀を試み戰爭を起したる後、甥をワルビノ侯とならしめ佛蘭西王家の一女王を娶らしめしが、一九年に之も死せり。羅馬の諸大家は此動作に激昂し法王反對の徒黨生じ、アルフォンソ、ペトル、パンテテロ、テ、サウロ、ソテリニ、カステレ、リアリオなど云ふ「カルテイナル」等之に加はり居りしが、端なくも發覺し、ペトルッチは捕へられ、他は巨額の罰金を出して免れ、三十一人の新カルテイナル法王に依りて新に立てられ、各巨額の罰金を出して之に就く。此を以て徒黨の事は全く虚構にして法王が其教庫の窮乏を救はんための策謀なりしとの風評起る。されど新カルテイナル團の設立は時の勢已むを得ざりしなり。レオは又カルル五世とフランソワ一世との何

レオ十世

レオ十世

れもの皇帝に選ばるゝを好まざりしが、宿者と共に優遇し、カールの當選の後もフランソワと交渉を繼續せしかば、カールは終に法王に迫りて其去就を決せしめたり。レオ十世在位中は財政至難なる時なりき。法王領内には欲められ得る限りの租税は徴集せられたり。十字軍の目的のため十分一税は課せられ、四割の公債は以太利の銀行にて募られ、教會の職位は羅馬にて賣りては又轉賣せられたり。然も會は尙足らざりき。教皇の賣出は善き思ひ付なりしも終にルーターを起たしめたり。レオは之に對する方法を回らせしも、問題の根柢は何所まで深入りし居るやを解せざりき。間もなく金の泉は断たれたり。然も一方にはウフアエルやミケランセロに伎倆を揮はすために之を要したり。古文書を買ひ圖書館を立て大學を設け友人羅者を幸福ならしむるために之を要したり。更に其等を合はせたるものよりも自己の儲蓄と野心遂行のため多くの金を要したり。死し時には負債は固より海山の如く、而して自己の葬式の燭燭代を拂ふ程の金さへも教庫に残り居らざりき。

歴代志略上 歴代志略下

The First Book of the Chronicles, The Second Book of the Chronicles. 人名 舊約聖書中の歴史的な文書。希伯來經典には此二書一巻をなし「クハニ」を稱せらる。元來此書が以喇士書、尼希米亞記と共に一巻をなしたりしこと、此等の書の文體の類似せること、作者が歴史を論ずる立場、材料選擇の方法の相似たること、共に家系、統計、宗教的儀式、祭司に關する詳細の事實、及び公理の組織の如き特殊の主意を記述したること、以士喇、尼希米亞二書の記事が歴代志略の記事の終る處に始

歴代志略上、下

レの部

歴代志略上、下

まる事等に依りて明也。此等の書の作者は上はアダムより下は前四三二年子ヘミヤ第二回の住居をエルサレムに定めたる時に至る迄の記録を編みたる者にして、歴代志略は其最初の部分となし、彼斯王がロスが其治世の元年詔を發して、ユダの民をしてエルサレムに歸り神殿を建てしめたりといへる記事に至りて筆を止めたり。斯く此等の書は其記する所の範圍頗る廣闊なれ共、其目的はユダ王國の歴史、殊に神聖禮拜の沿革及びダビデの系統を傳へんとするに在り。即ち作者は晩代セムリタ史家の例に倣ひ、アダムより筆を起したれ共、上巻第一章に記したる系圖の目的は、他の國民に對してユダ族の占めたる地位を示すに在り。斯くて第二章にはユダ族の系圖を掲げ、第三章にはダビデ王の系圖を記せり。四一八章には他の支派の系圖を掲げられ共、其最も長く記載せるはレビ族の系圖也。此等の章、殊に九の十一世四に於て、作者の附言せる所に常に存因以後の社會の組織、及び宗教制度に直接又は間接に關係せり。斯く此書の緒言は一九の世四に於て終り、九の世五より其の歴史となり、先づ簡短にサウルの歴史を叙し(九の世五-十の十四。十章は母前世家の王として選ばれたる事を述べ、(一)母後三の(一)十)たれ共、ダビデの少時の事、サムエルに追せられたる事、イシボセテ統御の事等は作者の目的に關係なきが故に之を省き、又ダビデ治世中に起りたる一身の私事に關する出来事も亦均しく省かれたり。ソロモン治世の物語は列王紀略上より採抄せり。王國分裂の後は、北王國の歴史に就ては、絕對的必要の場合を除くの外之を記さず。之に反してユダ王國の歴史は王下より採抄し、之に編者自らのものを

歴代志略上、下

歴代志略上、下

加へたり。世上の事に關する出来事を全く記さざるには非ざれ共、作者の最も重を置きたるは宗教の歴史にして、此點以士喇、尼希米亞二書共に相同じ。故にロイスは此四書を名けて『エルサレムの宗教志略』と稱したり。(一) 編輯の時代、此書編輯の時代を解説する鍵編は上三の十七、廿四に記されたる系圖にして、此處にはセルバベルより第六代の子孫迄記載せらる。されば此書の成りたるは前三五〇年より早かるべからず。然れ共三の廿一の語明白を缺く所あるを以て、此本文果して正當なりや否やに就て學者の中には之を疑ふ者あり。更に確實なる證據は以士喇、尼希米亞の書にして、此二書が歴代志略と同一時代に同一作者に依りて書かれたるものなることは前既に言へるが如し。而して此二書はエズラ、ネヘミヤ時代よりも適に後に(後斯時代の終り以後)生息したるこそと疑はしと云へ、歴代志略の編輯せられたるは、前三三二年以後の事に依りて、是れ近代多くの批評家の一致する所也。而して作者がレビ人に依りて、多分神聖歌隊の一人なるべしと思はるゝことは、書中の記事の性質より推定せらる。(二) 此書の史料、此書の基礎となりしものは、創世記より列王紀略下に至る迄の舊約歴史文書にして、作者は之に他の史料より取りたるものを加へて之を編輯したり。舊約歴史文書よりの採抄は全篇同一に非ず。即ち最初の部分(上一一九章)に在りては頗る省略的にして、且主として系圖を取りたり。上十一下廿六章(母前卅一王下廿五章の記事と並行す)に在りては、概言するに些少の變改を施して其全文を寫し取りたり。尤も或る場合には更に之を敷衍したるもの少からず。

此採抄に編者の附加したるものは、一部分は全然新なる事柄、一部分は舊約歴史文書に簡短に記載せられたるものを詳述せるもの、一部分は一句二句若くは三句をなす所の特異の事柄を、撒母耳書又は列王紀略より借りたる物語に入れたるものより成る。此等のものは其長短如何に拘はらず、編者の特殊なる言語、句法を示す。是れ編者自己の筆に非ざれば、其當時の文書より出でたるもの也。此等の部分の内内容及び目的を示せば左の如し。(イ) 此等の部分は歴代志略の緒言、系圖、名目等より成れり。(ロ) 此等の部分は歴代志略の組織、宗教上の儀式に關係し、殊にレビ人及び唱歌者に關係せる者を記せり。(ハ) 多くの場合に於て教訓的目的を有し、殊に凡ての出来事を道徳的原因に歸し、災禍を以て惡の刑罰也とし、救済を以て德の應報となすの傾向あり。此傾向は殊に預言者の言也とせらるゝ説話に於て著しく、歴代志略に於ける預言者は撒母耳書及び列王紀略等の預言者よりも一層國王と密接の關係を有し、其行爲に從て賞罰を預言せられたり。而して其言語に統一あり、母、王等に見ゆる預言者の言語よりも其調を異にせり。編者が舊約の歴史文書以外より取りたる史料は何れより來りたるものなりや、是れ次に來る所の問題也。此書の初めの部分(上一一九)に挿入せられたる種族及び家族に關係する物語は、或る場合に在りては編者が自ら一般の傳説より取りたるものにして(四の廿二、廿九-四十三、五の十、十九-廿二)他の場合に在りては書かれたる文書より取りたるもの也。思ふに當時存因より歸り來れる人々は、社會を出来る限り舊狀態に回復するの必要を深く感じ、此目的に從て當時殘存したりし系圖的記録に注目

レの部

歴代志略上、下

し、之を回復し之を完全にするの道を取りたりしなるべし。而して此目的に從て書きたる目録は、編者の手に在りて、思ふ儘に之を使用し得たりしなるべし(上五の十七、九の一參照)。然れ共此書の編者も列王紀略の編者と同じく、ダビデの時より後の事を記すに當りては、其治世の終り毎に其遺囑とせる文書を示し「……が爲したる事は……に記さる」と附言せり。斯くて編者が遺囑としたるものとして書中に示したる文書は左の如し。即ち(イ) ユダとイスラエルの列王の書(ロ) イスラエルとユダの列王の書(ハ) イスラエルの列王の言行録(ニ) 『列王の書の註釋』(ホ) 『先見者サムエルの書』、預言者ナタンの書、及び先見者ガドの書(ヘ) 『預言者ナタンの書』、シロ人アホヤの預言、先見者イドの子ヤラバムに就て述べたる默示(ト) 『預言者シヤヤの書』、先見者イドの書(チ) 『預言者イドの註釋』(リ) 『イスラエル列王記の中に在るハナニヤの子エロワの書』(ル) 『ワウヤの其餘の始終の行爲はアモンの子預言者イザヤの之を書けり』(レ) 『ユダとイスラエルの列王の書の中なるアモンの子預言者イザヤの默示』(ヌ) 『ホザイの言行録』是也。此中初めの三書は同一の書を指したる者にして、編者が用いたる史料中最も重要な者也。而して此書は存因以後の產物也と思惟せらる。『列王の書の註釋』が前三書と同一のものなりや否やは明ならず。其他の書の中には前三書の部分ななせる者も、獨立せる者もあり。次に起れる問題は此等の史料より取りたる記事は果して悉く歴史的なりやとの事也。編者はダビデの罪過に就ては、國內の人口を調査したりといへる一事を擧げたるのみ。而して僞傳的傾向を有せしソロモンを默々の中に既

し、神殿建築の計劃を以て、一切ダビデの經驗より出でたるものとなせり。統計的數字を示すに當りては、編者は常に誇張の筆を用ひ、ダビデの兵數の如きは之を百五十萬と稱せり。彼は又祭司典を以てモイセの律法と稱し、此律法は猶太建國の初めより神聖なる律法として効力を有したりしが、如く記し、其命令に従はざる者に對しては毫も假借する所なく之を攻撃せり。斯る記録が歴史として大なる價值を有せざるは言ふ迄もなし。參考書 ドライヴェル、コルニヤの『舊約聖書論』、ウィルヘルムの『舊約聖書正經の起源』、ライルの『舊約聖書の正經』、シワレルの『猶太人民史』、エワルドの『以色列史』、オストロー、カイル、ベンチツト、ボワレ、セリツケル、ロボルトソン等の註釋書。

に傾き、法王の教令に依て愈々志を決し、アウグスタルロにて公然ルテ主義を説教し、教會に反對して『羅馬教會の告知』を書けり。其年アウグスタルヒには羅馬教徒を調處せる幾多の文書出でたり、彼は其著者を目せられしかば、二一年偶然の事のため更任となり、彼の代りに天主教の忠士タレット博士の任せられたり。僧侶等は頗る喜びたり。レギウスは一時アウグスタルヒを去りしも、二四年また歸りて聖アンナ教會説教者に任ぜらる。其頃州の狀態は頗る危急なりき。當時の最も猛烈なる分子はアウグスタルヒ内に沸騰しつゝあり、而してレギウスは十分心の強き人に非ず。百姓戦争の市に近づきし時、彼は『東洋狀態又奴隷狀態』と『世俗的權力に就ての結句』を著はせしが、百姓に同情したる下級社會は満足せず、羅馬教徒は此種の原因は彼が其能に在りとなしたり。瑞西及び獨逸兩改革派の間に聖職に關する大論争の起りし時、彼は初めは瑞西の方へ傾き居りしが、二七年後ハルテラ説を固持したり。其少し前アナバプテスタ教徒は市に入り來り大黨派を作りしかば、レギウスは之に對して書を著はし、成功はせしが尙充分の勢力なく、終に市會は手を下して闘争を取り之を鎮めたり。一五三〇年の議會開くるや、レギウスは急に活動する能はざるに至りぬ。同年六月十六日皇帝は市に入りて直ちに福音主義教師の職を禁じなればなり。間もなくレギウスはリユネブルグ侯エルンストに事へテセルヒに住めり。北部獨逸のリユネブルグ、ハノーフェル等に新教を入れんとせし彼の靈力は大に成功し、又此時代に彼は Formulae salutis Iouenati を拉丁文と獨逸文とにて著はし『慰藉的説教に就ての問答』を著はす。共に好評ありし書なり。彼の性格は頗る非

レギウス

レギウス

レの部

レックス。レスリー

レスリー

レスキョー。レッシング

羅せられ、古典學的の偏見ありしこと確かなれ共、古典學者ながらも断然改革主義を取り、之がために戦ひしは彼に於て美とすべき所なり。

レックス

Robert Raikes

一七三五—一八一— 英國の人、日曜學校の創始者。ケラウセスターに生る。父は印刷業者にして又ケラウセスター雜誌を編むる小き雑誌を發行せり。ロベルトは幼より慈善の性あり、市の監獄を訪ひ囚徒に對する憐愍の心を現はせしのみならず、監獄改良の志を抱き居たり。されど其一生の大事業は日曜學校の創始なり。彼は其郷里の小兒等の状態の哀れむべきを見て心を打たれ、或る牧師が世に棄てられし兒童幾人かを學校に入れしといふを聞き、自己は四人の上品にして性質善き婦人を雇ひ、兒女等を集めて讀書と信仰問答を教へしめ、此等教師は一週一シヤングを携へり。現今の日曜學校の組織とは異り居たれ共、兎に角此種れたる美行が全世界に擴げれる日曜學校の濫觴なりしなり。一七八八年六月二十七日附の彼の書翰の殘れる者を見れば、ウインズルにて時々の貧女等來りて貧兒を教へて日曜日を送り、女息は使を連れて斯かる善事をなすの力を有する人々を幾多を傳へたりと云ふ。彼は七十六歳の時俄に死し、ケラウセスターのル、マヨ、ド、クリプト教會に葬らる。葬式には日曜學校生徒も到りしが、此等には遺言に依て一シヤングとプラムケーク菓子とを與へたり。

レスリー

Charles Leslie

一六五〇—一七二二 英國の教會論争の神學者。愛蘭ダブリンに生る。一六七一年ダブリンのトリニチー、カレッジを卒業し、英國にて法律を研究せしが、八〇年英國教會の聖職に入る。八七年を成す。六〇年アレスラウのタウエントチーン將軍の秘書となり、パラック生活の中に『ラオコーン』及び『ミナ、フォーン、パールンヘルム』を著す。六五年アレスラウを去り、六六年ハムブルフに行き、市の劇場の技術長の如き者となり、其間に『ドラルツルギー』を出し、又クロイツと考古學的論争をなす。七〇年ウエルフェンビュッテの圖書館長とせられ『エミール、ガロツチ、ナタン、デル、ワイセ』人類の教育に無名者の論片』等を出し、又ゲートと論争す。

レの部

レッシング

レバウイ

列王紀略上、下

年愛蘭に歸りコンノル大會堂の書記長となりしが、ウイリアム及びメアリーに忠信の誓約を立つるを拒みて地位を失ひ、八九年英國に行き、其より二十年間妨げらるゝ所なくしてクエーカー派、ソーチクス派、羅馬加特力徒、猶太人、殊に超絶神論者等と論争をなす。一七二〇年監督ホルツトと著書にて論争し、ノンワロルの主張を述べ、パルテテなる帝王の處に脱れ行く。ノンワロルとはウイリアムとメアリーに忠信誓約をなすを拒みし徒、帝王とはスチュアート家の裔なるに依て英國王位を要求したる人物なり。レスリーは帝王の下にて忠實に事へ、之を新教に導かんとし、且苦樂を共にせしが、二一年愛蘭の許可を得、歸りて間もなく死せり。レスリーの名を今日に留むる者は實に其著『A Short and Easy Method with the Deists』なり。此はロープの初代侯トマスに基督教の證明を請はれて三日間に書きたるものにて、トマスは之を見て余は是まで基督教者なりしが、今は之を自ら確かむと言へり云ふ。書の大要は、基督教は事實と教義とより成る、此二つは相依りて立てり、事實真ならば教義真ならざるべからず。而して事實は確なる證據を伴はざるべからず。其證據は一に五官の判斷するもの、二に世に公なること、三に記念せらるるのみならず外部に活動を起せしもの、四に其等の記念及び活動は事の起りし時を以て始まりしものたる是れなり。基督教は此四要素を具ふる事實を有するが故に真なりと言ふに在り。此書の外『對猶太人簡易論』あり、又ケール反對の『草中の蛇』等あり。博士ワウソンはレスリーを理論家なり、而も之に反對の途なき理論家なりといひ、監督ホルンはレスリーは多くの人を英國教會に入れたること何人にも優

の情を教へ、若くは之を實行するの度に從て尊敬せらるべきものなる事、凡ての宗教に普遍なる事は或る宗教に特殊なる事よりも貴重なる事、及び人は其信する所に依りて非ず、其行ふ所に依りて導かれ得べきもの也との事を説きたり。彼は此の如く其心を理性的宗教に傾けたりしが、天啓の宗教に對しては寛大なる態度を取り、自然神論者のいふ如く、天啓の宗教を以て傳信に依て創作せられたる者也とせば、少くも時世の必要に應ずる有用の創作也と言ひ、又宗教の形狀は互に相異るも、要するに凡ての宗教の根本なる自然宗教が、相異る國民の中に各々特殊なる形を取つたに過ぎずと言ひ、猶太教及び基督教を以て人智の未だ開きざる時代に在りては必要なる者なれ共、人智の既に進みたる場合に在りては自然宗教と交代せらるべき者也となし、又何れの時代に於ても斯る宗教を要せざるものは、之を等閑に附するも可也と説きたり『人類の教育』は此主意を發展したる者にして、一篇の論旨は、元來教育なる者は、人の自ら有せざる所のものと與ふること能はざる者にして、教育の要は唯之を簡易に迅速に與ふといふに過ぎず。此の如く天啓に依りて與ふる宗教の教育なるものも、人の理性に依りて與へ得ざる者を得べき者に非ず、唯最も重要な事柄即ち宗教の根本真理を迅速簡易に與ふといふに過ぎず。舊約は即ち此教育の課程に於ける初學讀本にして新約は之に代はりて第二讀本となりたる者也。而して此新約も亦遂に理性の宗教に依りて交代せらるべきもの也と言ふに在り。(上記著書の外『シュモック、ゴリンスキ、タイム、ヘレン、ツインメルン、ロレストン等のレッシング傳を見よ。)

レバウイ Leibniz 人名 耶蘇十二使

る言へり。彼は高教會主義の人にして非國教徒なれば容なく論刺したり。政治にも活動し、一七〇四年より七年間『ハーセル』と稱する新聞を出せり。自著の『神學的著作集』あり。

レッキー

William Edward Hartpole Lecky

一八三八—一九〇三 愛蘭の文學者。ダブリン附近に生れ、ダブリンのトリニチー、カレッジにて教育を受く。一八六一年匿名にて『愛蘭輿論の嚮導者』を出し、爾後歴史學の研究に専心し、九五年ダブリン大學の代表者として國會議員となりしが、一九〇二年辭職せり。其有名著書は『歐洲に於ける純理說歴史』、『アウガスタンよりシャーレン迄の歐洲道徳史』第十八世紀英國史』等也。

レッシング

Gotthold Ephraim Lessing

一七二九—一八一— 獨逸の文學者、哲學者。上ルスタアのカメンツに生る。父はルーテル派の牧師にして、カメンツの學校長が公開演説にて劇場を能辨の學校と言ひしにてレッシングを退校せしめしが、然も一七四六年レッシング神學研究のためライプツヒヒに送らるゝや、彼の最も注意したる所は、女優ノイマールが當時全盛を極め居たる劇場なり。學校にて研究したるは神學、哲學、言語學等にして、何れも之に精通せしが、殊に美學、文學、戯曲に最も其才を發揮せしめたる者なり。一七四八年ノイマールは彼の『青年學者』を上掲す。同年レッシングは柏林に移る。ゲッテルアと知り、同年レッシング及びニコライと知り、後の二人と共に『最新文學』に關する文書』を發行し注意を引く。五五年『ミス、サラ、サムアソン』と題する新戯曲出でて感動を起し、漸く

徒の一人『マッダライ』の條を見よ。

列王紀略上 列王紀略下

The First Book of the Kings, The Second Book of the Kings

此二卷はダビデ王のアドニヤの叛亂に依り、ソロモンを其繼嗣に立てたる時より、エホヤキ王の前後六二年巴比倫の城より出されたる時に至る迄の以色列史を録す。其結構大體に於て士師記と同じく、古き文書より取りたる史料を編者自らの骨組に入れて調整し、間々之を敷衍せり。編者自らの骨組は年代、邊境の文書及び諸王の性格の點綴にして、其筆法常に同一也。即ち編者は初めに諸王即位の年を記し、次に北朝の王の事を記する場合には、之と同時に南朝の王の事を挙げ、南朝の王の事を記する場合には、之と同時に北朝の王の事を挙げ、次に在位の年數を示し、邊境の文書を擧ぐる時は『ソロモンの其餘の行爲』と凡て彼がなしたる事及び其智慧はソロモンの行爲の書に記さるゝに非ずや』といへるやうに記し、諸王の行爲に關しては春秋的筆法を用ひて、『彼れエホバの目の前に惡をなし、其父の道に歩み其以色列に犯させたる罪を行へり』と言ひ、若くは『彼れエホバの善を見給ふ事なしたり』と言へるが如き論評を下せり。而して編者點綴の標準は申命記にして、ヨシア王に至る迄の諸王はアサ、ヨシヤマテの如き善王と雖も崇拝を除きざりし故を以て罪惡を犯せりとの非難を免るゝこと能はざりき。以て編者が申命記の大なる感化を蒙りたりしを知るべき也。此書の源りたる史料は編者自らの言ふ所に依れば『ソロモンの行爲の書』、『ユダ列王の書』、『イスラエル列王の書』等重なる材料をなしたるが如しと雖も、此等の材料すら多少改訂せられたるものなるが如

